

富山県八尾町の祭と観光

—伝統と現在を生きる人々—

地域社会の文化人類学的調査 18



2009

富山大学人文学部文化人類学研究室

目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・竹内潔

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・全員

第1章 八尾の概要・・・・・・・・・・竹内潔

第2章 曳山祭と住民・・・・・・・・・・吉本亜美
岡濱千尋
狭間一代

第3章 「おわら」に関わる人々

1. 「おわら」の概要・・・・・・・・・・竹内潔
2. 「おわら」の変化と継承・・・・・・・・吉田朱里
3. 「地方」に携わる人々・・・・・・・・安達悠摩
4. 「おわら」が創る新たな人間関係・・・・尾堂綾子

第4章 観光化と地域振興

1. 八尾の観光化と地域振興・・・・・・・・竹内潔
2. 「おわら風の盆」の観光化・・・・・・・・安田莉奈
ー組織、住民、観光客の3者の関係ー
3. 八尾旧町の景観づくりと住民・・・・・・・・後藤あかね・島田一
4. 「おわら風の盆」と商店を営む人々の関係・・南卓宏
5. 「市」を通した町の活性化・・・・・・・・伊藤岳大

第5章 獅子舞の再興・・・・・・・・・・西川純礼

ー野積地区乗嶺における人々の暮らしと獅子舞

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・調査学生一同

はじめに

富山大学人文学部文化人類学研究室では、毎年、北陸の各地で地域のさまざまな事象を対象に調査実習をおこなってきた。これまでに『地域社会の文化人類学的調査』と題する 17 巻の報告書を刊行し、北陸地域の社会と文化について、調査実習をとおして得た知見を公開してきた。

この報告書のもととなった 2008（平成 20）年度の調査実習は、富山市八尾町においておこなった。八尾は、1979（昭和 54）年に富山大学に文化人類学研究室が創立された翌年に、当時の教員であった和崎洋一と赤阪賢の指導のもとに年中行事である曳山祭を対象として、はじめて調査実習をおこなった土地である。『地域社会の文化人類学的調査』の第 1 号から 3 号は、『八尾の曳山祭』¹として刊行されている。

本年度は、約 30 年の月日を経て、八尾で調査実習をおこなった。30 年の時間の間に、八尾は大きく変貌し、人口流出や少子高齢化などによって山間集落の過疎化や中心市街地の空洞化などが進行している。また、その一方で、20 万人以上の観光客が押し寄せる「おわら風の盆」行事の観光化が著しく進み、観光振興を中心としたまちづくりが精力的におこなわれている。

この報告書は、さまざまな社会文化の変容が生じている現在の八尾において、年中行事の曳山祭、地域芸能の“おわら”、“おわら”が演じられる“おわら風の盆”行事、狭小な河岸段丘という立地を反映した独特の家屋、山間地の獅子舞などの「伝統」が、どのように現在の八尾の人々に認識されているかについて調査した成果をまとめたものである。ただし、ここで言う「伝統」は、過去から連綿と続いてきた固定的な事象の意ではなく、住民の生活に根ざし、住民が主体的に関わっていく「生きられる伝統」である。本報告書のサブタイトルを「伝統と現在を生きる人々」としたが、この報告書では、八尾の住民たちが自分たちの生活のなかで、過去から受け継いだ事象をどのように捉え直し、どう主体的に関わろうとしているかについて、さまざまな面から明らかにする。

ただし、本報告書は、八尾の「伝統」の現在の状況を網羅的に報告するものではない。学生たちは八尾で自分たちが関心を持った事象について自主的に調査をおこない、その成果を集めて編んだのがこの報告書である。

調査は主として夏季に合宿形式でおこなったが、学生たちはそれ以外の時期にも足繁く八尾におもむいて調査を実施し、自分たちが選んだテーマについて懸命に「現場」で理解しようとした。学生たちは、調査をとおして大学のなかでは学びえない地域社会の生きた様相を知る経験を得たが、しかし、この報告書の記述のなかには、経験を十

¹富山大学文化人類学研究室、『八尾の曳山祭Ⅰ』（1981）、『八尾の曳山祭Ⅱ』（1982）、『八尾の曳山祭Ⅲ』（1983）

分に客観化しえない未熟さのゆえに、分かりにくい点が多々あると思われる。あるいは、浅くとどまっている理解や事実関係の誤りが含まれているかもしれない。忌憚のないご批判やご助言を寄せていただければ幸いである。

また、この報告書のなかには、観光振興の施策に対して批判的ともとれる表現があるかもしれない。文化人類学は、生活者としての住民の語りをもとに地域社会を「下から」理解しようとする学問であり、広く地域の社会経済状況を鳥瞰して分析する学問ではない。批判的ともとれる記述や考察は、八尾の人々との邂逅をとおして、学生たちが地域の事情を理解しようと努めた結果だと諒解いただければ幸いである。

2009年1月28日

富山大学人文学部文化人類学研究室
竹内 潔

実習調査期間

- ・ 予備調査 2008年2月～8月に各自が調査
- ・ 本調査 2008年4月20日～5月4日（曳山祭調査）
8月25日～9月4日（合宿調査）
- ・ 補足調査 2008年9月～2009年1月に各自が調査

謝辞

今回の調査において、私たちは八尾町のたくさんのみなさまに多くのご援助やご配慮をたまわりました。以下に感謝の念を記したいと思います。

指導教員の竹内潔と調査参加学生の多くは、聞名寺のご住職、霧野雅磨様のご好意で、家屋を8月の長期合宿のために使わせていただきました。また、学生たちは、おわら風の盆について貴重なご教示を得ることができました。これらのご好意がなければ、調査を円滑に遂行することはできなかつたと存じます。

吉本亜美（第2章）は、西町の曳山祭について調査する際、西町自治会長平田公一様には貴重なお時間を割いていただき、たくさんのお話をうかがうことができました。また、西町曳山総代、池畑忠寿様をはじめとする西町のみなさまには、貴重なお話を聞かせていただき、さらに曳山祭に参加させていただくなど、たいへんお世話になりました。

岡濱千尋（第2章）は、上新町の曳山祭を調査する上で、上新町曳山総代、栃山仁一様をはじめ上新町のみなさまにはたいへん貴重なお話や資料を提供していただき、さらに、曳山行事に参加させていただくなどのご厚意をたまわりました。

狭間一代（第2章）は、東町の曳山祭について調査しましたが、東町曳山総代、富士原尚文様をはじめ東町のみなさまに貴重なお話を聞かせていただくとともに、曳山祭への参加の際にもたいへんお世話になりました。

また、狭間一代、岡濱千尋、吉本亜美の3名は、曳山祭の調査の際に、西町の渡辺様のご好意で、ご自宅に泊めていただきました。さらに、八尾町曳山保存会長、宮田紘郎様や、八尾壮年団団長、井山裕之様をはじめとして、八尾壮年団のみなさまからも多大のご協力をたまわりました。

吉田朱里（第3章）は、おわらの変化と継承について調査した際、富山県民謡越中八尾おわら保存会総務企画部長、古川克己様をはじめ、鏡町のみなさまにたいへん貴重なお話を聞かせていただきました。また、ご多忙であるにもかかわらず練習会の見学もさせていただきました。

安達悠摩（第3章）は、おわら風の盆における^{じかた}地方について調査する上で、鏡町のみなさまにたいへんお世話になりました。突然の訪問にもかかわらず、練習の見学を許可していただいたり、聞き取りに応じていただいたりと多大のご厚意をたまわりました。

尾堂綾子（第3章）は、おわらを通した人間関係の創出について調査しましたが、おわら酔芙蓉の会のみなさまはとても温かく迎えてくださり、会の見学を快く許していただいたばかりか、おわら当日には会の流しに一部参加させていただくなど、たいへんお世話になりました。

安田莉奈（第4章）は、おわらの観光化について調査する上で、八尾総合行政センターや越中八尾観光協会の職員のみなさまに資料を提供していただき、貴重なお話をうか

がうことができました。また、八尾町の住民のみなさまには、さまざまな質問に懇切に答えていただき、多くのご教示をいただきました。

後藤あかねは（第4章）、景観づくりと住民の意識について諏訪町、上新町、鏡町、西町で調査をおこなった際に、たくさんの方の住民のみなさまに懇切に質問に答えていただきました。

島田一（第4章）は、通年観光や助成金について調査する上で、諏訪町、上新町、西町、鏡町の住民のみなさま、八尾総合行政センターの建設課、農林商工課、また、坂の町アートに出展されていたみなさまにたいへんお世話になりました。

南卓宏（第4章）は、おわらの観光化と商店の関係について調査しましたが、八尾町の商店の方々には時間を割いていただき、貴重なお話を聞かせていただきました。

伊藤岳大（第4章）は、上新町で「なりひら風の市」を調査しましたが、なりひら風の市実行委員会のみなさまには、ご多用の中、様々な便宜をはかっていただきました。また、商店街や出店者の方々や関係者のみなさまにもたいへんお世話になりました。

西川純礼（第5章）は、獅子舞が乗嶺集落の住民の生活にどのように関わっているのかを調査する上で、角地芳郎様には貴重なお時間を割いてお話をさせていただきました。また乗嶺青年会のみなさまをはじめとして乗嶺の方々には、突然の訪問であったにもかかわらずあたたかく迎えていただき、たいへんお世話になりました。さらに、野積地区センターの職員の方には貴重な資料を提供していただきました。

また、岡濱千尋、尾堂綾子、後藤あかね、狭間一代、安田莉奈、吉田朱里の6名はおわら風の盆当日のお忙しい時期に「かたかご」の上田ご夫妻に食事や宿のお世話をしていただくなど、多大なご厚意をたまわりました。

このように、今回の調査では八尾の多くの方々にご協力をたまわりました。調査にご協力いただいたすべてのみなさまに、私たちの心からのお礼を申し上げます。

ほんとうにありがとうございました。

第 1 章 八尾の概要

竹内 潔

1.八尾の地理と地形

この報告書で取り上げる富山市八尾地域は、富山県の中南部に位置し、面積 236.86 平方キロメートルで、東西 12.2 キロ、南北 28.68 キロの菱形状をしている（図 1）。地形的には、岐阜県から続く山地と富山平野の南端の平野で構成される。岐阜県との県境には、1638 メートルの金剛堂山を主峰として白木峰などの飛騨山脈の支脈が連なっており（図 2）、山地に源を発する川は北流して流域の山腹に段丘平野を形成し、地区の中央部で合流して、井田川となっている。2002（平成 14）年の時点で、総面積の 85 パーセントが山林と原野であり、10 パーセントが農地で、宅地は 2 パーセントである（富山県八尾町、2003）。



図 1.八尾の位置（ただし、富山市と合併前の地図）



図 2.八尾の地形
(Yahoo 地図をもとに作成)

調査は、江戸時代中期の開町以来の中心地である「旧町」と「旧町」からの移住者によって造られた歴史を持つ JR 越中八尾駅付近の福島地区、旧町からおよそ 3 キロメートル南に位置する野積地区の乗嶺集落の 3 箇所でおこなった。

井田川沿いの河岸段丘上に住宅が密集している地域が旧町であり（図 2）、福島地区は JR 高山線沿いに広がる地域である。

乗嶺集落は旧町から約 3 キロメートルの野積地区のなかの一集落であり、山間地にある（図 2）。



図 3.旧町と乗嶺集落の位置
(Yahoo 地図をもとに作成)

2.八尾町の歴史

次に、調査の多くを費やした八尾旧町を中心に、八尾の歴史について、『八尾町史』（1967、八尾町史編纂委員会）、『続八尾町史』（続八尾町史編纂委員会、1973）、八尾町商工観光名鑑（1980、八尾町商工会）などに拠って概略を紹介しておきたい。

八尾の名の由来にはいろいろな説があるが、有力なのは、「八」が数の多いことを表し、「尾」が山の尾根を意味して、多くの山があるという地形に由来するという説である。

奈良時代の歌人大伴家持の「奥山の八峰（やつお）の椿つばらかに今日は暮らさね
大夫の伴」という和歌は八尾を訪れて詠んだ歌とされているが、八尾の町が歴史上に登場するのは、16世紀に浄土真宗の聞名寺が飛騨国吉田村（現岐阜県飛騨市神岡）から八尾の地に移り、真言宗の蓮勝院（現在の旧町・下新町の八幡社）も造られて、門前町が形成されたことが契機である。江戸時代に入って、1636（寛永13）年に、加賀藩三代藩主の前田利常から当時の名主に、町を造って商業活動を認める「町建て」の御墨付が授けられ、現在の八尾旧町の原型が成立するに至った。その後、町は、五箇山や飛騨山地と富山平野を結ぶ交通の要衝として、和紙に繭の卵を産み付けた「蚕種」、和紙、炭、薬草、柿、芋、栗、蓑、蠟、漆などの交易集散地として発展し、1692（元禄4）年には戸数385戸、人口1841人を数える大きな町となった。明治に至るまで、八尾は加賀藩から分かれた富山藩の財政を支える「御納所」であり、土地の産高の十割を納める

ことが可能なほど裕福な「十免じゅうめんの地」と呼ばれていた。

とりわけ、蚕種さんしゆの交易と和紙づくりが盛んにおこなわれ、1813（文化 10）年頃には、八尾が販売する蚕種が全国の蚕種の四分の一を占めるようになった。また、元禄時代から富山の配置薬業が盛んになるとともに、薬の袋紙の需要が増えて和紙産業が活発におこなわれるようになった。1788（天明 8）年には八尾の町に紙問屋が 34 軒あり、その下に和紙漉すき作業をおこなう宿子と呼ばれる農家が約千軒あったという。このような江戸期の八尾町の繁栄と町民文化の面影は、現在もおこなわれている曳山祭の絢爛豪華な曳山に残っている。

明治に入って、1872（明治 5）年、機械製糸工場「第一製糸場」が造られ、大正に入ると富山県原蚕種製造所が設立された。蚕糸業はアジア・太平洋戦争後、和紙業とともに急速に衰退していくが、現在でも、原蚕種製造所の跡地に建てられた曳山を展示する曳山展示館のなかに蚕糸業の展示室があったり、展示館脇の坂は「げんさんの坂」と呼ばれていたり、あるいは山間部の野積小学校の校章に稲穂と繭が組み合わされているといったように、さまざまなかたちで往時の歴史がとどめられている。和紙についても、かつての紙漉の技術を使って和紙を作ったり、八尾和紙の製品を展示する工芸館「桂樹舎和紙文庫」が鏡町に立てられている。

行政的には、1889（明治 22）年、市町村制の施行により「八尾町」が設けられ、1953（昭和 28）年に卯花村うのはなむら、杉原村すぎはらむら、室牧村むろまきむら、保内村やすないむら、黒瀬谷村くろせだにの一部と合併し、さらに 1957（昭和 32）年には、野積のづみ、仁歩にんぶ、大長谷おおながたにの三村と合併して、八尾町は町域を広げた（図 4）。



図 4.旧八尾町の地域図
(長尾、1994 より)

2005（平成 17）年 4 月 1 日に、いわゆる「平成の大合併」によって、富山市、婦中町、大沢野町、大山町、山田村、細入村^{ほそいり}の富山地域 6 市町村と合併して、富山市の一部となった。

大正期以降、生糸や養蚕の国際競争力の低下や洋紙の普及による和紙需要の落ち込みなどから、八尾の地場産業は次第に経済力を失い、また、交通網の変化によって交易の要衝としての商業的重要性も失われていった。アジア・太平洋戦争後、高度成長期になると、工業・商業の中心である富山市方面への人口移動が進み、山間部では林業が衰退した。

近年では八尾旧町では人口流出や商店街の空洞化が進行し、山間部では過疎化や少子高齢化が著しい。その一方で、平野部では先端技術産業によって地域振興がはかられている。1980（昭和 55）年から、富山テクノポリス開発計画の一環として、中小企業基盤整備機構、富山県、当時の八尾町によって、平野部の保内地区^{やすない}に内陸型工業団地である「富山八尾中核工業団地」の造成が始まり、企業の誘致が進められて、現在では電子部品や機械工作部品関連の企業が集まっている。旧町では、1986（昭和 61）年に当時の建設省が提唱した地域振興策「HOPE 計画」に即して「八尾町 HOPE 計画」を策定

し、1998（平成元）年からは、「八尾魅力あるまちづくり基本計画」にもとづいて、観光による地域振興や景観保存によるまちづくりのさまざまな施策が進められている。

3.八尾の人口と産業

3-1.人口

富山市の2008（平成20）年12月末現在の統計資料²によれば、八尾地域（旧八尾町）全体の世帯数は6970世帯、人口は21790人である。このうち、調査をおこなった八尾旧町の世帯数は954世帯、人口は2658人で、八尾地域全体に占める割合は、世帯が13.7パーセント、人口は12.2パーセントである。また、八尾地域内で、もっとも世帯数、人口が多いのは、旧町に加えて調査の対象とした福島^{ふくじま}と上述の「富山八尾中核工業団地」を含む保内地区^{やすない}で、2449世帯、7420人である。もう一つの調査地である乗嶺集落を含む山間地の野積地区の世帯数は402世帯、人口は973人で、乗嶺集落だけでは19世帯、人口は84人である。

八尾地域（旧八尾町）全体の人口の1925年から2005年までの推移を図5に示したが、1950年を境に周辺の村との再編合併にもかかわらず人口は減少し、1970年代以降は「富山八尾中核工業団地」の建設と企業従事者の移入があっても、2万2千人台で横ばい状態が続いている。1980年から2000年までの人口増減を地区別に見ると、黒瀬谷、保内、杉原などの平野部の人口が増加しているのに対して、八尾旧町と野積などの山間部の人口は著しく減少しており、全体としては増減が均衡している（東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2004）。

² 富山市ホームページ 統計データ <http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/>
2009年1月24日閲覧

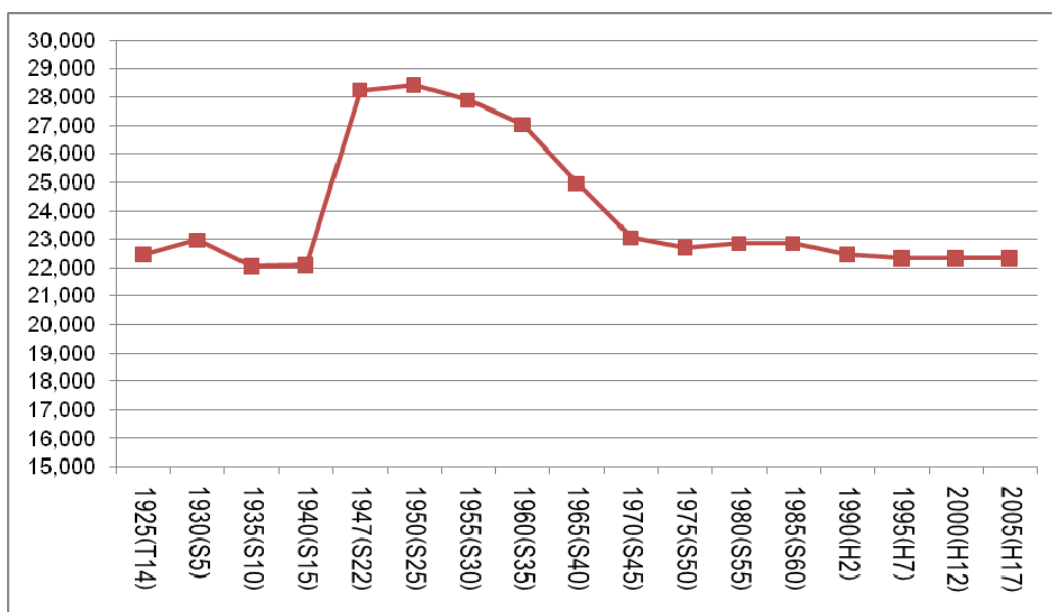


図 5.旧八尾町全体の人口の推移

(『統計やつお』2003 及び富山市ホームページ統計データ

<http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/> 2009年1月24日閲覧をもとに作成)

次に、調査対象地域の人口動態を見てみよう。図6に旧町の1960年から2005年までの人口と世帯数の推移を示したが、人口、世帯数ともに2000年まで急激に減少し続け、2000年以降は3千人を切ったあたりでほぼ横ばいになっている。

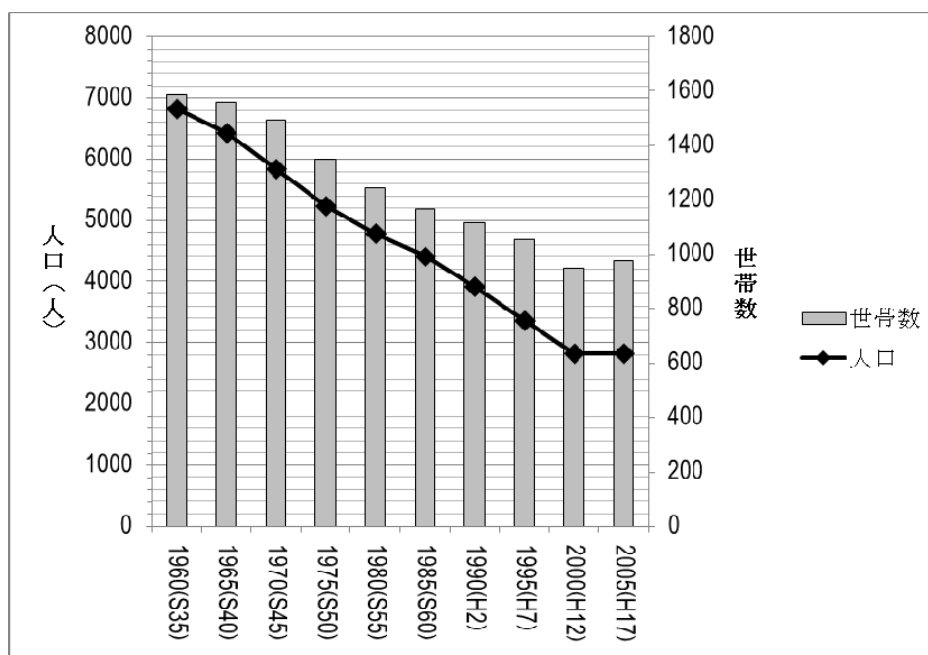


図 6.八尾旧町の人口・世帯数の推移

(『統計やつお』2003 及び富山市ホームページ統計データ

<http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/> 2009年1月24日閲覧をもとに作成)

調査地の一つである乗嶺集落を含む野積地区の人口、世帯数の推移は図7に表したが、人口は1980年まで急激な減少が続き、以降はゆるやかとはなったが減少を続けている。

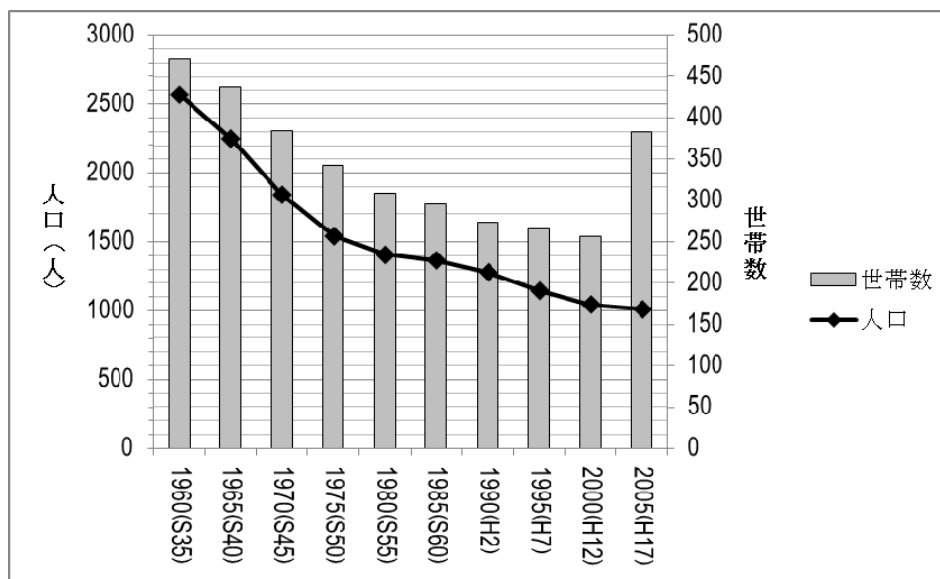


図7.野積地区の人口、世帯数の推移

(『統計やつお』2003及び富山市ホームページ統計データ

<http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/> 2009年1月24日閲覧をもとに作成)

2008(平成20)年12月末時点での旧町の人口を世代別に見てみると(図8)、20歳未満の人口が全人口2658人のうちの13.8パーセントである一方で、65歳以上の高齢世代が33.2パーセントを占め、高齢化が著しく進行している。また、20歳から39歳の世代を除いて、どの世代も女性の方が多く、高齢化を反映して65歳以上の高齢者層では女性が男性の1.5倍を占めている。

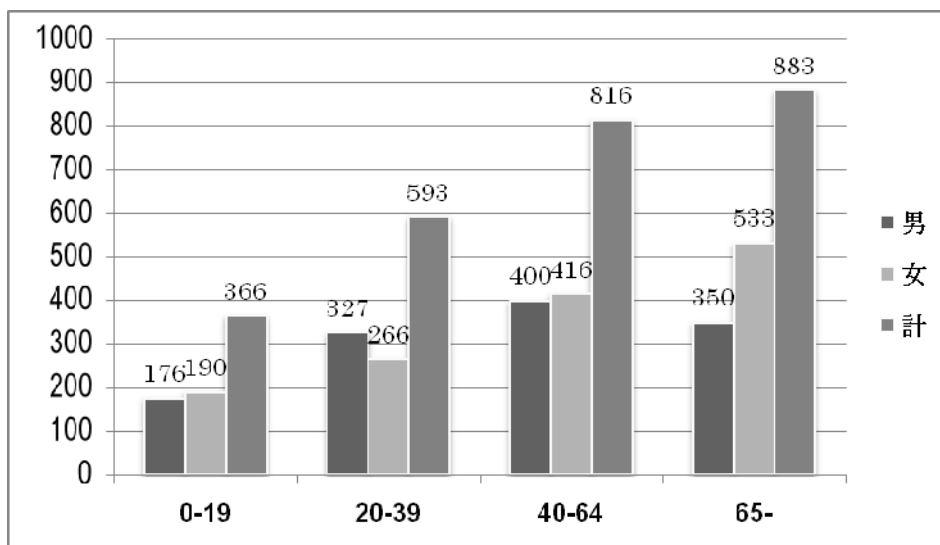


図 8. 八尾旧町の世代別人口構成

(富山市ホームページ統計データ <http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/>
2009年1月24日閲覧をもとに作成)

2008(平成20)年12月末時点の野積地区の人口構成は図9に示したが、総人口973人に20歳未満人口が占める割合は11.2パーセントに対して、65歳以上の高齢者人口が占める割合は37.2パーセントと、八尾旧町以上に高齢化が進んでいる。旧町とは異なり、高齢者層以外の世代では男性の方が多いか、あるいはほぼ同数であるが、高齢者層では旧町と同じく女性が多く、男性のほぼ倍である。

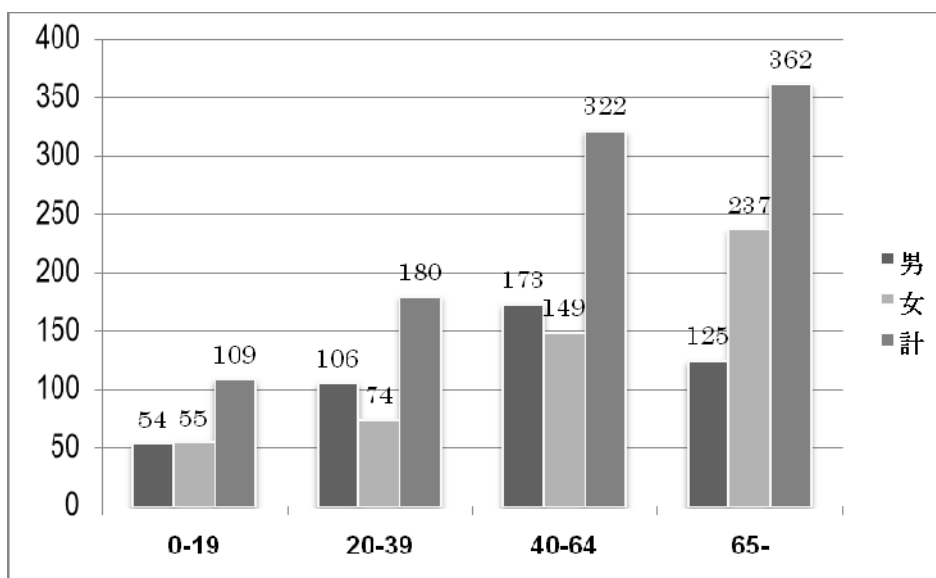


図 9.野積地区の世代別人口構成

(富山市ホームページ統計データ <http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/>)

2009年1月24日閲覧をもとに作成)

また、小学校児童数について、1992年の児童数を100とした場合、2004年の時点で、旧町は約7割に減少している。また、野積地区などの山間部は2割を切るほどまでに児童数が減少しており、少子化傾向が顕著である（東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2005）。

以上のように、旧町と野積地区ともに、2000年まで人口が減少し続け、以降は顕著な減少は見られないものの、どちらの地域も少子高齢化が進行している。

3-2.産業

旧八尾町の資料（『統計やつお』）をもとに八尾地域の産業を概観してみると、2000年度（平成12年度）の旧八尾町の就業者人口は1万2千人で、産業別の割合では、第2次産業と3次産業の就業者数が47.5パーセントずつで、第1次産業の就業者は5%である（図10）。

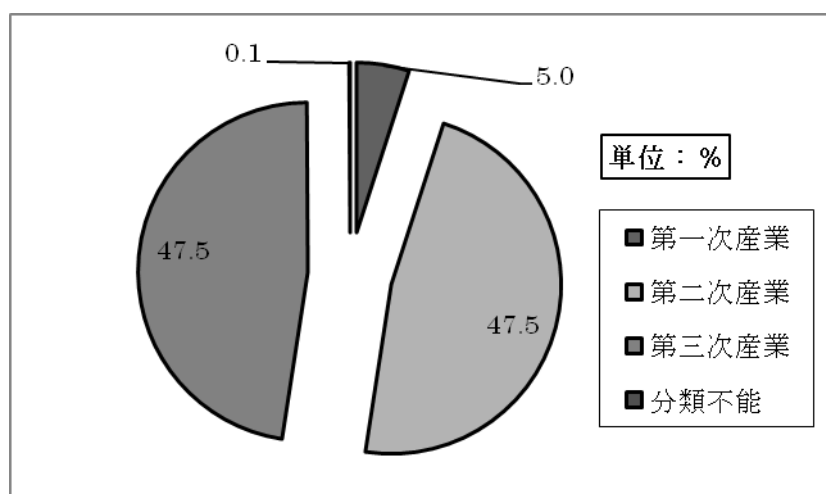


図 10.八尾地域の産業種別人口の割合
（『統計やつお』2003をもとに作成）

第1次産業の就業者数は596人で、うち577人が農業に従事している。2000年の時点で、旧八尾町の専業農家は76戸であるが、すべて旧町以外の地域の世帯である。野積地区には専業農家が8戸、農業を主な生業とする第1種兼業農家は3戸である。主要な農作物は米であるが、野菜、大豆、果樹なども作られている。

第2次産業の就業者5696人のうち、もっとも就業者数が多い業種は製造業で3736人が従事している。製造業の事業所は「富山八尾中核工業団地」がある安内や杉原などの平野部に集中している。

第3次産業の就業者 5697 人のうち、サービス業の従事者がもっとも多く 2767 人、次いで卸売・小売業・飲食業が 1830 人で、これらの業種の従事者が第3次産業の就業者の約 8 割を占めている。図 11 に、1991（平成 3）年から 2002（平成 14）年までの八尾地域全体の小売店の商店数と販売額を示したが、商店数、販売額ともに減少傾向にある。旧町の西町はかつては商店が軒を並べる商店街であり、1972 年に八尾商工会に加盟している商店は 63 店舗あったが、2004 年には 35 店舗と激減している（東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2005）。近隣への大型店舗の進出や人口流出などによって、このように八尾地域では小売業が衰退しつつあるが、とくに旧町では商店街の空洞化が問題となっている。

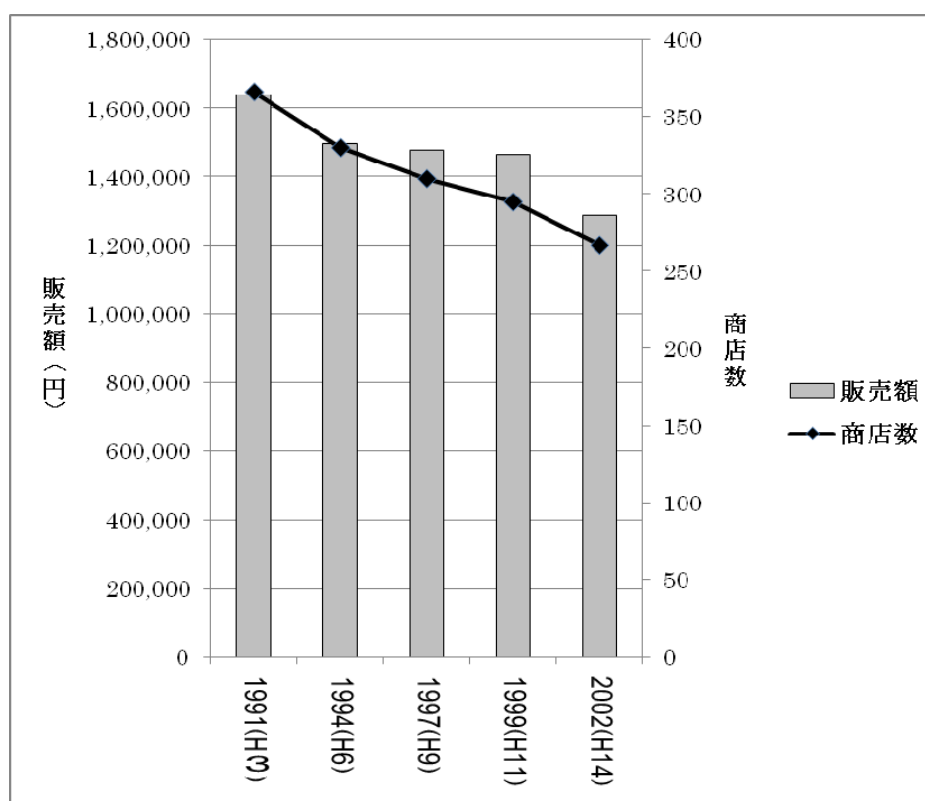


図 11.八尾地域の小売り商店数と販売額の推移（1991-2003）
 (『統計やつお』2003 をもとに作成)

4.八尾の年中行事とイベント

八尾にはさまざまな年中行事があり、また、観光協会のような組織が主催するイベントも数多い。以下では、この報告書の内容に触れながら、八尾の年中行事とイベントについて紹介したい。

4-1.年中行事

八尾の年中行事で参加者の規模が大きいのは、毎年5月3日に旧町で八幡社の神事としておこなわれる「曳山祭」と9月1日から3日の間にやはり旧町で開催される「おわら風の盆」であるが、この2つの行事については、第2章「曳山祭と住民」と第3章「“おわら”に関わる人々」で詳しく紹介される。以下に、2008（平成20）年の例をもとに年中行事を列挙する。

1月25日から2月3日の間、旧町の「曳山保存会」が「曳山囃子寒稽古」をおこなう。これは5月の曳山祭に備えて、囃子を練習する催しである。2月28日には、福島地区で、五穀豊穡と氏子の無事息災を祈願する「蔵王社祈願祭」がおこなわれる。

4月には、八尾地域内の31の地域や集落で、それぞれの神社で、主として青年団の主催によって獅子舞行事が催される。第5章「獅子舞の再興」で取り上げる乗嶺集落の獅子舞は、4月3日におこなわれた。また、4月中旬には旧町の南にある城ヶ山公園で、「秋葉神社例大祭」がおこなわれる。これは、江戸時代から続く防火祈念の祭りである。

5月には上述のように旧町で曳山祭がおこなわれるが、24日から25日にかけて、旧町の西町で天神に町内の子どもたちの書道の上達を祈願する「禅寺天満宮の祭り」が開かれる。

7月11日、野積地区の東川倉集落で、無病息災祈願を兼ねた川開きの行事である「川倉不動寺滝開き」がおこなわれる。8月6日から7日にかけて、平野部の黒瀬谷地区で鎌倉時代に作られたとされる法華経絵像蔓茶羅を虫干しにして、無病息災と家内安全を祈願する「蔓茶羅風入法要」が営まれる。同じく、8月6日から7日、八尾旧町が開かれるもとなつた聞名寺で聖徳太子の像を拝む「太子伝」という行事がおこなわれる。8月5日から7日、黒瀬谷地区の小長谷、8月6日から13日は旧町で、児童クラブや子ども会が中心となって地藏祭りが開かれる。8月13日、旧町では、盂蘭盆に先祖の霊を招くために組んだ竹に火をつける「精霊まつり」が井田川の河原で催され、天満町では灯籠流しもおこなう。

9月1日から3日は旧町で「おわら風の盆」が開かれる。また、9月から11月にかけては、五穀豊穡を祈る秋期祭礼が旧町の西隣の高熊集落、保内地区、野積地区でおこなわれる。

4-2.イベント

現在の八尾地域では観光客誘致のために越中八尾観光協会や商店会などの組織が主催しているイベントも1年を通して開かれている。2月の1ヶ月間、観光協会が「越中八尾 冬浪漫」というイベントを開いて、おわらや五箇山民謡など富山の民謡や日本各地や韓国の伝統芸能を催している。2月下旬には、曳山保存会が曳山祭の囃子を披露する「曳山囃子鑑賞会」が催される。5月下旬には、野積地区で「野積の里清流フェスティバル」が開かれて、イワナやヤマメを放流して来訪客に釣り大会やつかみどり大会を

提供している。7月下旬には、福島地区の JR 越中八尾駅前の通りで、「福島夜店とおわらナイト」という商店街活性化のためのイベントが開催され、商店街の活性化のために、夜店をだしたり、アトラクションを催したりする。同様に、8月初旬に、旧町の上新町が夜店を出す。

8月20日から30日は、おわら風の盆に集中する観光客を分散させるために、観光客参加型のイベントとして「おわら風の盆前夜祭」を連日開催し、各町がおわらを披露している。また、おわら風の盆が終わった後、9月最後の土日曜または10月最初の土日曜初めの時期に観光会社と観光協会の主催で、おわら風の盆を再現する「月見のおわら」を催している。

10月には、観光協会が「坂の町アート」というイベントを主催する。これは、絵画、彫刻、写真、書画、陶芸などさまざまな作品を広く募って、旧町の民家や通りに作品を展示して、観光客に旧町の町並みとともに作品を鑑賞してもらおうという催しである。

また、毎月第2土曜日と第4土曜日に、観光協会が主催して、おわらの踊りを見せる「風の盆ステージ」が越中八尾観光会館で開かれている。第4章の5節で詳しく述べられるが、上新町では、商工振興協同組合が中心となって、4月から11月までの間の毎月第2土曜日に「なりひら風の市」という露店の市を開いている。

以上のように、地場産業や商業が衰退した旧町では、1年を通して観光客を誘致するという目的や商店街の振興のために、「おわら」や「曳山」、あるいは八尾の独特の町並みを観光資源として、さまざまなイベントが催されている。このような八尾の観光による地域振興については、第4章「観光化と地域振興」で詳しくとりあげる。

5.八尾旧町と福島概要

旧町は、井田川沿いの河岸段丘の約1平方キロの狭い土地に家屋が密集しており、10の町で構成されている（図12）。河岸段丘は北東から南西に向けて勾配が強くなり、坂のまち大橋を渡って旧町に入ってから上がり坂が続く。

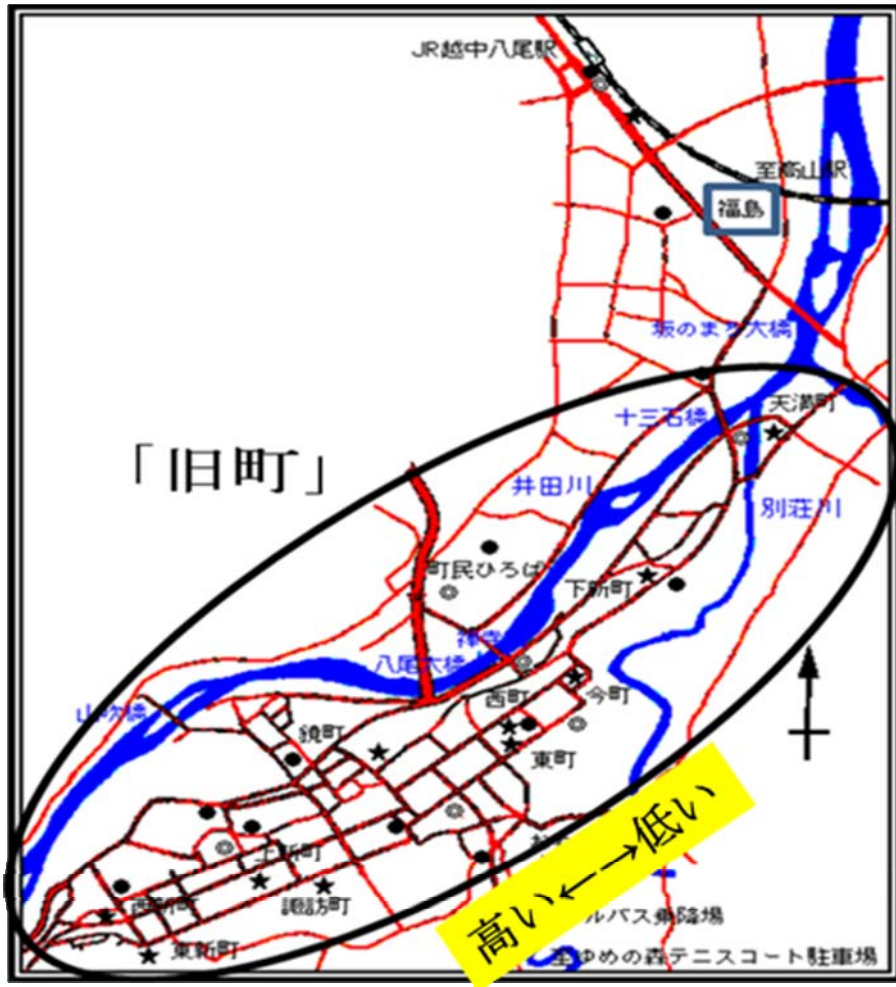


図 12.八尾旧町と福島地区
 (「おわら風の盆行事運営委員会」のガイドマップをもとに作成)

この報告書の多くの報告は旧町でおこなった調査の報告であるので、旧町を構成する10の町について概要を紹介しておきたい。

八尾の旧町は、浄土真宗の聞名寺^{もんみやうじ}の門前町である今町が井田川の河岸段丘の北東部の低い場所にでき、以降は表1のように、順次、南西部の高部へと町が広がっていき、あわせて、今町よりも低い場所にも町ができて、10の町が形成された。

表 1.旧町10町の成立
 (長尾、1994をもとに作成)

年	町の成立
1636 (寛永13) 年まで	今町 (初めは中町)
1637 (寛永14) 年秋まで	東町と西町
1664 (寛文4) 年	南新町 (後の上新町)。ただし、その後、取りつぶし

1672（寛文 12）年	鏡町
1677（延宝 5）年	下新町
1690（元禄 3）年	南新町再成立、上新町と改名
1745（延享 2）年	諏訪町
1793（寛政 5）年	西新町と東新町
1798（寛政 10）年	川窪新町、1890（明治 23）年に天満町と改名

段丘の勾配の高いところにある町から順に、町の特徴について紹介しておきたい³。

丘陵の一番高いところにある^{ひがしんまち}東新町と^{にしんまち}西新町は、町の歴史が比較的に新しいために「新屋敷」と呼ばれている。東新町には蚕養宮（かいこのみや）とも呼ばれる若宮八幡社があり、養蚕が盛んだった当時は参拝者で賑わったという。2008 年 12 月末現在の東新町の人口は 57 人と旧町のなかでもっとも少ない。

^{すわまち}諏訪町は、かつては職人町で、1986（昭和 61）年に町の本通りが当時の建設省と『「道の日」実行委員会』によって「日本の道百選」に選ばれた。^{かみしんまち}上新町は、旧町のなかでもっとも人口が多い町であり、数十軒の商店が立ち並ぶ商店街である。道幅が広いために、9 月に開催される「おわら風の盆」の行事の際には観光客を交えて輪になって踊る輪踊りが行われたり、「なりひら風の市」というイベントが開催されたりしている。また、かつての富山県蚕業試験場（富山県原蚕種製造所の後進）の跡地に、「越中八尾観光会館」（曳山展示館）が立てられている。^{かがみまち}鏡町は、かつてのいわゆる花街で、昭和初期には芸妓が生活する置屋や料亭が並び、劇場や寄席もあった。他の町に比べて入り組んだ細い道が多い。

^{ひがしまち}東町は、江戸時代に大きな商家が立ち並んでいたために、「旦那町」と呼ばれていた。大正時代に前出の「おわら風の盆」を町ぐるみの行事としての「おわら」に変えた川崎順二はこの東町の出身で、宅地跡に「おわら資料館」が建てられている。^{にしまち}西町は、隣の東町と同じく、大きな商家が並んでいたかつての「旦那町」で、現在でも造り酒屋や呉服屋などに昔の面影を見ることができ、すでに触れたように、1972 年と比べると商店数は半減しており、商店が軒を連ねる商店街としての姿は失われつつある。

^{いままち}今町は、浄土真宗の^{もんみょうじ}聞名寺の門前町で、すでに歴史の項で触れたとおり、八尾旧町のもととなった町である。1636 年の八尾旧町の成立以前は中町と呼ばれていた。^{したしんまち}下新町は、かつては真言宗の^{ねんしょういん}蓮勝院の門前町で、明治の神仏分離令の際に^{ねんしょういん}蓮勝院は解体され、現在は八尾旧町の鎮守である八幡社が建っている。^{てんまんちょう}天満町は、周囲を川で囲まれていたために町ができた当初は川窪新町という町名であったが、明治に入ってから町内にある天満宮にちなんだ町名に改名した。

以上、旧町を構成する 10 町について記述したが、JR 越中八尾駅前に広がる^{ふくしま}福島地区

³ ホームページ「おわら風の盆」（<http://homepage3.nifty.com/kazegumi/> 1 月 24 日参照）を参考にした。

は、もとは旧町からの移住者によって開かれた地区であるが、2008年12月末の時点で旧町全体の人口を越える3千人の人口を擁している。

表 2.2008年12月現在の旧町10町の世帯数と人口
(富山市ホームページ 統計データ <http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/>
2009年1月24日閲覧をもとに作成)

町名	世帯数	男	女	計
東町	102	131	159	290
西町	121	160	194	354
鏡町	126	160	182	342
上新町	155	192	223	415
諏訪町	87	124	131	255
西新町	121	140	137	277
東新町	22	27	30	57
今町	33	49	61	110
下新町	124	168	163	331
天満町	63	102	125	227
合計	954	1,253	1,405	2,658

表2に2008年12月末時点での八尾旧町10町の世帯数と人口を示したが、町域の狭い東新町、今町の人口が少ないことが目を引く。東新町では、おわら風の盆の行事を住民だけでは維持できなくなり、地域外の人たちの協力を得ている⁴。

文献

続八尾町史編纂委員会、1973、『続八尾町史』

東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2005、「西町のまちのすがた」

富山県八尾町、2003、『統計やつお』

長尾洋子、1994、『「風の盆」を通してみた八尾町の地域と住民の関わり』、『お茶の水地理』35、pp.76-88

八尾町史編纂委員会、1967、『八尾町史』

八尾町商工会、1980、『八尾町商工観光名鑑』

⁴ 北日本新聞 2008年9月3日「有志応援、深まる絆 人口減の富山・八尾町東新町、町外からおわら参加」

第2章 曳山祭と住民

この章では、八尾旧町の曳山祭について、3つの町の現地調査にもとづいて、それぞれの町の祭の組織や進行などの特徴を明らかにしながら、祭への住民の関わり方について考察する。

吉本 亜美
岡濱 千尋
狭間 一代

1. 曳山祭の概要

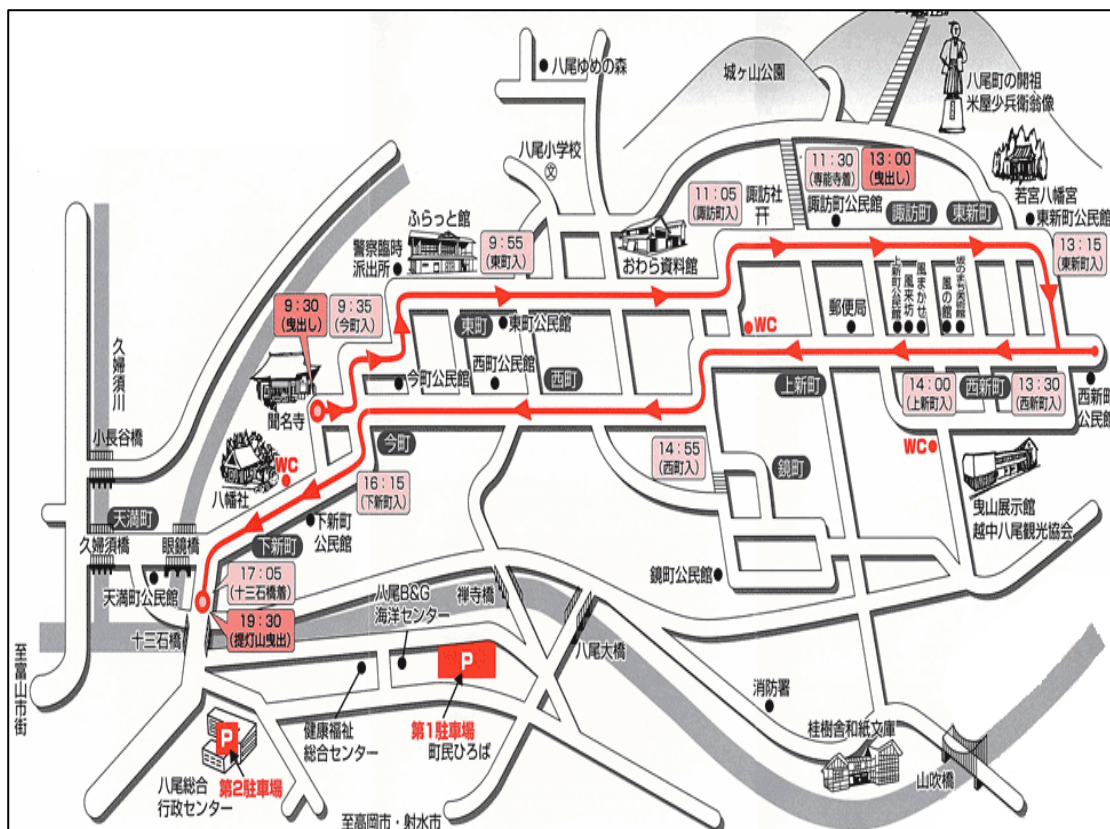
1. 曳山祭と調査について

八尾の旧町には、曳山祭という行事がある。江戸時代から 260 年以上続いている祭であり、江戸時代の町民文化を今に伝える祭だと言われている。また、養蚕や和紙で栄えたかつての八尾の姿を今に伝える祭だと言われる。

曳山祭は旧町内にある八幡社の春季祭礼であり、曳山の上層に神像を置き、下層に囃子方が入る。旧町は 10 町から成るが、曳山祭に曳山を出すのは、今町、下新町、西町、上新町、諏訪町、東町の 6 町である。昼は豪華な飾りと美しい彫刻が取り付けられ、夜は千余りの提灯の火が灯る提灯山となる。また、曳山の運行順路は決まっており、間名寺を出て東町の方へ進む東上がり、西町の方へ進む西上りの 2 つがある。これは 1 年ごとに変わり、今年（2008 年）は東上がりであった。今年の曳山の運行順路は下の図 1 の 2008（平成 20）年曳山運行予定（東上がり）のとおりである。

現地調査では、曳山をもつ八尾旧町の 6 町のうちの 3 町を対象にそれぞれの町の住民と祭との関わり方や認識について聞き取りと観察によって調べたが、この報告ではそれぞれの町の特徴を明らかにしながら、曳山祭への住民の関わり方について考察したい。

調査を行ったのは 4 月下旬から 5 月上旬の 2 週間ほどである。



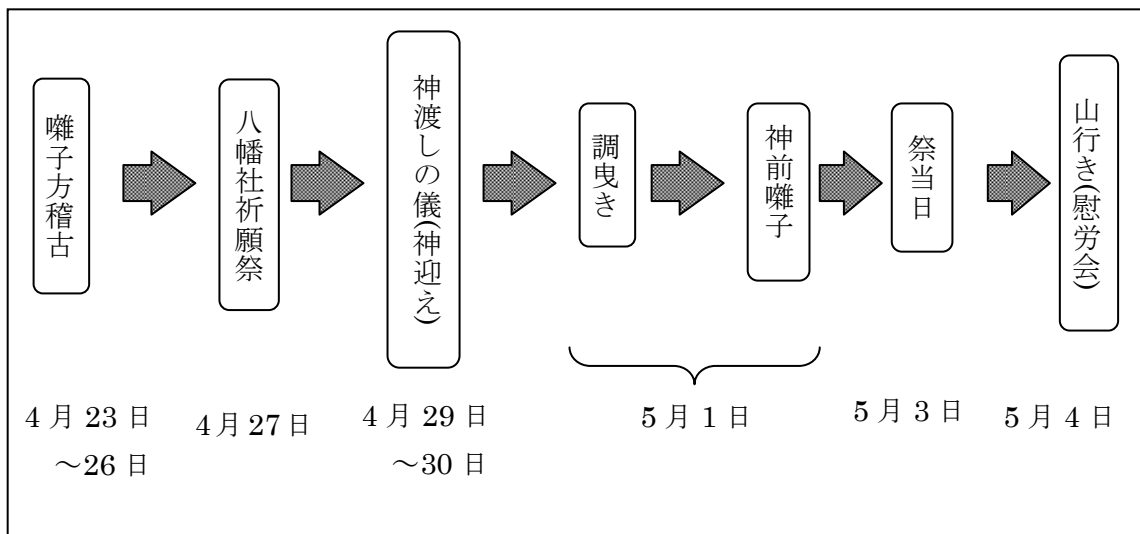


図3.祭の進行の概略

4.曳山の組み立て、解体、保存

八尾の曳山の構造を簡単に記す。町によって若干名称が異なる部分もあるが、下の図4、5のとおり、曳山は1階と2階部分からなる。2階部分には曳山を飾る瓔珞ようらくと天幕、曳山を囲むように取り付けられている柵状の高欄こうらん、曳山の1階部分から繋がっている四本柱しほんばしらと呼ばれる大きな4本の柱などが取り付けられており、人形ひとかたと呼ばれる曳山の神様の御神体が置かれる。また、2階部分の背面には見越けんけしと呼ばれる彫り物が取り付けられている。1階部分には、簾すだれと背面には大彫と呼ばれる大きな彫り物と1階部分の上4面には八枚彫と呼ばれる彫り物が取り付けられている。

曳山は調曳きの日までに組み立てる。しかし、曳山を持っているすべての町が毎年一から曳山を組み立てるのではなく、1年ごとに曳山を持っている6町のうち3町の曳山が交代で曳山展示館に一年間展示されるため、一から曳山を組み立てない町がある。

去年(2007年)は今町、上新町、東町の曳山が曳山展示館に展示されており、今年一から曳山を組み立てるとい作業は行っていない。

曳山の解体は祭が終わった次の日に行われる。曳山展示館に展示される曳山は解体せず、そのまま展示される。今年の下新町、西町、諏訪町の曳山である。また、解体された曳山は各町の曳山を納めておく山蔵に保存される。

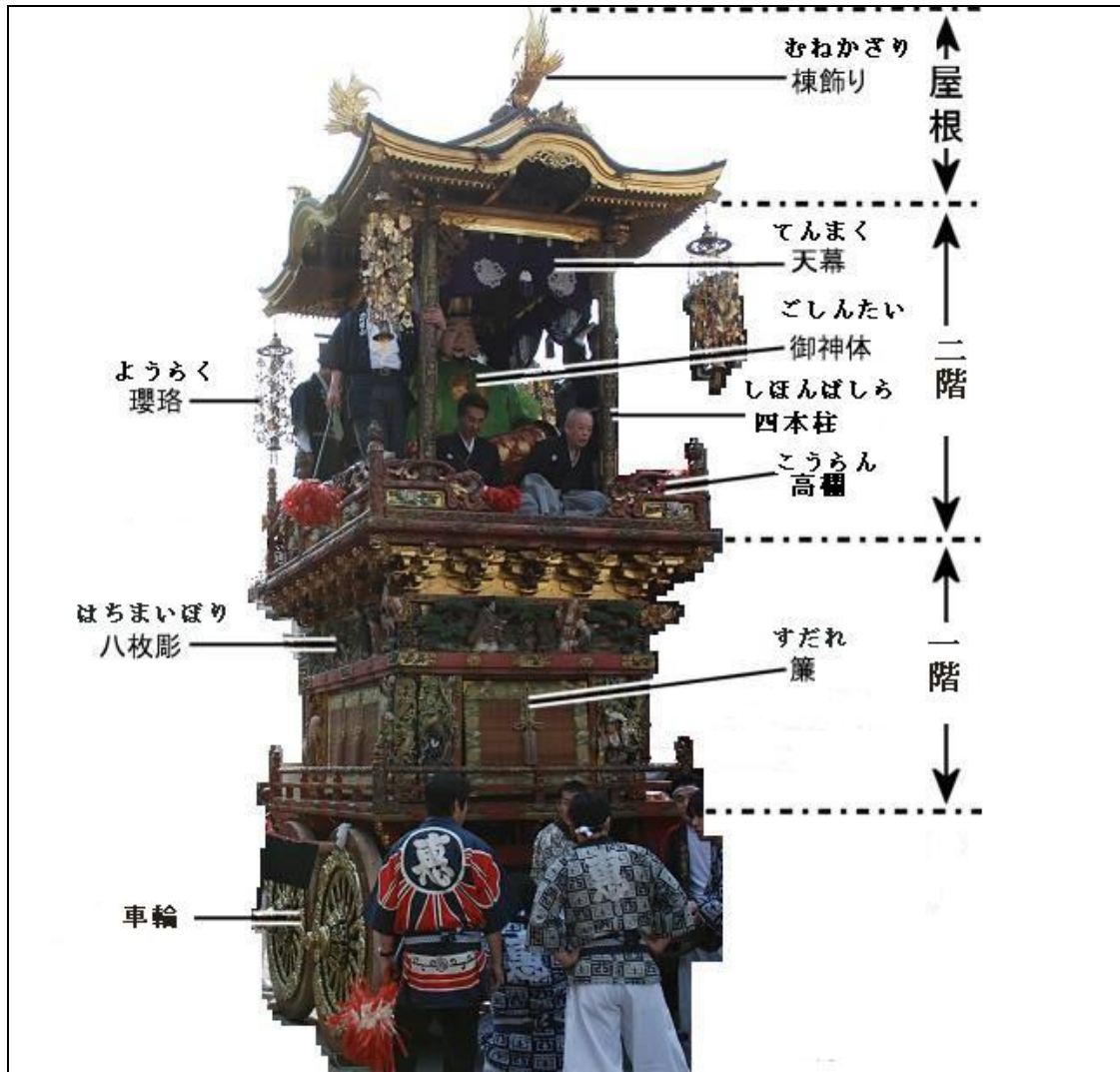


図 4. 曳山の構造 正面 (西町の曳山を例に)

(http://takaoka.zening.info/Toyama/Yatsuo_Hikiyama_Matsuri/Structure.htm
をもとに作成)



図5.曳山の構造 背面（上新町の曳山を例に）

以上、曳山祭について概要を記述した。次からは、西町、上新町、東町の曳山祭の特徴について町ごとに詳しくみていくことにする。

2.西町の曳山

吉本 亜美

1.西町と西町の曳山について

下の図 1 のように西町は丸で囲んだ範囲であり、旧町の中央に位置する。2008（平成 20）年 3 月末の時点での世帯数は 123 世帯、人口は男性 163 人、女性 200 人の計 363 人である。江戸時代には東町とともに大店が立ち並ぶ「旦那町」とよばれていたが、現在もその面影を町並みに残している。

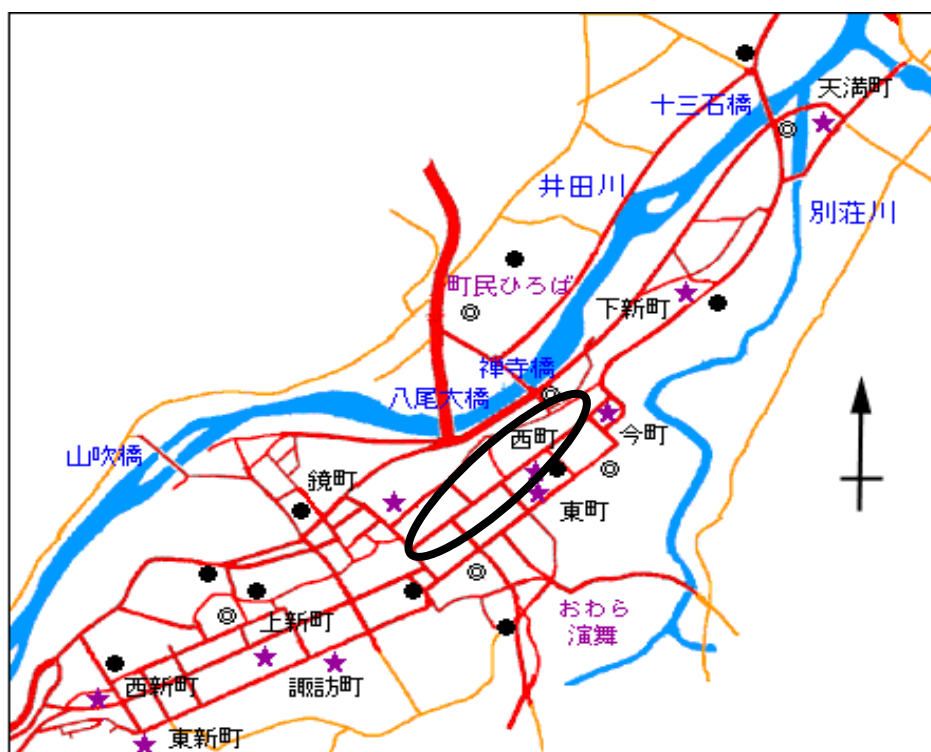


図 1.富山県八尾町旧町

(<http://homepage3.nifty.com/kazegumi/town.html> をもとに作成)

八尾町史（八尾町史編纂委員会、1967）によれば、西町の曳山は上新町、東町に次いで 3 番目にできたとき、1746（延享 3）年に花傘を飾る花山を作り、三途河婆しょうづがばと呼ばれる人形を飾って町内を曳きまわしたのが起源である。1771（明和 8）年にはこの花山を廃して、現在の西町曳山の原型となる屋根が八つ棟である八つ棟山やむねやまに造り替え、現在の富山県西部南砺市城端の城端西上町の曳山人形であった恵比寿を譲り受けて西町曳山人形としたという。

1-1.西町の組織

西町には以下の表1のような組織がある。小学生以下の子どもたちで構成されるめぐみ会から、小・中・高校生までの児童会、18才から25才までの女子青年団も含む青年団、26才から45才までのえびす会と呼ばれる他の町でいう壮年団世代の人々、46才から65才までの西ノ宮会、そして66才以上の老人会などである。

表1.西町の組織

組織	年齢
めぐみ会	小学生以下
児童会	小・中・高校生
青年団	18～25才
えびす会 (=壮年団)	26～45才
西ノ宮会	46～65才
老人会	66才～

2.祭の役職と祭の日程・進行

次に西町の曳山祭に関する主な役職と西町曳山の特徴、そして祭の日程や進行について記す。

2-1.祭の役職

祭に関する主な役職は表2のようなものである。曳山祭独特な役職を挙げて説明すると、曳山祭で各町の代表者となるのが曳山総代であり、その補佐役として曳山副総代という役職がある。次に曳山会計とは祭中の会計を担当する人である。また、神係とは曳山の上に乗っている神様の身の回りのお世話をする人である。神様に服を着せたりできるのは基本的には神係だけだとされている。そして、曳山祭で重要な役職となるのが警護とよばれる曳山を曳く時に指示をだす人たちであり、曳山の前に立つ警護頭1人と、警護頭の補佐役で曳山の後ろに立つ副警護2人がいる。曳山はこの警護の掛け声で動き出したり止まったりし、角を曲がる時には警護が曲がるタイミングや位置などをみて曳山をまわすよう指示をだす。この角廻しのタイミングや廻す位置を計るなどといった曳山の指揮をとることは難しく、警護頭になるには長い経験が必要とされる。ほとんどの役職が任期1年であるのに対して、警護頭になるにはまず副警護を4年つとめなければ

ならず、5年目でようやく警護頭になることができるのだ。そして警護頭になってからはさらに警護頭を2年つとめる。

上記で説明した曳山総代や副総代、そして警護といった重要な役職には主にえびす会の人たちがついている。

表 2.西町の曳山祭に関する主な役職

曳山総代（曳山祭の代表者）	氏子総代
曳山副総代（曳山総代の補佐）	公民館長
警護頭（曳山を曳く時に指示を出す）	神係（曳山の神様の世話をする）
副警護（警護頭の補佐役）	曳山大工（曳山の修理や組み立ての責任者）
曳山保存会長	壮支長（=壮年団支部長）
自治会長（区長）	青支長（=青年団支部長）
曳山会計	

2-2.曳山の特徴

曳山は町ごとに少しずつ違っており、それぞれに特徴を持っている。大きな違いは曳山の上に乗っている人形である。町ごとで人形は違っており、町の人はこの人形を人形と呼び、曳山の神様だとしている。写真1のように、西町曳山の人形は恵比寿神であり、右手には釣竿を持ち、左手には大きな鯛を抱えている。



写真 1.西町曳山の人形、恵比須

(http://takaoka.zening.info/Toyama/Yatsuo_Hikiyama_Matsuri/Nishi-machi_Goshintai.htm)

また八尾の曳山の最も特徴的といえるものは曳山に多く施されている彫り物であり、彫り物は町ごとに描かれているものが異なる。次に西町曳山の彫り物について記す。

曳山の2階部分の背後にあるひと際大きな彫り物は見越けんけしとよばれ、その町を象徴する代表的な彫り物である。西町の見越には「浦島太郎」が描かれており、写真2が西町の見越である。



写真 2.西町の見越

次に1階部分の背後にある大きな彫り物は大彫おおぼりとよばれ、写真3のように西町の大彫は中国道教の神様で南極星の化身だとされている「寿老人」じゅうろうじんである。名前のお通り長寿の神様であり、杖に巻物、そして独特な帽子をかぶり、鹿を連れた姿で描かれている。



写真 3.西町の大彫

そして曳山の1階部分の上側4面を取り囲んでいる8枚の彫り物は八枚彫とよばれ、1面に対し2枚ずつ取り付けられている。西町の8枚彫には「黄石公」、「張良」、「翁(住吉明神)」、「白楽天」などの中国の政治家や詩人などといった人が描かれている。

2-3. 曳山の組み立て、解体、補修

曳山の組み立ては曳山の組み立てについて詳しい曳山大工の指示によって行われる。曳山大工のように組み立ての順序を覚えている人は今では大分少なくなってしまったという。次に解体について、曳山の解体は通常祭が終わった後に行われるのだが、西町の曳山は今年曳山展示館に展示される番であったため、曳山の解体は行わずにそのままの形で曳山展示館に搬入した。よって解体の様子は観察していない。最後に補修について、やはり長い間同じ曳山を使い続けていると痛む所が多々でてくる。しかし、現在曳山自体を新しくするには相当なお金がかかるために曳山を新しくすることは出来ない。よって部分的な補修が行われている。部分的に補修するといっても、外から見えるような色が塗ってあるものや彫り物などは直すのに相当なお金がかかってしまうため、外から見えない内部の部品を新しくしたりして曳山の補修を行っている。

2-4. 曳山祭の日程

次に、曳山祭の準備から当日までの作業や行事について述べていく。

今年の進行日程は以下の表3にまとめた。詳しくは後ほど述べるが、大まかな進行としては、祭が行われる前に囃子方の稽古があり、本祭の1週間ほど前から様々な準備や行事が行われ、祭当日を迎えて、祭が終わると後片付けをして慰労会という流れである。

表3. 西町の曳山祭の日程

4月23日(水)	祭直前の曳山囃子練習
4月24日(木)	〃
4月27日(日)	八幡社にて安全祈願祭(一括総祓い)
4月29日(火)	公民館飾り付け
4月30日(水)	神渡 <small>かみわたし</small> の儀
5月1日(木)	曳山の組み立て 調曳き 神前 <small>はやし</small> 囃子
5月3日(土)	※祭当日※
5月4日(日)	公民館飾りの片付け・曳山の組み立て 神前囃子

曳山搬入式
慰労会

2-5.祭の進行

ここからは、曳山祭の進行にしたがって、作業や行事の内容について詳しく説明していく。

2-5-1.曳山囃子練習

囃子の練習は西町公民館で午後 8 時から始められる。囃子方は笛、三味線、太鼓合わせて 10 人ほどいる。囃子に使われる笛は西町が購入したもので、個人のものではないそうだ。しかし、三味線についてはおわら風の盆でも使用するものであり、三味線を演奏する人が個人で購入するという。

練習 1 日目の 4 月 23 日、午後 8 時半頃から練習が始まった。練習の曲順は以下の表 4 にまとめが、囃子は一の手、二の手、三の手、四の手、五の手、六の手、上下の坂、帰り山、おきんさとよばれる演奏と、4 つの唄で構成されている。

表 4.囃子練習の曲順

一の手	唄 (猛き心)
二の手	一の手
三の手	二の手
(休憩)	三の手
四の手	(休憩)
唄 (西の宮)	上下の坂
五の手	帰り山
唄 (さそわれ)	おきんさ
六の手	
(代々かさねて)	
唄尻	
(休憩)	

練習は 10 分から 15 分演奏して休憩、という風に進められ、休憩中にはつまみやお酒が用意されて、参加者は自由に飲食していた。このつまみやお酒は「曳山会計」と呼ばれる会計係が準備する。

練習 2 日目の 4 月 24 日も練習は続いた。この日は、祭当日に食事の準備をする女子

青年団の人が、祭当日の昼食や夕食の打ち合わせにやって来た。

また、中学1年生から囃子方をやっている20代の男性に、なぜ囃子方をしようと思ったのか聞くと「みんなやっているから自分もやろうと思った」という。最近では、人口が減って担い手が少なくなってきたので、囃子方の大人が子どもに囃子をやるよう頼むこともあるという。こうして囃子方を始めた子どものなかには、退屈だから、あるいは上手にならないからといった理由で、途中で練習をやめる子もいるという。

2-5-2.八幡社にて安全祈願祭（一括総祓い）

4月27日は一括総払いと呼ばれる行事が行われる。この日は八幡社で祭が安全に行われるように曳山を持つ6町と獅子舞を持つ鏡町の人々がお祓いをしてもらう。集合時間は午後7時過ぎであり、町ごとに長いさおの先に提灯がついている高張提灯たかはりちようちんを先頭に時間通りにやってくる。服装は、拝殿内に入る区長、氏子総代、曳山総代、警護などは紋付、または礼服と決まっており、その他の人は各町の名前が入っている法被を着て帯を締めている。

午後7時20分頃お祓いが始まる。安全祈願祈禱が行われ、宮司が祝詞のりとをよみ、全員でお祓いをしてもらう。次に町ごとに玉串たまぐしを奉納し、宮司が挨拶を行い、各町にするめと酒一升が渡される。一括総払いは30分ほどで終了して午後8時過ぎに解散となり、町の人それぞれ帰って行った。

2-5-3.公民館飾り付け

4月29日は午後1時から公民館の飾り付けが行われる。時間になると大方人が集まってきたので総代、副総代の掛け声で飾り付けが開始された。

作業が始まると、まず入り口の戸を外すなど、作業に邪魔になる物をどける。飾り付けに必要な物は曳山が保管されている山蔵と一緒に保管されているので、次にそれらを山蔵から公民館へ運び出す。公民館へ飾りを運び終え、いよいよ飾り付けにとりかかる。写真4のように提灯の取り付けから始まり、その後は各自様々な場所の飾り付けをしていた。午後2時過ぎには大方の飾り付けが完成し、神係の人が部屋の奥で神様周辺の飾り付けを始めた。これは次の日に行われる神渡かみわたしの儀の時に神様を公民館に迎えるための準備である。神渡の儀については次の項で詳しく述べる。

午後3時頃、神様周辺の飾り付けも完成しこの日の作業は終了した。



写真 4.公民館の飾り付けの様子

2-5-4. ^{かみわたし}神渡の儀

4月30日の午後7時頃、神渡の儀のために町の人たちが西町公民館に集合し、山蔵へと移動する。神渡の儀とは山蔵から公民館へ神様を迎える行事である。

山蔵に入るとまず拍手をうち、それから神様の装飾品や儀式中に読み上げられる祝詞などが運び出される。^{かしろで}祝詞を持った区長を先頭に、保存会長、公民館長という風に一列に並んで装飾品などが公民館へ運ばれる。そして最後尾には写真5のように神様の頭が入っている^{ずばこ}頭箱が続くが、この頭箱を運ぶのはなるべく汚れていない青年団4人とされている。



写真 5.頭箱を運ぶ様子

この日、祝詞や装飾品などを公民館まで運ぶ人や頭箱を担ぐ人たちは紋付袴姿であり、その他の人は西町の法被を着用している。15分程ですべてを公民館へ運び終え、午後7時20分頃、神渡の儀が始まる。写真6のように、頭箱が公民館の奥に置かれて開かれ、全員で二礼二拍手一礼し、区長によって祝詞が読み上げられる。祝詞が終わり、また全員で二礼二拍手一礼し、神渡の儀は終わる。



写真 6.神渡の儀

神渡の儀が終わると宴会が行われる。この日は八尾壮年団本部役員が各町に曳山祭に関する規約書と祭に使う^{きしろう}徽章を持ってあいさつに回る日でもあり、飲食しながらそれを待っている感じである。午後8時半頃やって来た本部役員を玄関先で総代が迎え、規約書と徽章を受け取った。その後、本部役員を公民館内へ招き入れ、御神酒をふるまった。本部役員は15分ほど滞在し、次の町へ向かって行った。

午後9時近くになり、公民館内の明かりが消され、提灯の明かりだけになった。薄暗い中でみんな酒を飲んでいるが、これは「ちょうちん見」と呼ばれる行事を真似たものである。「ちょうちん見」とは、昔神渡後に手持ちの提灯を持って鏡町にある「北吉」というお店に歩いて行き、そこで飲み直した行事のことである。この時、提灯を座敷の^{ながし}長押（柱を水平方向につなぐ部材）に差し込みちょうちんの明かりで酒を飲んでいたことから「ちょうちん見」と呼ばれるという。最近ではこの行事は途絶えてしまっていたが、今年西町の公民館が新しく建て替えられ、今の公民館を使つての神渡の儀は最後になるので、この「ちょうちん見」をやろうということになったという。

午後9時過ぎになり、区長、総代、警護からそれぞれあいさつがあり、最後に全員で神様に向かって二礼二拍手一礼し、解散となった。

2-5-5. 曳山の組み立て、調曳き、神前囃子

5月1日は曳山の組み立て、調曳き、神前囃子といった行事が行われる。

まずは曳山の組み立てについて述べる。午前7時、青年団支部長が町の人を呼び出すための呼び鈴を鳴らしながら町の中を歩き始める。だいたい人が揃うと、若い人たちが積極的に動き山蔵から様々な部品を運び出す。この時「彫り物を触る時は手袋をするように」など、年配の人が様々な場面で指示を出していた。1時間ほどで必要な部品を公民館へ運び終え、年配の人が彫り物を組み立て始めた。その頃、山蔵では40人近くの若い人たちを中心に、曳山の土台部分の組み立てが始められていた。写真7のように一旦山蔵で土台だけ組んで、その土台を公民館前へ持っていき、それから上の方まで組むという。また、曳山の組み立てと同時進行で公民館では神係が神様を作る。



写真 7. 曳山の土台部分の組み立て

午前9半頃土台が完成し、山蔵から公民館前曳山を移動し、いよいよ曳山の上の部分の組み立てが始められる。写真8のように1階部分の骨組がほぼ完成し、午前11時半頃から曳山の2階部分にとりかかる。この2階部分の組み立てと並行して、曳山の下の方では彫り物をはめ込む作業を行っている。午後12時半頃、曳山の組み立ては終了した。



写真 8. 曳山の組み立て

午後からは調曳^{ちようび}きが行われる。調曳きとは、曳山に異常がないか確かめるために試しに曳山を曳くことである。午後 1 時半、調曳きの前に公民館で神前囃子をし、その後神係によって神様を曳山に乗せるための準備が始められた。神様を曳山に乗せる時は、少し分解し曳山の上で再度組み立てられる。午後 2 時過ぎ、公民館から神様を運び出し曳山へ乗せる。この時神様には目隠しがされるが、神様に汚れたものを見せないためだと町の人と言う。曳山に神様の足、腕、冠などの装飾品、が乗せられ、分解された神様が組み立てられていく。午後 2 時半頃、神様が完成し曳き出す。この日は八尾小学校の 2 年生が曳山の見学に来ており、綱と一緒に曳いていた。10 分ほど一緒に曳いて小学生は帰って行った。

午後 4 時頃、調曳きが終わり曳山の解体が始まる。この時は曳山の全てを解体するのではなく、大体の骨組みを残した状態まで解体される。昔人が多かった時は調曳き後全て解体していたそうだが、今は人手不足で祭当日の朝に一から組み立てるのは難しいため少しだけ解体する。解体が終わると公民館近くのスペースに曳山を移動し、その場でビニールシートやブルーシートでしっかりと曳山を覆う。午後 5 時半過ぎに作業は終了した。

次からは夜に行われた神前囃子について記していく。神前囃子とは正式には御神前奉納囃子といい、神様に囃子を奉納する行事である。午後 7 時半、公民館へ来た人たちはず神様に向って拍手を打って、それから公民館へ入ってくる。

まず、この日公民館にやって来た人々の服装について記すことにする。区長や曳山総代などの役員にあたっている人は自分の家の紋が入っている紋付袴に羽織を着用しており、囃子方^{かしわ}の人は西町の紋である「つる柏」の入った紋付袴を着ているが羽織は着用していない。酌人^{しやくにん}と呼ばれるお酌をしてまわる人も紋付袴姿であるが羽織は着用して

いない。曳山を動かす時に警護と一緒に指示を出す副警護の人は「警護」と書かれた法被、曳山祭を仕切る曳山総代をサポートする副総代の人は「副総代」と書かれた法被を着ており、両者とも下はワイシャツにネクタイ姿であった。その他の人は西町の法被を着ている。曳山祭に参加する各町は、特徴的な自分の町の法被を持っており、西町の法被は西町の曳山の神様である恵比寿神の「恵」という1文字が背面に書かれているものである。また「西」という文字が法被全体に模様として入っている。

以上のように町の人々は様々な服装をしているのだが、囃子方の人々も紋付袴を着用しているというのは他の町にはあまり見られない特徴である。写真9のように本来5月1日の神前囃子は役員、囃子方とも紋付袴を着用するのが正式な形であるが、現在では役員だけ紋付袴姿という町も多いようだ。このように、西町の神前囃子は昔の伝統を守り役員、囃子方ともに紋付袴姿であるためとても厳粛な雰囲気で行われるという。



写真9. 5月1日の神前囃子の様子

次からは、時間の経過に沿って神前囃子の内容を紹介する。まず、全員で神様に向かって二礼二拍手一礼し、神前囃子が始められた。次に、酌人によって御神酒が配られ始めた。この日の酌人は壮支長、副警護、青支長、とくに役にはついていない人の4人によって行われた。この酌人と呼ばれる4人の内3人は、壮支長・副警護・青支長と決まっているようで、あとの1人は飲みたい人など誰でもいいと言う。それぞれ2人1組になって、上座の方から左右に分かれ御神酒を配っていく。この時お酌をされる人は、一礼し2回お酌を受け、最後に盃を裏返しにして返す。この2つのペアによるお酌が半分くらい進んだところで、副総代、八尾壮年団団長、副警護など数人が徳利を持って上座の方からお酌をし始めた。その後はみんな自由に飲み始めた。

会が始まって30分程度過ぎた頃、太鼓が1回鳴り、囃子方の三味線の人たちが楽器

の調整をし始めた。いよいよ囃子が始まる。

この日の囃子の曲目と順番は下の表 5 に示した。午後 8 時頃から、「一の手」から「三の手」まで、「四の手」から「唄尻」まで、「猛き心」から「一の手」・「二の手」・「三の手」まで、「上下の坂」から「おきんさ」というように進められていった。

表 5. 神前囃子の囃子の曲目と順序 (左上から始まる)

一の手	唄 (猛き心)
二の手	一の手
三の手	二の手
四の手	三の手
唄 (西の宮)	上下の坂
五の手	帰り山
唄 (さそわれ)	おきんさ
六の手	
唄 (代々かさねて)	
唄尻	

囃子と囃子の間はみんな自由に飲食している。午後 10 時 20 分頃普通の盃よりもかなり大きな大盃でのお酌が始まった。酌人は前に述べた人と同じである。お酌の最中は歌が歌われみんな楽しそうである。30 分程度で大盃でのお酌が終わり区長さんを先頭に酌人たちが奥の方へ帰っていった。その後、全員が部屋に集合して二礼二拍手一礼し、区長、曳山総代、警護のあいさつがあり、午後 11 時頃神前囃子は終了した。

2-5-6. 祭当日

これから時間の経過に沿って祭当日の流れを記していく。

5 月 2 日の午前 3 時前に、東町公民館の 2 階で本部役員と各町の総代、警護によって祭を行うかどうかの「曳き廻し会議」が開かれ、天候状態などからこの日の曳き廻しが決定した。その結果を聞き、西町ではすぐに曳山の組み立て準備が始められた。

午前 3 時、布令太鼓が鳴らされる。布令太鼓とは町の人に曳山の組み立てが始まることを知らせるものであり、副総代や八尾壮年団の団長などの数人の大人と小中学生くらいの子が鳴らしていた。昔はこの布令太鼓を鳴らすのは中学生の仕事だったが、今は子どもが少なくなったために大人も参加しているという。

公民館には組み立てのために 35 人くらいの人が集まり、公民館近くのスペースに収められていた曳山を公民館前まで移動する。午前 3 時半頃から組み立てが開始され、20 分ほどで曳山の 2 階部分が完成した。この時曳山の組み立てと同時進行で、夜の提灯山のために提灯の準備をしている人もおり、提灯山の出発地点である十三石橋ヘトラック

で提灯や足場などを運ぶ。

午前 4 時半頃組み立てが終了し、午前 5 時半頃から神前囃子が始まった。一の手から三の手まで演奏され、30 分ほどで神前囃子は終了した。その後 6 時半頃に、警護頭が祭の安全祈願のために曳山の周りに塩と酒をまき、車輪の上には盛り塩をした。祭当日の朝は写真 10 のように 6 本の曳山はまず聞名寺の境内に集合し、そこから順に曳き出していくが、西町もこの安全祈願が終わると車輪の歯止めをとりいよいよ聞名寺に向かって曳き出す。そして午前 7 時半に聞名寺に入った。



写真 10.祭当日の聞名寺の様子

町の人が朝食をとり終え午前 9 時半近くなると、曳山の 2 階へ人が上がり始めた。曳山の 2 階に乗るのは、4 本の柱につく四本柱 4 人と氏子総代、曳山大工、自治会長などである。

また、祭当日は役職によって服装が異なり、みんな様々な服装をしている。この祭当日の町の人々の服装については、以下に表 6 にまとめたが、ここで初めて出てくる役職がいくつかあるので簡単に説明する。ピンはりとは曳山の梶棒の両端につく 4 人のことをいい、前梶、後ろ梶とはそれぞれ前の梶棒、後ろの梶棒につく人のことをいい、数人いる。また車警しゃけいとは車輪の操作をする 4 人のことをいう。あいさつ係は花をくれた家にあいさつをし、花係は花を回収する人である。当日の服装で特徴的な点は表 6 に記されているように、西町の総代と警護頭が紋付袴姿であったことである。昔は多くの町が総代、

警護頭ともに紋付袴を着用していたようだが、一時期やめてしまっていた時期があったり、現在行っていないという町があるなかで、西町は一度もこのスタイルをやめたことがないのだと区長は語っていた。実際、曳山総代は紋付袴を着用しているが、警護頭は紋付袴を着用せずに法被を着用しているという町も見られた。

表 6. 祭当日の西町の人々の服装

自治会長	紋付袴	警護頭	紋付袴
氏子総代	紋付袴	副警護頭	襟もとに「副警護」、背中に「恵」と書かれた法被姿。 法被の下は白いワイシャツに西町のネクタイ。
曳山大工	紋付袴	ピンはり (梶棒の両端につく4人)	襟もとに「西町曳山」、背中に「恵」と書かれた茶色い法被にハチマキ、白いニッカ、白い地下足袋。
曳山総代	紋付袴	後ろ梶 (後ろの梶棒につく人たち)	(ピンはりと同じ)
壮支長	襟もとに「壮支長」、背中に西町の紋であるつる柏が書かれた法被姿。	前梶 (前の梶棒につく人たち)	西町の法被にハチマキ、白いニッカ、白い地下足袋。
曳山副総代	襟もとに「曳山副総代」、背中に西町の紋であるつる柏が書かれた法被姿。法被の下は白いワイシャツに西町のネクタイ。	車警 (曳山の車輪の操作を担当する4人)	襟もとに「西町曳山」、背中に「恵」と書かれた黒い法被に黒いニッカ、黒い手袋、黒い地下足袋。
		四本柱 (曳山の2階で4本の柱につく4人)	背中に西町の紋であるつる柏が書かれている黒い法被。法被の下は白いワイシャツに西町のネクタイ。
		あいさつ係	西町の法被。法被の下は白いワイシャツに西町のネクタイ。
		花係 (花を集める人)	西町の法被。法被の下は白いワイシャツに西町のネクタイ。

午前9時半になると、予定通りに今町から順に曳き出し始める。曳山を曳く順路には聞名寺を出て東町の方に進む東上がり、西町のほうに進む西上りの2つがあるが、これは1年ずつ変わり、今年は東上がりであった。曳き出し順は今町、下新町、西町、上新町、諏訪町、東町という風である。午前9時50分頃にいよいよ西町が曳き出す。曳山の周りには写真11のように多くの人が入り、曳山の前方には曳山総代、副総代、警護頭、曳山会計、青支長、壮支長、花係、あいさつ係などの役職の人たちがいる。そして曳山の後方には副警護が2人おり、そのほか公民館長であったり自治会長であったり、年配の人たちが歩いている。また、曳山の前では15人程の男女の子どもたちが綱を引いており、児童係と呼ばれる子どもをまとめる役の人が子どもたちに「行くよー」や「下がるよー」など声をかけている。基本的に八尾の曳山祭は女人禁制であるので女性は曳山に触れることはできないとされている。しかし、最近では子どもが少なくなったこともあり、小さい子に限り女の子の祭への参加が認められつつある。これは西町に限ったことではなく他の町でもいえることだが、西町はこの女性の参加という点に関して、他の町に比べるとそれほど積極的ではないという印象を感じた。このことについては、後に節で詳しく説明する。



写真 11.曳山を曳く様子

では祭当日の話に戻る。午前11時半頃に諏訪町で昼休憩に入った。お昼ご飯会場で

は、女子青年団の人たちがお弁当を配るなどしている。午後 1 時過ぎ、再び曳き出した。そしていよいよ一番難しく危険だと言われている東新町の曲がり角へ向かう。角が近付くと、曳山の 2 階部分の 4 本の柱の後ろ 2 本に、助け縄たすなわと呼ばれる縄を巻きつける。これは曳山が坂を上り下りする際に 2 階の柱が倒れてしまわないように柱を支えるためのものである。午後 2 時、曲がり角を曲がることに成功し、無事に東新町の角を過ぎた。曲り終わると、先ほどつけた助け縄を 2 階から出し、後ろで縄を引っ張りながらゆっくり坂を下っていく。

その後も順調に曳山は進み、午後 3 時半頃西町に入る。他の町では決められた家できか曳山をとめてあいさつをしないが、自分の町では全ての家の前で曳山をとめ、あいさつ係があいさつをする。

午後 5 時過ぎに提灯山の出発地点である十三石橋に到着する。町の人たちは到着してすぐに提灯山の準備にとりかかる。まず、屋根の上のシャチホコやそのほかの飾り、彫り物がすべて外され、手際よく提灯が付けられていく。写真 12 のように西町は 2 階の屋根の部分まで提灯をつけるが、これは西町だけだという。他の町は危険だからという理由で屋根の上までは提灯をつけない。



写真 12.西町の提灯山

そして午後 7 時半過ぎ、全ての町が提灯をつけ終わり提灯山を曳き出す。西町の曳山の前では、中学生が高張提灯たかはりちようちんを持って歩いており、年配の人たちが綱を引いている。少

し曳いたところで、公民館長が曳山と一緒に歩いていた女子青年団に向かって「女子青年団もつなぐれ」と声をかけた。基本的に曳山祭は女人禁制の祭であるため女性は曳山に触れることはできず、女子青年団も今年初めて曳山の曳き綱を持てるようになったようで、とても嬉しそうであった。

その後八幡社で参拝し、午後 9 時頃、聞名寺の横の道に一旦全曳山がそろろう。10 分後、それぞれ自分の町へ帰っていくために曳山が順に曳き出していく。この時、壮年団本部役員へ町の人全員で整列してあいさつをしてから帰っていく。

午後 11 時頃に西町公民館に到着し、その場でおきんさが囃される。おきんさが終わると、総代から「お疲れさまでした」とあいさつがあり、その後すぐに提灯山の解体に入る。また、神様は曳山から降ろされ公民館内へ移動する。曳山から提灯が全て外されると、曳山にシートをかけ公民館近くのスペースに移動しておく。

午前 0 時 40 分頃、全員で二礼二拍手一礼し公民館内で神前囃子が始まる。30 分ほどで神前囃子は終わり、区長、総代、警護頭からそれぞれあいさつがあり、午前 1 時半、祭は終了した。

2-5-7.公民館飾りの片づけ、曳山の組み立て、曳山展示館への搬入式

祭も終わり、5 月 3 日は公民館の後片付けや曳山展示館への曳山の搬入式が行われる。午前 7 時、曳山副総代が呼び鈴を鳴らしながら町内を歩く。公民館には 40 人くらいの人が集まっている。午前 7 時半頃から曳山の組み立てが始められる。ふつう祭が終われば曳山は解体されるが、今年（2008 年）西町は曳山展示館に曳山を展示する番であったので、屋根の部分や、2 階部分を組み立て、彫り物類をはめ込むなどして曳山を完成形にする必要があった。

1 時間ほどで組み立ては終わり、午前 9 時頃から神前囃子が始められる。20 分ほどで終了し、公民館の飾り付けを片付ける人と、展示館へ行く人とに分かれて作業が進められた。午前 10 時半過ぎ、公民館から曳山展示館へ向かって曳山を曳き出す。展示館に着くと館内でおきんさが囃され、外で曳山保存会長によって搬入式が執り行われた。

その後午後 1 時から西町公民館で慰労会が行われた。

祭の進行についての報告は以上である。

2-6.祭中の女性の役割について

本来曳山祭は女人禁制の祭であり、主に男性だけで祭は運営されているが、女性に関わっている部分もある。ここでは、祭全体を通しての女性の役割について記す。

まずは女子青年団の活動についてだが、女子青年団は祭当日の昼食と夕食の用意をする。その他は祭当日曳山についてまわっている。また婦人会の人たちは、休憩中に飲み物を配るなどする。

次に祭に女性が参加することについてだが、前にも書いた通り、曳山祭は女人禁制多

少変化が見られるなかでも、西町では昔ながらの曳山祭の伝統を重んじているという雰囲気強く感じた。であるため、昔は女性が曳山に触れることで曳山が汚れてしまうなどと考えられており、基本的に女性は祭に参加できない。しかし、最近では少しずつ女性の祭への参加が認められてきている。このように祭が変化してきたのは子どもが少なくなったことによる男の子の減少や、時代の流れで男尊女卑の考え方が薄れてきたことに要因があるだろうと町の人は言う。

西町でも近年そうした変化が見られる。ひとつは十数年前から女の子も曳山の曳き綱を持てるようになったことである。しかしこのことには条件があり、それは女の子でも小さい子に限られていて法被にズボン着用で女の子らしい服装は禁止というものである。もうひとつは女子青年団も曳き綱を持てるようになったことである。今までは小さい子に限って女の子でも綱を持つことが許されていたが、今年はじめて提灯山の時に曳山保存会会長の「女子青年団もつながれ」という呼びかけで女子青年団も綱を持てるようになったのだ。

こうして少しずつ西町も変化してきてはいるが、まだ曳山の上に女の子を乗せることは許されていないようだ。他の町では小さい子どもに限ってだが女の子を曳山の上に乗せたり、年齢に限らず女の子も綱を引けたりといったことが許されているところもあり、そういった町に比べると西町は祭の変化に対してあまり積極的ではないように感じられた。

3.祭に対する住民の認識

西町の人たちは、曳山祭をどのようにとらえているのだろうか。聞き取った語りを中心に考察してみたい。

今年の曳山副総代は「彫り物の山では八尾の（曳山）が日本一」と語り、また別の男性は「城端の曳山は上の方が寂しい。八尾の曳山は華やかや」と語っていた。このように、八尾の曳山が豪華で華やかだという誇りを感じさせるような語りが多く聞かれた。曳山総代の経験がある男性は曳山の組み立ての様子を見ながら、「いずれは曳けんくなるやろう（曳けなくなるだろう）。やっぱり木やから、腐ったりするからなあ」と少し寂しそうに話していたが、町の人が曳山そのものに誇りや愛着を持っていることが分かる。

また、ある中年男性は「公民館飾り（公民館を飾り付ける作業）みたいなんは好きくない（好きではない）。山（曳山）曳くのが面白いだけ」と語り、「警護はまだ山（曳山）動かせるからいい。総代なんてなんも面白くない」と話し、曳山を曳くことを楽しいと感じていることを表現していた。

祭が終わった後の公民館の片付けの時には、老年の男性が「おれはこういう祭後の片付けこそが祭やと思っとる」と言い、「後片付けとかで人と人との関わりができるでしょう。そういうのが大事なんやちゃ（大事なんですよ）」と話していたが、この語りか

らは祭への参加を通して、西町の住民同士の連帯感やまとまりができたり、強くなったりすることに意義があると住民たちが考えていることが分かる。

3. 上新町の曳山

岡濱 千尋

1. 上新町と上新町の曳山について

上新町は、八尾旧町の入り口である天満町から坂道を登り、下新町、今町、並立する西町と東町をさらに進んだ、旧町の南西に位置する。下の図1の丸で囲まれた範囲がそうである。

上新町の人口は、2008（平成20）年3月末の時点で男性204人、女性230人、計434人で世帯数は160世帯と、八尾旧町の中では人口の多い町である。しかし、近年では、10代後半から30代の若い人たちは進学や就職、結婚などの理由で町を離れることが多い。町から出た人のなかには、曳山祭の際に帰省して参加する人もいるが、町の人たちによれば、祭に参加する人がだんだんと少なくなっているという。

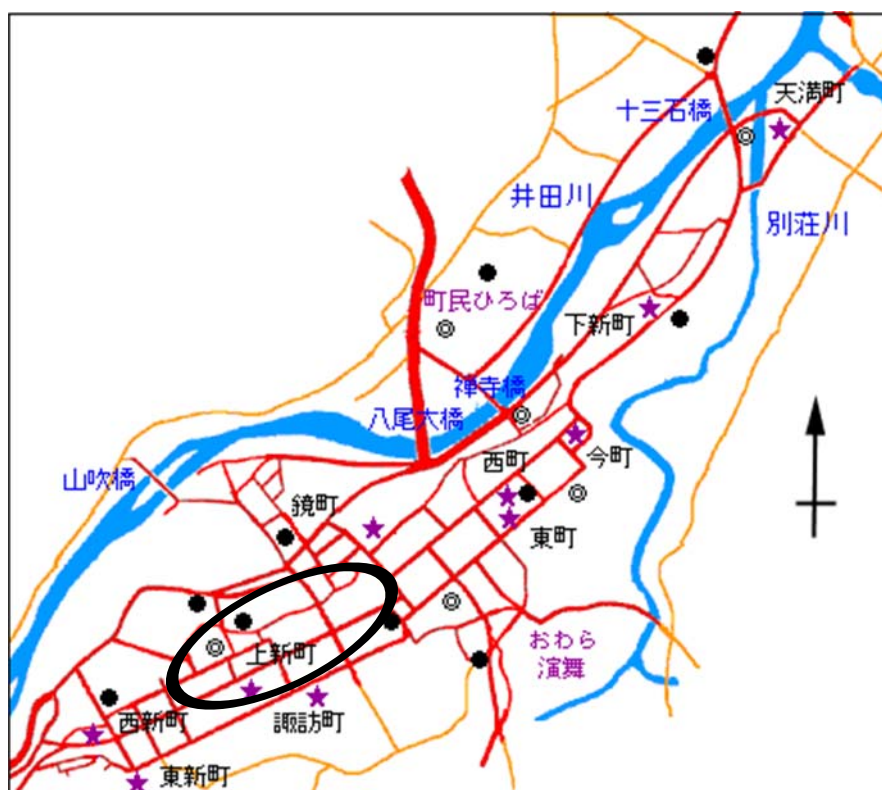


図1. 上新町の位置

(<http://homepage3.nifty.com/kazegumi/town>. をもとに作成)

次に上新町の特徴について記す。上新町は商店が多い町である。また、曳山が展示してある越中八尾観光会館（曳山展示館）があるため、1年を通して観光客の姿が多く見

られる。他の町と比べて、比較的に道幅が広いとため、9月はじめの「おわら風の盆」の際には、観光客と住民が一緒になって踊る「大輪踊り」が催される。また、「おわら風の盆」の雰囲気に合わせて木造の家が多いことも上新町の特徴である。

現在の下新町にある八幡社の産神上皇太子社の屋根をふきかえたときに、御遷宮祭を賑やかなものにするため、在原業平の人形を飾った曳山を作ったことが上新町、ひいては八尾の曳山の始まりとされている。上新町の曳山は曳山を持つ6町の中で最も古い由来を持つが、「曳山台帳」の記録から、1741（寛保元）年に曳山がつくられたとされてきた。「曳山台帳」は、曳山にかかった出費の内容を記した帳簿であり、かつてはそれぞれの町で台帳を作って保管していたが、現在まで残っているのは上新町だけである。

2. 上新町の曳山に関わる組織と役割

ここでは曳山祭に関わる上新町の組織と曳山祭での役割について記述する。まず、上新町の各組織を下の表1にまとめた。

表 1. 上新町の曳山に関わる組織

	組織	年齢	主な役割
上新町 自治会	むつみ会	小学生	曳き綱・助け縄
	青年団女子	18才～24才	給食係
	青年団	18才～26才	曳き手
	壮年団	27才～45才	祭の運営・曳き手
	業平会	46才～50代	挨拶係・曳き手の補助
	鳳凰会	60代～70代	曳き綱・助け縄・曳き手の補助
	曳山行事委員会		祭の運営
	曳山保存会		

上新町では自治会の他に年齢に応じて表1のような組織が形成されていて、曳山祭ではこの組織ごとに役割が決められている。

上新町の児童会であるむつみ会は、本番前の5月1日に曳山の試し曳きを行う調曳きや、5月3日の祭当日の曳き廻しに参加する。主に曳き綱や助け縄を持って曳くかたちでの参加となる。曳き綱は、曳き手が曳山を動かす際に持つ梶棒に結ばれ、主に子どもたちが引く。また助け縄は曳山2階の柱に結ばれ、曳山が急な坂道を通る際にその縄を引くことで曳山のバランスを取る。中学生と高校生も、調曳きと祭当日の曳き廻しに参加し、青年団、壮年団と一緒に、曳山の曳き手である前梶・後梶の役割を担う。曳山祭は本来女人禁制の祭であるため、青年団女子は祭の運営には参加しないが、祭本番の日の食事を用意する役割を持つ。上新町の曳山祭を運営しているのは主に青年団、壮年団、業平会である。鳳凰会は上新町の老人会で、祭の準備期間から当日まで青年団、壮年団、

業平会への助言や、調曳や祭当日に、曳き綱、助け縄など曳き手の補助を行う形で参加している。

このように、曳山祭は子供から年配者まで、幅広い年代の男性たちが参加する祭であり、20代後半から50代くらいまでの男性が中心となって運営される。

次に上新町の曳山祭における役職についてみる。前で述べたとおり、曳山祭には幅広い年代の男性たちが参加しており、そのほとんどが何らかの役割を担っている。下の表2に役職をまとめた。()内の数字を役職の人数とし、無表記を1人とした。

表2. 上新町曳山祭の役職

曳山行事委員会	曳山総代	氏子総代 (2)		高張提灯 (2)	
	副総代 (2)	神係 (2)		給食係	
	警護頭	囃子方	太鼓	/	
	副警護 (2)		三味線 (6)		
	曳山会計		笛 (8)		
曳山保存会	保存会会長	車警 (7)			/
	副会長 (2)	梶警 (9)			
	保存会会計	前梶・後梶 (8)			
	庶務 (3)	四本柱 (4)			
	曳山大工 (4)	曳き綱・助け縄			
	対策委員	挨拶係 (22)			
	調査委員 (2)	花係			

上新町では、曳山祭において、その町の代表者となる曳山総代、副総代2名、曳山を動かすときに指揮を執る警護頭、副警護2名、曳山会計の7名で曳山行事委員会が結成される。曳山行事委員会は上新町自治会に委託され、町の中心となって祭の運営にあたっている。

また、曳山の保存と研究のために曳山保存会がある。曳山保存会は、会長、副会長2名、会計、庶務3名、曳山の知識を持ち、曳山の簡単な修理を行うことのできる曳山大工4名、対策委員、調査委員2名で構成されている。保存会は、曳山の保存のために町の人たちから会費を集めたり、通年で曳山についての研究や調査を行ったりと、祭当日の運営には直接関わることはないが、委員個人では祭に参加し、何らかの役割を担っている。また、保存会は曳山についての知識が豊富な人や、曳山が好きな人で構成されている。

その他にも上新町には他の町と同様に多くの役割がある。町の人全員は氏子であり、氏子総代はその代表である。曳山祭では、祭に関わる儀式などで神主の代わりとして

祝詞^{のりこと}を読む役割を持つ。神係は曳山に乘せる、人形^{ひとかた}という神様の世話役である。上新町の人形については後で詳しく説明する。また、曳山の曳き手である車警^{しやけい}、梶警^{かじけい}、前梶^{まえかじ}と後梶^{うしろかじ}、曳山の2階の4本の柱から運行の安全を確認する四本柱^{しほんぼしら}、曳山運行の補助となる曳き綱と助け縄、祭の祝儀である花を打ってもらった家にあいさつをする挨拶係、花を集める花係、提灯山のときに曳山の前で、長い竿の先に提灯がついた高張提灯^{たかはりぢようらん}を持つ係、青年団女子が務める給食係など、細かく役割が決められている。

3. 上新町の曳山について

上新町の曳山について、部分ごとに特徴を列挙する。

鳳凰^{ほうおう}

上新町の曳山で1番の特徴としてあげられるのは、曳山の屋根の上に乗っている金色の鳳凰で、1887（明治20）年に上新町の職人によって造られたという。下の写真1にも見られるとおりに翼を広げた大きな鳳凰であるため、上新町の曳山は鳳凰を入れると高さでは6町の曳山の中でもっとも高い。



写真 1. 上新町の曳山

ひとかた 人形

上新町の「神様」であるひとかたは、容姿端麗でありながら和歌の名手とされた平安時代初期の歌人、在原業平と、そのお付きの女性であるともじよの2体である。写真2の右側が在原業平、左側が共女である。1960（昭和35）年に実施した調査で、古い初代の人形は1741（寛保元）年の曳山の歴史よりも50年ほど古い歴史を持つものだということが分かっている。



写真2. 上新町の人形

なりひらびし 業平菱（町の紋）

在原業平はなりひらびしと呼ばれる紋を持っていたとされており、業平菱はそのまま上新町の紋として使われ、曳山祭や「おわら風の盆」のときに上新町の人が着る法被、祭のときに各家の前に飾る献灯提灯などにも描かれている。

彫り物

次に上新町の彫り物について説明する。

「金鶏障」は曳山2階部分の後方にある大きな彫り物である。上新町の「金鶏障」は、歴史上の人物とされる武内宿弥と龍神の図である。龍神が武内宿弥に、海の潮を自由に満ち引きさせることのできる乾珠、満珠という宝の玉を差し出しているところが描かれている。

1階部分の背後にも大きな彫り物があり、大彫と呼ばれる。上新町の大彫に描かれているのは関羽という中国三国時代の英雄で、写真3に見られるように、本を読む関羽の姿が立体的に彫られている。関羽の読んでいる書物は、古代の兵法家である孫子の書物

であることがわかっている。



写真 3.書物を読む関羽の大彫

八枚彫は、曳山の 1 階部分の上側 4 面を取り囲んでいる 8 枚の彫り物である。上新町の八枚彫は「蘭亭の図」である。蘭亭の図は、水の流れに杯を浮かべ、それが流れてくるまでの間に詩を読むという風流な遊びを描いたものである。

次に、曳山の組み立て、解体、補修について記す。

上新町の曳山は昨年の祭が終わってから 1 年間、曳山展示館に組み立てたままの状態
で展示されていたため、今年（2008 年）には曳山の組立は行われなかった。その代りに曳山を曳山展示館から搬出する際に、搬出式が曳山展示館で行われた。搬出式の様子については後ほど見ていく。

祭の後で曳山は解体されて保管されるが、前に述べたように上新町の曳山は曳山会館に組み立てたまま展示されていたため、曳山の解体を行うのは 2 年ぶりとなった。解体は、曳山総代をはじめとする壮年団、業平会の人たちの指示に従って進められた。祭が終わると、曳山は彫刻や飾りなどをすべて取り外し、1 階部分の骨組みとクルマと呼ばれる曳山の車輪のみとなった状態で、曳山の保管場所である山蔵の中に保存される。取り外された彫刻や飾りも、木の箱に収納され、山蔵で保管される。

なお、曳山の簡単な補修は、町の人たちが自分たちで行う。例えば、夜の曳山に取り付けられる提灯で破れてしまったものは、年齢層の高い業平会の人たちの中で、作業に慣れている人や手先の器用な人たちが行う。しかし、大がかりな修理が必要な場合は、専門の職人のもとに運んで修復してもらうが、この作業には数ヶ月かかり、高額な修理代を要する。曳山の部品はどれもとても古いもので、作りが複雑で繊細なものが多いためである。

以上が上新町の曳山に関する説明である。

4.祭の進行

次からは祭の進行について、日程に沿って詳しく見ていく。上新町の曳山祭の日程は次の表3のとおりである。

表 3.祭の日程

2月第1大安～第2大安	寒稽古
4月下旬	囃子作り上げ
4月27日(日)	曳山点検 公民館飾り付け 八幡社にて一括総祓い
4月29日(火)	青、壮年団総会 徽章配布(担当:青、壮年団) 児童法被配布
4月30日(水)	神渡しの儀 壮年団本部役員あいさつ
5月1日(木)	曳山展示館にて曳山の搬出式、点検 調曳き 神前囃子
5月2日(金)	提灯山の準備
5月3日(土)	祭当日
5月4日(日)	曳山解体、山蔵へ収納 花びらき、山行き

4-1.寒稽古、つくり上げ

今回の調査では上新町の寒稽古とつくり上げを見ることはできなかったため、町の人から聞いた話の内容から、寒稽古、つくり上げについて簡単に説明する。

上新町では、2月の第1大安から第2大安までの間、曳山囃子の稽古を行う。これを寒稽古と呼ぶ。また、つくり上げとは、曳山の囃子の稽古の最終日のことを言い、上新町では4月の終わりごろに行われる。上新町ではつくり上げの日には囃子方の人たちに簡単な御膳がふるまわれる。

4-2.曳山点検

4月27日午前9時、上新町の曳山点検が行われた。6町の曳山は、1年ごとに交代で3体ずつ曳山展示館に組み立てたままの状態で開催される。上新町の曳山は今年の祭が終わってから1年間展示されていたため、曳山点検は曳山展示館にて行われた。点検は、町の男性が20人程度集まり、曳山の構造をよく知る年配の男性たちや曳山総代、警護頭をはじめとする曳山行事委員会が中心となって行われた。

曳山は釘を使う代わりに、クツバリやワリセンと呼ばれる棒に輪っかをくっつけたような金と麻ひもで各部分を繋げて組み立てられている。点検の際には、麻紐が弱ったり緩んだりしていないかしっかりと確認する。屋根の上の部分についても、同様の点検が行われるが、その点検を行うのは曳山の構造をよく知り、なおかつ高いところで作業ができる人でなければならない。

次に、ジャッキで曳山を持ち上げて曳山のクルマを1つずつ外していく。クルマはとても重いため、1つのクルマを男性約8人がかりで外す。クルマを外した後、クルマと曳山を繋ぐ心棒しんぼうに潤滑剤としてグリースを塗る。グリースを塗ることで、より滑らかにクルマが回転する。

4-3.神渡しの儀

4月30日午後7時頃に、上新町の山蔵にて神渡しの儀の準備が始まる。山蔵には、曳山に加えて、人形の装飾品なども保管されている。それらは儀式的後に人形の頭と一緒に公民館へ運ばれる。

神渡しの儀では、参加する人の服装はそれぞれの役割に応じて決まっていて、表4がその割り振りである。

表 4.神渡しの儀、服装について

紋付	自治会長、上新町曳山保存会長
礼服	氏子総代、神係、公民館長、曳山総代、警護
法被、白ネクタイ	青支長、壮支長、副壮支長、曳山大工、曳山役員
法被	青年団、壮年団、その他の町の人

神渡しの儀では正装が基本となる。自治会長や曳山保存会長、また、曳山において中心的な役割を担う人は紋付や礼服などのよりかしこまった正装と決められており、その他の人たちも、必ず町の法被はっぴを着なければならない。

表 5.神渡しの流れ 1

山蔵

- 二礼二拍手一礼
- 祝詞（氏子総代）
- 二礼二拍手一礼

神様の頭が入った祠は山蔵の 2 階にある。午後 7 時 15 分、山蔵の 2 階に紋付、礼服、法被に白ネクタイ姿の人が集まり、儀式が始まる。儀式は表 5 のように執り行われる。一同神様の祠に向かって正座し、はじめに拝礼する。神様に対しての拝礼は二礼二拍手一礼という形で行われる。次に神主の代わりである氏子総代が祝詞をあげ、再び拝礼する。

その後祠を山蔵の 2 階からおろし、山蔵から公民館へ運ぶ。祠は神輿のように持ち手が取り付けられていて、祠の前側を警護頭、後ろ側を副警護 2 名で持ち、準備していた神様の服や装飾品と共に公民館へ運ぶ。

表 6.神渡しの流れ 2

公民館
<ul style="list-style-type: none"> ● 二礼二拍手一礼 ● 祝詞（氏子総代） ● 歓談 ● 二礼二拍手一礼

祠が公民館についた後、公民館で再び儀式が行われる。流れは表 6 の通りである。

公民館の一番奥、上座に神様の祠が置かれ、祠の扉は閉じたままで儀式が執り行われる。今度は法被姿の人々も公民館に上がり、拝礼の後、氏子総代によって祝詞があげられる。しばらくの歓談の後、再び拝礼し、その後すぐに祠の手前にトマクがひかれ、神係がトマクの中に入り神様の体を組み立てる。トマクとは、公民館内で神様や祠が置かれるところと人々との境界にひかれる幕のことである。

神様の組み立てには 1 時間半から 2 時間程かかる。昔は神様を組み立てるときは、神係以外は公民館の中に入ることができず、また公民館の中の様子を外からは見られないようにしていた。現在では神係ではなくても公民館に入ることができるが、トマクの内側に入ったり、組み立てを行ったりしているところを見ることはできない。組み立てが終わると初めてトマクは開かれる。

4-4. 壮年団本部あいさつ

神渡しの儀と同じ日の 4 月 30 日午後 9 時半頃、礼服姿の壮年団本部の人たちが、町の人々にあいさつをするためと、規約書と徽章を配るために上新町の公民館を訪れた。本部の人たちは、1 人ずつ「失礼します」と言ってから公民館に入り、神様の前に正座する。一番前に壮年団本部団長が座る。本部の人たちが拝礼後、曳山総代と警護頭が本部の人たちに御神酒を振舞う。壮年団本部は、各町の壮年団の中から選ばれた人たちで、祭全体の運営を執り行うとともに、祭り当日は各町の曳山に 1 人ずつ付き添い曳山の運行状況を常に把握しておくことになっている。一同がそろって上新町を担当する壮年団本部団員の紹介がおこなわれ、法被姿の町の人々から壮年団本部の人たちにお茶、茶菓子などがふるまわれる。酒やビールで祭りを祝う町の人々とはしばらく歓談したあと、壮

年団本部の人たちは、再び神様に拝礼し、入り口で1人ずつあいさつして公民館を後にした。

4-5. 搬出式

翌5月1日、午前8時頃、公民館に曳山総代、警護頭、数人の青年団員が集まる。2人ほどが公民館の掃除をし、あとの人が小型トラックの荷台に布令太鼓をつみ、2人で交代してたたきながら上新町を回る。この布令太鼓は、5月1日の調曳き、3日の祭当日、4日の曳山解体と計3日間、町の人を起こし、男性たちを公民館に集めるために行われる。太鼓をたたく役目を任されるのは青年団である。太鼓の音を聞きつけて公民館に町の男性たちが集まり始める。布令太鼓をのせた小型トラックは、上新町を2周して公民館に戻ってきた。午前8時半、20人ほどの町の男性たちが集まり、曳山の搬出式のため曳山展示館に移動する。曳山展示館に1年間曳山が飾ってあった今町、東町、上新町の3つの町の人たちは、曳山の最終点検を行う。

曳山の搬出順と時間は次のとおりである。

表 7. 搬出順

午前8時55分	今町の曳山
午前9時	東町の曳山
午前9時5分	上新町の曳山

搬出順は曳山展示館に保存してあった並び順で、曳山展示館から遠い町ほど早く搬出され、搬出式の後もこの順に各町の公民館へ向かう。写真4は、搬出式の様子である。手前の曳山が今町、次が東町、上新町公民館は曳山展示館から一番近いため、最後の搬出となった。



写真 4.搬出式の様子

午前 9 時 10 分頃、搬出式が始まる。曳山保存会長、観光協会会長、曳山展示館館長のあいさつの後に各町にお酒が贈呈される。10 分弱で搬出式が終わり、3 つの町の曳山はそれぞれの公民館へと向かう。曳山を曳くのは青年団と壮年団で 10 代から 40 代の男性たちである。それ以外の人たちは曳山の後をついて回り、年配の男性たちは、ときどき曳山を曳く青年団、壮年団に曳山の動かし方についての助言を行う。

4-6.曳山最終整備

曳山会館を出た上新町の曳山は、午前 9 時 45 分頃、上新町公民館前に到着した。公民館前の道路に曳山を止め、曳山の周りに簡単な足場を組んで再び曳山の最終点検と整備を行う。整備の内容は、曳山の車輪などに施されている金の飾りを磨く作業と、彫り物を曳山から取り外して磨くという作業である。金の部分を磨く際は、傷がつかないようにフェルト生地のような柔らかい素材の布で磨く。

また彫り物については、主に曳山の高さの、ちょうど半分くらいの高さの 4 面に取り付けられている獅子の彫り物を磨いていた。この獅子の彫り物は「蛙股^{かえるまた}」と呼ばれる。写真 5 が蛙股である。蛙股を磨くときは、くるみの実を布で包んで小さく砕き、その油で磨く。彫り物のほこりを取り除いてつやを出すためである。磨くときに使う布は、おわらのときに着る着物で古くなって使えないものを割いて利用していた。作業には、曳山を曳く人たちのほかに年配の男性たちも参加する。



写真 5. 蛙股^{かえるまた}

正午頃に整備が終わり、曳山 1 階部分の囃子方が入って演奏するスペースに太鼓を入れ、三味線と笛の人たちが座るための座布団を敷く。最後に簾を取り付け、午前の作業は終了した。

4-7. 調曳き

5 月 1 日、午前に搬出式と最終整備を終え、午後からは調曳きとなる。午後 1 時、八尾小学校の生徒たちが公民館に到着する。調曳きには毎年八尾小学校の生徒が学年ごとに各町に分かれて参加している。上新町には 6 年生の生徒たちがやってきた。生徒たちは公民館の中で町の人々の指示に従って神様に拝礼し、曳山についての知識を教わる。その後曳山の 2 階に靴下を脱いで順番に上がらせてもらう。順番を待っているあいだはクルマの拭き掃除を行う。午後 1 時 50 分、調曳きのために 2 体の神様を公民館から曳山の 2 階へ移動させる。

写真 6 のように、曳山祭全体を通して、神様を移動させるときには、必ず神様の顔を布で覆い外気に直接さらさないよう、目隠しをする。なぜなら外気とは、俗人の世界であり、本来神様のいる世界よりも穢れているとされるからである。また、神様を運ぶのは町の人、つまり神様ではない俗人なので、一線をおくためとも言われる。町の人々にとって神様は町を見守ってくれる存在であるため、このような行動によって神様への敬意をあらわしているのである。



写真 6.人形を曳山に乗せる様子

曳山の 2 階に在原業平、その後方に共女ともじよがくるように乗せられた後、午後 2 時、調曳きが始まる。

小学生たちは、曳山の前方部分に取り付けられた、長くて太い 2 本の綱を曳く。曳山の 1 階部分には、囃子方が入って演奏するためのスペースがあり、調曳きのときはすべて生で演奏する。曳山のクルマはまっすぐに回転するため、曳山は直進することしかできず、角を曲がる時は力づくで曳山をまわして方向を変える。これを「角廻しかどまわ」と言う。1 時間ほど上新町の通りを曳き回したあと、小学生たちが帰り、曳山は上新町の公民館へと戻る。公民館前に曳山を止め、囃子方が「おきんさ」を囃す。「おきんさ」は、曳山囃子の最後にくる囃子である。曳山の運行が終わった後に最後の締めとして囃され、曳き手や町の人たちも手拍子と唄で「おきんさ」に参加する。神前囃子の最後や、本番当日の曳山曳き廻しの後などにも囃される。

調曳きが終了すると、曳山の上から 2 体の神様を公民館の祠の前に戻し、曳山の 2 階部分に飾られている装飾品をはずし、公民館の中に保管しておく。上新町の公民館前には、曳山を収納するための吹き抜けのようなスペースがあり、曳山は当日までそのスペースで保管される。

4-8.神前囃子

5 月 1 日の夜、上新町公民館にて神前囃子が行われた。午後 8 時、公民館に多くの人が集まり、公民館奥の神様の前に、囃子方と公民館長や自治会長などの紋付袴姿の役員と囃子方が 2 列に向かい合って座る。神前囃子では、公民館長、自治会長、曳山総代の他に、囃子方も紋付袴を着用する。並んで座っている人の前には、お茶菓子、餅、かま

ぼこ、御神酒が乗った御膳が置かれる。公民館の入り口側には、青年団や壮年団、業平会、町の男性たちが座る。神前囃子には、町の女性も数名見物に来ていたが、公民館の中の方には入らずに入り口付近で神前囃子の様子を見守っていた。

神前囃子は神渡しの儀と同様に神様への拝礼で始まり、次に自治会長があいさつがし、その後御神酒とかまぼこが公民館に居合わせたすべての人に振舞われる。しばらくして囃子方の音合わせがあり、太鼓の「エイコーリヤ」の合図で演奏がはじまる。この後神前囃子は、合間に休みを挟みながら進められる。囃子が演奏されているときは、周囲の人は目をつむったり、頷いたりと真剣な様子で聞いており、途中決まったところで「エイコーリヤ」や「ソーリヤ」、「ソーレ」などの合いの手を入れる。囃子の半分が終わると、青年団や壮年団の人たちが、公民館に集まっている人たちに酒やビール、つまみなどを振る舞い、つづいて1つの大きな杯で御神酒を回し飲みする。酌を行うのは曳山総代と警護頭の2名である。このとき、酒の肴^{さかな}、つまり酒を飲んでいる場を盛り上げるための余興として、指名された人が校歌や詩吟などの唄を歌う。その後しばらくして祝詞^{のりと}が読まれ、警護頭と副警護の3名が杯の御神酒を回し飲みする。それが終わると残りの囃子の演奏が始まる。最後に「おきんさ」が終わると、保存会長のあいさつがあり、二礼二拍手一礼で神前囃子は終了する。その後も深夜まで公民館で曳山の話題を酒の肴に、町の人たちの歓談が続く。

4-9.提灯点検

翌日の5月2日午後7時半、曳山総代、警護頭をはじめとする上新町の人たちが15人程集まり、公民館近くの駐車場で提灯の点検作業を行う。提灯は、祭当日の夜に曳山に取り付けられるもので、提灯を取り付けられた曳山は「提灯山」と呼ばれる。点検作業では、提灯の明かりが正常につくかどうかの点検と、どの提灯を曳山のどの部分に着けるかの確認が行われ、また、曳山総代をはじめとする壮年団、業平会の人々が青年団の若い人たちに取り付けの仕方を指導するなどといったことが行われた。

曳山に取り付ける提灯は、取り付けやすいように木枠に2個から4個ずつ取り付けられていて、どの木枠がどこに取り付けられるかは決まっている。翌日の祭当日では、夕方頃に6本の曳山が提灯山のスタート地点である十三石橋前に集まり、そこで曳山に提灯を取り付ける作業が行われ、昼の彫刻が取り付けられた曳山から夜の提灯山へと姿を変えることになる。点検の終わった提灯は、トラックに積んで翌日提灯の取り付け作業を行う場所まで運んでおく。

4-10.祭当日

本番当日の5月3日、祭の様子を時間の経過とともに見ていく。午前3時前に曳山総代と警護頭が東町公民館での「曳き廻し会議」に出席し、壮年団本部団長により曳き廻しが決定される。曳き廻しの決定により、午前5時頃、調曳きの日と同様に青年団が

布令太鼓をならす。布令太鼓を乗せた小型トラックは、町を2周してまた公民館に帰ってくる。神様である人形が公民館にいる間は、祭に参加する上新町の男性が数人ずつ交代で公民館に泊まることになっている。これには神様のお守りをするという意味がある。本番当日の前夜は青年団が公民館に泊まって神様のお守りをする。青年団の人が起きだすころには、曳山行事委員会の人たちも公民館にやってくる。

布令太鼓が鳴ると、町の人たちは起き始め、家の前に設置された^{ほんとうちょうちん}献燈提灯に風鈴をつける。布令太鼓を聞いてから提灯の設置に取り掛かかる家もあった。

先ほども述べたように、上新町の公民館には、入口の前方に曳山を収めるための屋根付きのスペースが設けられている。午前5時半、前の晩からそこに収められていた曳山を公民館の前の道路まで曳き出す。曳山は装飾品などを取り除かれた状態で保存されていたため、このときもう一度装飾品をつけなおし、あとは神様を乗せれば曳山は完成という状態にする。

午前5時50分頃神前囃子が始まる。このときの神前囃子に参加するのは、囃子方と曳山会計、曳山総代のみとなる。神前囃子が始まると、それより少し遅れて曳山が曳き出される。囃し方、曳山会計、曳山総代以外の曳き手は全員曳山を曳く。曳山は上新町の公民館から見て、^{かみ}上手である町の一番山側まで一度も止まることなく一気に曳かれる。これは、祭当日に曳山が公民館を出発する前に必ず行われる。上新町の曳山は、上新町通りのゆるやかな坂を上って西新町との境目まで曳かれ、そのあと公民館の前まで戻ってくる。出発するときは曳山の正面は公民館から見て^{しも}下手を向いているので、坂を登るときは後ろ向きで進み、坂の頂上に着くと今度はそのまま前向きで公民館へ向かう。この間、公民館では神前囃子が行われている。

曳山が公民館の前に着くと、しばらくして神前囃子が終わる。その後曳山の簾をもととかかっていたものから本番用の高価なものに取り換え、神様を曳山へ乗せる。これで当日の曳き廻しの準備はすべて整う。

午前6時半頃、上新町の曳山曳き廻しに参加する全ての人たちが上新町公民館前に集合し、曳山総代、警護頭の2人が代表であいさつし、その後祭に参加する人全員に御神酒やかまぼこなどがふるまわれる。それが終わると曳山は八尾旧町の中心から少し北東に位置する^{もんみょうじ}聞名寺へと向かう。曳山祭は、初めに6本の曳山が聞名寺に集まり、そこから午前の曳き廻しがスタートする。聞名寺に曳山が到着するとおきんさが囃される。午前7時50分には6本すべての曳山が聞名寺にそろった。この、朝の曳き回しは「朝山」と呼ばれる。

昼の部からはそれぞれの役割によって決められた服装で曳き廻しとなる。曳山総代、神係、氏子総代らは上新町の紋である業平菱の紋付袴姿、曳き手以外の役を担う人たちは、皆、白のシャツに上新町の法被と黒のズボンの正装であった。写真7の手前に後ろ向きで写っている人は曳山総代で、背中の真ん中に業平菱の紋が入った紋付袴を着用している。また写真8のように曳き手はその役割によって決められた本番用の法被に黒の

ももひき

股引と地下足袋を着用する。曳き廻しの際は、曳山の前方に警護頭、曳山後方の左右に副警護、さらに警護頭の前方に曳山総代と副総代が立ち、曳山やその周りにいる曳き手と見物客の動きなどを常に確認し、安全に、また正確に曳山が進むように指示を出す。



写真 7. 曳き廻しの様子 1



写真 8. 曳き廻しの様子 2

午前 9 時半、神係が曳山の 2 階に上って曳山曳き出しに備える。一番山である今町の曳山から出発する。各町の曳き出し順と時間は次の表 8 の通りである。曳山が続けて 6 本も運行するため、前に行く曳山と適当な距離を置くために 5 分から 10 分間隔で曳き出され、その後も常に前の曳山と十分に距離をとりながら進む。6 本の曳山の並び順は決まっており、一番山は次の年には最後の 6 番目に曳き出しとなり、2 番目以降は翌年には順番が 1 つずつ繰り上がる形となる。また、一番山の「山」は曳山のことを言う。上新町は、今年は 4 番目の曳き出しとなった。

表 8. 聞名寺曳き出し順と時間

① 午前 九時 半	② 九時 四十 分	③ 九時 五十 分	④ 九時 五十 五分	⑤ 十時	⑥ 十時 十分
--------------------	--------------------	--------------------	---------------------	---------	---------------

今町 (一番山)	下新町	西町	上新町	諏訪町	東町
-------------	-----	----	-----	-----	----

曳山は十字路や T 字路に差し掛かるたびに停止し、自分の町を通っているときは、花をもらった家と、自治会長、氏子総代、曳山総代、曳山大工、警護頭、副警護、壮年団支長、青年団支長、会計、神係、宮司の家の前で停止する。停止することにはあいさつの意味と、曳山をよく見てくださいという意味が込められている。また、挨拶係という役割もあり、花をもらった家の前で曳山が停まると、その家の住人に「今日はありがとうございました」とあいさつする。

角廻しかどまわは八尾の曳山祭の見どころでもある。直進しかできない曳山を、警護頭の「ひとつ、半分」という合図で曳き手が「せやー」と力づくで回す。見事なまわし方をすると、見物している旧町内の人や観光客から拍手や歓声が起こる。

12 時頃に諏訪町の公民館前に曳山が到着し、囃子方がおきんさを囃す。午前の曳き廻しはここで終了となる。

午後 1 時、一番山の今町が出発し午後の部が始まる。午後の部が始まってすぐに祭一番の見せ場である、東新町の坂にさしかかる。この坂を登り切った後の曲がり角はとても狭く、曲がった後には急な下り坂を下りていかなければならない。そのためとても危険な箇所とされ、見物客が危険な目に合わないよう警備も厳重である。曳き手にとっても、一番緊張する場面となる。上新町の曳山は 1 回で東新町の角廻しを終えた。角廻しが無事終わると、見物客から拍手がわき起こった。

東新町から西新町に続く急な坂を下りきると曳山は上新町の通りへと進む。どの町の曳山も、自分の町を通るときは、花をもらった家の前でも停止するため、町を通り抜けるのに時間がかかる。しかし、遅いからと言って前の曳山を追い越すことは出来ないため、後に行く曳山は前の曳山に合わせて進むことになる。

曳山は上新町、西町、下新町を通り、午後 5 時半に井田川の十三石橋の前へ到着した。再びおきんさを演奏し、昼の山は終了となる。

次からは、曳山祭当日の、夜の曳山曳き廻しの様子について見ていく。八尾の曳山祭では、昼の間は曳山に取り付けられていた彫り物が、夜には提灯と取り換えられ提灯山へと姿を変える。

写真 9 のように、上新町の曳山に取り付ける提灯には、上新町の「上」という文字が 2 つ上下に並んだような柄が描かれている。



写真 9.上新町の提灯

また、写真 10 は上新町の提灯山である。上新町の提灯山は、屋根の部分が飛び出たような形に取り付けられる。上新町の人によると、提灯は全部で 416 個で、6 町の提灯山の中で一番数が多いという。



写真 10.上新町の提灯山

祭の決まり事で、上新町は、後方の諏訪町、東町が到着するまで提灯山に変えることができないため、東町の曳山が到着するのを待ってから提灯の取り付け作業に取りかかる。

また、上新町の曳山の屋根の上には金色の鳳凰が取り付けられている。提灯山のときは、曳山の屋根から下の部分に提灯が取り付けられるが、鳳凰が目立たなくなってしまうため、鳳凰のライトアップを行う。

午後7時半、各町の人たちは夕食を取り終え、提灯山が出発する。夜の山では順番が逆転し、東町からの出発となる。提灯山は八幡社まで来ると、曳山ごと境内まで入り、曳山役員と曳き手はそこでお祓いを受ける。このときの角廻しは、昼の東新町の角廻しと同様に見せ場であり、見物客が多く集まる場面でもある。八幡社から出るための角廻しが終わると、曳き手はいっそう大きな声で掛け声をかけ、スピードを増して自分の町へと曳山を曳く。このときは、どの町の曳き廻しにも、見物客から大きな拍手と歓声がおこった。それが終わると自分の町へと帰り、思い思いに曳山を曳きまわす。

提灯山が上新町に入ると、前梶と後梶に人が別れ、「対決」を行う。この「対決」は毎年行われていて、上新町の曳山祭の特徴として挙げられる。前梶と後梶が同時に曳山を引っ張り、前梶が勝つと曳山は前に進み、公民館へと向かう。また、後梶が勝つと曳山は後退し公民館から遠ざかる。このときは青年団や高校生、中学生が積極的に掛け声をかけ、普段はあまり曳山を曳かない年配の人々が飛び入り参加し、その周囲では町の人たちが声援を送るなどして、和気あいあいとした様子であった。

上新町の曳山が公民館前に到着したのは午後10時であった。最後に1日の曳山祭の終りにおきんさが囃され、町の人たちはみんなで手拍子したり、唄を歌ったりして参加する。そして、曳山役員のあいさつが終わると、曳山祭は終了となる。

4-11. 掛け声について

ここで、曳山を動かすときかけられる掛け声について触れておく。警護頭は曳山の前方に立ち、出発や停止の合図を送り、運行中に曳山がまっすぐ動くように指揮を執る。副警護の2人は曳山の左右後方から曳山の動きを見張り、危険がないか確認する。曳山を動かすときには、必ず警護頭の「堀切 三つの 容寛坊」の合図を聞いてから曳き手が「せやーち」と曳山を動かす。曳山が動いた後はみんな「わっしょい、わっしょい」と掛け声をかける。警護頭が言う「堀切 三つの 容寛坊」は、実際に聞くと「ホーリ キーノミツターノヨーカンボ」と聞こえる。上新町の話によると、なぜこのような掛け声になったのかは各町によっていろいろと言われがあるようだ。

上新町の言われは、西町と今町の入り口に位置する聞名寺の前に、大きな石碑に關係している。昔、その石碑はどこか別の山の中にあり、それを村の人が聞名寺まで持ってこようとした。しかし、とても大きく重い石だったために、堀某^{ほりなにがし}という人が「絶対に持ってこられるはずがない。もし持ってこられたなら、自分の鼻と指と耳を差し出す」と言った。怒った村の人たちは、何十人がかりで何日もかかって、ついに石を運び終えた。堀某という人は、約束どおりに鼻と指と耳を差し出さなければならなくなったが、聞名寺の寛容なお坊さんが、許してやろうではないかと村の人に申し出たために、堀某

という人は三つのものを差し出さなくて良いことになった。この、堀某という人と差し出す三つのもの、寛容なお坊さんという話の鍵となる言葉が、現在曳き山を動かすときの合図に現れているという。

4-12.曳山解体

翌日の5月4日、この日は午前8時に青年団による布令太鼓がなり、30分後、公民館の前で曳山の解体を開始する。上新町の曳山は1年間曳山会館に展示されていたため、2年ぶりの曳山解体となる。曳山を解体するときは、写真11のように屋根の上から順番に解体していく。



写真.11 曳山解体の様子

現在は曳山の組み立て方を把握している人が少ないために、写真12のように1つの部品を取り外すごとに白いシートの上で写真を撮り、組み立てのマニュアルのようにして残し、これからも曳山の組み立てを行えるようにしておく。



写真 12.取り外された鳳凰の頭

同時進行で公民館の飾りなども取り外される。曳山を解体するときの注意点として、曳山には木材に金を塗装した部分が多くあり、日に当てすぎてしまうと割れてしまうため、直射日光に当てないように作業を行う。この日は晴天で日差しが強く、気温も高かったために、解体した部品は日陰に置かれ、写真を撮ったものは上新町の山蔵の中に、次の年に取り出すことも考え、丁寧に収納される。

4-13.花びらき

花びらきとは、祭のときにもらった祝儀の総合計を明らかにするもので、内訳は毎年記録されている。

また、この日、曳山解体と花びらきが終了すると、公民館に曳山に関わるすべての人たちが集まった。公民館の中央に総代が座り、それを取り囲むようにして人が座る。そして総代があいさつをし、最後に全員で「お疲れ様でした」とあいさつして、慰労会である山行きを除く、曳山祭のすべての日程が終了する。

4-14.山行き

曳山解体と花びらきが終了すると、「山行き」が行われた。「山行き」は、曳山祭の慰労会のようなもので、祭に参加した男性たちが、ごちそうとお酒で祭の成功を祝う。昔は八尾旧町のすぐ裏手にある城ヶ山で行っていたため、この慰労会のことを「山行き」と言うが、上新町では、現在、牛岳温泉という施設で行われている。「山行き」は、曳山祭についての話題でとても盛り上がっている様子であった。

5.祭の運営と女性の参加について

ここでは、上新町の祭の運営の特徴について見ていく。

上新町の祭の運営は、曳山行事委員会が中心となり、壮年団が行う。青年団は壮年団の人の働きを見たり、教えてもらったりしてそのやり方を覚える。また、曳山祭を継承するための活動として、上新町では、曳山祭を行うに当たり、毎年4月半ばに曳山組み立て講習会を行っている。曳山は釘を使わずに組み立てられていて、解体すると上から下までバラバラになる。そのため組み立て方も複雑で、すべてをわかっている人は少なく、毎年講習会を行い曳山についての知識を教えている。

さらに、講習会では教えられない、細かなことや、曳山についての知識などは、祭の準備期間に年配の人から若い人に教えられることが多い。その場合は1対1や、知識のある年配の人が「～の仕方、今からするから集まれー」と、若い人などを数人集めて教える。例として、前に述べた曳山点検のときの提灯の取り付け方を指導していた様子が挙げられる。

また、指導しているときの雰囲気についてであるが、教えているときの雰囲気は壮年団の人が冗談を言うなどと和やかだ。普段の会話では、若い人は上の人には〇〇さんと呼び敬語を使う。上の方は若い人を下の名前で呼ぶ。いずれもピリピリとした雰囲気はなく、和やかな雰囲気であった。しかし、神前囃子や神渡しなど、曳山行事を行うとき、座るときの順番は、上座から年功序列に座るなど、和やかな中にもしっかりと上下関係が守られている。

また、曳山解体の部分でも述べたが、上新町では今年の曳山解体のときに部品を一つ取り外すごとにその様子を写真に撮るという作業を行った。これは、写真だとどの手順で曳山がどんな状態になるのか、明確に記録しておくことができるからである。また、次の世代の人が曳山をちゃんと組み立てられるようにという意味も込められているという。

今まで見てきたように上新町では、曳山祭のやり方などについては年配の人が若い人に教え、伝統的な方法にそって行われる。しかし、近年新しく変わった点もある。たとえば、曳山祭当日、祭が終わり最後に曳山を公民館前に納めるときは、次の年に警護頭を務める人が行う。これは練習を兼ねたもので、最近になって行われるようになった。年配の人や現警護頭が次の警護頭に、曳山の動かし方について助言をしながら行われる。

以上のように、上新町では、祭の運営を行うに当たり、曳山祭の進行の仕方や曳山の知識を、若い人たちに積極的に教えようとする年配者の姿勢がよく見られた。

次に女性の祭への参加について見ていく。

本来曳山祭は女人禁制で、女性は曳山に触れることもできなかったが、祭に参加できる人の数が年々減ってきてしまったため、10年ほど前からは女の子も調曳きのときに曳山の2階に上れるようになった。このように上新町では女性の参加に柔軟な面がみられる。ただし曳山に登ることができるのは小学生までの女の子に限られていて、それ以上の年齢の女性たちは祭には参加せず、女子青年団が食事を用意したり、見物したりす

るだけである。よって、祭にかかわる準備や後片付けはすべて男性のみで行っている。

6.祭に対する住民の認識

これまで見てきたように、曳山の曳き廻し方や、曳山行事の仕方は、細かく手順が決められていて、昔からほとんど変わらないやり方で曳山行事は執り行われる。そのような曳山祭について、上新町の人々はどのように認識しているのだろうか。町の人たちの語りから考えていきたい。

まず、「人形^{ひとかた}を曳山に乗せたりおろしたりするときに必ず目隠しをするのはなぜか。」という質問に対して、70代男性のAさんは「人形は神様。急に外気に触れさせるのは失礼に当たる。外気は俗人の世界だし凡人と一緒に移動するがだから、目隠しをして一線をおくことで、神様に敬意をあらわしている。(人形^{ひとかた}を)ただの人形^{にんぎょう}と思えばそれまでやけど、町を助けて見守ってくれとると思つとる。大切にしたい」と語った。この他にも、神様や曳山の鳳凰、彫刻に対して「上新町のものが6町の中で一番」など、自分の町の神様や曳山に対して愛着を持っていると感じられる語りが多く聞かれた。また、曳山の構造について質問した際に、80代男性は「曳山なんか、修理とか宴会とか金かかってしょうがない。でも曳山曳いとるがは(曳くのは)楽しかった。今は(曳山祭を)もう見とるだけやけど、上手く角廻したな一、提灯山きれいやな一、って見とる」と笑顔で語る。50から60代男性のBさんは「曳山はいいよ。男の祭やね。他のどの町より上手く曳いてやるって燃える。今の若いもんは元気なくてダメや。そんなときは(曳山を曳いている)横ででっかい声でわっしょいわっしょいって言う。上新町の道は中央線があるからそこにあわせて警護が曳山を動かすように指示する。これがカッコいい」と熱弁した。60代男性は「上新町の曳山は鳳凰があるから1番きれいや。昔は砂利道で、曳山を曳きまわすのは大変やった。あと金かかるしな。今もよそから(八尾以外の町から)八尾に嫁に来たら祭に金かかって大変や(笑い)。でも曳山は誇りやね。曳山の組み立ての順番とか、決まっとるけどちゃんと覚えとる人が少ない。若い人にもちゃんと知っておいてほしい。この祭がなくなってしまうように」と語った。

このように、お金がかかるという語りが聞かれた反面、今は曳くことはないが、自分なりのこだわりをもって曳き廻しを見守るという語りや、祭が続いて行って欲しいという願いが込められた語りも聞かれた。「上新町の曳山について」でも述べたとおり、曳山の部品はとても古いもので、作りが複雑で繊細なものが多い。その分維持費などにお金がかかるが、それ以上に50代以上の年配の人々は、曳山や神様に対して愛着を持ち、曳山祭に参加することに楽しさを見出しているようだ。

それでは、若い人たちは、曳山や祭についてどのように感じているのだろうか。

70代男性のTさんは、「最近若衆(壮年団世代)が良く頑張ってくれとる」と言う。実際に聞いた若い人たちの語りを次に記す。

「どうして曳山祭に参加しているのか」という質問に、20代男性は「参加するよう

に上の人に言われるから参加している。でも曳くのは楽しい」と言い、また別の20代男性は「人おらんし参加せんならん（参加しないといけない）って理由もあるけど実際楽しいし、小さいころから当たり前みたいに参加している。曳山は好きだ」と語った。また、「あなたにとっての曳山祭とは」という質問に対して34才男性のTさんは「あちこち単身赴任で15年程八尾を離れていたが、子供の教育のために戻ってきた。久しぶりに参加してみて、昔の仲間がいて、その変わりようが見られて面白いと思った。曳山は曳くのが楽しい。昔は子供が多くて幼稚園の子しか曳山に乗れなくて、幼稚園のときにおじいちゃんとおばあちゃんが立て続けに亡くなり、乗れなかったのが残念。今でも乗ってみたいと思う」と語った。さらに、代々使われてきた地下足袋を履いた30代男性は、「ずっと使われてきた地下足袋でボロボロで地面の感触がじかに足の裏に伝わる。でもずっと（自分の家の人に）使われてきたやつ（地下足袋）だから大切にしたい」と語った。

以上のように、20代から30代の若い世代の人たちの語りからは、祭に参加する理由を「年配の人に誘われたから」としながらも祭を楽しんでいる様子や、曳山祭を引き継いでいくことが大事だと認識していることがうかがえる。

冒頭でも述べたとおり、上新町では昔と比べて祭に参加する人が少なくなっているという。しかし、だからと言って町の人々の意識が曳山祭から離れているわけではなく、年配の人も若い人も、祭に関わってきた長さの違いにより、祭に対する熱意に多少の温度差はあるが、どの世代も曳山祭に対しての楽しさと、継承していく必要性を感じているといえる。

4.東町の曳山

狭間 一代

1.東町と東町の曳山について

東町の人口は2008（平成20）年3月末時点で293人、そのうち男性134人、女性159人で、世帯数は102世帯である。

東町は、西町とともに江戸時代に大きな商家が立ち並んでいたため、旦那町と呼ばれ、役場や郵便局などがあり八尾の中心であった。図1の丸で囲んだ範囲が東町である。現在では、おわら資料館が設けられていて、おわらの演舞場にも近い。

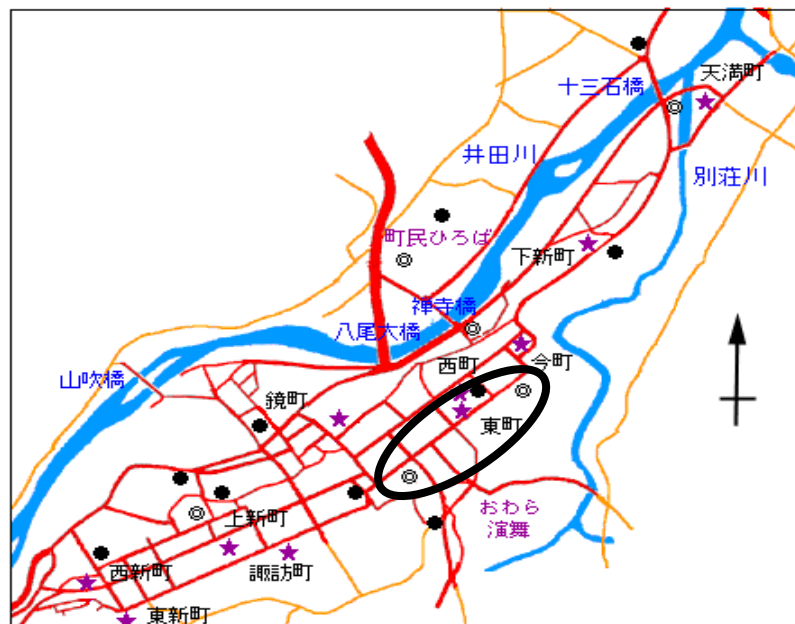


図1.富山県八尾町旧町

(<http://homepage3.nifty.com./kazegumi/town.html> をもとに作成)

東町の曳山は、1742（寛保2）年に産神上皇太子（現八幡社）の祭礼の際に屋台が作られ、神功皇后の立物を飾り、踊り子を乗せて曳き、同社で手踊りを行なったことがはじまりである。その3年後、1745（延享2）年に東町の曳山の神様である人形が、神功皇后から写真1のような平安時代の歌人である小野小町と小野小町のもとに99夜通ったという伝説上の悲恋の人物である深草少将となったが、これは現在も同じである。1772（安永元）年には、それまでの屋台から二層式の曳山に作り替えられた。



写真 1.東町の神様（左が小野小町、右が深草少将）

2.東町の曳山に関わる組織と役職

東町の主な組織について記す。中学生までは東町の児童会である「ささりん会」に所属し、高校生から「青年団」に所属する。青年団は男女共にあるが、女性にはその上の組織はない。そのため、女性は女子青年団を卒業するとおわらの地方じかたをやる人もいう。男子青年団の上の組織である「壮年団」があり、その上に「壮年団協力会」という組織がある。壮年団協力会というのは、壮年団の人数が少なくなったときにできた組織で、今も残っているという。そして、東町の老人会である「慶喜クラブけいき」がある。また、曳山を保存していくために東町の人全員が加入している「保存会」がある。以上について下の表 1 にまとめた。

表 1.東町の組織

組織	年齢
ささりん会（児童会）	中学生まで
青年団（男女）	高校生から 25 才まで
壮年団	26 才から 45 才まで
壮年団協力会	46 才から 50 才
慶喜クラブ（老人会） <small>けいき</small>	65 才から
保存会	東町の人全員

次に、東町の曳山祭に関わる役職について説明する。東町の役職は表 2 にまとめたが、東町では、曳山総代は年功序列で決まり、壮年団より上の人から選ばれている。任期は 1 年である。曳山副総代は、壮年団から選ばれ、総代の補佐的役割を担い、祭に関する作業の際に指示をだす。曳山副総代は常に 2 人おり、さらに補佐副総代と筆頭副総代の

2つの役職にわかれている。まず、補佐副総代を1年つとめ、次に筆頭副総代を1年とあわせて2年つとめる。

表 2.祭に関わる役職

曳山総代	曳山保存会長
曳山副総代	氏子総代
警護	神係
副警護	曳山大工
自治会長	<small>そうしちよう</small> 壮支長
公民館長	<small>せいしちよう</small> 青支長

警護は、曳山を曳く際に指示を出す。常に3人おり、壮年団の中から選ばれる。また、町の人から信頼され、この人ならしっかりやってくれるという人が選ばれるという。なので、祭の練習に参加していないのに警護をやりたいといっても警護をすることはできない。警護は、警護頭、筆頭副警護、副警護の3つの役職に細かく分かれており、副警護を2年、次に筆頭副警護を2年、そして警護頭を2年とあわせて6年つとめる。

神係は、曳山の神様のお世話をする。神様に関する知識を持っているから神係に選ばれるというわけではなく、本人の希望によって神係は決まる。神係の先輩から神様に関することを教わりながら、さまざまな知識を身につけていく。祭当日、神係は紋付袴を着て、曳山の2階に上がる。現在東町には神係は3人おり、任期は決まってないという。

曳山大工は、曳山の修理や組み立ての責任者で、東町では高いところが平気な人が選ばれるという。曳山大工は4人おり、任期はとくに決まっていない。

その他に、東町の自治会長、東町の公民館の管理をする公民館長、氏子総代、東町の曳山保存会長、東町の壮年団のまとめ役である壮支長、東町の青年団のまとめ役である青支長などが、祭に関わる役職としてあげられる。

3.東町の曳山について

東町の曳山の神様である人形は、ひとかた前述のとおり、深草少将と小野小町である。曳山の屋根がほかの5町とは異なっていて、写真2のように二重屋根である。また、車輪は1862(文久2)年に作られたもので、他の町は溶かした金属を型に流し込み、成形してつくるちゆうきん鋳金であるが東町はカメやウサギ、波の模様の彫金を施している。



写真 2.東町の曳山を曳いている様子

東町の提灯山は、写真 3 のように屋根には提灯を付けず、代わりにライトを取り付けて照らしている。昔は人が屋根にのぼって、東町の曳山の特徴である二重屋根にも提灯を付けていたというが、危ないということで提灯の代わりに屋根にライトを付けて屋根をライトアップすることにしたという。



写真 3.東町の提灯山

東町の曳山の彫り物について記す。曳山の2階部分にある大きな彫り物は見越けんけしといい、東町の見越は、写真4のように内裏南門だいりみなみもんにある正門で、天皇専用の門である建礼門けんれいもんが彫られている。



写真 4.東町の見越

曳山の1階部分にある大きな彫り物は大彫といい、東町の大彫に描かれているのは、

写真 5 のように中国の明代の武将である鄭成功^{ていせいこう}が、虎に乗って指揮する様子である。



写真 5. 東町の大彫

(http://takaoka.zening.info/Toyama/Yatsuo_Hikiyama_Matsuri/Structure-Oobori.htm)

曳山の 1 階部分の上側 4 面を取り囲んでいる 8 枚の彫り物は、八枚彫といい、東町の八枚彫は唐詩選『飲中八仙歌』^{いんちゅうはっせん}に登場する 8 人の人物の酒に酔った姿が彫ってある。

上新町と同様、東町の曳山は、去年（2007 年）の曳山祭の後、曳山展示館に展示されていたため、今年は組み立ての作業は行なわれなかった。今年は祭が終わった後に、曳山の解体作業が行われ、屋根から順番に曳山の各部分が外されて、1 階部分は残したまま、曳山祭で使うものが納められている山蔵に収納された。曳山の保存費用は、住民から徴収している。また、東町では 2 年に 1 度曳山を解体してすべての部分を点検するよう定められている。

4. 曳山の進行

今年の曳山の準備から祭当日までの作業や行事について、下の表 3 にまとめた。冬と祭本番前に囃子方の稽古を行う。祭当日前には東町の曳山の神様を飾り付けした公民館に迎え、曳山の調子を確認する調曳きを行い、公民館に迎えた神様の前で囃子を奉納し、祭当日を迎える。

ここでは、表 3 にしたがって作業や行事について詳しく説明していく。

表 3. 曳山祭に関する行事の日程

2 月 20 日（木）	^{はやしかた} 囃子方寒稽古
-------------	----------------------------

21日（金）	〃
23日（土）	つくりあげ
4月26日（土）	囃子稽古
27日（日）	〃 、八幡社安全祈願祭
28日（月）	つくりあげ
29日（火）	公民館の飾りつけ、神迎え
30日（水）	規約書、 ^{きしゅう} 徽章の配布
5月1日（木）	搬出式、調曳き、神前囃子（御神前奉納囃子）
3日（土）	祭当日
4日（日）	曳山解体、公民館の片付け、山行き

4-1. ^{はやし}囃子の練習

囃子方の囃子の練習は2月20日から23日の3日間にかけて行われた。練習の時間は午後7時半から午後10時の予定であった。この2月に行われる囃子方の練習を寒稽古という。稽古の最後の日には囃子を完成させるという意味で、つくりあげと呼ばれる。寒稽古には21日しか参加できなかったもので、21日の様子を記す。

21日は、午後7時頃に曳山副総代が公民館を開け、座布団や灰皿を並べ、囃子の練習の準備をしていた。練習に参加する東町の人たちは祭で着る東町の名前の入った法被を着ている。囃子方をやらない人も練習の様子を見に集まってきた。囃子方の座り方は年功序列になっており、上座の方から順番に年配の人が座っていく。また来た人から三味線や笛の音あわせをし、演奏を始める準備をする。

午後7時半過ぎになったので、囃子の練習が始まる。この日は、練習と平行して、壮年団の数人で祭当日の提灯山で使う提灯の数を数え、提灯が壊れていないかをチェックしていた。提灯は公民館の3階に保管してあるので、公民館の3階で壮年団の人たちは作業をしていた。提灯が壊れていた場合、本番当日に使うことができないため、提灯を修理に出さなければならず、提灯山で使うための最低限の数があるか調べていた。提灯の修理には、1つの提灯で1万円から3万円かかるという。提灯は付ける場所によって大きさなどが微妙に違っているため、提灯の内側に貼ってあるシールを見ながら提灯の数を数えていた。黄色のシールが貼ってあるのは提灯山で使う提灯で、緑と青のシールの付いた提灯は公民館の飾り用といったように分けられている。

囃子の練習の様子は、練習中は囃子方の人でも囃子方でない人もみんな静かで真剣に練習をしていた。リズムが早くなったりすると、周りから「(囃子が) はしっている」などといった声もかかり、囃子に対する熱心さが伝わってきた。囃子方でない人も一緒に声を出している。練習の途中には休憩が入り、休憩に入ると話しはじめ、ある 50 代の男性は「楽しくないと (練習を) やってられない」といったことも言っており、賑やかであった。練習は午後 10 時には終了した。

4-2.囃子稽古

祭直前にも囃子の稽古があり、4 月 26 日から 28 日の 3 日間行われた。練習の時間は午後 8 時から午後 10 時の予定であった。寒稽古の時と同じように練習に参加する東町の人の服装は、東町と名前が入った法被姿であった。

26 日の練習は、午後 8 時から始まった。練習には自治会長や保存会長も来ており、上座に座っている。曳山総代から「東町らしい威厳のある演奏を…」といったあいさつがあり、練習が始まる。しかし、笛や三味線の音が合っていないという声がかかり、いったん演奏が止められ、楽器の音あわせを始める。音あわせが終わると演奏が再開された。休憩の際には、みんな酒を飲んだり、話をしたりしている。囃子の練習が終わると、曳山副総代から曳山に関する今後の行事の予定などの諸連絡があり、午後 10 時に練習は終了した。

27 日は、八幡社で安全祈願祭があったため、安全祈願祭が終わってから公民館へ戻ってきた午後 8 時 20 分頃から囃子の練習が始まった。練習の始まる時間が遅かったこともあり、いつもより囃子を省略して練習が行われた。

28 日は、囃子の練習の最終日のでくりあげが行われた。「定刻になりましたのでのでくりあげのほうを始めてください」とあいさつがあり、囃子方の人たちは楽器の音あわせを始める。この日はのでくりあげということもあって、休憩に入るとビールやオードブルがふるまわれた。この日も、午後 10 時には練習が終了する。

4-3.囃子の楽器について

囃子で使われる楽器は、三味線、笛、太鼓の 3 つである。東町の囃子で使う笛は東町のものであり、曳山を入れておく山蔵に使わないときは納められている。笛を 7、8 年前に 5 本新調したという。新調した笛には、漆が塗ってあり、金粉で模様が施され、唐草模様などのめでたい模様が描かれている。この新調した笛は囃子方の年配の人が使っており、後の人は手作りで漆が塗ってあるだけの笛を使っているという。笛は町のものだが、三味線は個人のものだという。

4-4.公民館の飾り付け

4 月 29 日の午後 1 時から公民館の飾り付けが行われた。曳山副総代の指示により、

山蔵と万戸小屋と呼ばれる倉庫、公民館にわかれて飾り付けの準備を始めた。

まず、公民館の中の襖を全部外して、公民館の2階に上げる。同時進行で、公民館の3階から、ロープを使って飾り付けで使う提灯や提灯山で使う提灯の入った箱を下ろし始めた。公民館の中は紅白の幕をつけたり、提灯をつけたり、神様を置く場所をつくったりと公民館の中を飾り付けしていく。公民館は飾り付けしやすいようにカーテンレールなどが付いており工夫されている。公民館の前に立てる献燈提灯の準備も始めた。公民館の中を飾り付けしている間に、山蔵へ向かった人たちが、トラックで曳山の彫り物を入れる箱などを持ってきて、公民館の向いの家に置かせてもらっていた。彫り物が入っている箱には「文久4年」や「天保13年」といった文字が書いてあり、とても古いことがみてわかった。

公民館の飾り付けが大体終わると、公民館の外では、曳山祭当日の提灯山につける提灯を、提灯枠につけていくという作業を始めた。並行して提灯の電球がつくかの確認も行う。午後2時20分には、公民館の飾り付けが終了した。

4-5. 神迎え

同じ日の夜に東町の公民館に神様を迎える神迎えが行なわれた。本来は山蔵まで神様を迎えに行くのだが、去年の曳山祭が終わったあと、1年間曳山展示館に東町の曳山が展示されていたため、東町の曳山役員たちが、神様を曳山展示館まで迎えに行った。まず最初に、午後6時頃礼服を着た曳山総代、自治会長、保存会長ら数名が、長い柄がついた丸形の馬上提灯をつけて東町公民館から徒歩で曳山展示館まで向かう。曳山展示館に着くと、曳山を飾る瓔珞、高欄の猿と呼ばれている彫り物の猿、旗、深草少将と小野小町の神様を曳山から降ろし、自動車に乗せる。乗せ終わると礼服を着た役員が東町公民館までまた徒歩で向かう。公民館に到着すると、神様を置く場所にカーテンのように取り付けてあるトマクと呼ばれる幕がひかれ、神様や瓔珞などを設置する。準備が終わるとトマクを開け二礼二拍手一礼をし、神係が祝詞をよみ、副警護2人が御神酒を上座から配る。そして、自治会長のあいさつがあり、自治会長から委嘱状が曳山大工、祭当日に曳山の車輪を担当する車警、曳山の梶棒を担当する梶警に配布される。その後なおらい会が始まった。

4-6. 規約書と徽章と配布

午後8時15分頃壮年団本部の人たちが、保存会長と曳山総代、警護の当日付ける徽章と祭の規約書を配布するため、東町の公民館にやってきた。公民館の玄関先で、団長が「総代さんはいらっしゃいますか…」とあってあいさつをし、曳山総代がそれに答え、徽章と規約書を貰うと壮年団本部の人たちが公民館の中に入って来た。神様の前に正座をして座り、神様にまいると、東町の警護の人から御神酒が配られ、東町の人によって

干鱈^{しづら}が配られた。壮年団本部の人たちは東町の人と少し歓談をし、礼をして、公民館を出て行った。

4-7. 搬出式

5月1日に曳山展示館で搬出式が行なわれた。1年ごとに曳山を持っている6町のうち3町の曳山が交代で曳山展示館に1年間展示される。去年の曳山祭が終わったあと、展示された曳山を持つ今町、東町、上新町の3町の人が曳山展示館に集まった。式の前に、曳山を会館から外に出し、3本の曳山が会館の前に並べられた。3本とも会館から出ると搬出式が始まった。

式の内容は、まず、八尾町曳山保存会会長があいさつをおこない、次に観光協会会長、曳山展示館館長があいさつし、観光協会から酒が贈呈された。式は10分程度で終わり、式が終わると町ごとに曳山を曳いて自分たちの町に戻っていった。

4-8. 調曳き

5月1日の午後から調曳きが行なわれた。調曳きとは、本祭前に曳山を曳いて、調子の悪いところがないかなどを点検するための試し曳きである。まず、12時45分頃、東町の人が東町の名前の入った法被を着て東町公民館に集まってきた。人が揃うと神様の前で二礼二拍手一礼をし、御神酒を飲み、囃子が囃される。囃子は全部演奏するのではなく、囃子の曲目の三の手と四の手を演奏していた。囃子が終わると、調曳きの準備を始めだした。曳山に飾る瓔珞^{ようらく}をつけ、彫り物の猿、旗と順番に曳山に乗せ、神様に目隠しをして、男の神様の深草少将、女の神様の小野小町の順に乗せていく。神様に目隠しをするのは、神様に汚れを見せないようにするためだという。曳山に乗って囃子を演奏するので、曳山の1階部分に太鼓、笛、三味線も積み込んでいた。八尾の曳山祭では各町が子供を曳山の2階に乗せるのだが、東町も調曳きの際に子供を2人、2階に乗せていた。

準備ができたところで、まず、東町からみて下手である今町の方に向かって曳山を曳き始めていった。このとき囃子も演奏し始めた。下手へ向かう途中で、八尾小学校の1年生約60人が先生と一緒にやってきた。授業の一環として調曳きに参加するためである。今町の方へ曳山を曳いて行ったあと、今度は上手である諏訪町の方に曳山の向きをかえ、曳き始める。少し曳いたところで、いったん止まり、小学生が曳山につけられた綱につかまる。そして、一緒になって曳山を曳いて行く。小学生たちは一生懸命「わっしょい、わっしょい…」と言いながら曳いている。

東町公民館につくと「おきんさ」が囃される。「おきんさ」は祝い唄で無事に公民館に曳きまわして来たという喜びを表現しているという。「おきんさ」が囃された後、今度は上手のほうに向かって進んでいった。東町内を1時間ほど曳いてまわり東町公民館に戻ってくると、また「おきんさ」が囃された。神様を降ろした後、曳山を曳いた時に

屋根が浮いたということで屋根に梯子^{はしご}をかけて屋根を補修し、この作業が終わると公民館に曳山を入れた。公民館の前の曳山を入れるスペースに奥行きがないため、うしろの梶棒をはずしてから入れる。曳山を入れた後は、車輪に負担がかからないように曳山をジャッキアップして木で支えていた。

4-9.神前囃子（御神前奉納囃子）

同じ日の夜に神様に囃子を奉納する御神前奉納囃子が行われた。午後7時20分頃には東町の公民館に大勢の人が集まっており、御膳が並べられていた。公民館の玄関先で曳山総代と警護頭が来た人にあいさつをしている。御神前奉納囃子は曳山総代が主催の会である。そのため、曳山総代の服装は紋付袴。お客様である自治会長、曳山保存会長、公民館長、氏子総代、神系の服装は紋付羽織袴で、他の東町の人々は法被にネクタイ、ワイシャツ、帯という格好をしていた。

次に、この行事の内容を述べていく。まず初めに午後7時半頃神様の前で二礼二拍手一礼をし、御神酒を飲むと、曳山総代のあいさつが始まった。そして囃子の演奏が始まる。囃子の曲目の一から四の手がまず囃され、その後少し休憩が入る。囃子の曲目を下の表4のとおりであるが、30分くらいたったところで、三味線と笛の音合わせが始まり、また囃子が再開される。唄の「猛き心…」が始まり、その後「一の手」から「四の手」が囃される。その後休憩が入る。唄の「庭の千代…」から囃子が再開され、「唄尻（旧）」、「三の手」、「四の手」と囃されていく。そしてまた休憩があり、唄の「猛き心…」から囃子が再開され、「唄尻（新）」と続く。

表 4.囃子の曲目

囃子の曲目	
一の手	唄（猛き心…）
二の手	唄（庭の…）
三の手	祇園囃子（帰り山）
四の手	上下の坂
唄尻（旧）	おきんさ
唄尻（新）	

その後、祭当日の提灯山のときに囃される祇園囃子が始まると警護頭の方が、紋付袴姿の上から警護の法被を着て真ん中に立ち、提灯山のときに采配^{さいはい}の代わりに使う赤い提灯を持った。采配とは、曳山を動かす際に使う指示棒である。副警護の人たちも立ち上がり提灯を持った。公民館の明かりが消され、公民館に飾り付けされている提灯の明かりだけになる。帰り山ともいう「祇園囃子」、「上下の坂」、「祇園囃子」の順に演奏されていく。「上下の坂」という曲になると「ソーライ」という掛け声が入る。祭当日の提

灯山を曳いている様子をイメージして「わっしょい、わっしょい…」という掛け声も入り、盛り上がってくる。祭当日の提灯山が下新町から上がってくる様子を再現している。曳山の角廻しの数だけ警護の人が「ホリキノミツノヨウカンボー」と掛け声をかけ、当日の角廻しの様子を再現していた。2回目の「祇園囃子」が終わると公民館の電気がつき、「おきんさ」が囃される。唄と手拍子が入り、さまざまな掛け声がかかり、みんなで囃し立てる。「おきんさ」が終わったところで、自治会長があいさつを行った。そして、氏子総代が音頭をとり万才三唱が行われた。最後に全員で二礼二拍手一礼をして解散となった。

4-10.祭当日

次からは、時間の経過にそって、5月3日の祭当日の様子を紹介していく。

午前4時15分に青年団の人たちが起こし太鼓を鳴らしはじめる。午前5時頃に公民館に集まった東町の人全員で、二礼二拍手一礼をし、御神酒を飲む。その後、曳山総代があいさつを行い、朝の会議で曳山を出すということが決定したということが伝えられ、曳山を公民館から出し、外してあった曳山の後ろの梶棒を付け、曳山を曳く準備をする。準備ができると、神前囃子（三の手と四の手）をし、警護頭の人があいさつを行い、次に曳山総代が「よろしくお願ひします」といい、みんな動き出した。神様を曳山に乗せ、曳山につける簾を新しい簾に取り換えた。同時に、提灯山に変えるときに使う提灯などをトラックに積み込んでいた。

午前6時頃に曳山が出発する。神様が後ろを向いたまま東町からみて上手のほうへ曳山が上がっていく。このとき曳山を止めてはいけなくて、囃子も囃されない。上手までいったところで、囃子が始まり、聞名寺へと向かっていく。

午前6時40分頃に聞名寺の入り口に到着。聞名寺に対して神様を後ろ向きにして曳山を入れ、曳山に歯止めをする。すると曳山副総代から「午前9時に聞名寺に集まってください」と連絡が入り、朝食を食べ、着替えるために一旦解散となった。

午前9時頃、東町の人々が着替えて聞名寺にやってくる。午前9時半頃から今年の1番山である今町から順番に聞名寺を出発していく。午前10時15分に曳く順番が東町の前の諏訪町の曳山が聞名寺を出発すると、東町の人たちは曳山を曳くための綱を伸ばしたりして曳山をだす準備を始める。準備ができると、「山（曳山を）だすよー」と警護の人の声がかかり、曳山を曳き始め、午前10時30分頃に東町の曳山が聞名寺をでた。

午前11時頃に東町の曳山が東町に入る。自分の町に入ると、町の各家にあいさつをするため、曳山を止める回数が多く、曳山の速度が遅くなる。午後11時15分頃に東町公民館に到着すると、「おきんさ」が囃された。

午後12時20分頃に諏訪町にある専能寺せんのうじに到着すると、昼食休憩に入った。東町にある常松寺でばら寿司を全員そろって食べた。

午後1時20分に昼食が終わると、専能寺前から東新町のほうに向かって曳山を曳出す。諏訪町から東新町にかけて急な上り坂になっている。急な坂を曳山が上るときに曳山が傾いて、曳山の2階部分にある四本柱しほんぼしらが折れたり傾いたりしてしまう恐れがあるため、重心を移動させるために四本柱に助け縄という細くて長い縄をつけるという。この坂は、上り坂なので、進行方向の前2本の四本柱に助け縄をつけていた。坂道はとてもきつそうで、坂道に入る前よりも掛け声が少し大きくなった。

午後1時50分に東新町に入る。東新町から西新町にかけの下り坂では、囃子を生で演奏するため、曳山の1階に囃子方の人が入っていった。

午後2時40分に東新町の角に到着。ここの角廻しは見どころであり、角を曲がると周りから拍手が起こった。角を曲がり終えると、急な下り坂になるため、助け縄がおろされる。この坂では、「上下の坂」という曲が生で演奏され、坂を下るときに囃子に合わせて、途中で「ソーライ」とかけ声がある。坂を下り終え、上新町に入ると、助け縄が外された。

午後5時に今町に入る。聞名寺の下坂は急な坂道になるため、坂に入る手前で、助け縄をつけていた。この坂道でも囃子の曲目の「上下の坂」が生で囃されるという。

午後5時40分に夜の提灯山の出発地点である十三石橋に到着。到着するとすぐに、曳山の周りに足場を設置し、彫刻山から提灯山に帰る準備を始めだした。神様に目隠しをし、簾や瓔珞、彫り物などを外していく。外し終えると、曳山は柱だけの状態になり、曳山の2階部分に柵のようなものを取り付け、提灯を曳山の1階部分から付けていった。午後6時30分頃に全部の提灯が取り付け終わり、昼間挨拶係をしていた人や、紋付袴を着ていた人が着替えて十三石橋にやってきた。また、このとき提灯の電気をつけて電気がつくか確認をしていた。提灯山の準備ができたところで、夕食休憩となった。

午後7時半に提灯山が十三石橋を出発。東町の曳山は昼間、最後の6番山たかはりぢょうちんだったため、提灯山では1番に出発した。長い竿の先に提灯が付いている高張提灯を先頭に八幡社に向かって曳山を曳いていく。八幡社に着くと、八幡社の鳥居のところで、東町の人はお祓いをしてもらう。八幡社をでると、聞名寺の下の所で曳山を止め、ほかの5つの町が、八幡社でお祓いをしてもらうのを待っている。6町の曳山がそろわないと曳山を動かすことができないという。午後9時20分頃、6本の曳山がそろったので、動き始める。八幡社でお祓いをしてもらった後は、各町自分の町に曳山を曳いて帰っていく。

午後9時40分に東町公民館に到着。「おきんさ」が囃される。その後、高張提灯を先頭に東町の町内を曳き廻し始める。東町の人たちがたくさん見に来ていた。午後11時頃に東町公民館に到着。また「おきんさ」が囃される。「おきんさ」が終ると曳山の周りに足場を設置し、曳山についている提灯をから上はずしていく。提灯は枠についているため、提灯を一つずつ枠から外し、箱に入れて片付けていく。曳山から提灯を外し終わると次に神様を下ろし、神様を公民館に連れていった。その後、公民館の前の広いスペースに曳山をいれた。そして、神様の前で二礼二拍手一礼をし、御神酒を飲み、神

前囃子をする。神前囃子が終わると、自治会長があいさつを行い、次に曳山総代のあいさつが行われる。事務連絡があり解散となった。

4-11.祭当日の服装について

曳山総代、保存会長、神係、公民館長らは礼服や紋付袴姿であった。警護の人は、警護とかかれた警護用の法被を着ていた。曳山を曳く際に梶棒を担当する人は「東梶警」とかかれた法被をきて、黒い股引き、黒い地下足袋、黒い前掛けという格好を、曳山の車輪を担当する人は「東車警」という法被を、曳山大工は「曳山大工」とかかれた法被を着ていた。どの法被も後ろに東町の紋である笹りんがはいっていた。他の東町の人は東町の法被を着ており、挨拶係をする人は東町の法被にワイシャツ、ネクタイ、帯という格好をしていた。

4-12.「花」について

曳山を曳いている途中に各町の曳山関係の役に付いている人の家や公民館、花を打った家の前に来ると必ずとまってあいさつをする。「花」とは町の人が祭のときに出す祝儀のことである。該当する家分かるように挨拶係が当てはまる家の前に曳山が来る前に采配さいはいを持って立っていた。挨拶係が立っている家の前に曳山が来ると、采配を持った挨拶係の人が「おー」と采配を振りながら言う。それを合図に曳山が止まり、家々にあいさつをする。曳山関係の役に付いている人の家には必ず曳山総代なら曳山総代と書かれた札がかかっており、わかるようになっている。曳山関係の役についているが、家が曳山の通過する通りに面していない役の人もおり、その人の家の前ではあいさつをすることができないため、各町の公民館でまとめてあいさつをすることになっている。そのため公民館には役職名が描かれた札がかかっている。自分の町にはいると、曳山の止まる回数が多くなる。東町に入ると、曳山を曳いていた人たちも挨拶係に加わって東町の通りに面している家、一軒一軒の前に采配をもって立っていた。東町では挨拶係は、曳山総代と東町の壮年団と青年団が中心となって行う。

4-13.曳山の解体と公民館の片付け

祭の翌日の5月4日、午前8時から曳山を解体する作業と公民館の片付けが始まった。まず、みんなで神様の前で二礼二拍手一礼をした。次に曳山副総代から事務連絡があり、自治会長があいさつを行った。そして、曳山を解体する人と神様を解体する人、万戸小屋へ片づけに行く人にわかれて作業が始まった。曳山は屋根から外していき、外したものをいったん広い場所においていた。今年、曳山の車輪を直しにだしているため、写真6のように1階部分は残したまま山蔵に入れることになり、曳山は2階まで解体することになっていた。

作業が始まって、1時間くらいしたところで、四本柱を外し終え山蔵に曳山を移動す

る準備が始まった。曳山を解体すると同時に、公民館の中では、トマクを張って神様を解体し、公民館に飾りつけてあった提灯や紅白幕を外していた。山蔵や万戸小屋に納めるものをトラックに積んでいき、万戸小屋と山蔵までトラックを使って運んでいた。山蔵は2階建てになっており、公民館から運んできた箱などを慎重に2階に上げ、片付けていった。蔵の中に公民館から運ばれてきたものを片付けているうちに、公民館から写真6のような1階部分だけになった曳山を何人かで曳いて山蔵までやってきた。



写真 6.解体後 1 階部分だけになった曳山

午前 11 時頃に曳山を山蔵に入れ終わると、今度は神様の頭が入った祠が写真7のように御所車ごしょぐるまに乗せられてやってきた。山蔵の2階には神様の祠を置くスペースがあり、神様の頭の入った祠を2階に納めていた。神様が山蔵の2階に納められるので、元日の日には東町の人たちが山蔵の2階にお参りをしにくるという。すべて入れ終わると、山蔵のシャッターを閉め作業が終わった。山蔵にいた人らが公民館に戻ると、「山行き（慰労会）は城ヶ山で午後1時から行います」という連絡があり、解散となった。



写真 7. 祠を御所車で運んでいる様子

5. 祭における女性の役割について

祭の運営は組織のところで記したように男性が行っているが、祭当日の夕食は女子青年団が作っている。

曳山を曳くのは男性で、女性（女の子）は曳山に触ってはいけないが、東町では子供が少なくなってきたため、14、5年前から女の子を曳山に乗せるようになったという。曳山に乗っていいのは小学生までとなっており、中学生以上は、曳山には乗れないが、綱に触ることはできる。男の子はおわらの時に着る法被があるため、女の子用にも法被を貸し出しているという。昔は女人禁制であった曳山祭が少子化などの影響により、女性（女の子）の参加がみられるようになってきている。このように、東町は女性の参加に対して柔軟に対応しているといえる。

6. 祭に対する住民の認識

東町の住民は、曳山についてどのように認識しているか、聞き取りからみていきたい。

ある 30 代の男性は「自分の町の山（曳山）が一番いい」と語る。また、50 代の男性は東町の曳山について、「他の町の曳山 5 本合わせても東町の曳山 1 本にはおよばない」と語った。その理由は、「（東町の曳山の）車輪がほかの町と違う（ため）」だと言う。

これらの語りから、東町の住民たちは、ほかの町とは違う特徴をもった自分たちの曳山に誇りを持っていることが分かる。

前出の 50 代の男性は「同世代が集まると曳山について熱く語る」と言う。また、別の 50 代の男性は、「様々な世代の人が（祭に）参加するから、世代を越えて親しい」とうれしそうに語っていた。30 代男性は「上の世代の人から神様の逸話など曳山に関する話を聞かされた」と言う。

これらの語りから、祭への参加が、同じ町に住む男性たちが親しくなるきっかけになっていること、また、世代間の交流を通して、祭についての知識が下の世代へ伝わっていることが分かる。

また、20代の男性は、「(喪中などで)祭に参加できなるとさみしい。喪中の時に(曳山を曳けないので)曳山の後ろからついていった」と語り、50代の男性は、「40年間(祭を)休んだことがない」と言う。祭は、男性たちの交流の機会であるとともに、楽しみの場でもあるのである。

5.まとめと考察

西町、上新町、東町 3 町の調査結果の報告は以上である。最後に、この 3 町の調査結果を比較して、曳山祭の特徴といえる共通点を抽出したり、町による違いを明らかにしたりすることを試みたい。さらに、これまで町ごとに記述してきた住民たちの祭に対する認識をまとめてみたい。

八尾曳山祭の特徴—3 町の比較から

ここでは今までみてきた町ごとの報告から 3 町を比較し、八尾曳山祭の特徴についてまとめる。

おおまかな祭の進行はどの町も共通しているが、町ごとに多少の違いがみられた。例えば行事中の町の人々の服装が挙げられる。5 月 1 日の神前囃子では、東町の囃子方は東町の法被を着用していたのに対し、西町と上新町では囃子方は紋付袴を着用していた。このように西町と上新町では囃子方も紋付袴を着用することによって儀式の厳粛さが増しているように感じた。また、祭当日の服装では、昔は総代とともに警護頭も紋付袴を着用していた町がいくつかあったそうだが、現在では警護頭の人が紋付袴を着用している町はほとんどなく、今年上新町も東町も着用していなかった。これに対し西町の警護頭は今年も紋付袴を着用していた。西町は昔からこのスタイルをやめたことがないようで、昔ながらの形式を守り続けているようだ。また、女性の祭への参加についても町ごとに違いがみられる。前でも何回かみてきたように、曳山祭は女人禁制であり女性は曳山に触れてはならないとされてきた。しかし、現在では少子化の影響で男の子が少なくなったことにより、曳山に女の子を乗せる町もみられる。例えば上新町と東町は小学生までの女の子に限って曳山の上に乗ることができる。一方、西町は年齢に限らず曳山の上に乗せることは現在でも許されていない。

以上から、上新町と東町は祭の変化に対して柔軟に対応している一方で、西町は形式を重んじる傾向が強いといえる。

このように、町ごとにそれぞれ特徴をもっていることが分かった。一方、各町共通して祭という伝統を継承しようという姿勢もみられる。それは多少の変化はあるが、行事の進行や内容に大きな変化はなく、現在も昔ながらの形式で儀式が行われていることや、各町に保存会があり曳山の保存に努めていることから分かる。また、上新町のように、若い人に対する曳山の組み立て講習会が開かれたり、どの町でも若い人たちが多く祭に参加していたりと、町の人が伝統の継承に積極的である様子からもいえる。

このように形式をできるだけ継承しようとする共通の認識を持ちつつも、変化への対応に町ごとの個性が現れているが、町ごとの個性が見えることには、町単位で祭が成り立っている町人の祭という基本的な伝統が今なお息づいているからだと考えられる。

曳山祭に対する認識—3町の住民の語りから

最後に、各町で記した3町の住民の祭についての語りから、祭に関わる人たちが曳山祭に対してどういう認識を持っているのかを考察する。

まず、どの町の人も自分たちの町の曳山が1番だと考えており、自分の町の曳山に誇りを持っている。このように自分の町の曳山に誇りを持つのは、他の町との競争意識が働いているということもあるだろうが、小さな頃から祭に参加し自分の町の曳山に愛着を感じているからだともいえるだろう。

また、町の人には自分の町の曳山に誇りを持っているだけでなく、全体としての「八尾の曳山」にも特別な思いを持っている。八尾はかつて交通の要衝として、あるいは養蚕や和紙制作などの地場産業で栄えた町人の町であり、曳山祭はその繁栄を今に伝えている行事だということが、このような意識の底にあると推測される。「このような曳山を作ろうと思うと相当なお金がかかるため現在ではどうして作ることはできない」といった語りをどの町でも聞いたが、曳山祭は、八尾旧町の住民にとって、自分たちの町が誇りに足る歴史を持っていることを思い起こさせる象徴なのだといえる。

さらに、祭に参加することで、それぞれの町で世代を越えたつながりが維持されたり、強化されたりすると住民たちは意識している。若い世代と中年以上の世代の男性が祭をとおして協力することで、町の連帯が生まれたり、維持されたりするのである。このことを住民たちは強く認識しているし、そのようにして生まれた連帯感があるからこそ、進学や就職で八尾を離れている人たちも祭の時期になるとわざわざ八尾に帰ってきて祭に参加するのだろう。

つまり、祭に関わる八尾旧町の住民たちにとって、町がさまざまな変貌を遂げた現在においても、曳山祭りは住民の間の連帯を強める行事であり、同時に「八尾の町民」としてのアイデンティティを再確認する機会なのである。

謝辞

調査を行うにあたって、八尾曳山保存会長である宮田紘郎様をはじめ、八尾壮年団団長である井山裕之様、八尾壮年団の皆様には、総会に参加させていただくなど様々な便宜をはかっていただきました。さらに、西町曳山総代である池畑忠寿様、上新町曳山総代である栢山仁一様、東町曳山総代である富士原尚文様をはじめ、西町、上新町、東町のたくさんの皆様には貴重なお話を聞かせていただき、多大なご好意をたまわりました。また調査を行う際に、西町の渡辺様には無償で宿を提供していただきました。

皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

第3章 「おわら」に関わる人々

この章では、八尾旧町の伝統芸能である「おわら」と人々との間のさまざまな関わりの様態について報告する。

吉田 朱里
安達 悠摩
尾堂 綾子

1. 「おわら」の概要

竹内 潔

「おわら風の盆」は、富山県富山市八尾町で9月1日から3日の間に行われている伝統的な祭りである。おわらを行っているのは「旧町」と呼ばれる10町とJR越中八尾駅付近の福島^{ふくじま}をあわせた11町である（旧町と福島については、本報告書の第1章「八尾の概要」を参照）。

この章ではおわら風の盆に関わる人々について記述していくが、おわら風の盆の祭りは八尾旧町の年中行事であるとともに、踊りや演奏を披露する行事でもある。したがって、この章では、「おわら風の盆」を年中行事としての「風の盆」と芸能文化である「おわら」に分けて記述する。

年中行事としての「風の盆」は、暴風を吹かせて農作物に被害を与える悪霊を「二百十日」に歌と踊りで鎮める風鎮行事であるというのが通説であるが、八尾旧町は交易や養蚕・和紙などの地場産業で栄えた町であるので、むしろ祖霊を供養する盂蘭盆^{うらぼん}との関係が深いとも考えられている。

以下では、主として芸能文化としての「おわら」について概要を記したい。

1. おわらの歴史と変化

おわらの起源は、江戸時代の元禄期であると伝えられている。町外に流出していた八尾旧町の建設の許可書「町建御墨付文書」を町に取り戻したことを喜んで、町民が三日三晩踊り明かしたことに由来すると言われていたが、はっきりとしたことは分からない。

また、「おわら」の語源についても、江戸時代の文化年間に、遊芸者たちが滑稽な格好をして、歌に「おわらひ」という言葉を入れながら町を練り歩いたが、その「おわらひ」が元となったという説や豊年を意味する「大藁」（おおわら）に由来するという説、あるいは、「小原村」出身の娘が女中奉公をしている際に美声で歌った子守歌が起源だという説などがあり、確実なことは分かっていない。

おわらは踊り手と地方^{じかた}で構成されるが、地方は唄や囃子を含めて伴奏をおこなう人たちで、「唄い手」、「囃子方^{はやし}」、三味線、胡弓、締太鼓^{しめだいこ}の5つのパートで構成される。おわらは、踊り手が伴奏する地方とともに踊り歩く芸能であるが、この町を踊り歩くことを

「町流し^{まちなが}」と呼ぶ。「町流し^{まちなが}」の原型は江戸時代の元禄頃に生まれたという。なお、江戸期のおわらは現在のように優美なものではなく、交通の要衝として栄えていた八尾旧町の豪壮な町人文化を反映して、どちらかという粗野な趣があったと伝えられている。

ただし、明治時代の中ごろまで、おわらは唄だけの民謡であり、その後、尺八と三味線が加わるようになり、しばらくして、尺八の代わりに胡弓が用いられるようになった。

胡弓は、後におわらに哀調を加えることになる。1911（明治 44）年、現在の北日本新聞の前身である新聞『北陸タイムス』の千号紙発行の記念として、おわらの踊りを披露するという行事があり、旧町鏡町の芸者たちが即興で踊った。これが契機となって、おわらに踊りが加わるようになる。

1913（大正 2）年に、北陸線が新潟県の直江津まで開通した記念事業として富山県が 50 日間に渡る大きなイベントを主催し、そこでおわらを披露することとなった。その際に、三味線の師匠であった江尻せきが中心となって、それまでの芸者の踊りは所作が難しかったため、深川踊りやカッポレなどを参考に農作業の動きを踊りの流れのなかに取り入れて、単純明快で活発な振り付けで誰でも楽しめる「豊年踊り」を作り上げた。この踊りは、次に述べる「新踊り」が誕生してからは「旧踊り」とも呼ばれている。

大正時代の中期、1919（大正 8）年、八尾に「おわら保存会」が発足した。これは現在の「富山県越中民謡おわら保存会」のもととなった組織である。初代会長は医師の川崎順次^{かわさきじゆんじ}であったが、彼の指導でおわらの踊りは大きく変化した。当時は若い娘を人目に触れさせるのを嫌がる風習があったため、いわゆる花街であった鏡町の芸者たちが踊り手となっていた。しかし、川崎順次は自分の娘たちを積極的に踊りに参加させ、それを他の町民が見習って娘を踊りに出すようになったという。こうして、豊年踊りの創作とともに、おわらは次第に多くの住民たちが参加する芸能に変わっていく。

1928（昭和 3）年、川崎順次は、それまで卑猥な表現が含まれていたおわらの歌詞（「おわら古謡」）を変えようと、知人の画家である小杉放庵に依頼して歌詞の創作を依頼した。こうしてできあがったのが、「八尾四季」と呼ばれる「新作おわら」であり、以降、野口雨情、佐藤惣之助^{みづたたくほ}、水田竹圃、高浜虚子、長谷川伸、小川千甕^{せんとう}、林秋路^{あきじ}など、八尾を訪れた文人たちが寄せた歌詞によって、「新作おわら」は充実していくことになる。

また、川崎順次は、1929（昭和 4）年、東京三越で富山県の物産展即売会でのおわらの披露に際して、当時、新進の舞踏家であった若柳吉三郎^{わかやよしざぶろう}を八尾に招いて、新作おわらに合わせた踊りの振り付けを依頼した。こうして新しく作られたのが「新踊り」と呼ばれる踊りである。「新踊り」には、所作の振りが大きく勇猛な「男踊り」と「八尾四季」にあわせて春夏秋冬それぞれに異なった所作が入れられた「女踊り」（「四季踊り」とも呼ばれる）の二つがあったが、当時は「男踊り」が踊られることはなく、男性が実際に踊りに加わるようになるのは後年になってからである。「女踊り」は日本舞踊の優雅さを取り入れたもので、このため、町民の娘たちが積極的に踊りに参加するようになった。また、踊りの優雅さにあわせて、地方は尺八を胡弓に変えて哀愁が漂う調べを奏でるようになった。こうして、かつての八尾の町の中だけで芸者の芸や猥雑な歌詞で構成されていたおわらが、社会の変化に合わせて、町の中でも広く参加できる芸能となり、また、八尾を越えて楽しまれる芸能へと変化していったのである。

以上のように、大正から昭和初期にかけて、「豊年踊り」（旧踊り）と「新踊り」（「男踊り」と「女踊り」）が創られたが、現在では、「豊年踊り」は主として町流しや後述す

る輪踊りで踊られ、「新踊り」は主にステージなどで披露されている。なお、踊りの所作は、旧町を構成する 10 町のそれぞれで工夫が加えられて、町ごとに独特の特徴を持っている。

以上のように、おわらは「伝統芸能」ではあるが、決して、昔からそのまま伝わってきたものではなく、むしろ、大正から昭和というそれほど古くない時代に、社会の変化に応じて新しく創りなおされてきた。

次章で詳しく述べられるとおり、現在のおわら風の盆には、毎年 20 万人を越える観光客が訪れるようになっていて、観光化が著しい。また、八尾の概要に述べたように、旧町は人口流出と高齢化が進んでいる。このような社会の変容に対して、住民がおわらをどのように変化させているかについては、次の「**おわらの変化と継承**」で吉田が詳しく報告する。

2. 地方^{じかた}について

おわらで使用される楽器には三味線、胡弓、締太鼓^{こきゅう しめだいこ}がある。町の規模によって人数は異なるが、旧町を構成する一つの町ごとに、三味線、胡弓、締太鼓の地方がいる。

三味線は地歌三味線^{じうた}と呼ばれるもので、三味線が刻む音を支えに、唄と胡弓とがからまり、おわらの哀調を醸し出す。また、踊りも三味線がリードするため、三味線の地方は地方でも最も重要なパートと言ってよく、したがって地方の人数が一番多い。また、おわらでは室外で長時間演奏することが多いため、おわらの三味線には強い音を出せて丈夫な犬の皮が多く用いられているという。

観光化が進んでから注目されるようになってきた胡弓は、明治 40 年代に、輪島の漆職人で浄瑠璃を学んでいた松本勘玄が八尾に婿入りしていた際に伝えたと言われる。また、民謡で胡弓を使用するのは珍しく、おわら以外で用いられるのは大分県の「鶴崎踊り」やおわらと同じく富山県の五箇山^{ごかやま}の麦屋節^{むぎやぶし}などわずかである。胡弓は演奏が難しいため、地方の人数は少ない。

締太鼓は、猿楽太鼓^{さるがくだいこ}とも呼ばれ、能や長唄で用いられる太鼓を用いる。二本の撥で打ち、町流しの時は首から吊り下げる。なお、上述のように明治末期までおわらの地方には尺八が用いられていたが、尺八は微妙な音程を表現しにくいいため、代わりに胡弓が導入されることになった。

地方のどのパートも、長年の修行を要するものであるが、おわらの地方はすべて無償のボランティアである。地方に携わる人々にとって、地方を担うことがどのような意味を持っているかについては、安達が 3 節「**“地方” に携わる人々**」で明らかにする。

3. 踊りについて

先述したように、おわらが他の芸能と異なる点は、踊りや演奏をしながら町を歩くと

いう点である。これを「町流し」という。日中の「町流し」は「昼流し」と呼ばれるが、「昼流し」では、踊り手と地方に加えて、子どもたちも参加する。それぞれの町の公民館から出発して決められた順路に沿って、途中何回か休憩を挟みながら、3時間から4時間をかけて町を練り歩き、演奏と踊りを披露する。

観光客が押し寄せるようになってからは、観光客がまばらになった深夜になってから、住民たちが自分たちの楽しみのために「町流し」をするようになった。これは「夜流し」と呼ばれる。夜流しでは、気の合う者どうしが少人数で自由に町を流していく。踊り手をとまわず、地方だけで流すこともある。ただし、最近では、この「夜流し」を目当てにやって来る観光客が増えている。

町流しのほかの踊りのかたちには、「輪踊り」と「舞台踊り」がある。

「輪踊り」は、地方を中心として踊り手たちが輪をつくって踊る。近年では、踊りに参加したい観光客のために、午後10時から12時まで、道幅が広い上新町通りで、観光客も参加できる「大輪踊り」が催されている。

「舞台踊り」は、演舞場での競演会や各町に設置されるステージで行う踊りで、旧踊りや新踊りを入れ混せて、町ごとに独自の特徴を持つ演技を披露する。

4.おわらの組織

おわら風の盆の行事は、八尾町商工会、越中八尾観光協会、富山市八尾総合行政センター農林商工課（2005年の合併前までは八尾町商工観光課）から構成される「おわら風の盆 行事運営委員会」によって運営され、「富山県民謡越中八尾おわら保存会」の11の支部が参加して、練習や準備をおこなうというかたちでおこなわれている。「富山県民謡越中八尾おわら保存会」の11の支部は旧町の10町（東町、西町、今町、上新町、鏡町、下新町、諏訪町、西新町、東新町、天満町）と旧町内から移り住んだ人たちが多く1956(昭和31)年からおわら風の盆に参加するようになったJR越中八尾前の福島地区の11地区に設けられている。「富山県民謡越中八尾おわら保存会」は、この11地区の代表者から構成されていて、「本部」と呼ばれている。ただし、「本部」と「支部」の間に上下関係はなく、おわらの練習や風の盆の準備は各支部が自主的におこなう。

おわら風の盆は、上記の11の町の行事であり、基本的にはこれらの町の住民の主体的な参加と協力によって行事は進められる。おわらの伝承や練習なども、各町の住民の間でおこなわれる。しかし、八尾旧町には、おわらを習いおぼえたい町外の住民や婚入者などが加入している相互学習のサークルがあり、部分的なかたちではあるが、おわら風の盆にも参加している。第4節の尾堂の「“おわら”が創る新たな人間関係」では、このサークルが旧町の住民を含む新しいネットワークを築く役割を果たしている点に注目して、活動状況を詳細に報告する。

参考文献

越中八尾尾観光協会編、2003、『越中八尾おわら風の盆公式ガイドブック』

北日本新聞社北日本新聞社編集局編、1988、『越中おわら社会学』

北日本新聞社編、2004、『越中八尾おわら風の盆』

富山県民謡おわら保存会、2000、『越中おわら』

2. 「おわら」の変化と継承

吉田 朱里

1.はじめに

「おわらの概要」で述べられているように、八尾で芸者により支えられ行われていたおわらは、明治から大正にかけての社会の変化に合わせて、多くの町民が参加する芸能になり、また、八尾を越えて楽しめる芸能へと変化していった。おわらは「伝統芸能」ではあるが、昔から変わらない伝統が受け継がれてきたわけではなく、八尾の住民たちが社会の変化に合わせて創造を繰り返してきた芸能である。

しかし、次の第4章で詳しく述べられるが、おわら風の盆は観光化が進み、毎年全国から20万人を超す観光客がやってくる。また、旧町は地場産業の衰退などによって人口流出と少子高齢化が進んでいる。

町の人たちに話を聞くと、観光客が増えるにつれて、おわら風の盆の行事の内容や芸能としてのおわらに変化が生じてきていると言う。また、人口の減少や少子化はおわらの芸能の継承に影響を与えざるをえないと考えられる。

おわらは、社会の変化に合わせて住民が主体的に変化を加えてきた芸能であるが、観光化や少子化などはおわらにどのような変化を与えて、住民たちはその変化をどのように捉えているのだろうか。また、住民たちはどのようにおわらを継承していこうとしているのだろうか。この報告では、おわらの現在を住民の視点から、語りや観察をもとに明らかにしたい。

なお、おわらの概要で示されているように、以下の記述では、行事としての「おわら風の盆」と芸能としての「おわら」を区別する。

2.おわら風の盆の変化

「おわら風の盆は昔と今で変化がありましたか」という質問を20代以上の旧町の住民に尋ねた。聞き取った人たちのほぼ全員から、「昔と比べて変わった」という回答を得たが、変化したという回答があった点ごとに、紹介していきたい。

2-1.前夜祭

おわら風の盆の変化の中で、最も大きな変化と住民たちが認識しているのは「前夜祭」の開始である。「前夜祭」とはおわら本祭の前の10日間、つまり8月20日から30日までの間に行われる観光イベントである。1日に1町ずつが観光会館でのステージ演舞と各町での町流しを行う。

前夜祭が始まったのは20年ほど前で、おわら風の盆に訪れる観光客が多くなり、本祭で町の人たちが祭を楽しめなくなったために、おわら風の盆の本祭の前に住民たちが

楽しむ祭として考えられたものだという。

前夜祭が開かれる前まで最終日の9月3日は、町民が楽しむための祭の日であった。しかしある女性は「最初、9月3日は町の人のおわら風の盆だったのに。観光のガイドさんがお客さんに3日（の観光）を勧めるようになって、3日にも観光客が増えてしまった」と語った。おわら風の盆が全国的に有名になるにつれて、客足の少なかった3日にも多数の観光客がやってくるようになったのである。そのため、町の人を楽しむためのものとして前夜祭が開かれるようになった。

しかし、そのうちにこの前夜祭にも観光客がやってくるようになった。ある50代の女性は「最初は婦人会で出演してくれないか、と頼まれるほどやる人がいなかったのに」と前夜祭が始まった当初は踊りたい住民だけが参加したと語り「今じゃ（前夜祭にも）こんなにたくさんお客さん来るからね」と言う。この女性は「町の人のおわら風の盆のために前夜祭も始めたはずなのに前夜祭も（9月3日と）同じようにお客さんが多くなってしまった」と語る。3日の祭だけでなく、祭本番前の前夜祭も、1年のうちの町民の娯楽から観光客のための祭に変わっていったのである。写真1は、観光客向けの前夜祭の案内の看板である。もともとは住民の楽しみのために設けられた前夜祭が、観光客向けのものに変わってしまったことが分かる。

観光客の増加は地域活性化につながる面を持つが、一方で、町民たちの娯楽としての祭の特色が薄れていくことにつながっている。



歓迎
おわら風の盆
前夜祭

20日	天満町	26日	上新町
21日	東新町	27日	福島
22日	東町	28日	諏訪町
23日	下新町	29日	西町
24日	西新町	30日	鏡町
25日	今町		

写真1.おわら風の盆前夜祭各支部の町流しの日程表

2-2.露店やマンドの廃止

50代から60代の人が多く上げた変化点として、露店やマンドの廃止がある。露店は祭などによくある出店のことであり、マンドとは企業の広告で家の軒先から軒先に道を

またぐようにしてかけられるもので、マンドを張ることでその企業がスポンサーとなりお金を出してくれるという仕組みだった。

「私たちが青年団のときはマンドを作っては小遣い稼ぎしていた」と西町の A さんは語る。昔は今よりも道幅が狭く、家と家の間に道をまたぐように広告が取り付けられたのだという。現在では観光化が進み、道が広くなったためマンドはかけられないのだそうだ。

しかし、もともと道幅の広がった上新町では今もタテマンドという形でマンドが残っている。タテマンドは道にまたがる普通のマンドとは違い、看板のように電柱に結びつける縦型のマンドである。

A さんは「青年団が集まってマンドを作る作業が楽しかった。道幅が広がって綺麗になったのはいいけど、昔ながらのものが消えていくのはやっぱり少し寂しい」と語っていた。

2-3.浴衣のあり方

40代以上の女性の答えとして多かったのが、「夜流しよながのときに町の浴衣を着る子が増えた」というものだった。おわらの概要でも述べたが、夜流しは支部ごとではなく個人で仲のよい者同士が連れ立って行うものである。そのため、夜流しでは町の浴衣ではなくネマキとよばれる自分の浴衣を着るのが古くからの決まりとなっている。ネマキは写真2を見ても分かるように紺や藍、灰色など地味な色合いの浴衣が多く見られた。しかし、最近では夜流しの際にも写真3のような揃いの町の浴衣を着ている人が、特に若い世代を中心に多いようだ。

西町に住む A さん（50代・女性）は「昔は町の浴衣は町の代表の印だから、夜12時を過ぎてそれぞれ踊りに出かける時は自分のネマキを着て出かけるのが決まりだった。最近の若い子は町の浴衣を着ていれば注目されることが分かっているようだ」と語る。



写真 2.ネマキ

写真 3.鏡町の女性の浴衣

実際、おわら風の盆の本祭中も夜流しのときに町の浴衣を着ている人を何人も見かけた。町の浴衣を着ているのは主に踊り子で、青年団で現役の踊り子としてステージに立っている女性が多かった。地方^{じかた}の人で夜流しの時に町の浴衣を着ている人はいなかった。

夜流しのときに地方の人に話を聞いてみると、「観光客がいると集中できない。だから人のいない所を探して歩く」という。地方の人たちからは、「カメラのフラッシュで集中力が途切れる」や「人の話し声で自分の音がかき消される」などという苦情の声があがっているが、あまりに観光客が多いと地方は演奏や歌唱に集中できない。これに対して、踊り手の人たちは、地方とは少し異なった視点で観光客をとらえている。最近まで踊り手をしてきた B さん（20 代・男性）は「踊り手は人に見られてうまくなる。だから、注目されてなんぼだと思っていた」と語る。踊り手の人々、とくに若い踊り手は、観光客を観衆としてとらえているのである。

以上から、若い踊り手が、観光客を意識して見せることに注意を払ったり、楽しむようになったという変化があることが分かる。

2-4.女性の地方としての参加

老年の女性の答えとして多かったのが女性の地方への参加が認められたということである。30、40 年前から女性の参加も認められるようになったという。それ以前、女性^{じかた}は地方をしてはいけないうるだけでなく、楽器に触ることも許されなかったという。

最近では参加している女性も増えており、婦人会でおわらを教えているという町もあるようだ。その場合、八尾に嫁いできたが、ずっと参加できなかった女性も地方としておわらに参加できるという利点がある。しかし、旧町以外の所から嫁いだ女性はまだまだあまりおわら自体に参加できていないのが実状である。

同様に、子供が地方の練習をすることも昔はなかったという。しかし、現在では小学生からでも地方の練習をしている子が少なくない。けれど、「地方は踊りが出来ないという地方になれない」とされていて、特別な理由がない限り踊りから入るのが基本とされている。

2-5.変化点のまとめ

上記のことから、おわら風の盆の行事は、観光化と人口の減少が原因となってさまざまに変化していることが分かる。観光客数は近年安定してきたと語る人が多く、一番観光客が多かったのはいつかと聞くと、およそ 10 年前という答えが圧倒的に多かった。これはおわら風の盆の知名度が上がり、パッケージツアーなどが組まれるようになったことが大きな原因となっている。芸能としてのおわらについては、観光化の影響により、本来の自分たちが楽しむという目的を離れ「見せるおわら」という意識が若い世代の中

心に見られるようになったようだ。また、女性の地方での参加においては女性の参加意欲が高まったことももちろんだが、男性だけの地方では人数が足りずおわらを行うことが出来なくなったことが主な理由であるようだ。

2-6.世代間の認識の多様化

このようにおわら風の盆の行事が変化することにより、世代間での芸能としてのおわらに対する認識も変化してきているようである。踊り手である若い世代では夜流しのときに町の浴衣を脱がないなど「踊り手は見られてこそ価値がある」という認識の人が多く見られる。しかし、40代以上の方は「踊りは楽しむもの」と語る人が多く、必要以上にちやほやされることに抵抗を感じる人もいるようである。

3.おわらの継承

ここまで、おわら風の盆の変化を見てきたが、町の人の中には世代間における認識の違いがあることが分かった。では、この世代間における認識の違いがおわらの芸能の継承にどのように影響を与えているのだろうか。また、継承の仕方もおわら自体の変化にもなっていて変わっているのだろうか。このような点について、観察と聞き取りをもとに記述していきたい。

3-1.伝承に関わる組織

個人練習を除く集団でのおわらの練習は本部温習会^{ほんぶおんしゅうかい}、支部温習会^{しぶおんしゅうかい}、練習の3種類がある。これらは全て基本自由参加である。以下、これらの練習会の概要について詳しく説明する。

本部温習会とは、おわら演技指導部が中心となって行う練習会のことで、上新町の観光会館で行われる。本部温習会は定期温習会と本部合同温習会の2種類がある。定期温習会は毎月1日に行われる温習会であり、本部合同温習会は6月に行われる1週間に渡る練習会のことである。本部合同温習会は前2日に地方、中3日に踊り、最終日に合同発表会の形で行われる。

また演技指導部の企画として演技発表会も行われている。これは毎年7月の第2日曜日に観光会館で行われる発表会である。この発表会は支部ごとに練習の成果を発表しあうもので、本番前の中間発表会としてこの発表会にむけて練習している支部が多い。表1はおわら演技指導部主催の練習会、発表会の年間の予定である。定期温習会は、曳山祭の行われる5月、おわら風の盆が催される9月、正月がある1月以外は毎月行われていることがわかる。

表 おわら演技指導部主催の温習会と発表会の年間予定

定期温習会	本部合同温習会	演技発表会
-------	---------	-------

4月	○		
5月			
6月	○	○	
7月	○		○
8月	○		
9月			
10月	○		
11月	○		
12月	○		
1月			
2月	○		
3月	○		

支部温習会とは、各町の支部ごとで決められた日時に行われる温習会のことで、月に1、2回程度行われる。各支部の公民館で行われ、各々の支部のしきたりや決まりに従って行われる。例えば、^{かがみまち}鏡町では上座から芸歴の長い順に座ること、唄を歌うときも芸歴の長い人から歌うなどの決まりがある。また、温習会と練習とは違う意味を持っており、温習会が主に地方の練習であるのに対して、練習とは支部ごとに行われる踊りの練習のことを指す。基本的に練習はおわらが近づいてきた7月頃から行われる。幼児から青年団までの幅広い層の人が参加する。

3-2.おわらの伝承の現状

次からは温習会での継承の現状を地方と踊りに分けて見ていきたい。

3-2-1.踊りの指導

本部の指導は演技指導部の人たちが行う。演技指導部とは、基本的に現役の踊り手を卒業した26歳以上の八尾に居住している人たちで構成されている。各支部から数名ずつ選出している。しかし、人口の減少から指導部に参加しながら現役の踊り手としておわらに参加している人もいる。

本部での指導が始まった理由は様々あるが、主な理由として支部ごとでバラバラになりつつある踊りの統一化を目指して始まったという。踊り方が多様になった背景として、メディアの発達により同じ時間に踊っている他支部の演技をテレビなどで見るできるようになり、他支部との差をつけようとしたということが考えられる。

以下には2008年度の本部合同温習会での様子と聞き取り調査をした内容を、語りを中心に記述する。

2008年度の踊りでの本部合同温習会の参加者は小学生が多かった。練習は小学生の男女、中学生以上の男女で行われた。小学生は基本となる輪踊りを、中学生以上は新踊りの練習をしていた。

小学生以下の演技指導をしていた演技指導部のCさん(20代後半・女性)に子供に教えるのは大変かと尋ねると、「(子供に)教えるのは初めてだけど、音楽がかかれば自然と静かになって集まってくれるのでそれほど苦労はしない」と語ってくれた。実際、音楽がかかると遊んでいた子供たちも「始まるよ」と声を掛け合って踊り始めていた。

現役の踊り手の指導をしていた演技指導部のDさん(27歳・女性)に一番苦労するのはどんなことかと聞くと、「支部ごとの仲がいいから、合同の練習で他の支部と練習すると微妙な雰囲気になることが苦労する」と語っていた。基本の練習が支部ごとであり、支部ごとでの芸を競うおわらであるため支部のまとまりが強く、合同練習であるにも関わらず支部ごとに固まってしまう傾向があるようであった。どれくらいの違いが支部ごとであるのかと尋ねると「手の向きや視線の向きなどの細かい点は違っても、踊りの意味を外さなければいいと思うから、それ程違いはない」とDさんは語った。

現役の踊り手であるEさん(20代・女性)におわらは好きかと尋ねると、「好き。伝統を守っていくことに喜びを感じる。今まで守られてきたものを守っていくことが使命だとも思っている。だから下の年代の子がちゃんと練習をしないと腹が立つ」と語った。

本部温習会では指導者、踊り手ともに伝統を下の世代へ伝えていこうとする共通認識を多くの人を持っているように感じた。しかし、現役の世代では演技を競うという点で、競争心から支部同士で多少の摩擦があることも伺えた。

次は支部での踊りの指導について見ていこう。支部での指導方法は11支部それぞれであるが、今回は鏡町^{かがみまち}を例とする。鏡町での踊りの指導は小学校低学年以下、小学校高学年、現役世代に分けて行われている。特色としては小学校高学年で新踊り^{しんおど}の指導を行っており、これは11支部でも鏡町だけの試みである。以下、3つの練習の様子を記述する。

小学校低学年以下への指導は壮年団役員、青年団が行う。教えるのは写真4のような輪踊り^{わおど}のみで、輪踊りでは所作^{しよさ}と呼ばれる浴衣の袖や編み笠を使う仕草がないため練習用の羽織や編み笠は使用しない。全員で輪を作り、指導者が中に入り子供たちはそれを見ながら踊る。練習後にはお菓子やアイスが配られ、子供たちはそれを貰うためや、休憩中に友達と遊ぶのが楽しいから来ているという雰囲気であった。



写真 4.鏡町の小学校低学年以下の練習風景

次に小学校高学年の踊りの指導について記述する。上記した通り、鏡町では 2008（平成 20）年から小学校高学年への新踊りの指導を始めた。それは、10 年前にも同じ試みを行っており、その当時の小学校高学年であった子供たちが現役になったときが鏡町の踊りの黄金期であったからだという。しかし、その後、新踊りの指導を中学生からに戻すとあまり踊りの評判がよくなかったため、2008（平成 20）年から 10 年計画としてもう一度新踊りの小学校高学年への指導を開始した。「この子供たちが現役になったときにもう一度（黄金期が戻ってくることを）期待している」と役員の中の多くの人が語っていた。他支部では新踊りは中学校に入ってから教えられるのが一般的らしく、小学生が写真 5 のように羽織を着て練習をしている様子は鏡町でしか見られなかった。



写真 5.鏡町の小学校高学年の練習の様子

これらの小学生への指導は基本的にボランティアで行われている。ボランティアは現役の踊り手と現役を終えたばかりの壮年団役員世代が行っているが、現役の踊り手が指導に来ている姿はあまり見られなかった。このことについて鏡町の F さん（30代・女性）は「本当は現役の子が教えるのが一番いいけど、結局来なくなってしまった。一生懸命（踊りを）やった人は苦勞も分かるし、その分、下に伝えたいと思うしそれを義務的に思うけど、最近の現役の子はだめだ」と語っていた。問題点として、指導者が決まっていなかったために「誰が教えるのか」という考えの食い違いが青年団世代と壮年団世代で見られるようだ。

F さんは「(小学生には) 現役のお姉ちゃんたちより上手になれる、と言って頑張らせている。相互効果で現役の子たちも頑張ってくれることを期待している」とも語ってくれた。実際に壮年団役員の人たちも同じことを考えているようで、10年計画の狙いとしては10年後の踊りの実力を高めるだけでなく、現在の踊り手たちのやる気の向上もあるようだ。

次に現役の踊り手に対する指導であるが、鏡町では現役の踊り手への直接の指導は行われていないようであった。現役同士お互いに指摘し合い、改善していくという方法がとられていた。練習期間は小学生がおわら後も2ヶ月ほど練習をしていたのに対して、現役の踊り手は7月に入ってから練習を開始し、おわらの期間が終わると練習も終了していた。

踊りの練習に指導者として参加していた G さん（20代・男性）に踊りを教えるときに難しいことは何かと尋ねると「うまい踊りというのはベースの上にオリジナリティがあるもの。教えすぎるとオリジナリティがなくなるし、教えなさすぎるとやらない。だからそのバランスが難しい」と語った。基本の踊りというものは決まっているが、そこから自分独自の「色」を出すことがうまくなる秘訣であると多くの人が話すように、踊りは基本の型を身につけるだけではいけないようである。G さんに苦勞する点は何かと尋ねると「食い付きが悪いと教える気がなくなる」と語っていた。よりいい踊りを目指すためにはただ振りを覚えるだけでなく、他人を真似し、自己研究をする必要があるようだ。

3-2-2. ^{じかた}地方の指導

次からは演奏を担当する地方（唄い手を含む）の指導についてみていく。ここでも踊りの指導同様、本部と支部に分けて記述する。

本部温習会での地方の指導は踊り手と同様、演技指導部の人が行う。指導部の人はいくつかの楽器に数名ずつおり、練習はその人を中心として行われた。

支部での地方の指導も各町それぞれの手法があるが、今回は踊り同様に鏡町^{かがみまち}を例とする。唄以外の地方の場合、地方には緩やかな師弟関係がある。師匠が同じ支部で練習に参加している場合は師匠が弟子に指導するが、それ以外の場面では特に指導はしない。

しかし、注意や確認はあった。唄い手にも一応師弟関係がある。鏡町では、一見したところ師弟関係を持つ人が町内にいない。支部での指導は個人個人が中心で、お互いに刺激し合っている様子であった。

3-3.指導法の変化

鏡町で胡弓をしている H さん（50 代・男性）に指導法についての話を聞いた。H さんは「昔は個人個人に師匠がいて、一対一の練習で練習のバリエーションや練習の仕方を習えた」と語る。現在との違いについて H さんに尋ねたところ「今は公民館でみんな揃って練習する。とりあえず行けばいいや、という曖昧な練習しかしていない。だから、自分が人に指導する立場になったときにどう指導したらいいのか分からないとか、何が悪いのか分からないという若い人が多い」と語った。

H さんは自分が指導部のときに行っていた練習の例を教えてくれた。H さんが指導部だった当時、鏡町は^{かがみまち}おわらがうまいと旧町でも評判であったという。「だから（鏡町の）みんな天狗になっていた。それではだめだと思って、^{にしんまち}西新町との合同練習を企画した」と H さんは語る。当時の西新町はレベル的には鏡町には劣っていたが、大変やる気があったため合同練習の相手に選ばれたという。「西新町は鏡町と練習できるからやる気を出す。だからすごいスピードで上達していった。鏡町の人もそれに刺激されてやる気を出した。相乗効果がいい具合に働いた」と H さんは語った。

H さんが指導部のときには^{こきゅう}胡弓作りの指導も行ったという。胡弓弾きは、昔は自分で胡弓を作ることが主流であったらしいが、近年では八尾に胡弓を作る職人はいないという。「楽器を作ることで、楽器の大切さが分かったり、きちんとした扱い方がわかる。そうすれば音にもちゃんと深みが出る」と H さんは語る。また H さんは「最近では胡弓を弾く人が多すぎる。胡弓はサブ的なポジションだから目立たなくてもいいのに、最近では人が多すぎて胡弓の音ばかり目立ってだめだ」とも語った。おわらは踊り、三味線、胡弓、太鼓、唄がきちんと混ざり合ってこそいいものになるのだという。「その（すべての）バランスを保つために、自分のことだけでなく周りをよく知り、聞き、奢ることなく演奏をしなければならない」と H さんは語る。

これはなにも胡弓だけに言えることではない。唄い手の F さん（30 代・女性）は「自分の町が好きだし、自分の町がうまくなることはすごく大切だと思っている。でも、おわらを残していくためには自分の町だけを見ていてもだめ。だから他の町の評判が落ちると嫌だと思う」と話す。

八尾では、老若男女問わずおわらに携わるすべての人が後世におわらを伝えていこうとしていることがわかる。しかし、各世代が各世代の価値観を持ち、その摩擦が生じている部分もあるようだ。おわらに携わる人たちは「おわら」の変化自体には抵抗が薄いようだが、どのようにそれを受け止めてどのようによいものを作るかというところで世代ごとの差が見られる。

4.世代ごとの認識の違い

ここまで、おわら自体の変化と伝承について見てきた。どちらについても、世代によって認識の違いがあることが分かった。考察に移る前に、世代ごとのおわらの変化と継承に対しての認識の違いを記述してみる。

4-1.若い世代（青年団）のおわらに対する認識

まず、現役の踊り手である青年団世代の人は注目されることに慣れていているということが明らかになった。これは生まれた時から「見られるおわら」というものに慣れていているためであると考えられる。踊り手の最高年齢である 26 歳の人は、10 年ほど前から現役として踊っている。現役の踊り手である青年団の人の多くは、上記のように下の世代に対する指導にあまり参加していない。これは、指導したくないというわけではなく、どのように指導したらいいのかが分かりにくいと推測される。本部合同温習会で現役の踊り手である C さんが語ったように、おわらを伝承していくことは大切だと思っている人は多いが、どのように伝えていけばいいのかが分かりにくい、というのが現状であるようだ。

4-2.30 代以上の世代のおわらに対する認識

地方としておわらに参加している 30 代以上の人たちは観光客に対してあまりいい印象は持っていないように思われた。また、30 代の人たちは「踊り手は見られてうまくなる」という認識も持っているが、自分自身が地方としておわらに参加する場合は観光客のマナーの悪さが目につくと感じているようだ。老年の世代になるにつれ、観光客から離れ自分自身が楽しむことを重視する人が多いように思われる。しかし、老年の世代であってもおわらが八尾の活性化につながっているという認識は持っており、観光客が来ること自体を否定しているわけではなく、マナーを守らないことや自分たちが楽しめないほどにちやほよとされることに嫌悪感を抱いている様子であった。

また、継承に関しては若い世代と比べさらに強く下の世代へ伝承していこうという意識が見られた。そのため、若い世代の人が指導の仕方や練習方法がわからないから練習に来ない、曖昧な練習しかできないという状況に多少の不満を持っているようだ。

このように、おわらに携わる人々はおわら自体の変化には抵抗があまり無いようだが、どのようにそれを受け止めてどのように良いものを作るかというところで、世代ごとの認識の差が見られた。

5.考察

本論で見たように、おわらが観光化にともなって変化していることがわかった。この変化には、バリ島の「ケチャ」に見られる伝統の再創造と似ている面がある。バリ島で

は祭礼儀式であった「ケチャ」を観光化にともないきらびやかな衣装や観光客に分かりやすい筋立てにすることによって「見せる演技」として再創造された。(山下、1999) おわらでも観光化にともなうこれと同じ現象が起こっている。それは、1929 (昭和 4) 年のおわらの大きな修正から始まり、より多くの観光客におわらを楽しんでもらえるように現在も続いている。観光化にともない、町内で楽しむものから観光客に見せるものへと変化し、演じる側も見せることを前提に考えるようになった。そのことには賛成派、反対派、様々な意見があるようだが、観光客の求める「哀愁漂うおわら」は観光客の目が成長させたものであるといえる。

また、今回の調査で分かったことは、観光化にともなうおわらの変化だけでなく、おわらを演じている人たち自身の変化が大きいということであった。おわらが「楽しむもの」から「見せるもの」に変わったのは、八尾の人々のおわらに対する認識が「楽しむもの」から「見せるもの」に変化したことも大きな原因となっているようだ。世代間でおわらに対する認識が異なっているのは、おそらくこのような変化が現在も続いているからなのだろう。

しかし、すでに見たように、世代によるおわらに対する認識に差があるものの、八尾の人たちがおわらに大きな誇りを持っていることに変わりはない。また、町民たちは、おわらに携わるすべての人におわらを伝承しようとしている。つまり、町民たちは主体的に観光化に対応しておわらを変化させ、そして、再創造したおわらを後の世代に伝えていこうとしているのである。

文献

山下晋司、1999、「バリ 観光人類学のレッスン」、東京大学出版会
越中八尾おわら風の盆ホームページ
<http://www.city.toyama.toyama.jp/yatsuo/nourin/owara/>

3.「地方」に携わる人々

安達 悠摩

1.はじめに

日本舞踊などで、三味線などの伴奏を演じる人たちを「地方」と呼び、舞い踊る人を「立方」と呼ぶ。八尾のおわら行事では、踊り手を「立方」とは呼ばないが、踊りのための演奏者は唄や囃子を歌う人も含めて「地方」と呼んでいる。おわらは、踊り手と地方が一体となっておこなわれる行事であるが、この報告では、地方を受け持っている人たちが、どのようにその役割と関わっているかについて、地方を始めたきっかけや地方の楽しさについての語りを中心に記述したい。

調査は、旧町で地方を担っている人たちを対象に聞き取りでおこなった。

2.おわらの地方について

おわらの地方は、三味線、唄、胡弓、囃子、締太鼓の5つのパートから構成される。まず、三味線（写真1）の演奏は、地方のなかで最も基本とされるパートである。三味線の演奏が、おわらの踊りと地方すべてのリズム、テンポ、メロディの基調となるのである。



写真 1.地方の三味線

唄は、三味線に次いで、おわらの中で重要な役割を果たす。歌い手は、三味線が奏でるリズムに乗せておわらのメインメロディを朗々と歌いあげる。歌詞は、たとえば次のようなものである。

例として代表的な唄を一つ挙げる。

「唄の街だよ 八尾の街は 唄で糸とる オワラ 桑も摘む」

上記の唄からも分かるように、おわらの唄には必ず「オワラ」という言葉が入るのが大きな特徴である。

最近では、胡弓は（写真2）、おわらと言えば胡弓と連想されるほど有名になってい

るが、本来は三味線の伴奏的な役割を受け持つ楽器である。胡弓の演奏は、三味線より目立つようにはおこなってはならないと言われている。実際に胡弓を演奏している人自身、「おわらの中に特になくてもかまわない」とまで言う。



写真 2.地方の胡弓

締太鼓（写真 3）はリズムを刻むための楽器であるが、深夜に町を踊って回る「夜流し」の際には担当する人がいなかったりする。



写真 3.締太鼓

囃子を歌う人を「囃子手^{はやして}」と呼ぶが、囃子手は、唄の前や合間に囃子を入れる。

例としては唄の直前に「越中で立山 加賀では白山 敦賀の富士山三国一だよ」と歌ってから「うたわれよ わしゃ 囃す」と歌ったり、唄の間奏の部分に間に合いの手を挟んだりする。なお、囃子手はある程度の技量を要するため、唄の上手な人が囃子手になることもある。

以上がおわらの地方であるが、踊り手と地方の両方をやったことがある人によれば、おわらを上手く演じるためには、踊り手は地方に合わせて踊らなくてはならず、「地方を振り回す」ような動きをしてはならないという。特に、踊り手は、三味線のリズムに

注意して踊らなければならないとのことだった。おわらは、一見、踊り手が主役で、地方は脇役のように見えるが、踊り手をリードしているのは地方なのである。ただし、その一方で、踊りの雰囲気や流れにそぐわないようなテンポの変え方を地方がしてしまうと、踊り手たちが気持ちよく踊り続けられなくなるので、地方の側も踊り手と合わせる工夫が必要であると言う。地方は、踊り手の様子をちゃんと把握しながらリードしなければならない、まさにおわらの要なのである。

3.地方への関わり方

さて、おわらで地方に携わっている人たちはどのような人たちで、どのようなきっかけで地方を始め、現在も続けているのだろうか。旧町の一つ鏡町で地方を担っている人たちの語りを中心に、地方への関わり方を記していきたい。

3-1.地方を始めたきっかけ・理由

三味線をはじめて30年という50代の男性Aさんは、三味線をはじめたきっかけは、自分がベースを弾けたことと三味線の弾き手だった姉の影響を受けたためだと語る。また、小さい頃から自宅に三味線が置いてあり、なじみがあったとも言う。地方歴10年で胡弓を担当している30代の男性Bさんは、父親が胡弓の弾き手だったので、その影響を受けて胡弓を始めたと話す。唄を担当している地方歴5年の20代男性のCさんは旧町出身ではないが、父親が唄い手としておわらに参加していたことに影響を受けたという。また胡弓を始めて38年になる50代の男性Dさんは、兄から胡弓をやってみてはどうかという勧めを受けたことがきっかけとなって胡弓を始めたと語る。これらの事例から、地方を始める際には家族の影響があることがわかる。ただし、家族と同じパートをそのまま受け持つという人は少なく、むしろ、自分のやりたいパートを選択する例の方が多い。

また、唄の地方を27年やっている50代の男性Eさんは、自分の子どものクラブ活動を手伝っている時に、同じ活動に参加していた地方をやっている先輩から誘われたことが地方を始めた直接のきっかけだと語る。同じように地方歴4年で唄を担当している20代男性のFさんも、Eさんからの誘いがきっかけとなって地方を始めている。また、地方歴4年で締太鼓を担当している30代男性のGさんは、鏡町の他の地方の人から誘われたから地方を始めたと語る。

以上から、地方をはじめたきっかけは、すでに地方をやっていた家族や周囲の人たちの影響や勧誘であったことが分かる。ただし、どのパートをやるかは本人の選択によることが多い。

3-2.地方を続けている理由

同じく聞き取りをおこなった人になぜ今まで地方をやり続けているのかを聞いてみ

た。また地方をやっている人は地方を続けていくうえで何を思いながら続けているのか、そしてそのモチベーションとなるものはなんであるのかを尋ねた。

前出の地方歴 30 年の A さんはおわらが好きで楽しいからというのが一番の理由だと語る。それ以外にも自分が八尾の人間であり、八尾が好きだから、八尾の象徴とも言えるおわらを続けていると話してくれた。

同様に前出の地方歴 27 年の E さんはおわらが大好きであり、おわらに対して常に向上心をもって取り組めるからと語る。さらに自分自身のことだけでなく、後継者の育成なども自己活性に良いので地方を続けている。それとおわらというのは報酬などの一切ないボランティア活動でもあるので、そのような面から学ぶことも多いので地方を続けていると話す。

地方歴 4 年の F さんは E さんと同様におわらが好きであり、唄を歌うことが好きだから続けていると話す。おわらが好きというのはもちろん地方を続ける原動力となっているが、それに加えて年配の唄の上手い人たちから気にかけてもらっているというのも地方を続けていく力になっているようだ。年配の人たちは若い人たちにおわらを残していってもらうために様々な期待をかけているからそれらの期待に答えていきたいと語る。それ以外にも難しい唄をいかに味がある唄として歌えるか、という考えを持ち続けていることもおわらを続けている理由だと話す。

前出の地方歴 38 年の D さんは、地方として目指す目標があり、それを達成するために地方を続けていると語ってくれた。

地方歴 5 年の C さんが地方を続けている一番の理由はおわらが楽しいからだと言う。楽しいと感じる中には唄の歌詞を上手く自分なりに表現することの工夫や、それによって聴く人に対して曲のイメージを呼び起こさせる楽しさということが含まれているようだ。また自分らしさ、自分しか歌えないものへといった追求、高い技術を目指す楽しさもあると語る。さらに、続けている上で大きな原動力になっているのは 2006（平成 18）年のおわらの 3 日目の夜流しの時に感じた凄まじい高揚感をもう一度体験したいからとも語る。

3-3.地方をおこなう意義や目的

ここでは地方をやっている人に地方をやる意義や目的について、上記の質問で得た答えやそれ以外の質問から得た答えをもとにまとめていく。

まず地方の人々の語りをまとめていってわかったことだが、地方をやることで自己活性の喜びを感じることができる人が多いようである。これは、彼らの語りに含まれていた、「自分で定めた演奏の目標を達成する」、「年配の上手な地方の人たちに褒められ、認められる」、「おわらを演奏する上で自分なりの表現を発見し工夫する楽しさ」、「厳しい練習や聴衆に聴かれていることに対するプレッシャーを克服する喜びなどを感じる」、といった語りから推察できる。上記のことを感じたりおこなったりすることで自分自信

を高め、自己を活性することができているようである。この自己活性の喜びを感じることを目的や意義としておわらをやっている人が多く見受けられた。

それ以外の理由として、演奏の楽しさと陶酔を味わうことを目的にしている人も見られた。

前出の胡弓奏者で地方歴 38 年の D さんは今までおわらに参加してきた中で、2 回だけ夜流しの時に完全に「無」の状態でも演奏することができたと言語。それはどういう状態かという、自分の頭では歩くことだけを意識しているのに、体は自動的に胡弓を弾いているような状態だったそうである。そして D さんにとってはその「無」の状態になるのが演奏している時において最高の状態なのだそうだ。

前出の地方歴 5 年の唄担当の C さんも、地方を続けている上で一番の原動力になっているのが 2006（平成 18）年の 3 日目の夜流しの時に「無」状態になって感じた凄まじい高揚感をもう一度体験したいからだと言語。それはどういったものかという長時間歩き、歌い続けたことにより体は歩くことも歌う事も限界なのに、ほぼ無意識に近い状態で歌を歌うことができた。そのような「無」の境地にもう一度辿り着きたいからおわら続けていると話す。

これら 2 人の語りから得た答えにあるように、おわらを演奏している時には一種の極限状態に達することがあるようで、地方にとってはその境地に到達することにより得られるカタルシスが何にも代え難い素晴らしいもののようなのである。

それ以外にも地方歴 30 年の A さんからは、おわら本番の時に全員の音がぴつたりと合う瞬間がとても気持ちのいいものであり、その感動を得るといことがおわらの醍醐味であるといった語りも聞いた。

おわらを続けていく上でこれらの演奏による一体感や陶酔感を味わうということが重要なものであることがわかった。

3-4.最近の地方にとっての問題

ここ 10 年から 20 年間で観光客が激増したことにより、地方は町流しの時に演奏に集中するのが大変困難になってきている。特に夜流しの時にカメラのフラッシュを焚かれるのはとても困るという話をよく聞いた。先述の聞き取りで聞くことのできた、地方の最も素晴らしい状態である「無」の状態になるには莫大な集中力が必要なため、観光客による迷惑な行動に悩まされている現在の状態は地方の人々にとってはあまりよい状態とは言えないようである。

おわらというのは本来旧町の人々が自分たちのためにおこなっているものであり、観光客に見せるためのものではない。観光客と地方の人々の考えの差を今後どう埋めていくかというのがこれからもおわらを存続させて行く上で重要な点になるだろう。

3-5.地方の伝承の変化

ここでは地方の伝承の変化について現在地方をやっている人々から聞き取ったことをまとめて書いていきたい。地方の指導や教育はここ 10 数年の間に変化してきているそうだがそれがどのようなものであるか記述していく。

胡弓奏者の 50 代男性 H さんの語りによると、昔は子どもたちに早いうちから楽器を教えていたそうである。また現在と違って必ず師匠がいて教えていた。今は師匠が面倒を見るということがなくなり、全体の練習会などでまとめて教えているから一人一人の個性がなくなってきたと語っていた。また 20 年から 30 年前くらいの鏡町は同じ旧町の一つである西新町にしんまちと交流を持ち、合同の練習などをおこなっていた。当時の西新町の地方はそんなに上手というわけではなかったがやる気がとてもあり、熱心に練習に取り組んでいた。そのため上達も早く、鏡町の人たちも追いつかれないように熱心に練習するようになった。このように片方が追いかけ、もう片方が追いつかれないようにするという相乗効果によりお互いが上達していった。しかし現在では残念ながらそのような交流は廃れてしまった。

それ以外にも H さんだけでなく年長の地方の人がよく口にしてきたことだが、地方の全ての基本は三味線であり、20 年から 30 年前までは三味線を一定量練習してからそれぞれのやりたいパートをやるようになっていたのだそう。それなのに最近では必ずしも三味線を習わずに胡弓や歌を始める人が多く、また練習会などでも一人ずつではなくまとめて指導するため厳しい教え方が見られなくなってきた。

また H さんの胡弓奏者という観点から見ると、昔の胡弓弾きには個性が見られたが、今となっては顔を見なければ誰が演奏しているのかわからなくなってしまっていると話してくれた。もちろんおわらというのは日本の芸能らしく和を乱すような飛び抜けた個性はいるが、その中でも少しの個性がないと面白くない、とも語っていた。

これらのことから現在では地方の指導というのはだいぶ緩やかなものになってきているようである。今回聞き取り調査をおこなった地方の人たちに聞いた時も、今は自分たちが指導されていたころと比べるとだいぶ甘くなったと認識している人がほとんどだった。

4.まとめと考察

これまでの聞き取りの結果をまとめてみると、地方をやっている人々はそれが無償のボランティアであっても、自ら進んでこれに取り組んでいるということがわかる。無償の地方に取り組んで継続している理由としては楽しいからといった理由や自己を高めたり、自分の目指す目標を達成したりするためといった理由が多い。

これらから言えることは、おわらの地方はただの祭の芸能なのではなく、たえず向上を目指して努力する自己実現の機会を与えてくれるものであり、また、日常を離れて独特の楽しさに触れることができる技芸だということである。

地方をやっている人たちはおわらをやることを職業にしているわけではない。しかし、

だからといっておわらはただの趣味ということでも決してない。自分の職業でもないにも関わらず地方の人々はプロフェッショナル精神というものを持っており、おわらを大変誇りに思っていることが調査を通して知ることができた。地方は一人一人が確固たる自己の目標を持っており、毎年たった3日間しかないおわらに向けて自分なりの努力を怠らない。地方の担い手が少ないから仕方なくやっているという人は、調査したかぎりでは一人もいなかった。地方を担っている人々は進んで演奏や練習に取り組んでいる。地方になったばかりの若手から何十年と地方をやっている達人の域に達した人まで、地方に対する認識には根本的な違いはない。地方の人々には特別な義務感や使命感があるわけではなく、彼等は自己活性や自己の目標の達成、自分なりの楽しさの追求のためにおわらに関わり、地方の役割を果たしている。

おわらの地方に限らず地域の伝統芸能は本来、日常の仕事の達成感などとは別の「生き甲斐」を与える力と役割を持っているのではないだろうか。

5.謝辞

突然の訪問にも関わらず快く調査に応じていただいた鏡町の地方の皆さまと住民の皆さまには、心より御礼申し上げます。特に、おわらの直前から当日という大変忙しい時期にも関わらず見学を許可していただいた上に聞き取り調査まで快く応じていただいた鏡町役員の皆さんには本当にお世話になりました。重ねて御礼申し上げます。

鏡町の地方の皆様には調査に行く度に暖かく迎えていただき本当にありがとうございました。おわら当日では一番近くで見学させていただいたこと、たいへん感謝しております。

鏡町の多くの方のご協力を得たおかげで調査を進めることができました。本当にありがとうございました。

4. 「おわら」が創る新たな人間関係

尾堂 綾子

1.はじめに

9月初めに催される「おわら風の盆」には全国からたくさんのお客者がやってくるが、祭りを主催する八尾旧町民にとっては1年のなかで大切な行事である。祭りの間、旧町を構成する10の町と旧町民が移り住んだJR 越中八尾駅前の福島地区が、それぞれの踊りを披露する。

風の盆は八尾旧町を中心とする地域住民の祭りである。しかしその地域住民の祭りに、地域の外の人たちや八尾旧町に転入してきた人々も風の盆に参加している。こういった人たちが多く集まっているのが、「おわら酔芙蓉の会」というおわら芸能の練習会である。

地域の祭りである風の盆に、地域外の人たちや転入者たちが加わることに對してこの「おわら酔芙蓉の会」は大きな役割を果たしている。この報告では、この練習会が具体的にどのような集まりで、会の参加者の間でどのような交流があるのか、また、この練習会と八尾旧町の住民とはどのような関係なのかについて、練習の様子や参加者からの聞き取りをもとに記述していきたい。

なお、この報告では、「おわら風の盆」という祭りを「風の盆」と記し、「おわら風の盆」での踊り、演奏、唄などの芸能としてのおわらを「おわら」と記している。

2. 「おわら酔芙蓉の会」

まず、「おわら酔芙蓉の会」がどのような会なのかについて見てみよう。

2-1. 「おわら酔芙蓉の会」の概略

「おわら酔芙蓉の会」は、八尾町上新町にある、おわらを練習したい個人が集まってつくっている会である。会では、唄、踊り、三味線、胡弓を練習する。会の中心になっているのは上新町で喫茶店とサロンを営むAさん夫婦で、Aさん夫婦と八尾の人々数名が1993（平成5）年5月、おわらの演奏方法や踊り方、歌い方を学ぶことを目的として会をつくった。会の名前について「酔芙蓉」とは、朝から夕方にかけて白から赤に花の色が変化する花だが（写真）、おわらを題材とした小説「風の盆恋歌」に登場したのがきっかけとなって、現在ではおわらや八尾を象徴する花となっている。



写真 八尾旧町の民家の軒先の酔芙蓉

「おわら酔芙蓉の会」は、もともとは、八尾の住民のなかでおわらを習いたい人たちが集まって合同で練習する場であった。そのうち、おわらの踊りや地方を教わることができる場として周囲に知られるようになり、練習に参加する人数が増えて、現在のような地域外の人たちも集まる練習会となった。

会では、毎月第2、第4月曜日の午後8時から、上新町にある練習場に集まっておわらの合同練習をしている。また、風の盆の近くになると、上新町付近にある城ヶ山に登って、祭りの当日の観光客が少なくなった深夜に町を踊り歩く「夜流し」の練習をする。なお、この会では、9月2日の午前1時から「夜流し」をする。

現在の会には、八尾の旧町に住んでいる人々に加えて、八尾町以外のさまざまな地域から参加者が集まり、合計で20人ほどが参加している。この会は、おわらを学びたい有志の人々が協力しておわらをお互いに教えあう会なので、授業料を支払うことなどはない。また、旧町に住むおわらのベテランを指導者として会に招いていて、旧町の「富山県民謡越中八尾おわら保存会」が伝えるおわらの伝統的なスタイルを学んでいる。

「おわら酔芙蓉の会」は表1のように、おわらの練習や風の盆の夜流し以外にも、1年の間にさまざまな行事をおこなっている。表1から分かるように、この会は、たんにおわらの練習をする会ではなく、参加者どうしの親睦をはかる会でもある。

表 1. 「おわら酔芙蓉の会」の年間行事

	行事内容
1月	新年会
4月	花見
7月	合宿（現在は行われていない）
8,9月	おわら本番
10月	月見
12月	忘年会
	慰労会

2-2. 「おわら酔芙蓉の会」の参加者

すでに述べたように「おわら酔芙蓉の会」には、八尾旧町の住民だけでなく、さまざまな地域の人たちが参加している。八尾地域以外の富山市内に住む人たち、あるいは富山県外から参加している人もいる。

ここで「おわら酔芙蓉の会」の参加者を、出身や居住地で、「旧町の住民」、「八尾旧町を含む八尾地域に転入してきた人」、「旧町と福島以外の地域から参加している人」の3つに分ける。「旧町の住民」とは、旧町にずっと住み続けている人のことを指し、「八尾旧町を含む八尾地域に転入してきた人」とは、八尾出身者との結婚で八尾に移り住んだ人や仕事、就職などの関係で転入してきた人を指す。また、「旧町と福島以外の地域から参加している人」とは、風の盆に町として参加をしていない八尾地域に住んでいる人や、八尾以外の富山市から来ている人、富山県外から来ている人を指す。

表 2 は聞き取りからわかった、この3つの参加者のタイプ別の人数である。ただし、会に参加している人たち全員から聞き取ることはできなかったので、表 2 は聞き取った参加者の内訳である。

表 2. 「おわら酔芙蓉の会」の参加者

参加者の種類	旧町の住民	八尾旧町を含む八尾地域に転入してきた人	旧町と福島以外の地域から参加している人（八尾以外の富山市、他県など）
人数	9人	4人	6人

また、表に載せた参加者は、「おわら酔芙蓉の会」に定期的に参加している人たちだが、「おわら酔芙蓉の会」にはそれ以外に、風の盆当日にだけ会の夜流しの踊りに参加している女性たちがいる。この女性たちを2つのタイプに分けて、「おわら酔芙蓉の会」の参加者の例外として表 3 に紹介しておく。

表 3.おわら酔芙蓉の会の当日だけの参加者

1	以前八尾に住んでいて、現在東京に住んでいる女性数名が、東京でおわらの踊りを教えている。そこで踊りを習っている女性たち 10 名ほど
2	参加者の妻や娘など

風の盆では、町ごとの町流しの踊り手は、「25 歳以下で未婚の者」だという暗黙のルールのようなものがある。女性たちで、とくに既婚している人々は旧町に住み続けていてもそのルールによって町ごとの町流しに踊り手として加わることは難しい。そのため、町流しの雰囲気味わうためにも会に参加していると思われる。

「おわら酔芙蓉の会」の参加者はさまざまな場所から通ってきている。それでは、どのようにして会の存在を知ることになり、会に入ることになったのか、そのきっかけについて見ていこう。参加者を、前述のように「旧町の住民」、「八尾旧町を含む八尾地域に転入してきた人」、「旧町と福島以外の地域から参加している人」に分けて、それぞれのカテゴリーの人たちに、会に入ったきっかけについて尋ねた際の回答を記述していく。

2-3-1.旧町に住み続けている人の例

旧町にずっと住み続けていて、会では唄の練習をしている B さん（60 代男性）に話を聞いた。B さんは、「若いころは、旧町の青年団に入っていておわらにも取り組んでいたが、仕事のためにおわらから遠ざかっていた」と言う。60 歳になって、「還暦の節目だと思って、おわらを習おうと思った」そうだが、旧町のおわら支部に入るのは難しく、指導してくれる人も見つけにくかったと語る。そんなときに、B さんは「おわら酔芙蓉の会」に旧町に住んでいる唄の名手がいることを知った。そして、その人に教わりたくて、会に参加したと言う。

B さんの語りから、旧町に住み続けながらも、仕事やその他の理由により、おわらを一時離れていた人たちが、おわらを練習する場を求めて会に入るケースがあることが分かる。

2-3-2.八尾に転入してきた人の例

八尾町外から 31 年前に八尾に転入してきた中年男性の C さんは、「おわら酔芙蓉の会」で三味線を練習している。C さんは、八尾に引っ越してくる前から、風の盆の際には旧町の上新町に遊びがてら、踊りに来ていたという。八尾に引っ越してきてから、ずっと三味線を習いたいと思っていたところ、「おわら酔芙蓉の会」をつくった A さんに誘われて、会ができた 1 年後に入ったと語る。

また、就職を機に八尾に移り住むようになった 20 代男性の D さん（20 代男性）に話を聞いた。D さんは会に入ったばかりであり、三味線の練習を始めたばかりである。

Dさんはもともと三味線を習いたいと思っていたが、会に知り合いがいて、会にはその人を通じて参加するようになったと言う。また、会の行事である花見に誘われたことがきっかけとなったとも言う。

上の話から、「おわら酔芙蓉の会」は、八尾旧町に移り住んできた人のなかでおわらに関心を持ち楽器を習っておわらに参加したいと思っている人たちにとって、いわば、受け皿の役割を果たしていることがわかる。また、「会に入ることによって、八尾での知り合いが増えた」と語る人もいて、「おわら酔芙蓉の会」はたんにおわらを教えるというだけでなく、転入者にとって、八尾での交流の場を提供していると言える。

2-3-3.八尾以外の地域に住んでいる人の例

富山市から来ている女性のEさんは、会で踊りの練習をしている。Eさんは風の盆を毎年見に来ていて、「おわら酔芙蓉の会」を立ち上げたAさん（女性）とはもともと書道の友人だった。「夫がおわらの唄を始める際に、つきそいとして一緒に会に来たのがきっかけ」だと話していた。

他にも、会で胡弓を練習しているFさん（女性）は、富山市の隣の高岡市新湊しんみなとから来ている。2007（平成19）年に、住んでいる場所の近くにある喫茶店に入り、そのマスターと意気投合して風の盆を見に行くことになり、「おわらの凄さを見て、あこがれて習いたいな」と思ったそうだ。「それを喫茶店のマスターに話したら、Aさん（夫婦）のことを人づてに知っていて紹介してくれ、それで入った」と話してくれた。

2人の話から、おわらに魅せられ、習いたいという理由で、富山市内や遠方から通っている参加者がいることが分かる。また、夫婦で練習会に参加する人たちや、家族で参加している人たちが数組いるので、家族に共通の趣味ができて、家族関係も良好になるのではないかと思われる。

また、全員の答えを聞いていると、「おわら酔芙蓉の会」を立ち上げたAさん夫婦を仲介として、会の存在を知り、会に入っていったことが分かる。これは、Aさん夫婦が、喫茶店とサロンという町の人々や観光客の人々が交流をする場を営んでいるということで、そこに来る人々に会の存在を広めることができやすいからではないかと考えられる。

参加者の分類、語りを見てきて、「おわら酔芙蓉の会」は、さまざまな理由で旧町の支部には参加できない人々や、風の盆に参加したくてもできない人々を受け入れる、受け皿としての役割があることが分かる。

2-4.参加者のおわらへの熱意

「おわら酔芙蓉の会」の人々の話を聞いていると、おわらが大好きなことはもちろん伝わってくるが、それだけでなく、おわらに対して真剣なことが分かる。

会で三味線を練習しているCさんは、「楽器は最低10年はやらないとダメだ。とく

に八尾出身でない者は、習得が難しい。毎日練習せんなん（しないといけない）」とおわらの難しさを語っていた。Cさん自身も八尾出身の人ではないため、八尾出身の人に追いつけるよう毎日努力していることが伝わってきた。三味線を練習している女性のGさんも、「10年間三味線を会で練習しているが、なかなかうまくならない」と練習に励んでいた。また、胡弓を練習している女性のFさんは、「おわらの音の良さに惹かれた。4、50分かけて会に通っている。なんとか時間の合間をぬって会に参加している」と語る。

これらの語りから分かるように、参加者はおわらが大好きな人たちであり、しかも技術的にも向上したいと思っていることが分かる。生まれた時から八尾に住んでいた人ではなく、自分からおわらに興味を持ち習いたいと思ったからこそ、練習に熱が入るのだろう。

3. 「おわら酔芙蓉の会」の練習会と祭りを通じた参加者の交流

次に、「おわら酔芙蓉の会」の練習会と祭り当日の参加者間の交流について記述していく。ここでは、練習会を「練習」、「休憩と反省会」の2つに分けて見て、そののちに風の盆当日の記述にうつる。

3-1. 練習会の概要

「おわら酔芙蓉の会」の練習は、毎月第2第4月曜日の午後8時から始まる。また、参加費は無料である。普段の練習会は上新町にある練習場で行い、おわらが近くなると、八尾にある城ヶ山に登り夜流しの練習をする。練習会は、風の盆が終わったあとも行われる。三味線、胡弓、唄、踊りの4種の参加者が練習場に集まり、おわらの節を合同で何度も演奏し、練習する。練習の流れは、おおよそ図1に示したとおりである。

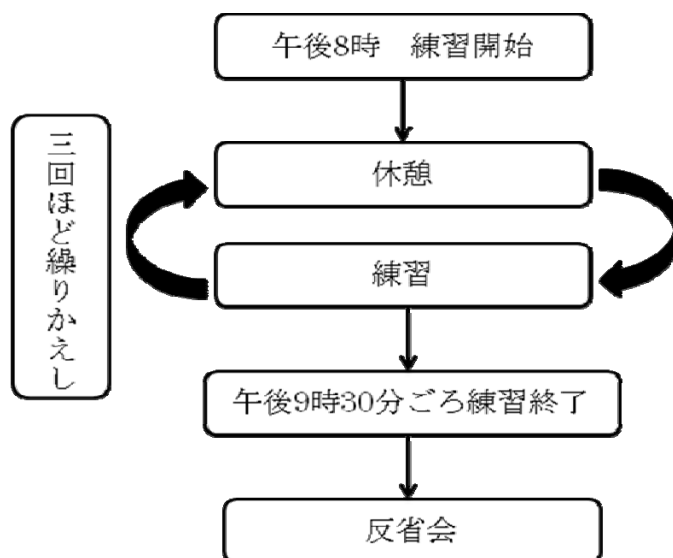


図 練習会の流れ

「おわら酔芙蓉の会」は午後 8 時から練習開始となつてはいるが、午後 8 時前に会に来ている人もいれば、30 分経ってから会に来る人もいて、厳密な集合時間は決まっていない。また、会の時間の間ずっと練習をするのではなく、20 分くらいの練習を 1 回したら、10 分ほど休憩、ということをして会の時間の間に 3、4 回繰り返す。練習はだいたい午後 9 時 30 分ごろに終了するが、そのあとには会の参加者が「反省会」と呼んでいる時間をみんなで過ごす。会から帰る時間も人によってバラバラであり、とくに決まっていない。

3-2.練習会から分かる参加者の交流

練習会を通した参加者の交流の様子について、以下に記述していく。

3-2-1.練習を通した参加者の交流

練習をしている間は、真剣におわらの演奏や唄、踊りにそれぞれ取り組んでいる。

普段は全員そろっておわらの演奏練習をするのだが、11 月 3 日の練習日には、会に入って間もない D さんが来ていたため、C さんがマンツーマンで指導をしていた。普段での練習会では言わないような、基本的なこと、たとえば調弦の仕方や三味線の糸の張り方などを丁寧に教えていた。

また練習会では、全員ではないが、参加者の間で、「パパ」、「お父さん」、「マスター」「〇〇ちゃん」などのあだ名で呼び合っている。

練習において、参加者は親密に交流していると言える。

3-2-2.休憩や反省会での参加者の交流

さらに、参加者間の交流について見てみよう。

練習の合間には何回か休憩が入る。休憩の間、参加者はおもに楽器のチューニングをしたり、参加者が持ち寄ったお菓子を食べたり、お茶を軽く飲んだり、参加者同士で会話をしたりする。練習している間は、参加者同士はあまり言葉をかわせないで、このような休憩の時間に練習のときに見つけた相手への注意点や、おわらとは関係のない思いつき話、自分の近況などを語り合ったりする。

すべての練習が終了すると、その後は参加者が「反省会」と呼んでいる時間が始まる。楽器を片付けると、練習部屋に置いてある長机にみんな集まり、お菓子を食べたりお茶を飲んだりしながら、話をしている。おわらについての話以外に、世間話や自分の住んでいる地域の情報交換、冗談を言い合うなど、和気あいあいとした時間である。

話題を具体的に載せると、「〇〇さんはいま、病院に入院しているようだ・・・」という自分の身近な人の近況報告だったり、「次の慰労会の場所で心当たりがある人はいるかね」という会の行事の話だったりする。あるいは、「このお菓子どこの」という反省会で食べるお菓子への感想だったり、「今、五箇山は紅葉どんな感じかね」とう八尾町外から来ている人の地域の情報交換をしたりといろいろと話題はある。このように、おわらとは直接関係のない話もたくさんしており、雰囲気は和やかである。

このように、「おわら酔芙蓉の会」はおわらという芸能の技術を教えあう練習会という側面だけでなく、参加者の交流と親睦の場であることが分かる。

3-3.おわら本番の概要

おわら風の盆当日では、「おわら酔芙蓉の会」は「夜流し」をする。旧町支部や福島の人々は町ごとに9月1日から「町流し」をするが、会では2日の午前1時からが本番である。午前1時から午前3時ごろまで、天候が悪くならなければ、気のすむまで町を流していく。

旧町や福島の人たちが町ごとに浴衣を揃えているのに対して、会の参加者たちには揃いの浴衣はなく、みな思い思いの浴衣や着物を着て夜流しの出発地点に集まってくる。出発地点は毎年決まっていて、上新町にある祐教寺という寺の前である。また、風の盆当日には、すでに触れた、東京で八尾出身の女性におわらの踊りを習っている女性たちや会の参加者の妻や娘なども参加する。

3-3-1.風の盆を通じた参加者の交流

2008（平成20）年度の2日、3日は雨が降らなかったために夜流しを行うことができた。祐教寺にはすでに当日参加の女性たちが列をなして待っていた。「今回もよろしくお願いします」と当日参加の女性たちは会の中心人物であるAさんに挨拶していた。

当日の参加者のなかには、夜流しが終わると「また明日ね」とハイタッチをするなど

して、とても仲が良さそうに帰って行く人もいた。

最終日である4日の午前1時から、雨が降ってしまい夜流しは中止となってしまった。しかし、近所や遠方から来ているお客さんが会のおこなう夜流しを見に来ていたため、練習場でおわらを披露することになった。遠方から来るお客さんの中には、わざわざロサンゼルスから来ている人たちまでいた。お客さんはみなさん、さまざまな縁があってこの会の存在を知って見に来ていた方たちで、初めて会った人同士なのに仲良く話をしていました。

おわらの披露のあとは、お客さんと参加者が入り混じり、輪になっておわらを踊る輪踊りが始まった。「踊り分からなくてもいいから」と会の参加者は言って、輪の中にお客さんをどんどん入れていった。お客さんは困惑しながらも楽しそうにおわらを踊っていた。普段は三味線を弾いているCさんも輪の中に入って楽しそうに踊っていた。

輪踊りが終わると、会の参加者たちが用意していたお酒とごちそうが振る舞われた。お客さんや参加者が入り混じり、自分の土地の会話や、どのようにしてこの会を知ったのか、など話をして盛り上がっていた。初めて会った人同士なのに、漫才のようなやりとりもしていて仲が良さそうだった。

これらのことから分かるように、「おわら酔芙蓉の会」は、参加者同士でも親密な関係を築いているが、おわらの時期に来る人たちも温かく受け入れ、親密な関係を築いている。「おわら酔芙蓉の会」を中心に新たな人間関係が着実に広がっていることが分かる。

4.旧町支部の人々との交流

八尾の住民で「おわら酔芙蓉の会」に入っている人たちは、会でおわらの練習を積み重ねおわら本祭に参加するようになると、旧町支部の人たちの口利きによって、支部に所属することができる。現時点で、会のメンバーで支部に加入した人は13人である。町ごとの2008（平成20）年までの加入状況は表4のとおりである。

表4.支部に所属した会のメンバー

町	人数
福島	3人
天満町	1人
下新町	1人
上新町	4人
西町	2人
諏訪町	2人

「おわら酔芙蓉の会」では、せっかくおわらを習ったのなら、支部に入ることによっ

て町に貢献するべきだ、という意見がみられる。「町に貢献」とは、おわらを趣味で終わらせるのではなく、支部に所属することで町の一員となり、おわらの行事やその他の行事に参加して、町を活性化する一人になるということである。

また、支部に入った参加者Cさんは、「支部での練習会は楽しい。支部に入ると、風の盆以外の行事にも参加できるから町に溶け込める」ということを言っており、「おわら酔芙蓉の会」では、会の人々を町に貢献させることと同時に、旧町の人々と会の人々を繋ぐ役割を持っていることが分かる。

4-1.旧町支部の人々の考え

「おわら酔芙蓉の会」ができた当初は、八尾の地元の祭りであるおわらに外部の団体が入ってくるという不安があったために、旧町の人たちからはやや反発があったという。しかし、現在では、八尾旧町で会の存在はかなり認知されている。「おわら酔芙蓉の会はおわら愛好家の集まりだし、まあいいねか（まあ会があってもいいじゃないか）」といった、会の存在や活動を認める声が多い。昔と比べて地元の旧町に受け入れられるようになったのは、「おわら酔芙蓉の会」が旧町の人たちの不安を理解して活動し、また旧町の人たちも会の参加者が真剣におわらに取り組んでいることを認めたという結果であろう。

会では、旧町支部に所属しているおわらのベテランを呼んで指導をしてもらっている。これは、おわらの技術向上のためだけでなく、旧町支部が伝えるおわらの伝統的なスタイルを会でも継承するためである。

ただし、「団体自体は認めるが、おわら当日に流すのはちょっと。他のよく分からない（外部の）団体も流してくるかもしれないし・・・」と「おわら酔芙蓉の会」が当日に参加しているのを見て、おわらの形式を無視した団体が出てくることを心配する声も少なからずある。これは、観光客のなかに地元住民を装って勝手におわらを踊ったりする人たちのグループがあったりすることからくる不安である。しかし、「おわら酔芙蓉の会」がおわらの形式と伝統を守る姿勢をとっていることが、より住民たちに知られるようになれば、そのような不安もなくなっていくと思われる。

5.まとめと考察

調査の結果、「おわら酔芙蓉の会」は、大きく3つの役割を持っていることがわかる。

1つ目は、支部に入れたい人やおわらに参加できない人を受け入れ、おわらをやりたいという希望を受け止める受け皿の役割である。おわらは八尾の町の行事であるために、八尾外の地域に住んでいる人々は支部に所属することはできない。そのため、八尾外の人々も受け入れてくれる「おわら酔芙蓉の会」に入ることによって、地域外のひとたちもおわらを習うことができる。また、八尾ではおわらを知ることを小さい頃から始める場合が多いため、ある程度歳を重ねた人に基礎からおわらを教えてくれる人は少なく、

年配の初心者が適切な指導者を見つけることは難しい。しかし、「おわら酔芙蓉の会」に入ることによって、おわらを基礎から教えてもらうことができる。

2つ目は、会から支部に人を送り出し、町の行事に参加させることによって、町と会の人とをつなぐネットワークの役割である。会には、外部から八尾に転入してきた人たちが何人かいる。八尾に転入してきた人々は八尾では「ヨソモノ」と呼ばれる。差別的な言葉ではけっしてないが、八尾に限らず、地方の小都市では、外部から入ってきた人が地元の人として認知されるには時間がかかる。しかし、「おわら酔芙蓉の会」では八尾に転入してきた人々が支部に所属することによって、それらの人々と町の人々との交流の輪を広げ、八尾に溶け込みやすくすることに貢献している。

3つ目は、会の人々の連帯感を深める役割である。会の参加者はおわら愛好家の集まりであり、おわらの練習に、旧町の支部の人々に負けなくらい熱心で真剣に取り組んでいる。その一方で、会では、おわらの練習以外の行事があったり、反省会での参加者同士の和やかな交流があったり、参加者同士の連帯感を深める機会が多くある。参加者同士は、おわらという芸能を通して繋がり、日常的な連帯感を深めているのである。さらに今後は、会がおわらに真剣に取り組んでいることを通して、伝統行事としてのおわらを大事に思っている旧町支部の人々も、会と会に参加している人たちを今よりもさらに受け入れやすくなっていくだろうと考えられる。そうなれば、会の範囲を超えて、おわらを通じた人間関係がつくられていくことになる。

このように、「おわら酔芙蓉の会」は、芸能の練習会であるばかりでなく、新しい人間関係の創出の機能を担っている場なのである。

第4章 観光化と地域振興

この章では、おわら風の盆の観光化や観光化にタイアップした八尾旧町の地域振興について、住民、観光客、商店を営む人々の語りをもとにして、さまざまな視点から報告する。

安田 莉奈
後藤 あかね
島田 一
南 卓宏
伊藤 岳大

1.八尾の観光化と地域振興

竹内 潔

1-1.観光客数の増加と観光化の始まり

八尾町のおわら風の盆については、すでに第3章で詳しく述べられているが、毎年9月1日から3日の間に、八尾旧町と福島地区^{ふくじま}で開かれる行事である。

1946（昭和21）年には、9月1日に4万人、2日に3万人の計7万人がおわら風の盆に訪れたというが、アジア・太平洋戦争の敗戦直後であるにもかかわらず、富山県下だけではなく、東京や大阪方面からも観光客が押し寄せたという⁵。1950（昭和25）年に、八尾に観光協会が設立されたが、当時は、3日間のおわら風の盆に15万人の観光客を誘致することが目標であったという。そのため、富山市内、城端、魚津、氷見などの富山県内各地と金沢、高山と八尾の間に観光客のための臨時列車やバスが用意されたり、旧町の各所に無料休憩所が設けられた。このように、1950年代から、八尾旧町の年中行事であるおわら風の盆を観光資源として、観光客誘致の施策や観光客の利便のための工夫が投じられるようになった。この頃からおわら風の盆の本格的な観光化が始まったといえる。

1952（昭和27）年、第3回全国民謡大会でおわら保存会が民謡舞踊部門で優勝し、翌年の第4回大会では民謡唄部門でも優勝し、おわら風の盆に全国の注目が集まることとなった。こうして、おわら風の盆に訪れる観光客はうなぎ登りに増えていくことになる。

1985（昭和60）年に出版された高橋治の小説「風の盆恋歌」がベストセラーとなったことがきっかけとなって、「おわら風の盆」はさらに全国的に知られるようになった。この小説は、おわら風の盆の時期の八尾を舞台として描かれた恋愛小説で、おわら風の盆について的情绪あふれる描写が当時の多くの読者を魅了したという。さらに、この小説がテレビドラマ化され、1989（平成元）年には歌手の石川さゆりが同名の歌謡曲を歌って、さらに八尾とおわら風の盆が広く知られるようになった。

⁵昭和21年9月2日付 北日本新聞による

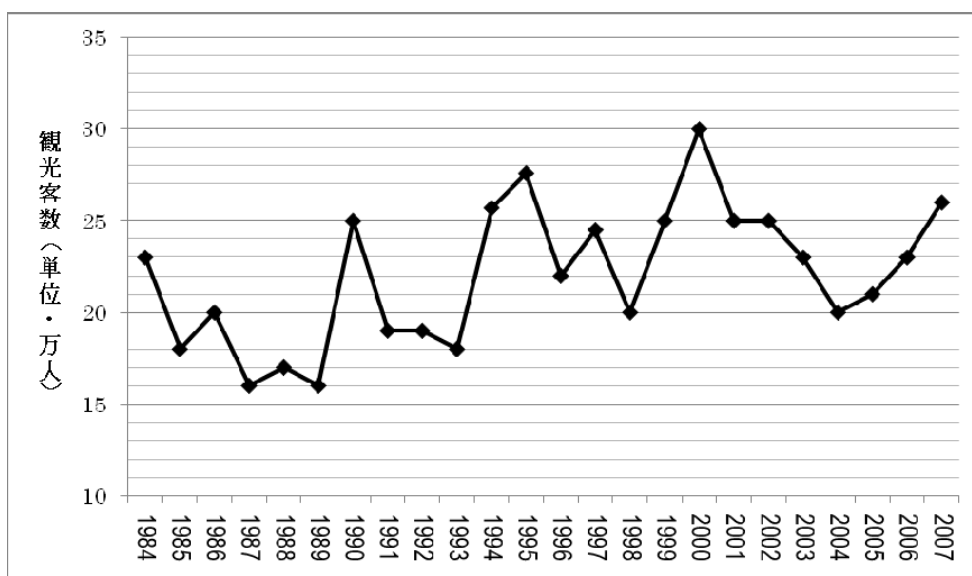


図 3.おわら風の盆の観光客数（1984-2007）

図 1 に 1984 年から 2007 年までのおわら風の盆の観光客数を示したが、小説、ドラマ、歌謡曲などによって知名度があがったために、急激に観光客数が増加したとは言えない。むしろ、小説などで有名になる前から、観光協会の努力もあって、現在と変わらない規模の観光客がおわら風の盆にやってくる。ただし、全国的に知られるようになり、富山県内あるいは北陸の観光地の一つにおわら風の盆を組み込んだパッケージツアーの普及もあって、1994 年以降は観光客数が 20 万人を下回ることはなくなったと言える。なお、図 1 のとおり、観光客数の年較差は大きい。これは、おわら風の盆は、平日でも開催されるため、また、雨天の場合は順延されずに中止されるからである。開催期間中に休日が含まれるかどうかや天候によって、観光客数は大きく左右されるのである。

2008 年のおわら風の盆の観光客数は、平日開催に加えて降雨の影響があって約 20 万人だったが⁶、旧町の人口はこの数年 3 千人程度で、しかも旧町の面積は約 1 平方キロであるので、開催期間の 3 日間に少なくとも旧町の人口の 60 倍以上の観光客が丘陵の上に立つ小さな町に殺到していることになる。

1-2.観光化の進行－「見てもらう」から「見せる」へ

観光客の増加に伴って、地域の年中行事の一つであるおわら風の盆に「見せるイベント」の要素が加わっていく。渡辺（2008）をもとに、以下に、イベント的要素を列挙

⁶ 北日本新聞 9月4日朝刊 「おわら名残尽きず 3日間で20万人」

してみよう。

1935（昭和 10）年に聞名寺の境内でおわら風の盆の期間中に各町ごとに舞台踊り⁷を披露する「おわらの競演会」が始まり、これを見に来る観光客が年々増えていった。1961（昭和 36）年には、聞名寺の境内では観光客を収容しきれなくなったために、競演会場は聞名寺から町営グラウンド（現在の八尾小学校グラウンド）に移転された。1970年代に入ると、競演会場は「演舞場」と名前を変えて入場料を取るようになったが、競演会の時代は、住民たちによれば、自分たちのおわらを観光客に「見てもらう」という意識が強かったという。1970年代以降、町の間での競演は、観光客からの入場収入を目的とした「見せる」演舞へと代わっていったのである。

2008（平成 20）年現在では、おわら風の盆の開催中の 9 月 1 日と 2 日に八尾小学校のグラウンドに「**おわら総合演舞場**」の特設ステージが設けられて（写真）、午後 7 時から 9 時まで、おわら風の盆を開いている 11 の町ごとに舞台踊りが演じられている。2007（平成 19）年では、「演舞場」には 9100 席が設けられ、そのうち 5500 席が指定席で見やすさから A 席と B 席に分けられてる。自由席も含めてすべて有料であるが、2006（平成 18）年から、全国チェーンのコンビニエンスストアで前売り券が発売されるようになった。コンビニエンスストアでの発売を開始した 2006（平成 18）年には、発売開始 30 分で A 席の前売り券が完売となり、2007（平成 19）年には 10 分で売り切れたという。現在のおわら風の盆の収入総額の約 8 割が、この演舞場の入場料収入だという。



写真 演舞場
（渡辺佳央里撮影）

また、有料の演舞場とは別に、2001（平成 13）年には、おわら風の盆を開いている 11 町の 5 カ所に無料でおわらを鑑賞できる**特設ステージ**が設置された。設置されたのは、福島地区の八尾駅前、下新町の八幡社、東町にある観光情報や学習情報を提供する

⁷ 「舞台踊り」、「町流し」、「輪踊り」、「豊年踊り」などについては、第 3 章の「おわら」の概要を参照

マルチメディア施設「八尾ふらっと館」、上新町の越中八尾観光会館、諏訪町の諏訪社で、会場によって2日間、あるいは3日間、決められた時間におわらが上演される。

以上、渡辺（2008）の報告に拠って、おわら風の盆の観光化について記した。おわら風の盆は各町ごとに自由に「町流し」や「輪踊り」をおこなう行事であるが、観光客の誘致と増加に伴って、観光客がおわらを鑑賞しやすいようにステージが設けられ、あらかじめ決められたプログラムでおわらを演舞するという観光客向けの工夫がなされるようになり、また、入場料が観光収入の大きな部分を占めるようになった。

このように、住民の年中行事であったおわら風の盆は、現在では「見せるためのイベント」としての側面を強く持つようになってきている。このようなおわら風の盆の観光化について、本章第2節「**“おわら風の盆”の観光化**」で安田が、行政や観光協会、住民、観光客の3者の認識を比較して考察する。また、おわら風の盆は、観光による地域振興の一環を担うようになってきているが、経済的機会であると同時に年中行事でもあるおわら風の盆と住民の関係について、第4節「**“おわら風の盆”と商店を営む人々の関係**」で、南が地域の商店に焦点をあてて報告する。

1-3.観光客分散の試みと「おわら」の観光活用

約1平方キロメートルの狭い八尾旧町が人混みで埋め尽くされるほどの観光客がおわら風の盆を訪れるようになると、行事自体の遂行が難しくなるため観光客の分散が課題となってきた。その対応策として、1982（昭和57）年から、おわら風の盆の前に「**前夜祭**」がおこなわれるようになった。当初は1日2町ずつの6日間行われていたが、翌年からは1日1町内ずつ、午後8時から10時まで「輪踊り」、「舞台踊り」、「町流し」を披露するようになり、8月20日から30日までの11日間が前夜祭期間となった。ただし、町ごとに演舞の順序などを決めるためプログラムはなく、また、降雨の場合は中止となる。観光客があまりにも多い場合は、近隣の町が協力して演舞をおこなって、観光客を分散させる。

さらに、1987（昭和62）年からは、前夜祭期間中に「おわら鑑賞・踊り方教室」が、前夜祭の前の時間帯に越中八尾観光会館のホールで開催されるようになった。この「教室」では、おわらの踊りのなかでもっとも踊りやすい「豊年踊り」（旧踊り）の解説が椅子に座ったままの観光客の手振りの練習も加えておこなわれる。これは、観光客に踊りの基本を教えて、観光客たちがその後の前夜祭会場での「輪踊り」に参加できるようにする一種のサービスである。解説と練習の後は、前日の前夜祭をおこなった町による舞台踊りが披露される。この「教室」は有料で、やはり、全国チェーンのコンビニエンスストアで前売り券が発売されている。

以上のように、おわら風の盆に集中する観光客を分散させるために、11日間を費やして「前夜祭」や「おわら鑑賞・踊り方教室」が開催されるようになったが、一方で、1990年代末以降、おわらの芸能を観光資源として人口流出や近隣への大型店舗の進出

による旧町の空洞化に対する地域振興に活用しようとする動きが活発に見られるようになる（中部開発センター、2005）。

1997（平成9）年から、地元のおわらとともに県内外から伝統芸能のグループを招致して民謡を披露するイベント「越中八尾冬浪漫」が、観光客の少ない2月に越中八尾観光協会の主催で始められるようになった。近年では、地域活性化やまちづくりについてのシンポジウムがプログラムに組み込まれることもある。

翌年の1998（平成10）年からは、9月最終の土曜か10月最初の土曜に、おわらを披露する「月見のおわら」が始められた。「月見のおわら」は、もともと、風の盆が終わって一息ついたころの十五夜に、住民たちが旧町の脇の城ヶ山^{じょうがやま}で満月を見ながらひっそりとおこなっていた行事だという。この行事に目をつけた旅行代理店がおわら風の盆を再現する観光イベントとして企画し、観光協会との共催で開かれるようになった。当初は、おわら風の盆での観光客への対応に疲れた住民の間から開催に不満の声があり、旧町と井田川を挟んで反対側にある町民広場を会場として開かれていたが、現在では、上新町と諏訪町でおこなわれるようになっている。

2000（平成12）年からは、毎月第2、第4土曜日の午後1時半から2時半まで、越中八尾観光会館内のホールで、観光協会が富山県民謡越中八尾おわら保存会の協力を得て、「風の盆ステージ」というイベントを始めた。これは、おわらの歴史や踊りの解説を挟みながら、おわらの芸能を披露するイベントで、プログラムの最後は観客も加わる「輪踊り」で締めくくられる。深夜の「夜流し」を大スクリーンに映し出すなど、おわら風の盆の雰囲気をかもし出す工夫が随所になされていて、おわら風の盆を簡略化して観客に示す内容となっている。2003（平成15）年からは、風の盆ステージに合わせて、毎月第2土曜日に、商店街の活性化と地域交流を目的とした露店市の「なりひら風の市」が、上新町商工振興協同組合を中心として、上新町で開かれるようになった。本章第5節の「市を通した町の活性化」で、伊藤が地域振興の取り組みとしての「なりひら風の市」が住民や出店者にとってどのように位置づけられているかについて報告する。

以上のように、現在では、おわらを観光資源として地域活性化のために活用し、おわら風の盆への観光客の過度の集中を回避しながら、おわら風の盆以外の時期にも観光客を誘致しようとする「通年観光化」の方策がさまざまなイベントの実施というかたちで精力的に進められている。この取り組みの成果は、図2に示したようにおわら風の盆以外の時期の観光客数の増加となってあらわれ、2001（平成13）年以降は、おわら風の盆以外の時期に八尾を訪れる観光客数が、おわら風の盆の観光客数を上回るようになった。2007（平成19）年度では、おわら風の盆の期間の観光客数は約26万人で、風の盆以外の時期の観光客数は約41万人であり、おわら風の盆の観光客の約1.6倍の観光客がおわら風の盆以外の時期に訪れている。

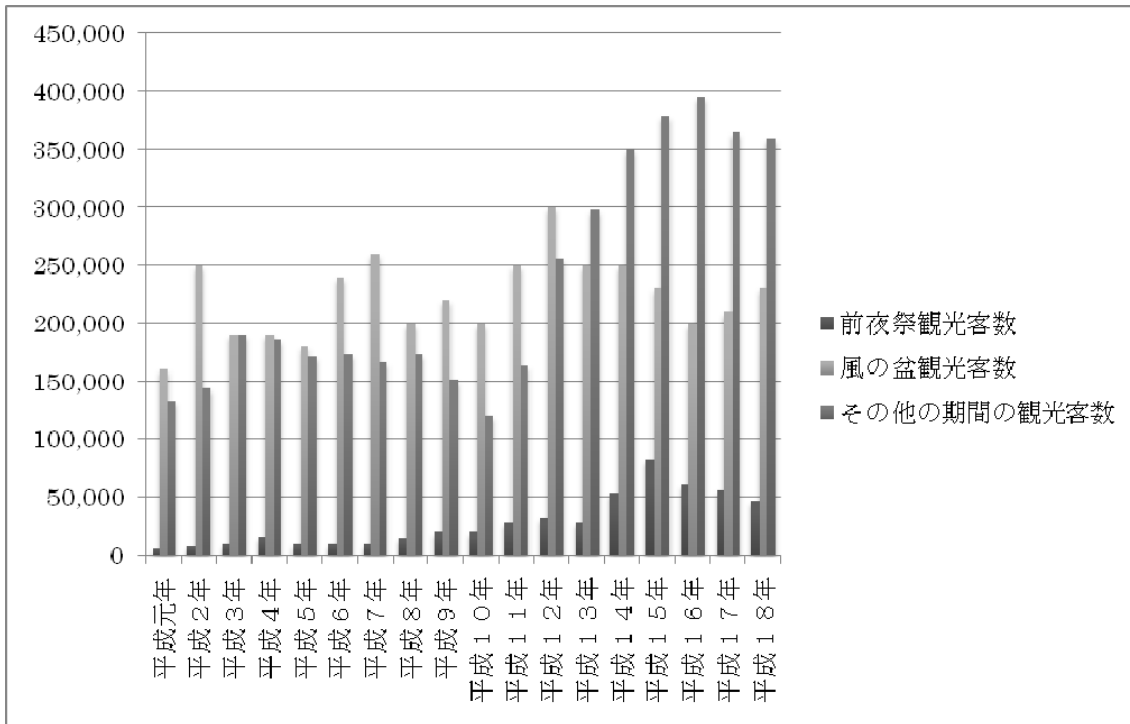


図 2.おわら風の盆と前夜祭及び他の時期の観光客数
(渡辺、2008 より)

なお、おわらとは直接には関わらないが、傾斜の大きい河岸段丘にあつて坂の多い八尾旧町の景観を利用して、1996（平成 8）年から 10 月に「坂の町アート」という芸術展が観光協会の主催で開かれている。これは、絵画、彫刻、写真、書画、陶芸などさまざまな作品を広く募って、旧町の民家や通りに作品を展示して、観光客に旧町の町並みとともに作品を鑑賞してもらうという催しである。このイベントは、2002（平成 14）年度に、総務省から「地域づくり総務大臣表彰」を授与されている。

1-4.観光振興に関わる組織

八尾旧町の「通年観光化」は、上述のように、さまざまなイベントを催している越中八尾観光協会が推進している。この協会は、1999（平成 11）年までは旧八尾町から観光振興の補助金を受けていたが、財政悪化のために補助金は打ち切られて、自主運営となった。さまざまなイベントの実施によって自主財源を確保し、2005（平成 17）年からは有限責任中間法人として法人格を取得している（中部開発センター、2005）。また、2003（平成 15）年には、観光協会が主体となって、行政やイベントを実施している他の組織との連携のための「八尾町観光イベント連絡協議会」が設立されている。観光協会は、このような組織を通じて、行政と協力しながら観光振興に取り組んでいる。

また、八尾町商工会も、商店街の活性化のために、「坂の町アート」や「なりひら風

の市」などのイベントに協力し、観光客向けに八尾特産品の店や飲食店、旅館などの紹介などをおこなっている。

行政で観光振興に関わっているのは、八尾総合行政センター（旧八尾町役場）の農林商工課と建設課である。農林商工課では、おわら風の盆や曳山祭の宣伝やイベントの補助をおこなっている。建設課は、町並みと景観の整備を行っている。観光協会がイベントの開催といったソフト面で通年観光化を推進しているのに対して、行政では、建設課が中心となって、行政でしかおこなえない町並み・景観整備というハード面で、通年観光化のいわばインフラ整備をおこなっている。

1-5. 「おわら」の似合う町並みの創出

町並み・景観整備の推進の契機となったのは、1986（昭和 61）年に当時の建設省が発表した「HOPE 計画」という地域振興プランである。この計画は、住まいづくりやまちづくりをその土地の文化や歴史を活かしながら、「良好な住宅市街地」、「地域文化の育成」、「地域住宅生産の育成」などをはかるというものであった。当時の八尾町は、「HOPE 計画」をもとに、1986（昭和 61）年に「HOPE 計画推進協議会」を設置し、八尾らしいまち並みの再生と快適な住環境の創出を図ることを目的とした「八尾町 HOPE 計画」を策定した。また、住まいを取り巻く環境について広く住民と意見を交換する「HOPE 計画町民会議」が 3 年に 1 回の割合で開催された。

1998（平成元）年からは、1986（昭和 61）年に旧町の諏訪町の本通りが「日本の道 100 選」に選ばれたことを背景に、「おわら風の盆、曳山にふさわしいまちづくり」をテーマとして「八尾魅力あるまちづくり基本計画」が策定された。計画に沿って 1990（平成 2）年から 1999（平成 11）年まで「八尾町歴史的地区環境整備街路事業」によって、「八尾らしい景観」の維持と創出のためのさまざまな事業がおこなわれた（八尾総合行政センター建設課、2000,2007）。「八尾らしい景観」には「おわら」をモチーフにしたものが多い。たとえば、2003（平成 5）年に竣工した井田川にかかる禅寺橋は、欄干に「おわら」のレリーフが施され、編み笠を模した街灯が設置され、さらに橋の中央には踊り場が設けられている。

このような事業によって、おわら風の盆以外の時期にも観光客を吸引するための景観整備が旧町を中心に進められ、現在も家並みの整備や創出の事業が継続されている。

景観整備についての具体的な施策については、第 3 節「八尾旧町の景観づくりと住民」で報告する。この報告では、後藤と島田が、行政が進める町並み・景観づくりに対する住民の認識について詳細に記述して、考察を加える。

なお、1980（昭和 55）年から平野部の保内地区やすないに「富山八尾中核工業団地」の造成が始まったことを契機に、1985（昭和 60）年から 5 年間、通産省と八尾町の主催で、「最先端技術と伝統文化の融合」をテーマとする公開討論会「八尾町文化会議」が開催された。この会議においても、「八尾の伝統的な町並み」の再認識と再創出が提唱され

ている（中部センター、2005）。なお、「八尾町文化会議」の議論を引き継いで八尾の活性化を考える住民の自主的組織「坂のまち千年会議」が、1991（平成3）年に設立されている。

文献

中部開発センター、2005、「伝統芸能をまちづくりに生かして—大観光資源に転化させたカリスマ」、『機関誌「Crec 中部開発センター」』、152

八尾総合行政センター建設課、2000、『やつおの住まい』

八尾総合行政センター建設課、2007、『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度～歴史的な風情あるまち並みを目指して～』

渡辺佳央里、2008、「観光化にともなう祭礼の変容—富山県八尾町おわら風の盆の事例から」、平成19年度富山大学人文学部卒業論文

2. 「おわら風の盆」の観光化

－組織、住民、観光客の3者の関係－

安田 莉奈

1. はじめに

観光化には様々な問題がつきまとう。たとえば、八尾のおわら風の盆では地域外から観光客が大量にやってくるが、なかにはゴミを投げ捨てるようなマナーの悪い観光客もいて、住民に不快感や生活被害を与えたりしている。その一方で、観光客がやってきて自分たちの町が有名になったり、踊りを観光客に見られたりすることは住民にとって嬉しいことでもある。また、前節で詳細に紹介されているように、行政や越中八尾観光協会は、おわら風の盆の時期だけに観光客が集中しないよう通年の観光化を施策として打ち出し、観光化に対する住民の自発的協力を期待している。八尾の住民、行政、観光客は、おわら風の盆の観光化についてどのように認識しているのだろうか。また、それぞれの認識はどこが共通していて、どこが違っているのだろうか。このように、3者の視点から観光化を考えてみるのが、本稿の目的である。

2. 調査方法

次に、調査方法について述べたい。

八尾町は1章（概要の章）で紹介したように、人口は約2万人であり、そのうち旧町の人口は約3千人である。9月初めのおわら風の盆の3日間には、毎年、人口の約80倍以上に相当する20万人から25万人以上もの観光客がやってくる。この調査をおこなった2008年度の観光客数は、約20万人であった。

調査は、八尾旧町の住民、観光に関わっている行政や組織、観光客の3者を対象として、聞き取りと観察でおこなった。聞き取りでの語り手の年代は、外見から判断して、以下の3世代に分けた。

青年世代：20代

中年世代：30代～50代

老年世代：60代以上

3. 観光化についての行政や組織の認識

では、まず行政や観光に関わる組織がおわら風の盆を中心とする八尾の観光化について、どのように認識しているのかみてみよう。

まず、行政や行政と協力して八尾町の観光化を推進している越中八尾観光協会（以下、

観光協会と略する)は、商店街の空洞化が進む八尾の地域振興にとって観光は必須であると認識している。たとえば、観光協会長であった福島氏は「おわら風の盆を主とした“伝統文化という財産”を、“観光という産業”に生かしていくことが必要」と語っている (http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/mr_fukushima_j.html)。行政や観光協会は、「おわら風の盆」という観光資源を「まちづくり」に生かして、「観光による振興」と「地域ブランドの確立」を進めることが、八尾の経済活性化にとって最も有効な手段であると考えている。

おわら風の盆には、最初に述べたように町の規模をはるかに超えた数の観光客がやってくるので、観光客数だけを見るとおわら風の盆を観光資源とする観光化は成功したかのように見える。しかし、後で詳しく事例を挙げるが、人が多すぎて見物が十分にできとないために、観光客のなかには八尾を訪れたことに満足しないで帰る人もいる。このことは、行政もよく認識していて、八尾総合行政センターの商工観光係の男性は、「おわらのときにやってくる観光客の数は、町の規模をはるかに越えてしまっているため、本当はもう少し訪れる観光客を減らしたい。しかし、これほど(全国的に)有名になってしまったので観光客にくるな、とも言えなくなっている」と語る。そこで、おわら風の盆以外の時期にも観光客が八尾にやってくるようにして、観光客数を分散させたいと言う。行政側は、特定の時期に観光客が集中せずに1年を通して観光客がやってくる「通年観光」化を考えているが、おわら風の盆以外の観光資源としては、八尾旧町の日常生活の「風情」を観光資源としたいようである。観光協会の観光化に務めている男性Aは、「おわらの時には伝えきれない町の良さを多くの観光客に伝えたい」と言う。

観光協会も行政と同じく、八尾の日常生活を観光資源とする通年観光を目標としている。この協会の目標は次の3つである。まず1つ目は、観光客が散策しやすい町を作ることである。観光協会の男性Aは、「観光客に八尾町の住民の心意気や生活習慣を感じてほしい」と言う。2つ目は、観光客に八尾に対する好印象を持ってもらうということである。そして3つ目に、観光客のリピーターを増やしたいということである。つまり、観光客が八尾の風情や日常生活に触れやすいまちづくりをおこない、観光客のリピーターを増やして通年観光化を実現する、というのが観光協会の目標なのである。

通年観光化の具体的な取り組みとして、「おわら資料館」の開館や2章で取り上げられている5月の曳山行事に使われる曳山の常時展示、毎月2回の観光会館での「風の盆ステージ」の上演、本章の5節で取り上げられている月1回開催される「なりひら風の市」の開催、次の3節で詳しく述べられる町の景観整備、観光客向けの町の案内図の設置や町のパンフレットの作成など、さまざまな施策がすでに実施されている。

このような取り組みがうまくいったのか、9月初めのおわら風の盆以外の時期に八尾を訪れる観光客数は徐々に増えている。2007年度をみると、おわら風の盆の期間の観光客数は約26万人で、年間を通した八尾町への観光客数は約67万人であり、おわら風の盆にやってくる観光客の約1.6倍の観光客がおわら風の盆以外の時期に訪れて

いる。しかし、おわら風の盆の際の観光客数には変化がほとんどみられないため、おわら風の盆への観光客の集中という問題は解決していないと言える。

おわら風の盆への過度の観光客の集中は、観光客に八尾の好印象を与え、1年を通じて観光客がやってくる町にするという目標を持つ行政や観光協会にとって、好ましいことではない。そこで、おわら風の盆の期間中に、観光客が満足するようなサービスを実施している。たとえば、おわら風の盆の「前夜祭」である。これは、おわら風の盆「本番」前の11日間に日替わりで各町が順番におわらを披露するというものである。おわら風の盆の「本番」では、各町がそれぞれおわらを披露するが、いつ、どこで踊るのかについてはわからない。しかし、「前夜祭」では「本番」と異なり、開始時刻や会場となる町が細かく決められているため、観光客は必ずおわらを見ることができる。また、「前夜祭」では演目の後半に、その場にいる観光客もおわら踊りに参加できる輪踊りをおこなう。そのため、観光客は単におわらを見るだけでなく、胡弓などの和楽器の音色に合わせて、八尾の人々と実際におわらを踊って楽しむことができるのである。

また、その一方で、行政や観光協会は、おわら風の盆の際に住民が観光客に対して積極的に働きかけて観光客の満足を得ることも期待している。八尾の「人情」に触れることで、観光客が八尾に対して好印象を持ち、おわら風の盆以外の時期に観光にやってくるのが、行政や観光協会が意図するものなのである。つまり、行政や観光協会は、住民との協力を得て、おわら風の盆を主とする八尾の観光化を町の振興につなげたいと考えているのである。

それでは、実際に住民たちは観光客に対してどのように接し、また、観光化についてどのような認識を持っているのだろうか。次では、観光化に対する住民の行動や認識をみてみよう。

4.観光化についての住民の認識

まず、住民が観光客にどのように接しているのかについて、事例を挙げてみよう。

おわらの「本番」は、^{じかた}地方の演奏とともに各町の踊り手たちがおわらを踊りながら町内を練り歩く町流しであるが、その町流しの最中に、ある町では子供が次々と公民館の中に入っていった。近くにいた観光客たちは、もう町流しが終わるのかと勘違いして、心配し始めた。すると、観光客たちの側にいた住民がとっさに「今、子供だけ中（に）入るんです」とその場の状況と、まだ町流しが続くことを説明した。また、別の場所で町流しをいったん止めたとき、住民は「今、楽器の調子あわせなんがで（楽器の調子をあわせなくてはならないので町流しを止めた）」と理由を周囲にいた観光客に説明していた。また、ある老年女性は観光客が、自分たちの乗ってきた大型バスの乗り場を尋ねてくるので、「今年は観光客を3回も（大型バスが止まっている）町民広場まで連れて行ってあげたよ」と語っていた。なぜ、わざわざ見知らぬ観光客を案内したのかという問いには、「自分も知らん（知らない）とこ行ったら、いろいろ、わからんくて（わ

からなくて) 困るからね」と言う。これらの語りからは、住民たちが自発的に観光客の便宜をはかっていることが分かる。

「前夜祭」の町流しの後におこなわれる輪になって踊る輪踊りには、先に述べたように観光客も入ることができるが、住民たちは「どうぞみなさん、輪の中に入ってください、恥ずかしくないで、(笠で) 顔見えませんから」と観光客に積極的な参加を促していた。住民が観光客との一体感をわざわざ生み出そうと努力していることが分かる。

以上から、八尾旧町の住民たちは、自分の家庭にやって来た客をもてなすように観光客を接していると言える。住民たちは、観光客を自分たちの町である八尾に来た客として接しているのである。

また、観光客を八尾の客としてもてなすだけにとどまらない住民もいる。雑貨屋を営む中年女性は、「店に来た観光客を精いっぱいもてなしたい」と語り、「もし、おわらで不快な思いをして八尾にネガティブな感情をもっても、この店で少しでもプラスに変えられ、総合的に八尾がいい町だと思ってほしい」と言う。観光客のために設けられる特設ステージでのおわらの上演が終了した後、上演を担当していた住民は「夜の八尾の町並みを散策されて帰るのもよいと思います」と見物していた観光客たちにアナウンスをおこなっていた。住民たちのなかには、たんに観光客を「客」としてもてなすのではなく、さらに、自分たちの住む八尾の町に好印象を持ってもらいたいと働きかけている人たちもいるのである。

ここまでをまとめると、住民たちは、観光客を自分たちの町にやって来た客として接して、なかには町の印象を良くしようと努めている人もいることがわかる。こうしてみると、住民たちは、行政や観光協会が期待するように、積極的におわら風の盆の観光化に協力しているように見える。しかし、住民は観光化について全面的に肯定しているのだろうか。次からは、八尾の観光化に対する住民の語りをみていくことにする。

5.観光化に対する住民の語り

ここでは、調査で得た住民の語りを、観光化に対して肯定的にとらえているものと、否定的にとらえているものに分けて、詳しくみていきたい。

5-1.肯定的な語り

まず、おわらの観光化について肯定的に捉えている住民たちの語りをみてみよう。

中年女性 A は「おわらをたくさんの人に見てもらえるのはうれしい」と語り、飲食店を営む中年女性 B も同じように、「観光客がたくさん来るのはうれしい」と語る。また、ある老年女性は「(たくさんの人におわらを見もらうのは) うれしく思うし、誇りに思う」と話し、別の老人女性は「今年は人が少なくて残念。たくさんの人に(おわらを) 見ってもらえるのはうれしいからね」と語る。これらの語りから、多くの観光客に自分たちのおわらを見てもらえることは、住民にとって喜ばしいことであり、誇りに

なっていることがわかる。

また、中年女性 C は「観光客との深いつながりを持てることがうれしいし、良いこと」と語り、「わたしは、千葉の人と知り合って十数年年賀状や、暑中見舞いのやりとりをしていたよ。また千葉には梨がないので、富山の梨を送ってあげたりもした。向こうは毎年おわらに来て、うちに顔をだしていつてくれたよ。この人が亡くなられたという手紙をもらったときは、涙がこぼれて胸が痛くなった」と涙ぐみながら語っていた。また、同じように中年女性 B は「財布を忘れられた方がいたので警察に届けて、栃木まで財布を送ってあげたら、わざわざお礼の手紙が来たのよ」とうれしそうに観光客とのやりとりについて語る。これらの語りから、観光化によって多くの観光客がやってくることは、住民にとって遠く離れた他県の人々と知り合い、親交を深めるきっかけとなることがわかる。そして、時に住民は、八尾に住む他の地域住民との関係よりもさらに深い人間関係を築いていることがわかる。

以上から住民にとって、おわらの観光化は、多くの観光客に自分たちのおわらを披露する機会であるとともに、観光客と深い人間関係を築くきっかけであることがわかる。このような点で、住民は、おわらの観光化を肯定的に捉えているといえる。

その一方で、おわらの観光化を肯定的に捉えるだけでなく、すでに述べたように、観光客を八尾に来た客として接しようとする住民もいる。中年女性 B は「観光客が多すぎて一人一人丁寧に対応してあげられないのがかわいそう」と語り、「観光客がよく、どこに行けばおわらをよく見られるか聞いてくるけど、大忙しだから簡単にしか答えてあげられない。それが、せっかく来てもらっている観光客に申し訳ない」と言う。同じように、雑貨屋を営む中年女性も「観光客がたくさんくるのはいいけど、3千人足らずの少ない人数じゃ対応しきれんちゃ（対応しきれない）」と語る。また、ある中年女性は「せっかく（観光客が）来てくれたのに、人が多くて（おわらを）見られないのがかわいそう」と話し、中年女性 C は「せっかく遠くから来てくれているのに、（おわらを）見られないって人が多いから、（観光客がおわらを見に来てくれることを）誇りに思うというよりも、気の毒に思う」と語る。これらの語りから、住民は、観光客を自分の家庭にやって来た客のように懸命にもてなそうとするあまり、丁寧に接することができないと、申し訳なさを感じるということがわかる。このような住民は、観光化を迷惑と考えたり、おわらを見てもらえることを誇りに思うというよりも、観光客がおわらを満足に見られない現状に同情するとともに申し訳なさを感じている。

ここまでの肯定的な語りをまとめると、住民は多くの観光客におわらを見てもらうことを喜ばしく思う一方で、満足におわらを見られない観光客に対して申し訳なさを感じている。そもそも、住民が観光客に申し訳なさを感じるのは、八尾に来た客として懸命にもてなそうとしているためである。また、住民にとっておわらの観光化は、他県の人と深い人間関係を築くきっかけとなっている。つまり、住民は普段の生活の延長線上にある人付き合いを観光化にも反映しているといえる。このように、行政側が期待するよ

うに、八尾の人々の客を懸命にもてなそうとする住民たちの「人情」や生活の「風情」が表れている。しかし、八尾の住民のなかには観光化に対して否定的に捉えている住民もいる。次はそういった人々の語りをみてみよう。

5-2.否定的な語り

ある老年女性は「ゴミばっかで大変。(観光客が来ることに)何も思わん(思わない)。なんせ(なぜなら)町の人が大変」と語り、「(おわら風の盆の)4日目の朝はぼんぼりを片付けてすぐ、ゴミの片付けをしたよ。ビンやら缶やら(軒下に)置いてあるからね。その後、自主的に川の方までみんなとゴミ拾いしたよ」と言う。別の中年女性は「ゴミも増えるし(観光化は)とっても迷惑。あれほど大人数(の観光客)が来るなら(おわら風の盆は)2、3年に一度でいい。(多くの観光客がやってくるのが嫌で)旅行に出かける人もいるけど、(わたしは)おわらが好きだから他行きたくないね」と語る。これらの語りから、住民は、観光客が出すゴミの始末に不満を持っていることがわかる。観光客は住民の家の軒下にまで、あたりかまわずゴミを捨てていくが、住民がそのゴミを必然的に片付けなくてはならない。実際に、わたしも店先に置いてあった傘立てに、山ほどのゴミが無分別に捨てられているのを目の当たりにした(写真1参照)。傘立ての持ち主と一緒にゴミを片付けると、中からトレイやペットボトルだけでなく、カンやビンも出てきた。



写真1.ゴミ箱と化した傘立て

また、ある中年男性は「観光客がゴミを捨てていくから、ゴミを捨てられる前にゴミ袋をもって(ゴミを)集めるよ」と語る。なかには、ゴミが無分別に捨てられる前に、自主的にゴミの回収をおこなう住民もいる。このように、住民は生活被害を受けることに不満を持つ。

また、住民の家の軒下に多くのゴミが捨てられている理由の一つとして、始発列車で

帰宅する観光客が、住民の軒下で一夜を過ごしていくためである。本調査を行ったおわら風の盆の「本番」3日目の天候は、あいにくの雨であったため、写真2のように、住民の家の軒下で雨をしのぎながら一夜を過ごす観光客が多く見受けられた。



写真2.軒下の観光客

ここまでをまとめると、「おわらが好きだから他に行きたくない」と中年女性が語るように、住民はおわらを続けていきたいという気持ちを強く持っているが、生活被害への苦労が絶えず、おわらを毎年楽しみには思えなくなっている。このように住民は、生活被害を受けることに関して、おわらの観光化に不満を持つことがわかる。

また、住民のおわらの観光化への不満は、生活被害だけにとどまらない。自分たちの踊りであるおわらが、観光客のための踊りになっていることに対しても不満を抱く。ある老年男性は「観光客はおわらがみれんかったり(見られなかったり)、踊り子が踊ってくれないと、せっかく来たのに、と文句を言ってくる。住民がはな代を払っているから(踊り手が)おわらを踊っていつてくれるのに、(おわらが)みれんかったと文句を言われても困る」と語り、「観光客は勝手に来てただで(踊りを)見ているのだから、文句言わんと(文句を言わないで)踊り子がくる時間まで待ってればいい」と語る。この語りから、住民は、自分たちが経費を負担して支えているおわら風の盆の行事について、外からやってきて無料で楽しんで帰る観光客に苦情を言われることに強い嫌悪感を抱いていることがわかる。

また、飲食店を営む中年男性は「おわらは祭りではない。それなのに観光客は(祭りと)勘違いしてやってくる。よく祭りの本とかに載っていて、ツアーでやってくるからね。観光客の数は本当に見たい人だけが来て2、3万人くらいでいい」と語る。この語りから、住民は、観光客がやってくることに全面的に反対しているわけではなく、単にツアー旅行の一環として見にくるのではなく、心から地域の行事としてのおわらを見たいという観光客には来てほしいと考えていることがわかる。

そして、ある老年女性は「八尾で育ち、正真正銘の八尾の人間だから(おわらに)参加するのが当たり前だし、(おわらに愛着もわいて)楽しい」と語り、別の老年女性は「本当は町の人のおわらなのに。前は上手な歌い手の後ろをついて歩いて歌をき

いたもんだよ。静か一な中でね」とさみしそうに語る。これらの語りから、本来は自分たち住民のためのおわらである、という認識が強く持たれていることがわかる。

否定的な語りをまとめると、住民たちは、おわらを自分たちの行事であり、自分たちが楽しむものだという意識を強く持っている。また、観光客が出すゴミなどによる生活被害や観光客からの苦情に対して強い不満を持っている。ただし、住民は、観光客がやってくることに全面的に反対しているのではなく、地域の行事として理解してやってくる観光客には来てほしいと考えている。

ここまでの住民の観光化に対する認識をまとめると、自分たちのおわらを多くの観光客にみてもらえることを喜ばしく思い、観光客を積極的にもてなし、観光化を観光客と知り合うきっかけとしては肯定的に捉える。その一方で、住民たちは生活被害を受け、本来は自分たち住民のためのおわらが、観光客のためのおわらになっていることについて否定的に捉えていることがわかった。

では、おわらにやってくる観光客たちは、おわらの観光化をどのように捉えているのだろうか。次からは、八尾にやってくる観光客たちの語りをみていこう。

6.観光客のおわらの印象

ここでは、まず、前夜祭も含むおわら風の盆にやって来ていた観光客から得た語りを、肯定的なおわらの印象と否定的なおわらの印象に分けてみていきたい。また、観光客がおわらの観光化に求めているものについても詳しくみていこう。なお、記述の中で語り手の後に示す括弧内の数字は、これまでおわら風の盆に観光にやって来た回数を示す。

6-1.肯定的な印象

まず、観光客のおわらに対する肯定的な印象からみていこう。ここでの聞き取り調査の対象は、おわら風の盆の期間中にステージで上演されたおわらや町流しを実際に見た後の観光客である。

愛知県から来た老年女性（2回目）は、おわらを実際に見た印象を、「イメージ通り、テレビで見るより自分の目で見るほうがはるかにきれいやね。楽器もいい、優雅で」と語る。また、兵庫県から来た老年女性（1回目）は「イメージは違ったわね。いいわねえ、ポスターのポーズ、あれも意味があるのね。ただポーズをとっているだけだと思ってた」と語り、同じように岐阜県から来た中年女性（1回目）は「イメージ以上、すごいよかった、胡弓をああやって弾くのとか知らんだ（知らなかった）。楽器も目の前で演奏してくれるんやね」と興奮気味に語った。そして、滋賀県から来た中年女性は「きれいやったわーゆっくりしてて。やっぱ哀愁帯びてるねえ。また来たいと思う」と言う。これらの語りから、観光客は、おわらが自分たちの想像を超えたものであったり、イメージ通りの優雅さをもっていると、満足している様子がうかがえる。つまり、メディアから得たおわらの優雅なイメージを十分に味わうことができると、全面的におわらを肯

定する。しかし、おわらの優雅さを味わうことができても、なかには不満を抱く観光客もいる。では、どのようなことが、観光客に不満を抱かせるのだろうか。

6-2.否定的な印象

ここからは、観光客のおわらに対する否定的な印象について詳しくみていこう。では、観光客はどのようなことに対して不満を持つのだろうか。

兵庫県から来た老年男性（1回目）は、実際に踊りを見て「優雅やねー。でも、こんなもん（こんなに人が多い）とは思ってなかった」と顔をしかめて語り、同じように愛知県から来た老年女性（1回目）は、町の様々な箇所に設置された特設ステージでのおわらの上演を見て「イメージを越えた、イメージよりはるかによいね」と笑みをうかべて語るが、「でも、こんだけ人多いとまた来たいとは・・・考えさせられるよね。人多いとは聞いていたけど、(踊りが) 見えないほどだとは思わなかった」と顔をしかめた。また、富山県内から来た青年女性（1回目）は「うーん、人多くて・・・ぼんぼりで町並みは風情があるけど」と語った。これらの語りから、ステージでのおわらの上演を見て、おわらの優雅さを味わうことができても、他の観光客が多くて町流しを十分に見ることができないと、観光客は不満を抱く。つまり、おわらが優雅で自分たちのイメージ通りであることに満足しつつも、観光客の多さに不満を持っている様子がわかる。では、観光客は踊りが十分に見られると満足するのだろうか。そもそも、観光客がおわらの観光化に求めているものは何だろうか。

6-3.おわらの「観光化」に対する観光客の反応

ここでは、おわらを満足に見ることができた観光客と、満足に見ることができなかった観光客の行動と語りを比較して、観光化によっておわらを知ってやってきた観光客が、観光化現象に対してどのように反応しているのか、もう一度確認してみよう。

おわら風の盆の「前夜祭」の一日は、あいにくの雨であった。地方が演奏する和楽器^{じかた}は、雨に非常に弱い^{じかた}ため、この日の町でのおわら踊りは中止となり、風の盆ステージが上演される観光会館の駐車場内に設置された特設ステージ上での踊りの上演となった。そのため、「前夜祭」に来ていた観光客が一か所に集中したため、写真3のように大勢の人が特設ステージ前に押し寄せた。写真からは、観光客で埋め尽くされている様子がわかる。



写真 3.特設ステージ前の様子

また、特設ステージ前の駐車場に入りきれない観光客が、付近の道路まであふれていた。このような状況の中で、特設ステージでのおわらの上演が終了した。しかし、そのあと上演を担当していた住民が「さっさと帰ろうと思いましたが、せっかく雨が晴れたので、もう一回（おわらの上演を）やります」と突然のアナウンスをした。その後あたりを見回すと、特設ステージ付近にいた観光客の数は1度目の上演の時よりも約20分の1の数に減っていたが、観光客による大きな拍手が2回も起きた。2度目の上演が始まる前に特設ステージの近くにいた中年女性は「前夜祭来てよかったね、本番こんな風に（人の少ない中で踊りを間近に）見れんからね」と喜び、別の中年女性は「やったー、ラッキーじゃん。こんなラッキーな日はない」と興奮して語った。また、ある老年女性も「さっき（1度目の上演）は（人が多すぎて踊りを）全然見れなかったけど、今度はゆっくり（踊りを）見える。（特設ステージまで）戻って来てよかった、さっきよく見えなかったから・・・」と語る。これらの語りから、観光客は、踊りが他の観光客に邪魔されることなく十分に見ることができると満足している様子がうかがえる。

逆に、満足に踊りを見ることができないと、観光客から「仙台からわざわざ来たんだから見せてけろ」、「頭だけで（踊りが）見えんのよー」、「前の人ずっとみとるんやから変われー」、「前の人座ってー、（踊りが）見えん」などといった不満の声が飛び出す。このように、踊りが十分に見られないと観光客はその不満を大声で叫ぶ。また、兵庫県から来た老年女性（7回目）は雨が降っていたので「（特設ステージでの踊りを）見るとき、傘の色が透明だったらよかったわー。色があると（傘が邪魔になっておどりが）見えんからね」と言う。また、ある老年女性は「子供のときよく来てたけど、人にぶつかって歩くから嫌だった。今ではテレビで見れるし、行きたいと思わない」と話す。これらの語りから、観光客たちは、自分たち以外の観光客の過度の多さに不満を持ち、おわらを十分に「観光」できないことに不満を持っていることがうかがえる。

6-4.観光客が抱く「ホスト」への不満

観光客が抱く不満の別の事例を挙げてみよう。

地方の演奏に合わせる、踊り手が輪になって踊るのが輪踊りであるが、おわら風の盆の前夜祭のとき、その輪踊りを踊る場所に、多くの観光客が押し寄せていた。そのため、住民が踊る空間を確保するために、観光客に対して下がるよう声をかけると、周りにいた観光客たちは「(下がってほしいとは) ちょっとひどいよねー、両脇に3列くらいに並んでくればいいのか、誰か整理する人おればいいのか」と叫び、「30分前からここで並んでいるのに…」とつぶやく。また、別の前夜祭の日には、小雨が降っていたので住民が町流しを中止しようとしていると、ある中年女性は「(町流しを) 流せばいいのに。流さないのに下がってくださいなの。なら(じゃあ)、そこで踊ってるのと一緒だから帰ろう」といらいらした口調で叫んだあと、近くにいた男性とすぐに帰ってしまった。また、町流しや輪踊りをいつ踊るのかといったような、踊りについての詳しい知らせが何もないことに関して、ある中年女性はいらつきながら「やだねー、動かないからって言ってほしいよねー。くると思って待ってたのに。10時間かけてきたのにアホくさいね」と語り、同じように別の中年女性は「そこでだけ踊って移動しないだもん、町内歩くとって待ってたのに」と語る。また、ある老年女性は「(踊りに関するアナウンスがないことは) そりゃちょっとサービスとして悪いよね」と語り、同じように別の老年女性は「(町流しをしないという) 放送もしないなんてひどいよね。雨降ってないのに」と語る。また、別の町の「前夜祭」で、天候の悪さから公民館の中でおわらを踊っていたことに対して、老年女性は「全然雨降ってないもん(降ってないのに) 出てこりゃいいがに(出てきて踊ればいいのか)」と叫び、別の老年女性は「衣装もぬれるかしら、なーんぬれんわ(全然ぬれないわ)。アンコールにも出てればいいのか(出てきて踊ればいいのか)」と語る。これらの語りをまとめると、観光客は、おわらを十分に見ることができないことに不満を持つだけでなく、費用と時間をかけたことに見合うだけのサービスを満足に受けられないことに関して不満を抱いていることがわかる。

また、なかには住民のサービスがよかったことに満足して、今年もおわら風の盆にやって来たという観光客もいる。愛知県から来た中年女性は「毎年来たいと思う。昨年たまたま一番前で見ることができて、たまたま自分の方に(踊り手が) 向いて踊ってくれたから、それがすごくよくてまた来たいと思った。もしそれがなかったら、(おわら風の盆にくるのを) 考えたわ」と語る。このように、観光客は「ゲスト」と自分たちを位置づけていて、「ホスト」の八尾の住民たちが自分たちが満足するよう配慮してくれることを期待しているのである。

また、おわら風の盆の「本番」の3日間はすべての町で常に町流しがおこなわれているわけではない。そのため、観光客は、いつ、どこで地方とともに踊り手が町を練り歩く町流しをしているのかわからないので、新潟県から来た中年男性2人(1回目)は「もっと町のどこでも(おわらを) やっていると聞いていた。初めて来た人はどこに行ってもいいかわからん。どこに行っても(おわらを) やっとる(踊っている)、というかんじに(してほしい)」、「パンフレットや地図1枚じゃ何もわからない」と町流しをなか

なか見れないことに関して不満を言う。同じように静岡県から来た老年男性（1回目）は「どこで（町流しを）やっているかわからなくて困る。町流しは町じゅうでやっていると思っていた。町の人に聞いても“わからん（わからない）”としか返ってこない」と語り、長野県から来た青年女性（1回目）も「どこで（町流しを）やっているのかわからない。案内人とかいたらよかった」と語る。これらの語りから、観光客は、踊りの運営や住民のサービスに対しても不満を持つことがわかる。これらの不満も、自分たちがあらかじめイメージしてきたように踊りを見るが出来ないために生じている。

ここまでをまとめると、観光客は自分たちがあらかじめ持っていたイメージに合わないと、踊りを満足に見られないことや、自分たち以外の観光客の多さに不満を持つ。しかし、それだけにとどまらず、観光客は自分たちを「ゲスト」と意識して、踊りの運営や「ホスト」である住民の対応に対しても不満をもつことがわかる。

6-5.過剰な観光化に対する不満

これまで述べたように多くの観光客は、観光客の多さや踊りの運営、住民のサービスに対する不満を抱いているが、中には直接に、観光化の悪影響を指摘する観光客もいる。

大阪府から来た中年女性（1回目）は「観光化されすぎるのもなんかいやなあって（思う）。今、町流しの時間決まってないから行き当たりばったりがいい。（踊りを）見つけた時、すごくうれしい」と語り、同じように千葉県から来た中年男性（7回以上）は「やっぱ、町流しがいいよね。ただ、最近特設ステージがたくさんできているから残念に思う。だって、ステージだと（時間が）決まっているし、観光化されすぎているから」と語る。このように、観光化の影響を受けて、住民たちが受け継いできた本来のおわらが見えなくなっていくことに不満を持つ観光客もいる。また、長野県から来た老年男性（3回目）は、不満を持つどころか「こっちがどうこうしてほしいって言うもんじゃないよね。（踊りを）見させていただいているんだから」と謙遜しながら語る。このように、住民たちの生活や住民たちの行事としてのおわらに配慮する観光客もいるが、おそらく、こういった観光客はわずかであろう。

ここまでみてきた観光客のおわらの印象をまとめると、観光客は、おわらを十分に見ることができて、自分たちのイメージ通りであることを確認すると満足する。ただし、実際には自分たち以外の観光客の多さのためにおわらを十分に見られないことに不満を持つ観光客が多い。また、観光客は費用と時間をかけてやってきた「ホスト」として、それらに見合うだけのサービスが住民にないことにも向けられる。観光客にとって、おわらはあくまで「見せるためのおわら」であり、一種のショーである。つまり、この点においては、本稿の5でみてきた住民の“自分たちの住民が楽しむための踊り”とはどうしても交わらない。

7.まとめと考察

さて、ここまでの行政や観光協会、住民、観光客のおわらの観光化に対する認識をまとめてみよう。

行政や観光協会は、八尾町の景観や住民生活における「風情」、住民の「人情」を観光資源としたいと考えている。そのため、通年観光化を進めるにあたって、地域住民の協力は不可欠である。つまり、これらの組織行政は住民が観光化に積極的に参加することを望んでいる。

また、住民は、多くの人におわらを見てもらうことを喜ばしく思う一方で、満足におわらを見られない観光客に対して申し訳なさを感じている。そして、なかには積極的に観光客を客としてもてなし、八尾町の好印象を与えようと働きかける住民もいる。この点で住民は、行政が期待するように、普段の生活の中で生まれる「人情」を反映させて観光客に接している。

しかし、一方で、観光客が出すゴミなどの生活被害を受けることに不満を持つ住民もいる。また、住民がお金を出しておわらを運営しているのに、ただでおわらを楽しんでいく観光客に文句を言われることへ嫌悪感を抱く人もいる。このように、観光化に対する否定的な認識もみられるが、住民は、観光客がくることに全面的に反対しているわけではない。このような住民は、単にツアー旅行の一環としておわらを見にくるのではなく、心からおわらを見たいという観光客に来てほしいと考えている。それは、住民にとっておわらは、“本来自分たち住民が楽しむためのおわら”であり、観光客に“見せるおわら”ではないからである。

そして、観光客は、あらかじめイメージしたおわらの優雅さを味わうことで満足する。一方で、観光客の多さや踊りを見られないことに不満を持つと同時に、踊りの運営や住民の対応にも不満を持つ。なぜなら、観光客は費用と時間をかけて来たことに見合うサービスを求めるからである。つまり、観光客にとっておわらは、ショー化された“見せるおわら”なのである。この点で、自分たち住民が楽しむためのおわらであると考えている住民とショー化された見せるおわらであると考えている観光客との間には、おわらの観光化に対する認識のずれが生じていることがわかる。

組織、住民、観光客のおわらの観光化に対する認識をみてみると、3者すべてが共通して望んでいることがある。それは、おわら風の盆の期間にやってくる観光客数の減少である。3者とも、おわら風の盆の期間への観光客数の過度の集中を肯定的には捉えていない。行政や観光協会は、おわらへの観光客の集中を避けるために、観光客を分散させる施策をいくつかとっているし、また、他の観光資源を活用した通年観光化を目指している。それでは、観光客数の減少が実現すると、本稿で指摘してきたような現在生じている問題は解決するのだろうか。

まず、観光客数が減少することで、住民たちの不満の対象のひとつである生活被害は確実に減少する。また、観光客が減ると、これまでよりは、自分たちの町の行事としてのおわらを楽しめることになる。

また、住民の生活被害が減り、住民の観光化に対する苦情が減少すると、行政や観光協会は観光化における住民の協力をより得やすくなる。そして観光客にとっては、十分におわらをじっくり見ることができるようになり、旅行に要した費用と時間に見合った満足を得ることができるようになる。

このように観光客数の減少が実現すると、地域の伝統行事が観光化したことにもなう問題点が改善されるように見える。しかし、これまで見てきたように、本来、住民と観光客のおわらに対する認識は異なっている。住民たちの多くは、自分たちの年中行事であるおわらとして“自分たちが楽しむ行事”という側面を意識するのに対して、観光客は、「観光」のために訪れている「ゲスト」であるから、自分たちのイメージに合う“見せるおわら”や“ショーとしてのおわら”を期待し、また住民には「ホスト」としてのサービスを望む。そもそも、行事をおこなっている住民と観光に訪れる観光客は行事に対する認識が異なっているのだから、通年観光化によっておわらの観光客数が多少減少したとしても、おこなう側である住民と見る側の観光客の間にはどうしても埋められない溝が残るのである（図参照）。

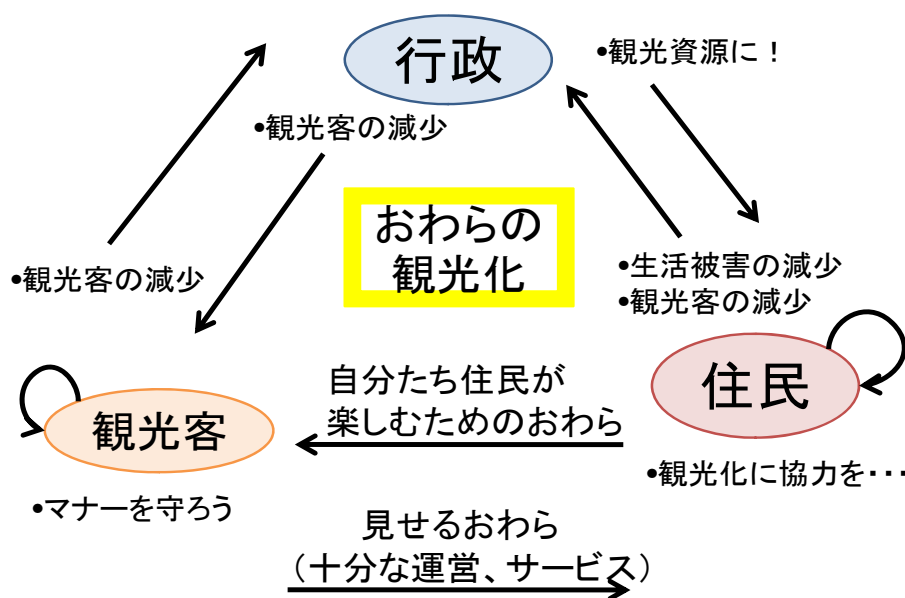


図 おわらの観光化に対する認識

行政や観光協会は住民と観光客の両者の認識や希望を考慮しながら地域振興をはかっているが、観光客誘致を目的にする以上、観光化への自発的参加と積極的な観光客へのサービスを住民に期待せざるをえない。しかし、住民と観光客の間の認識のずれを埋めることは困難である。あるいは、もし、住民が組織の意向に沿って積極的に「見る側」の観光客に合わせるようになれば、地域住民の生活と深く結びついた特徴や参加する

人々の活力が失われ、おわらは魅力の乏しい「見世物イベント」と化してしまうかもしれない。行政が目指す八尾の日常生活や景観の観光資源化についても同様で、行政の施策が「見せる側」のイメージや要望に寄り添って住民の生活をステレオタイプ的に型にはめてしまうと、住民たち本来の日常生活の風情や活気は失われてしまうだろう。皮肉なことに、おわらや町そのものを観光資源にしようとする行政や観光協会の施策や要望に対して、住民が完全に従ってしまうと、かえっておわらや町の観光資源としての価値は下がってしまう。

今後、観光化と住民の間を調整するために求められているのは、住民の生活に根ざした、あるいは住民の生活の範囲内で観光化をはかっていくというバランス感覚であり、また、行政や観光協会と住民との絶え間ない対話だと思われる。

3.八尾旧町の景観づくりと住民

後藤 あかね
島田 一

1.はじめに

八尾を訪れる観光客は、1985（昭和 60）年頃から増加を続けている。観光客数が増加した要因の一つとして、毎年 9 月に行われる「おわら風の盆」が全国的に有名になったことが考えられる。ただし、近年では、行政や観光協会などが 1 年を通して観光客を誘致する通年観光化を進めていて、「おわら風の盆」の時期の観光客数は年間観光客数の半数程度となっている。

行政側は通年観光を促進するためにさまざまな事業をおこなっているが、この報告では、景観整備を中心とするまちづくりに焦点をあてて、通年観光化のために具体的にどのような事業がおこなわれているか、また、事業について八尾の住民たちがどのように考えているかについて報告し、行政と住民の認識の相違について考察したい。

調査では、八尾旧町のなかで景観整備が進んでいる諏訪町、鏡町、西町、^{すわまち} ^{かがみまち} ^{にしまち} ^{かみしんまち} 上新町の住民を対象として聞き取りをおこない、また、地域の行政機関である八尾総合行政センターでインタビューをおこなった。

2.まち並み整備と住民

2-1.まち並みの景観づくりの経緯

本章の 1 節でも紹介されているが、まず、八尾のまち並み景観保存や創出に関わる事業について概要を紹介したい。

八尾町は 2005（平成 17）年に富山市と合併したが、それにもなつて旧町役場は富山市の地域行政機関である八尾総合行政センターとなつた。この機関のなかで、観光化推進事業や町の景観づくりに携わっているのは、農林商工課と建設課である。

農林商工課では、「おわら風の盆」などの観光 PR や八尾町商工会や越中八尾観光協会のイベントを補助する活動をおこなつており、建設課ではまち並み保存や修復のための助成金制度の施行や石畳敷設など、この報告で取り上げる景観保存の事業をおこなつている。

八尾行政センター建設課発行の「やつおの住まい」20 ページ、21 ページによれば、八尾の景観保存事業は、1986（昭和 61）年に当時の建設省が提唱した「HOPE 計画」がきっかけで始まった。「HOPE 計画」とは、住まいやまちづくりをその土地の文化・歴史・風土の地域性を生かしながら「良好な住宅市街地」、「地域文化の育成」、「地域住宅生産の育成」などをはかるというものである。

八尾町もこの「HOPE 計画」に 1986（昭和 61）年から取り組み、「HOPE 計画推進協議会」が設置され、同じ年に八尾らしいまち並みの再生と快適な住環境の創出を図ることを目的とした「八尾町 HOPE 計画」が策定された。この計画の目的の一つは、「蘇れ、おわらの町昭和ルネッサンス」をテーマとしてまち並みの保存と再生が図ることであった。さらに、木造住宅団地建設推進のための「ウッドタウンプロジェクト推進事業」や八尾らしい住宅を表彰する「やつおの住まい賞」が設けられ、住まいを取り巻く環境について広く住民と意見を交換し、住民に八尾の地域特性を活かした住まいづくりやまち並みのあり方に関心を向けさせるための「HOPE 計画町民会議」が開始された。この会議は 3 年に 1 回の割合で開催され、八尾総合行政センターでのインタビューでは、これが住民にまちづくりの意識を持たせるきっかけになったとのことだった。

また、1998（平成元）年からは、1986（昭和 61）年に旧町の諏訪町の本通りが「日本の道百選」に選ばれたことを背景に、「おわら風の盆、曳山にふさわしいまちづくり」をテーマとして「八尾魅力あるまちづくり基本計画」が策定された。計画に沿って 1990（平成 2）年から 1999（平成 11）年まで「八尾町歴史的地区環境整備街路事業」によって、「八尾らしい景観」づくりのためのさまざまな事業がおこなわれた。

2-2.まち並みづくりの現状

八尾旧町で行われた景観づくりについて具体的に見てみよう。上述のように、固有のまち並み形成の再生と、歴史的景観の保全を図ることなどを目的に 1990（平成 2）年から 1999（平成 11）年まで、「八尾町歴史的地区環境整備街路事業」が実施された。この事業でおこなわれたのは、道路の石張り舗装、無電柱化、木製の街路灯の設置、ポケットパークと呼ばれる小さな公園や休憩所の整備、土蔵の修復、蓋をして玉石を埋め込みせせらぎの音を演出する側溝づくりなどである。そのうち、道路の石張り舗装は現在も続けられている。写真 1 のような行政による道路の石張り舗装工事は、調査をおこなった 2008（平成 20）年の 12 月にも旧町のいくつかの比較的狭い道で行われていた。



写真 1.石張り舗装の工事中

写真 2 は、最近に、石張り舗装工事が完了した道路であるが、狭い路地で石張り工事がおこなわれたことが分かる。写真の手前の道路は石張り舗装されていないが、住民に理由を尋ねると「車が通る道は石張り舗装しないのではないか」という回答が返ってきた。細い路地を石張り舗装するのは、車が通らないということもあるだろうが、石畳の路地を多く作ることによって、旧町全体の景観を情緒のあるものにしようとする意図があると考えられる。



写真 2.石張り舗装が完了して間もない道路

現在も石畳の路地などによって情緒を醸し出す景観づくりが進められているのは、この報告の最初に記したように、行政は、1年を通して観光客を誘致する通年観光化を目指しているからだと考えられる。

八尾総合行政センターの農林商工課によれば、「八尾を訪れる年間観光客数を見ると、おわら風の盆や曳山祭の時期に集中しているので、他の時期にも分散させたい」と考えていると言う。おわら風の盆や曳山祭のような行事に観光客が集中するのを防いで、これらの行事に頼らずに、1年を通して観光客を誘致するには、八尾の古いまち並みが観光の資源となる。したがって、行政は、石張り舗装のようなまち並みの創出を積極的におこない、その成果があがって、報告の冒頭で紹介したように、現在ではおわら風の盆にやってくる観光客とほぼ同数の観光客が他の時期に訪れるようになっている。

2-3.住民が認識している変化

ここまで行政側のまち並み景観整備について見てきたが、それでは、住民たちは景観づくりによる変化をどのように認識しているのだろうか。聞き取った住民の回答を町ごとに見ていきたい。

西町の住民の事例を挙げると、ある60代の女性は、「以前は道路の脇に溝があったけど工事で埋められたのよ」と側溝工事について語る。彼女によると、西町では景観整備で生じた目に見える大きな変化はなかったという。また、50代の女性も「町は古くなったところを直したりしているけど、特に変わったなと思うところはあまりないよ」と話す。40代の女性は「町の風景は大きく変わったところはないと思うよ」と言いながら、「最近横道を石畳に舗装したりしてるけど」と、近年、西町でさかんにおこなわれている石張り舗装については言及していた。60代の男性は西町の景観に変化はあまりないと言ったうえで、「八尾の町の景色で変わったところは、ところどころ、石畳や無電柱化になったことだね」と語る。このように、西町の住民は自分たちが住んでいる町の景観が大きく変わったとは認識していない。

次に、鏡町に住む80代の女性は、「道が石畳になったねえ。鏡町は階段もあるしおわらの時なんかはすごくきれいだよ」と話していた。彼女は、鏡町に作られた階段を下から見た光景がきれいなので好きだということだった（写真3）。観光客もこのように感じるらしく、おわら風の盆の期間中、階段の下から写真を撮る観光客が多い。



写真 3.鏡町の階段（おわら風の盆の期間中の撮影）

同じく鏡町に住む 80 代の女性に景観の変化について尋ねると、「今も工事をしているけど、道が石畳になったことじゃないかな」と地面を指さしながら答えた。70 代の男性は、「昔の町は町幅が狭かったんだよ。今は町幅が広がったなあ。町幅が狭いほうがおわらの音楽が響いてきれいだったんだけどなあ」と昔を懐かしむように語る。この男性によれば、町が観光客向けになってきたという。これらの語りから、鏡町の住民たちは、道が石畳になったことを変化として認識していると言える。

「日本の道百選」に選ばれて、行政が八尾旧町の景観づくりを進めるきっかけとなった諏訪町に住む 50 代の男性は「日本の道百選に選ばれてから道路が舗装されて石畳になり、電柱もなくなったよ」と話す。60 代の女性は、「町の見目はすごく変わったね。日本の道百選に選ばれてから道路が石畳になったんだよ。その前はコンクリートの道で、道の脇には水路もあったけど、石畳の舗装のときに埋められたんだよ」と言う。諏訪町で聞き取り調査をおこなったほぼすべての人が、この諏訪町が「日本の道百選」という言葉を語りのなかで使っていた。

なお、「日本の道百選」とは、1986（昭和 61）年に「道の日」の制定を記念して、当時の建設省と「道の日実行委員会」から選ばれた日本の特色ある道路である。富山県のなかで、諏訪町本通り（写真 4）は、^{こかやま}五箇山トンネルとともにこの「日本の道百選」選ばれた。



写真 4. 諏訪町の本通り

別の 60 代の女性は「家の前の通りが石畳になったんだよ。電柱もなくなって町が広く見えるようになったわね」と語り、80 代の女性は「道が舗装されて石畳になったな」と語った後で、水路がどれくらいの幅であったか手で示しながら、「道の脇にどぶがあったけど舗装のときに埋められたよ」と話す。諏訪町では、「日本の道百選」に選ばれてから、大きな通りが石張り舗装になったことや電柱が姿を消したことが、住民に強く認識されているようである。

調査した限りでは、諏訪町だけでなく、八尾旧町の住民にとって、石張り舗装された石畳の道が、まち並みづくりによる変化として強く認識されていると言える。

なお、諏訪町では、住宅について語る住民も何人かいた。80 代の女性は「まち並みに合わせて家の外観を改築したりする人もいる」と語り、50 代の女性も「最近では格子戸をつけたりしている家が増えたかな」と話していたが、行政は通年観光化を進めるために、伝統的な家並みづくりにも力を入れている。家並みづくりについての行政の取り組みとそれに対する住民の反応については、3 節において詳しく説明する。

2-4. まち並みづくりに対する住民の反応

それでは、住民たちは行政が進めてきたまち並みづくりについて、どのように認識しているのだろうか。

上新町に住む 50 代の女性は「景観づくりは町をにぎやかにするためだからいいことだと思う」と話し、60 代の女性も「町をきれいにすることはいいことだと思うわ。観光客も増えるし活性化につながるんじゃないかしら」と語る。西町に住む 60 代の女性

は「景観づくりには良いイメージを持っているよ。おわらなどの伝統行事を守るためだからいいことだと思う」と話す。鏡町に住む 80 代の男性は「おわらの時期は石畳と階段と家の調和がすごくきれいなんだよ。やっぱり観光客にはそれを見てもらいたいね」といきいきと話していた。60 代の男性は「八尾の人は行事が好きだからね。(観光化や景観づくりで) 町が活性化すれば、行事を続けていくことができるでしょう」と語る。これらの語りからは、行政が進めている景観づくりを、住民たちは伝統に合った「きれいなまちづくり」であり、観光化による町の活性化につながるものと認識していることがうかがえる。

また、諏訪町に住む 60 代の女性は「すごく住みやすくなったよ。やっぱり日本の道百選に選ばれたからかしら。住民が意識しているのかゴミも少なくなったしね」と話す。同じく諏訪町に住む 50 代の男性は、「諏訪町の住民は景観づくりに意欲的だと思うよ。“日本の道百選”に選ばれてから住民は景観づくりに興味を持ち始めて自分たちでまちづくりを行うようになった」と言い、「(まちづくりは) 八尾の町への愛で成り立っているんだよ」と熱を込めて話す。同じく諏訪町に住む 50 代の男性は、「“日本の道百選”に選ばれてから町の人々が景観に興味を持ち始め自分たちでまち並みを変えはじめた」と語り、「今の諏訪町はおわらの時以外でもまち並みを見に来る人がいる。住民にとっては誇らしいことだね」と話す。

これらの住民たちは、行政が進めるまち並みづくりと通年観光化を、自分たちの問題として捉え、整備されたまち並みに対して誇りを持っていることが分かる。

しかし、その一方で、まち並みづくりに対して生活上の不便を訴える人たちも少なくない。

ある 80 代の女性は、最近足腰が弱ってきたと話した後で、「昔のアスファルトの方が良かった。今は石畳でよくつまずいてしまう。とても歩きづらいね」と困った顔をしながら語っていた。また、別の 80 代の女性は、まち並みづくりで「町がきれいになる」と前置きしながら、「(景観づくりでできた町並みは) 風情があるんだけどね。でも石畳はやっぱりつまずいて歩きにくい」と話す。80 代の男性は、「石畳に草履が引っ掛かってつまずいた。高齢の人にはやっぱり少し危ないね」と生活上の不便を強調する。80 代の女性も、「石畳は本当に歩きづらいよ。(自分の町の) 石畳はダメ。(行政は) 住民のことを何も考えてないね」と話していた。住民、とくに高齢者たちにとっては石張り舗装された道は歩きづらく、不便を感じているようだ。

また、冬の降雪時に道から雪を取り除く「雪かき」についても、石張り舗装された道への不満の声がどの町においても聞かれた。80 代の男性は「電柱も無くなって町が広くなったし、町もきれいになっていいけど、石畳は住民にとったら都合が悪い。特に雪が降ったら雪かきがスムーズにできない」と話し、40 代の女性は「雪が降ると石畳は住民にとっては本当に迷惑だね。雪かきがすごく大変なんだよ。雨でも滑るし」と話す。前出とは別の 80 代の男性は「石畳はあまり歓迎できない。雪が降ったらとても都合が

悪い」と語り、「町の変化は住民にとって都合が悪いことばかりやわ」と言う。

住民たちは、自分たちの住む町がきれいに装われることには肯定的であったり、積極的である一方で、生活面では、行政が進めるまち並みづくりを全面的に歓迎しているわけではなく、むしろ不満に思っている面もあるのである。報告書の冒頭の「八尾の概要」で見たように、八尾旧町は65歳以上の高齢世代が33.2パーセントを占めて高齢化が著しく進行しているが、高齢者にとっては石畳の道は不便な面があるのである。

また、90代の女性は、「景観を整えても人が来るのはおわらのときだけ。おわらのときだけ町がにぎやかになっても意味がないと思うわ」と、行政が進める通年観光化が必ずしも成功していないことを指摘する。

さらに、行政に対して、住民の自主性を考慮するよう求める声もある。50代の女性は、「町がきれいになるのは住民として嬉しいよ」と話す一方で、「ただ、今の八尾は完全に行政のイメージが強い。これは住民にとっては都合が悪いね。石畳もそうだし、家の外観なんかもう少し譲歩してもらえるといいんだけどね」と語る。さらに、彼女は、「景観づくりをしたら、観光客から見た町はきれいだとか、風情があるだとか良いものばかりに思えるけど、実際に町に住んでいるものからすると外観と利便性も考えて欲しいね」と苦笑いしながら話していた。60代の男性は「行政は八尾の古いまち並みを意識して景観づくりを進めているようだけど、住民の意見はほとんど取り入れられてないと思う」と話し、「もともと八尾は町民の独特の町なのだから行政が一方的に手を加えるのは良くないことだと思うよ」と言う。さらに、彼は「町の人が文化をつくるのだから行政の人はもっと八尾のことを知らないといけない。実際、石畳なんかは歩きにくいって言う声もあるし、雪かきに不都合で、今行政が行っている景観づくりは住民にとってメリットがないよ」と語る。

住民たちは行政が現在に至るまで進めてきた通年観光化のためのまち並みづくりに対して評価する一方で、住民の生活や主体性に配慮してほしいという声は少なくないようである。

3.伝統的な家並みの維持・創出と住民

すでに触れたが、行政は情緒あふれるまち並み景観を創出するために、住宅の格子戸や土塀などの修復補助制度を整備している。補助制度の正式名称は、「八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度」である。

行政が配布している「歴史的な風情ある町なみを目指して」というパンフレットには、この制度の目的は「経年による老朽化、度重なる改修等で八尾らしい、まち並みが消えつつあります。このため通り沿いの伝統的家屋などの修景及び建替・新築時の修景を図るため、工事費の一部を補助」と記してある。

ただし、多くの地方小都市と同様、八尾でも人口減少が進み、商店街が空洞化しつつある。このような現象に伴って、家屋や家並みも変化している。「経年による老朽化」

だけではなく、八尾の町の家屋や家並みそのものが時代の波のなかで変容しているのがある。行政が、伝統的家屋の補修や創出に助成金制度を設けたのは、このような事情があると考えられるが、家屋やまち並みの変容について、住民の語りを紹介したい。

3-1.家屋や家並みの変容

まず、町の全体的な変化について、諏訪町に住む60代の女性は、「今は人が減って活気がない。残ったのは年寄りだけ。若い人たちは下の方（富山駅近郊など）へ行ってしまふ。だから空き家も増えてなんだか寂しくなったよ」とため息混じりに話す。彼女によると、最近の諏訪町には空き家が増えているとのことだった。八尾の概要で述べられているように、旧町は狭い河岸段丘の上にあつて、面積はわずか1平方キロで、ここに多くの家屋が建ち並ぶために間口が狭く奥行きのある家が八尾独特の家屋である。ところが、乗用車が交通手段となっていることもあつて、若い世代は駐車場が確保できるより広い土地に家を建てようと、八尾を離れてしまうという。

また、上新町の住民からの聞き取りでは、商店街に関する話が多くみられた。上新町に嫁いできたという60代の女性は「店が少なくなりましたね。今は10軒くらいしかないんじゃないかな」と話す。若いときに嫁いできてからずっと八尾に住んでいるという90代の女性も「町はさびれたよ。昔は店がいっぱいあつたのにねえ。今じゃ賑やかになるのはおわらの時期くらいだよ」と寂しそうに語っていた。上新町で商店を営む50代の男性もまた、「店が減ったなあ。うちはまだやってるけど、店をたたんだ人はいるよ。おわらの時は少し繁盛するけど、普段町にあんな大勢の人がいることはないからなあ」という。

さらに、80代の男性は「上新町は昔商店街で店がたくさんあつたのに今は店が少なくなつてしまったよ」と身振り手振りを加えて、昔、上新町で商店街が栄えていたことを話していた。

報告書の冒頭の八尾の概要でもふれられているが、このように、旧町では人口減少や商店街の空洞化が進行している。そのために、空屋が増え、住民のなかには家屋を改築する人も増えている。

70代の女性は、「人が減って空き家が増えた」と言い、おわらの時期だけ八尾の外から人がやってきて空き屋を借りて店を開いていると話す。また、西町に住む60代の男性は、「八尾の町はもともと間口が狭くてウナギの寝床みたいに家が並んでいたんだよ。西町は古い町でね、昔は豪商がたくさんおつた。しかし今は人が減つたね。空き家も増えたし」と語る。

さらに、70代の男性は、「八尾の家は元々間口が狭かつたから、最近はず隣の空き家を買って家の土地を横に広げる人が多い。皆、車を持つようになって置く場所がないから、買って取った土地を駐車場にしとる」と話す。50代の女性も、「昔は1軒1軒の玄関がとても狭かつたけど最近はず隣の土地を買って家を広げる人が多くなつたかな。うち

も隣家の土地を駐車場にした」と語る。彼女はもともと隣家に土地を貸していたのだが、隣家の住民が八尾の外に引っ越したので土地を広げて家を改築して、駐車場もつくったという。彼女は、「家が広くなって住みやすくなったから土地を広げてよかった」と話していた。

人口減少、商店街の空洞化、乗用車の普及などによって、八尾旧町の伝統的ないわゆる「ウナギの寝床」のような家が立ち並ぶ家並みが姿を消しつつある。行政が通年観光の資源として古い家並みを保つために、家屋の補修や改築に助成金制度を設けたのはこのような背景があると考えられる。

3-2.家屋の補修や改築への助成

次は、行政がおこなっている助成金制度について見てみよう。

八尾行政センターの資料「八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度」によると、助成金制度は、「家屋を八尾の伝統的なまち並みに調和する外観とするための、黒瓦や外壁、格子などの通りから見える部分の工事を対象として助成する」というもので、この補助制度が適用される対象は表1に記した5つに分かれている。

表1.補助の対象と補助の目的

項目名	補助対象	修景補助の目的
伝統的家屋	昭和初期以前の伝統的家屋	歴史的な景観にふさわしい、質の高い伝統的家屋の表構えの維持、保全を図る。
一般建築物等	伝統的家屋以外の建築物	歴史的なまち並みに調和した家屋の表構えを創出する。
土蔵	土蔵	越中八尾観光会館（曳山展示館）前通り沿いの土蔵の景観の維持、保全を図る。
石垣（柳清水線）沿線家屋	石垣の通りの家屋	自然石を活用した井田川沿いの石積み護岸や急傾斜地の石垣上部に調和した景観形成を図る。
空家等活性化工事	空家、空き店舗など	空家、空き店舗になっている建築物を店舗、飲食店等にするため修繕又は模様替えし、まち並みの活性化を図る。

（八尾総合行政センター『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度』をもとに作成）

ここでは、現在の住民が多く住む現代的な住宅である「一般建築物等」に焦点をあてて、補助制度を詳しくみてみよう。一般建築物を対象とした補助の内容は表2のとおりである。

表 2.一般建築物等の補助内容

	H19－H21	H22－H23
建築物外観修景	補助率 70%	補助率 70%
	限度額 300 万円	限度額 150 万円
格子等修景	補助率 90%	補助率 90%
	限度額 100 万円	限度額 50 万円
外構物修景	補助率 70%	補助率 70%
	限度額 100 万円	限度額 50 万円

(八尾総合行政センター建設課『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度』より引用)

このように、補助が適用される部分は、家屋そのものの補助にあたる「建築物外観修景」、「格子等修景」、門や堀あるいは敷地内の舗装などを対象にする「外構物修景」の3つである。また、八尾総合行政センターの建設課によれば、2007（平成 19）年から2009（平成 21）年と2010（平成 22）年から2011（平成 23）年までの期間の補助限度額や補助率が違うのは、「まち並みを早く整備するために、（前半の補助を）手厚くして町民が申請しやすいようにした」と言う。しかし、このような対策はあまり効果がなかったというが、これについては後に触れることにする。

補助が適用されている区域は、図の太線で区切られた旧町の諏訪町、上新町、西町、鏡町の4つの町である。



図 補助対象区域（『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度』より）

ただし、特例として、東町にある北陸銀行八尾支店（写真 5）は、助成金の補助を受けた。建設課によると、区域外でも公共性のある建物については助成金がおりの場合があり、北陸銀行の外装は八尾のまち並みに合わせて 2008（平成 20）年に改築された。



写真 5.特例として助成金が適用された北陸銀行八尾支店

助成金の対象区域が4つの町に限定しているのは、行政が住民対象におこなったアンケートの結果に拠るという。建設課の男性は「2006（平成18）年に八尾の10地区内で、アンケート（自分の家を修景するつもりがあるのか否かについて）を実施し、上位4つの町を補助の対象にしたら偶然にも旧町の中心に固まっていた。上新町、諏訪町、鏡町は最初から補助を考えていたが、アンケートで西町も上位に入ったので（補助の対象に）入れた」と話す。

もともと上新町、諏訪町、鏡町を補助の対象として考えていた理由については、「伝統的な家屋が多い諏訪町を中心にして、隣接する上新町、鏡町の3町を補助対象にしようと考えていた」という。こういった理由で、4つの町が選定されて補助対象区域となったが、ただし、4つの町の全ての住宅の改修が補助対象になるわけではない。助成金の対象となるためには、改修が表3と表4に示した厳しい基準を満たしていなければならない。

表3.建築物外観の修景補助基準

項目		修景補助基準	
建築物外観	位置	外壁の位置は、町並みと揃える。1階の壁面は、道路境界線から2メートル以下とする。 建築物の外壁が道路境界線から後退している場合は、塙塙、または木製のゲート等を設けるなど町屋の連続性を配慮する。	
	高さ・階数	高さは、平均地盤面から10メートル以下とする。 表構えの地上階数は、2以下とする。	
	形態意匠	屋根	屋根の形は、切り妻平入りとする。 屋根材は、黒瓦とし、屋根勾配は3.5/10～4.5/10とする。
		軒の出	出し梁や腕木などにより1.05～1.35メートル程度の長さの軒の出を設ける。 腕木の木鼻には雲を彫らない。
		庇タイプ	1階部分に、600ミリメートル～900ミリメートル程度の庇を設ける。 屋根材は、木質厚板、または鋼版葺きとする。 腕木の木鼻には雲を彫らない のれん板を設ける。
		下屋タイプ	屋根材は、黒瓦で葺く。
		外壁	白漆喰塗り、下見板張りとする。 外壁の色は、白色、茶色、濃い茶色を基調色とする。
		2階の開口部	木製の格子及び手摺を設ける。
		1階の開口部	出入口は、木製またはカラーサッシ（茶系統）で格子戸を設ける。 出入り口以外は、木製の千本格子を設ける。 店舗、飲食店等の1階の開口部は、木製の切子格子、酒屋格子等を設ける。
車庫	表構えの通りに面して車庫を設ける時は、折れ戸、引き違い戸または引戸等を設ける。		

（八尾総合行政センター『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度』をもとに作成）

表3を見ると、補助の基準は、建物の位置、高さ、階数や屋根など、細かく基準が設定されている。高さ、階数の項目を例に見ると、建物の高さは平均地盤面から10メートル以下や、地上階数は2以下とするとあるように、これらの基準はすべて満たした改築でないと、助成金は適用されないのである。

次に表4で門、塙、敷地内の舗装などの外構物について補助基準を見ていく。

表4.外構物の修景補助基準

外 構 物	門、塀	木製板張りとする。
	屋外広告物	自家用広告物で、木製看板、のれんとする。 屋上広告は設置しない。 外壁から張り出して設置する広告物は、1建築物につき1箇所までとする。また、外壁面からの張り出しは1メートル以内とする。 広告物全体の合計表示面積は、7平方メートル以下とする。 地色は、青、黄、赤の原色を使わない。 点滅灯、回転灯及びネオン管等を使用しない。
	敷地内の舗装	通りに面する部分を、豆砂利コンクリート、タタキ風土間、敷石等で仕上げる。
	設備	屋外の設備機器等は、通りから見えにくい位置に置く。 やむを得ない場合は、木製の紙面格子で覆う。
	駐車場	通り沿いの駐車場敷地では、木製板塀、または木製ゲート等を設ける。
その他	審査会に諮って認められる建築物についてはこの限りではない	

(八尾総合行政センター『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度』をもとに作成)

外構物の補助基準も、表4に示したように、細かく設定されている。改築がこれら全ての基準を満たさなければ、助成金制度は適用されない。また、表2で示したように、助成金がおりの場合でも限度額や補助率が決められているので、助成金を受ける住民は多くはない。建設課によれば、「(助成金制度の適用は) 実際は伸び悩んでいる。相談は50件近くあったのだけど、基準を満たしていなどの理由により、補助されたのは(2008年、7月31日時点で) 25件だった」という。

行政は早めに景観づくりを促進するために、近い年度の限度額を多めに設定して住民の申請を促すようにしたが、補助を受けるために設定された基準を満たすことが難しいために助成金制度の適用が伸び悩んでいるのだろう。

3-3.家屋の補修や改築についての助成の現状と住民の反応

建設課によると、2008年7月31日の時点で、八尾で助成金制度が適用されて建てられた家の軒数は、西町で2軒、鏡町で3軒、上新町で8軒、諏訪町で11軒である。

住民は家並み整備のための助成金制度に対してどう認識しているのだろうか。住民の語りを紹介したい。

まず、改築をおこなった動機についての住民の話をまとめてみる。ある80代の男性は、助成金制度がなかった十数年前に八尾の伝統的な家屋に改築したが、「直したいという気持ちがあっても金がなくちゃ(できない)」と語り、助成金制度の施行が遅かつ

たと言う。また、60代の女性は「個人的に（古い八尾の家屋）が好きだったので建てかえた」と話し、「皆が古き良き伝統を守っていく上で、伝統的な家作りはいいと思う」と語っていた。助成金を利用して家を改築した別の60代の女性は、「今年のおわらに間に合うように建て直した」と言う。

このように、八尾旧町の景観を意識して、自主的に八尾の伝統的な家に改修する人たちがいる一方で、周囲に合わせたため、あるいは行政からの働きかけを受けたためという理由で家を改築した人たちも少なくない。

たとえば、30代のある女性は、行政（当時は町）からの補助を受けて改築したのは「周りに合わせないといけないかと思い改築した」からだと話す。50代の女性は「周りも建てると言ったので便乗して助成金で建てた」と言う。別の50代の女性は「15年前に、設計が終わって建て直すときになって、町から八尾の伝統的な家作りにしてくれと要望があって、それを受けて建て直した」と話す。

以上から、行政が意図する八尾旧町の「伝統的」な家並みづくりに自主的に加わる住民と、家並みづくりをそれほど意識せずに周囲や行政との関係で家屋の改修をおこなっている住民の双方がいることがわかる。

それでは、行政が施行している助成金制度について、住民たちはどのように考えているのだろうか。まず、肯定的に捉えている語りから見てみよう。上述のおわらに間に合わせるように立て替えたと言った女性は、助成金制度による改築は「まち並みに合わせてなのでいいことだと思う」と語っていた。70代の女性は「(助成金は) いいと思う。おわらもあるし、曳山もある。だからまち並みを整えることはいいと思う」と話す。2つの語りにも共通していることは、おわら風の盆や曳山祭といった行事に似合うように旧町の景観を創るためには助成金は有効な制度だと考えていることである。

しかし、一方で、行政の助成金制度や家並み整備について、家並みに個性がなくなるという批判的な意見も少なくない。このことについて、まず、実際に助成金を利用して建てられた家の写真6と写真7を見てみよう。



写真 6.助成金を利用して建てた民家



写真 7.助成金を利用して建てた喫茶店

写真 6 と写真 7 の家屋は、どちらも助成金を利用して建てられた。写真 6 は民家で、写真 7 は喫茶店であるが、両方を比べてみるとどちらもよく似たようなつくりをしている。民家と喫茶店というまったく異なる家屋であるのに、一見すると同じ家のようにも見えるつくりで、補助を受けるために満たす基準が画一的であることが、両方の家のつくりを見るとよく分かる。

また、写真 7 の喫茶店については、前出の外構物の修景補助基準のなかの「屋外広告物」の項に「自家用広告物で、木製看板、のれんとする。屋上広告は設置しない」と定められているため、人目を引くための看板もなく、地域外からやってくる人間には喫茶店であるという事は分かりづらい。

ある 50 代の男性は「寿司屋と喫茶店が補助で改修したが、(見た目は) 同じでどっちがどっかわからなくなった」という。写真 7 の喫茶店の近くには助成金を利用して建てられた寿司屋があるのだが、建物の外観からはどちらが喫茶店でどちらが寿司屋かを判別することは難しい。この男性は、八尾のなかでも築歴が長い古い家屋に住んでいるが、「行政のやり方は形だけ枠にはめて面白くない」と言い、似たような家ばかりになってしまうと話す。また、現在ある形で古い家を保存することも行政は考えるべきだと言う。

同じように古い家屋に住む 70 代の男性は、「同じようなまち並みをしている所は全国にあるのでそんなに意味がないのでは」と言い、「もっと他に特徴があればいいのではないか」と語る。40 代の女性も、「もし、(助成金の) 許可が下りても (家の) 個性がなくなる。面白みがなくなる」と話す。助成金を利用して改築した 60 代の女性は、もともと助成金を申請することは考えてなかったが、「改築中に助成金の話が入って、助

成金を出してもらうために基準に合わせた」と話し、「助成金がでるのはいいと思う」と述べながら、「でも、もっと個性があってもいいのではないか。面白味がない」と語る。旅館を営む50代の女性も「(助成金は) いいことだと思う」と助成金の意義を認めながら、「嫌な人は自分で好きなように建てればいい。同じ型ばかりで建てても味気ない」と話す。八尾の住民のなかには、助成金制度は評価しながら、助成金を利用すると自由な家の設計ができないことに否定的な評価を下す人たちもいるのである。

写真8は、先ほどの写真6の助成金を利用して改築した家屋であるが、これと写真9の助成金を利用せずに建てられた家屋を比較してみよう。



写真8.助成金を利用した家



写真9.助成金を利用していない家

写真8の家屋は、道路沿いに位置し、建築物外観の修景補助基準(表3)の位置の項目の「外壁をまち並みと揃える。1階の外壁は道路境界線から2メートル以下とする」という基準に拠って建てられている。また、階数の上限である2階の家屋となっている。これに対して、写真9の助成金を使わずに建てられた家は、3階建てで建築されている。写真9の家も八尾の家屋の様式である屋根が二つの斜面が本を伏せたような形状をしている切妻造であるが、写真8の家屋が基準通りの屋根の棟(もっとも高い稜線)と平行な方向である「平」に出入り口があるのに対して、棟と垂直の方向の「妻」側に出入り口を作っている。修景補助基準に従って家を改築していると、すでに見たように、民家でも喫茶店でも似たような家が建ち並ぶことになるが、助成金を受けずに家を改築すると八尾の伝統的なつくりの家屋であっても、比較的住民の希望を多く取り入れることができる。

旧町の住民のなかには、助成金制度の意義は認めながら、枠にはめる基準の適用で似たような家屋が立ち並んでしまっ町個性や魅力がなくなってしまうことを心配する人たちは少なくないし、写真8のように自由に自分の家を設計した例も少なくない。

60代の女性は「(助成金は) いいことだと思う」と話したあと、「しかし色々と制限があるのでちょっとやりにくい」とも語った。自分たちの住む家を自分たちの思い描く家に改築するために、「自己負担で改築を行う人もいる」と60代の男性は言う。

さらに、観光客が「(町中を) 全部同じ格子になったら客が来なくなる。同じまち並みにしたら面白みがなくなる」ので、「今のような3割程度が格子のある古風な家だというぐらいがいいのではないか」と話していた、ということも住民から聞き取った。行政が「伝統的」な家並み保存や整備のために画一的に基準を適用することで、似たような家屋が建ち並ぶ観光写真向けのまち並みになってしまうという危惧が住民のなかにあると思われる。また、観光客のなかにも、家並みを揃えるとかえって八尾の魅力が失われると感じている人もいるようである。

また、改築時や生活する上で、助成金制度に対する不満も少なくない。ある50代の女性は、「もう少し(補助の金額を) 多くあげてほしい。もう少し多くもらえれば、ちゃんと立て直せる人がいるのに」と補助金額が小さいことを指摘する。70代の男性も、「助成金が出ても、建て直し額が高いため、皆建て直しにくい」と語る。この男性は「モルタル、トタンなどで建てるより伝統的なつくりの方が高くつく。維持費も大変だ」と話す。60代の女性は「ある程度向こう(行政) のいいなりにしないとイケない。お金も出さなくてはイケない。もったいなすぎる。友人は建て直ちに700万かかって、そのうち250万分しか助成金がでなかった」という。さらに彼女は「(行政から) 八尾らしい家を作ってくれと言われても、やっぱり維持管理の費用がかかる」とも話した。

これらの語りから、改築にかかる費用や伝統的な造りの家の維持費用などの点から、行政の厳しい基準を満たす努力に対して受けられる補助が相対的に小さいことについての不満が一部の住民の間にあることが分かる。

4.まとめと考察

これまで見てきたように、八尾旧町では古い町並みを再生したり、新しく創りあげたりするために、行政は、道路の舗装や無電柱化、建築物等の外観統一のための助成金制度の施行など、さまざまな景観整備の施策をおこなってきている。これに対して、きれいに揃った町並みができて町の活性化につながると肯定的に評価する意見がある一方で、行政の画一的な景観整備は住民の生活から遊離していると指摘する人たちも少なくない。

石張り舗装された石畳の道は、観光客だけでなく住民にとっても美しいものと感じられているが、しかし、「八尾の概要」で見たように、住民の約3分の1が65歳以上の高齢者という超高齢化が進行している旧町では、石畳の道は歩きにくく、積雪時の雪かきには不便である。

また、おわら風の盆や曳山祭のイメージに沿うような町並みを創るための改築に対する助成金制度についても、制度自体は評価されているが、厳しい基準のために助成金を

利用すると自分の家を自分の生活や希望にしたがって改築することができず、同じような家しか造れないという不満がある。

行政は通年観光などの地域振興の一環として八尾の伝統文化を活かした町並みづくりを進めてきているが、そのような施策は、住民たちが自分たちの生活から遊離してしまっただけの観光客向けの人工的な町並みづくりと感じてしまう一面を持っている。八尾旧町は、江戸時代から町民によって文化が創られてきた町であり、住民が文化を担ってきた町である。住民の主体性や生活の自由度を認めないと、かえって、町民の町としての八尾の活気が失われてしまう恐れがあると考えられる。今後、住民と行政の間の積極的な対話を通して、観光客などの外部を指向する景観づくりのなかに、住民の実際の生活と自主性に根ざした景観づくりの側面を取り入れていく必要があると考えられる。

文献

月刊地域づくり「みちの整備で歴史のまちづくり」ホームページ、富山県八尾町五感で味わえる「おわら」のまち石畳、格子、白壁が調和

<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/monthly/9808/html/t06.htm>

八尾総合行政センター建設課、2000年、『やつおの住まい』

八尾総合行政センター建設課、2007年、『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度～歴史的な風情あるまち並みを目指して～』

4. 「おわら風の盆」と商店を営む人々の関係

南 卓宏

1. 調査テーマと調査について

八尾の観光化についてはこれまでの節で詳しく述べられているが、この報告では観光化が進む状況に対して、八尾で商店を営む人たちがどのように対応しているのかについて、おわら風の盆の行事に焦点をあてて明らかにしたい。商品を販売する商業従事者としての面と八尾の住民としての面の二つの側面から、商店の人々のおわら風の盆への関わり方を見てみたい。

調査は、旧町の新町と旧町外の^{ふくじま}福島地区を中心として、小売り商店を営む人たちを対象に聞き取りでおこなった。

新町は、八尾町の旧町内の一つであり、井田川の河岸段丘に位置している。新町には越中八尾観光会館があり、「日本の道百選」に選ばれた諏訪町本通りなどとともに、観光客が多く訪れるスポットとなっている。福島は平野部に位置し、八尾町と富山市中心部を結ぶ高山本線の JR 越中八尾駅付近一帯の地域である。鉄道を利用しておわらに訪れる観光客の多くは同駅を利用するので、9月はじめのおわら期間中に福島は多くの観光客で賑わう。図に示したように、JR の駅に面した通りは多くの観光客であふれる。また、おわら期間中は下流の「坂のまち大橋」が封鎖されるので、観光客が旧町に行くのに渡る十三石橋に至る通りも観光客で賑わう。



図 福島を観光客で賑わう通り（黒線）
（Yahoo 地図をもとに作成）

なお、聞き取りをおこなった人たちは、外見から判断して 10 代から 20 代に見える人を青年世代、30 代から 50 代に見える人を中年世代、60 代以上に見える人を老年世代として 3 つの世代に区分した。

2. 商店とおわら風の盆の経済的関係

八尾町の地元の商店のなかには、年間を通しておわらをモチーフとした土産物を販売している店もあるが、おわら期間、前夜祭期間以外の時期に土産物を主力商品としている店は少ない。しかし、おわら風の盆の期間中は、食料品、衣料品、靴、文房具といった日用品を取り扱っている商店も土産物を前面に陳列して観光客に販売する。また、本祭期間中には、旧町内や福島で、地域外からやってきた露天商の店や八尾で「にわか店」と呼ばれる店が観光客を相手に土産物などを売る。「にわか店」とは、空き家を借りたり、パイプテントで店を開いたりして、おわらの間だけ営業する店のことである。

2-1. 前夜祭期間とおわら期間の地元の商店

9 月 1 日から始まるおわら風の盆の前に、町内ごとにおわらを披露する前夜祭が 8 月下旬に開かれる。調査をおこなった 2008（平成 20）年 8 月の上新町の前夜祭には多く

の観光客が訪れていた。前夜祭の間、上新町の地元の商店の多くは店を開けており、そのうちのいくらかの店は土産物を販売していた。たとえば、ある商店は、店頭に机を置いて観光客向けのうちわ、短冊、色紙などを並べ、店主はその横に椅子を置いておわらを観ながら店番をしていた。また、観光客向けに軽食や飲み物などを販売する店もあった。

前夜祭は午後 10 時までと決まっており、午後 10 時に前夜祭が終了すると、上新町の商店もいっせいに閉店した。また、前夜祭を実施する町の近隣の町にも観光客が流れることがあるので、近隣の町の商店のいくらかは午後 10 時まで店を開いていることがある。また、上新町や諏訪町などの前夜祭が土曜日や日曜日に実施される場合は、狭い範囲に多くの観光客が集中することが予想されるので、観光客を分散させるために、近隣の町と合同でおわらを披露する。つまり、一つの町だけで前夜祭をおこなった場合、多くの観光客が過剰に集まってしまうので、観光客を分散させるために、二つの町が合同で前夜祭を催すことが多いということである。そのような場合には、その二つの町の商店は 10 時まで店を開けるが、同時に隣接する他の町の商店のいくつかも店を開けておく。

福島の前夜祭の経済的な影響は、上新町などの旧町内の前夜祭とは違って、限定的である。JR 越中八尾駅から少し離れたところに店をかまえる老年女性は、「福島の前夜祭は駅前でやるから、このあたりは前夜祭（の時の観光客）とは関係ない」と言った。また、別の老年女性は、「前夜祭の時に使用されるおわらを披露するためのステージ、輪踊りがおこなわれる公民館（八尾 1 区コミュニティーセンター）、帰りのバスの間を客は流れるだけなので、（土産物を）売らないし、（土産物も通常の商品も）売れない」と話した。つまり、福島では、前夜祭のときに観光客が集まる場所や観光客の移動に直接に関わらない店が多いので、土産物を置く店は少ない。

9 月に入り、おわら風の盆が始まると、旧町内すべてと福島でおわらが披露され、前夜祭のときよりも大勢の観光客が押し寄せてくる。この観光客を相手に、地元の商店の多くが店を開く。普段から土産物を置いている店もそうでない店も、土産物を主力商品として店頭に並べ、観光客に販売する。商店の閉店時間は店によって異なるが、おわら期間中には深夜になっても多くの観光客が街中に見られるため、夜遅くまで開いている地元の商店もある。上新町の商店のある女性は、「おわら期間には夜遅くまで開いている地元の商店もあるけど、そこそこ（の時間）で（店を）を切り上げるところが多い」と話した。また、多すぎる観光客を嫌い、「（おわら期間中は）通常よりも早く（店を）閉める」という商店もあった。

2-2.おわら期間中に販売される土産物

おわら期間中に地元の商店が観光客に販売する土産物について述べる。土産物にはおわらをモチーフとしたものが多く、海産物などの富山県内の名産品にちなんだものも見

られた。2008年のおわら期間中に販売されていた土産物のなかでも、Tシャツ、箱入り菓子、手拭い、タオル、ハンカチーフ、うちわ、おわら編笠、草履、巾着、和紙製品（人形・パネルなど）、キーホルダー、ストラップ、DVD、CD、ポスター、カレンダー、ガイドブックなどは多くの商店で見ることができた。他にも、タペストリー、のれん、木製製品（人形・はがきなど）、地酒、もんぺなどの衣料品、手提げ鞆、小物入れ、切手、短冊、風呂敷、便せん、化粧品、扇子、手編み鞆、竹細工、箸、耳かき、ネクタイなどいろいろな土産物が地元の商店で販売されていた。

土産物の他にも、ペットボトル飲料水、生ビール、かき氷、おにぎりなどの軽食や飲み物、雨傘などが地元の商店によって販売されていた。

2-3. 地元の商店の経済的利益

八尾町の地元の商店の人々の、おわら風の盆に対する経済的な期待や実感は確かにあるようで、「3日間で半年分、1年分儲ける」、「お札を数えすぎて手が痛い」、「お金を数えきれずに貯めている」とか冗談交じりに言い合うような会話が聞かれた。ある喫茶店の女性は、「うちの店は（おわら期間の）3日間で1月分儲かる」、「1リットルしか入らない容器に、10リットルの水を入れようとしても、こぼれてしまうでしょう。おわらの時のお客さんもそんな感じ。地元の商店にとっては御の字」と話す。また、別の商店の女性は、「おわらでの売り上げは、1年間の売り上げの30パーセントくらいにあたる」と話していた。

このように、おわらによって十分に経済的利益を得ていると感じている商店がある一方で、そうでないところもある。ある商店の男性は、「おわらの時期も儲からない」と言い、別の商店の女性は「おわら期間中は（自分の店で）土産物を売っているけれど、利益が少ないため来年から土産物を売ることがやめようかと思っている」と話していた。

このように、おわら風の盆による経済的な利益を実感している商店とそうでない商店があるようだ。しかし、全体としてみると、おわら風の盆の期間中の売り上げは減ってきているようである。ある女性は、「少し前は何でも売れたが、今はそんなに売れない。今の観光客は簡単にはものを買わなくなったし、財布の紐が固い」と観光客の購買意欲が減退していると言う。また、「おわら期間中の売り上げは、最近（近年）減ってきている。昔は（おわら期間の）3日間を通して観光客が多かった。平日、休日、朝からの客、昼からの客も関係なく、いつも観光客が多かった。でも、今では平日の観光客は明らかに少なくなった」と話す。この章の第1節「八尾の観光化と地域振興」で触れられているように、近年では、平日におわら風の盆が開かれると、観光客数は数万人単位で減り、それが売り上げ減少につながるのである。

ほかにも、「八尾では土産を買わず、富山市中心部などの宿泊先で（土産を）買う人も多い」と話す商店の人もおり、おわらを観にきた観光客が八尾以外の地域で土産物を買って帰ることが、おわらの時期の土産物の売り上げに影響を与えているようである。

2-4. 「にわか店」

おわら風の盆の期間である9月1日から3日には、八尾町内で「にわか店」が店を開く。この「にわか店」に対して、ある女性は、「八尾町外の間人が（八尾町の）空き家などを借りて（おわらの時期に）店を出す。地元の商店の人のなかには、「八尾のおわらなのに、誰のためのおわらなのか」、「八尾町外の業者が、“おわら”の名を使って商標を登録してしまう」、「八尾よりも他（の地域）にお金が落ちる」などと、「にわか店」や八尾町外の業者が、おわらを利用して利益を得ていることに対する不快感を示す人もいる。また、2008（平成20）年のおわら期間中に、八尾で作られた土産物を買っていた商店の女性は、「八尾の人が新しいタイプの土産物を作ると、そのアイデアを“にわか店”が盗んで、そっくりなものを作っておわらで売る」と話し、まるで「たちごっこ」だと語った。このように、八尾の商店の人たちのなかには、八尾産の土産物を真似て、同じような土産物を作る「にわか店」に困っている人たちがいることがわかった。ただし、これらの語りとは対照的に、「“にわか店”があってもいいと思う。いろんな店があったほうが、（祭りの）雰囲気が出ていい」と話す地元商店の女性もいる。

3. 八尾住民としてのおわら風の盆との関わり

地元の商店の人たちは、商業従事者としておわら風の盆に関わっていると同時に、八尾の地元住民として、おわら風の盆に深く関わっている。ここでは、八尾町の商店の人々が、八尾町の住民としておわら風の盆とどのような関わりを持っているのかについて見ていく。

3-1. 世代による違い

八尾町の住民のなかには、おわらの芸能やおわら風の盆への参加に情熱を傾けている人がいる。ある商店の老年女性は、このような人たちのことを、おわらに狂っているというように表現していた。彼女によれば、とくに若い人にそのような人が多いという。彼女も若いときは夜中に踊りに行っていたというが、年をとるとつらいと言う。また、上新町のある老年女性は、「（地元の商店の人のなかには）おわらについていく人もいるけど、若いうちだけ。年をとると（おわらについて）いけない」と語った。また、この女性が、「（若い人には）赤ん坊を寝かせてから、おわらについていく人もいる」と言うと、別の女性は、「私は、若いころに、赤ん坊を放ったままおわらについていたり、店番を放っておわらについていたりして叱られたことがある」と言って笑った。

ただし、別の老年女性によると、若い人だけでなく、年をとった人にもおわらに情熱的な人がいるという。この女性は、おわらに大きな情熱を傾けている人を前出の女性と同様に、「おわらに“狂っている”人」と表現し、「若い時におわらに“狂っている”人がそのまま年をとって、年寄りの“狂った”人になる。そういう人たちがいるからこそ、おわらが（毎年）続く」と笑いながら話した。この女性の夫は三味線の演奏者であるが、

「(夫は) 八尾の住民のなかでも最もおわらに“狂っている”人のうちの一人ではないかと思う」と言う。

この女性によれば、25才を過ぎてもおわらに関わり続けたい人は、(踊り子から) 歌い手や三味線・胡弓の地方に転向するそうだ。また、「若い人は始めからおわらに本気であるというわけではない。若い人は“目立ちたい”というところから、おわらに入る」と言い、「年をとっても“おわらを追及”し続けたなら、本当に“狂っている”といえると思う」と語る。目立ちたいという思いから始めて、そういう思いがなくなっても続けていれば、本当のおわら好きということである。

3-2.出自による違い

おわらに対する思いや情熱に影響を与えているのは世代だけではなく、出自も大きく関わっている。ある老年女性は、「嫁いで八尾町にやってきた人のなかには、おわらを楽しんでいない人もきつというと思う。子供は、八尾で育った正真正銘の八尾の人間だから、おわらに参加するのが(子供にとって) 当たり前のことだし、楽しいのだと思う」と語る。また、別の商店の老年女性も、「八尾に嫁に来てから数十年経つが、おわらは好きではない」と言っていた。さらに、ある結婚して八尾に住むようになった中年女性は、「八尾で生まれ育って、小さいときからおわらを踊っている人、小さいときからおわらを耳にしている人のほうが、おわらには積極的。周りに顔見知りも多いし(積極的になれるのだろう)」と言い、「(私は) よそから(嫁いで) 来て(おわらを) 踊ることもできないし、歌うこともできない。(私は) 店の前を(町流しが) 通っていくのを観ているだけ」と話す。このように、八尾出身でない人たちのなかには、幼少時からのおわらとの関わりがないために、おわらに対して親しみや情熱などを持っていない人もいる。

ただし、次のような例もある。よそから旧町内に嫁いできたというある老年女性は、「私は、八尾の出身ではないが、40年前ほど前に八尾高校を卒業した。(高校に在籍していたころ) 当時開催された富山国体のために高校でおわらを教えられて、開会式でおわらのマスゲームをした」と話し、「(おわら風の盆は) 楽しみ」と言う。おわらや土産物について話すときのこの女性の生き生きとした表情から、おわらに対する情熱が強く感じられたが、若い時代におわらに触れていると、八尾の出身でなくても、おわらへの愛着が生まれるのである。

3-3.性別による違い

商店を営む人たちのなかには、おわら期間中の忙しさが原因となって、おわらに興味を持たない人もいる。^{じかた}地方の多くは男性が担当するので、おわら期間や前夜祭がおこなわれる時には男性は家を空けることが多く、店番は女性がおこなう場合が多い。ある商

店の女性は、「(おわら期間の) 3 日間は、女性のアルバイトを雇う。親戚と嫁に行った娘にも (店番などを) 手伝ってもらったりする」と忙しさを強調し、「店番があるから (私がおわらを見に) 出るわけにはいかない」と話す。また、別の商店の女性も、「男の人は三味線とか胡弓とかするから、(男は) みんな地方で (おわら期間の) 3 日間は出ていく」と言い、やはり、「アルバイトを雇ったり、姉妹や親戚などを呼んだりして店番や家事などをする」と語る。この女性によれば、おわら期間中は、家に泊めているお客さんの世話や、家事、店番などに忙しくて、おわらには興味を持つことができないという。この女性は、「(私と同じような立場の) 女性が (おわらに) 興味を持ってないことは往々にあると思う」と言い、それは「たんに (おわらが) 好きとか嫌いとかの問題ではない」と語る。このように、商店を営む女性のなかには、おわら期間中、あまりに忙しいために、おわらに関心を持ちにくいという人がいる。逆に、商店の男性たちのなかには、経済的な利益を得る機会であるのに、店を女性任せにして、自分はおわらに参加するという人が少なくない。

3-4. 観光客に対する認識

地元の商店の人たちと観光客との関係は、商業的なものだけに留まらない。地元の商店の人たちは地元の八尾の住民としても、全国からやってくる観光客と関わりを持つ。

鏡町の商店のある老年女性は、店の近くのアスファルト製の階段に座る観光客に段ボールとガムテープを渡し、ダンボールを重ねて地面に貼って座布団の代わりに使うように勧めているという。この女性は、「観光客には年配の人も多いし、尻が冷たくて痛いだろうと思って (段ボールなどを貸す)。旅の人でも、うれしいと思ってくれると (私も) うれしいから」と話していた。また、ある呉服店の女性は、「毎年よそから来て八尾でおわらを踊るリピーターの人たちの着物を洗濯して、翌年 (のおわらの時期) まで保管している。着物の持ち主から洗濯代はもらっているが、保管は善意でやっている」と話していた。どちらの女性の行動にも、観光客におわらを充分に楽しんでもらいたいという思いがこめられている。このように、地元の商店の人たちには、観光客を気遣い、積極的に助ける人もいる。

一方で、観光客のマナーの悪さが、地元の商店の人々に良くない印象を与えている例もある。上新町のある老年女性は、「最近の人は不自由ないからねえ (なかには自分勝手な観光客もいる)」と言い、「(観光客のなかには、おわらを) 歌いたがる人がいて、“どうしても歌わせてくれ” と頼みこんで、歌わせてもらっていた。こういう人は好きになれない」と話し、わがままな観光客の存在に少し不満を感じているようだった。また、福島のある女性は、「(観光客が多く来ても) 店は困らないけど、“(混みすぎて) おわらがみられない” っていう苦情を聞きたくないだけ」と語り、八尾側に苦情を言う観光客に少し困っているようだった。

以上のように、地元の商店の人々が観光客を大切な「お客」として扱おうとしている

一方で、観光客のマナーの悪さやわがままな態度に嫌気がさしている人たちもいるということがわかる。

4.まとめ

おわらと商店の経済的関係については、おわらによる経済的な利益を十分に享受していると感じている商店がある一方で、そうではない商店がある。ただし、近年では、全体としては売り上げが減少していると感じている人が多い。

商店を営む人々の地元住民としてのおわらの関わり方や情熱の濃淡は、個人の世代や出自が関係していることがわかった。また商店によっては、男性が女性に店番をまかせておわらに参加するという店が少なくない。

観光客に対しては、八尾への「客」としてもてなす一方で、マナーの悪い観光客には不快感を抱いている。

八尾町の商店の人々とおわらとの関係は、たんに経済的な関係であるだけでなく、おわらを支える地元住民としての関係もあり、多面的である。また、世代や出自、性別によって、おわらとの関係は多様である。

5. 「風の市」を通した町の活性化

伊藤 岳大

1. テーマと調査方法

富山市八尾町は、5月の「曳山祭」と9月の「おわら風の盆」で多くの観光客を集める町である。特に「おわら風の盆」には多くの観光客が訪れるが、それ以外の時期の観光客はそれほど多くはない。そこで、2003（平成15）年から、祭のない時期にも観光客を誘致する通年観光化の試みの1つとして、旧町内の上新町で「なりひら風の市」というイベントを開くようになった。このイベントは、観光客を誘致するとともに、人口減少や商店街の空洞化が進む八尾を、「地産地消」のスローガンのもとに地域内の交流をはかって地域の活性化をはかるといふ地域振興も目的としている。つまり、「おわら風の盆」というイベントは、観光客誘致と地域内交流の両面から地域を振興させるという役割を持っているのである。

この報告ではこのイベントが実際に八尾の地域振興にどのような影響を与えているのかについて、住民からの聞き取りをもとに記述し考察する。

調査では、「なりひら風の市」を手伝いながら風の市の様子を観察し、このイベントを主催している人たちや出店者、八尾旧町の商店街の人たち、八尾旧町とJR越中八尾駅前の地区である福島の住民、イベントに訪れた客を対象に聞き込みをおこなった。

2. 「なりひら風の市」の概要

八尾旧町の上新町の商店街では、1999（平成11）年に「商店街等活性化先進事業」の一事業として、実験的に、空いている店舗を借り上げて創業者などに貸し出す事業をおこなった。さらに、上新町商工振興協同組合は、「通年型観光商業のまちづくり」をスローガンとして、同組合を中心にした「なりひら風の市実行委員会」を立ち上げて、2003（平成15）年9月から、毎月第2土曜日に上新町の通りを歩行者天国にして、露店が集まる「なりひら風の市」を開催するようになった。「なりひら風の市」という名称は、第2章でとりあげられている5月に八尾旧町で開催される曳山祭の際に上新町の曳山の神様である平安時代の歌人の在^{ありわらのなりひら}原業平と第3章でとりあげられている八尾の代表的な行事である「おわら風の盆」を合わせて作られた。

「なりひら風の市」は、「やつおブランド」の名のもとに原則として八尾で作られた物を露店で売るイベントであり、「なりひら風の市」実行委員会によって出店者は上新町商工振興協同組合、商工業者、一般市民と定められていて、個人が自分の使っていた物を売るフリーマーケットの出店は認められていない。ただし、後で詳しく述べるが、地域外、富山県外の商工業者の出店は認められている。詳細については後に触れるが、風の市で売られているものは、食べ物、土産品、日用品などである。また、大道芸など

のパフォーマンスやビンゴ大会のようなアトラクションもおこなわれている。

風の市は、八尾町上新町商店街 2 丁目と 3 丁目の路上を車両進入禁止の歩行者天国にして、4 月から 11 月までの第 2 土曜日の午前 10 時から午後 3 時 30 分までの間に開かれる。風の市の開催時間の間には、表のように、ビンゴ大会のようなアトラクションや「風の盆ステージ」といったイベントが開かれる。ビンゴ大会は、客に楽しんでもらうという目的とともに、風の市や商店街の経済効果を上げるという目的を持っているので、後に詳しく述べる。「風の盆ステージ」は、上新町にある観光会館で観光客向けにおこなわれるおわらのステージショーである。これを見るために観光客が観光バスで訪れており、一定の客数が見込める。

表 なりひら風の市の日程

10 : 00	風の市開始
11 : 30	ビンゴ大会
13 : 30	ビンゴ大会、 同時開催「風の盆ステージ」
15 : 30	風の市終了

風の市は、4 月から 11 月の間に月 1 回の割合で開かれるが、月によって客数は異なる。後に触れる地元小中学校の出し物など露店以外のイベントがあった場合は多くなり、また、気温が低かったり、雨が降っていたり天気の良いときは少なくなる。写真 1 は 6 月の風の市の様子であるが、風の市は客で賑わっている。



写真 1.客数が多かった 6 月の風の市の様子
上新町商店街ホームページより

http://www.cty8.com/narihira/album/album_f.html

しかし、その前月の 5 月は写真 2 のように客はまばらである。5 月の客数が少なかったのは、天気が悪かったためと、富山市内の他の場所でイベントがあり、出店者がそちらに行ってしまう、出店の数が少なく、外部の客もそちらに流れてしまったためと考え

られる。



写真 2.客数が少なかった 5 月の風の市の様子

3.出店者と客層、イベントについて

風の市の出店者と客層についてみていくことにしたい。

3-1.出店者と客層について

出店者には「なりひら風の市」実行委員会の許可を得て1年を通じて出店できる通年会員と、その月だけ会費を支払って風の市に参加する臨時会員がいる。2008（平成20）年度の通年会員は、食品・農作物22店、飲食4店、衣料品2店、雑貨・小物・骨董6店、アート・クラフト6店、その他2店の計42店であった。ただし、毎月の風の市に、通年会員すべてが参加するわけではなく、臨時会員と合わせても、一回の風の市に出店する数は30店程度である。その月に参加するか否かは出店者が自由に決められる。また、会員は写真1と写真2から分かるように、「なりひら風の市」実行委員会指定のテナントを借りて出店する。

風の市で販売されているものの半分以上は焼きそばや団子などその場で食べられる物や総菜、野菜、果物などの「食品関係」であり、その他はお土産、玩具、盆栽などである。土産物は、観光客向けのおわら風の盆を題材にしたものが多い。図に7月の風の市を例に、上新町の道路に沿って露店でどのようなものが売られているのかを示した。この図からわかるように、さまざまなものが風の市で売られている。

食品	飲食	土産			花	衣料	野菜	衣料	玩具
以下Aへ続く			道路				1丁目→		
			果物 野菜	食器					

	食品	飲食	飲食	飲食	飲食	野菜	食品	飲食	衣料
以下Bへ続く			道路				A		
	野菜	食品	食品	飲食		食品			

飲食	飲食	土産	その他	土産	土産		花	飲食	
道路								B	
						土産			

図 「なりひら風の市」の店

出店者の多くは八尾の外から来ており、地元の八尾の店は4、5店程度である。富山県外からの出店は、たとえば、岐阜県飛騨市から来ているコロッケ屋、長野県から来ている果物屋、石川県から来ている食器屋などである。

風の市を訪れる客数は月によって異なり、地元小中学校の出し物など露店以外のイベントがあった場合は多くなる。また時間帯によっても異なり、午後よりも午前中の方が客は多い。これは昼食を風の市の食品で済ませようとする地元の客が多いためである。

客は地元の八尾の人がほとんどであり、外部から訪れる客は少ない。客の多くは中高年か小学生である。また、出店している人が他の店の客になることも少なくない。

3-2.風の市でのイベントについて

「なりひら風の市」では500円分の買い物ができ、ビンゴに参加できるカードが付いた「買い物券」を販売している。この買い物券はその日の風の市で使うことができるだけでなく、その月の間、上新町商店街での買い物に使用することができる。

ビンゴ大会は、風の市の日の午前と午後に2回行われ、景品は買い物券である。写真3はビンゴ大会の様子であるが、子どもたちだけでなく、大人の客やあるいは風の市の出店者たちも参加する。



写真 3.ビンゴ大会の様子

実行委員のある人によれば、ビンゴカード付き買い物券には、風の市の売り上げ上昇を狙ったり、風の市のおおよその売上高を把握したり、商店街での買い物による経済効果と商店街の活性化を目指すという目的があると言う。しかし、一部の出店者には買い物券がよく認知されておらず、使用できない場合がある。また、一部の出店者が自分たちで買い物券を購入するということもある。一部の出店者が買い物券を購入するのは、出店者は一般の客と違って買い物券を換金することができ、買い物券を多く買って使わずに換金してビンゴカードを集めることができるためである。ただし、こういった出店者は、ビンゴ大会で多少の利益を得ようとしているのではなく、一般の参加者と混じって、レクリエーションを楽しみたいために、買い物券を購入している。風の市が、経済的利潤を売る目的で開催されているのと同時に交流のイベントでもあることが、こういう行動に表れているのだろう。ただし、買い物券の発行は、当初の目的である商店街の活性化には、それほどつながっていないと言える。また、ビンゴ大会と「風の盆ステージ」の時間が重なっているため、地域外の観光客は「風の盆ステージ」に行ってしまう、ビンゴ大会自体も、観光客誘致による商店街の活性化につながっていないようである。

なお、風の市では、年に数回、地域の保育園や小中学校と連携したイベントもおこなわれている。2008（平成 20）年は、8 月に地元の中学校ブラスバンド部が演奏会を開き、11 月には地元の保育園の園児達による鼓隊の演奏パレードがおこなわれた。写真 4 は 8 月の演奏会の様子である。



写真 4.8 月の地元の中学校ブラスバンド部の演奏会の様子
上新町商店街ホームページより

http://www.cty8.com/narihira/album/album_f.html

10 月には八尾の芸術祭である「坂の町アート」が風の市と同時に開催され、この月の風の市にはかなりの観光客が訪れ、人気のある店には行列ができることもある。しかし、風の市を「坂の町アート」の付録的な催しと思っている観光客が多く、八尾外での風の市の認知度はまだ低い。

4. 「なりひら風の市」による地域振興と住民

最初に記したように、「なりひら風の市」を主催しているのは、上新町商工振興協同組合がつくった「なりひら風の市実行委員会」である。主催者側は、「なりひら風の市」は、観光客を誘致するとともに、人口減少や商店街の空洞化が進む八尾を、「地産地消」のローガンのもとに地域内の交流をはかって地域の活性化をはかるという役割を担っていきたいと考えている。ここからは、「なりひら風の市」に関わる人々や地域住民の語りをもとに、「なりひら風の市」が目指す地域振興がどのような問題を抱えているのか、明らかにしていきたい。

4-1. 主催者側の認識

実行委員会は上新町に住む 50 代から 60 代の 10 名程度の男性で構成されているが、風の市の際には商店街の中の空き屋を本部にして、5、6 人が準備や片付け、買い物券の販売、アナウンスなどの作業をおこなっている。

この報告の冒頭で、資料をもとに、風の市は観光客誘致と地域内交流の両面から地域を振興させる目的で始められたと記したが、実際に、実行委員会の人たちに、今後、風の市をどのように変えていきたいか、また、現在の風の市は八尾にどのような影響を与えているかという質問をおこなった。

まず、最初の今後の風の市のありかたについての質問に対しては、ある実行委員は「八尾外の地域からもっと人を呼びたい」、「もう少し売り上げが伸びるといい」と述べたう

えで、「チラシなどで宣伝して、人を増やして、行政から補助金が出る」と話す。しかし、富山市は新規のイベントでないと補助金を出さないとのことで、補充金の獲得には悲観的だった。また別の実行委員は「店や客を増やしながら、継続していきたい」と語った。

風の市は八尾にどのような影響を与えていると思うかという質問に対しては、実行委員の1人は、旧町にはスーパーがなく、自家用車を持たない高齢者はバスで遠方のスーパーに買い物に行かなければならない点を指摘し、「高齢者には役立っていると思う。近くで買い物できると評判だ」と話す。また、「子どもの遊び場にもなっていると思う」とも語った。

これらの語りから、風の市の主催者は、八尾外からの客の誘致と経済効果の拡大を今後の課題と考えている一方で、風の市が地元の八尾町民の生活に役だっており、子どもたちを含む町民の交流の場となっていることを認識していることがうかがえる。

4-2. 町外からの客の誘致と経済効果

以上のような主催者側の意図や認識について、今度は、出店者や住民たちの語りから検討してみよう。まず、現在における八尾町外からの客数や風の市の経済効果について出店者、商店街の人たち、一般住民たちを対象とした聞き取りの結果を記す。

出店者に対して、現在の売り上げや客層について尋ねてみた。ある出店者は「ほとんど売れないね」と話し、客の誘致についても「(客は) 地元の人しか来ない」と言う。別の出店者は「年々人が少なくなっている」と話し、客数減少の原因は「マンネリ化したため」と言う。このように風の市の催しに目新しいものがなくなったことが原因で客数が減少していると考えている出店者は多かった。

また、実行委員会から頼まれて地域外から来ているある出店者は「他と比べ(なりひら風の市では) あまり売れない」と話す。聞き取った限りでは、売り上げだけを目的とするなら、出店者にとって風の市はそれほど有効な場所ではないのである。

次に、商店街の人に前出の商店街でも使える買い物券について聞いてみたところ、ある商店の人は「2 か月に 1,000 円ほど(しか使う人がいない)」と語り、風の市の経済効果はほとんどないという。さらに、別の商店の人は使う人はたまにいと述べたうえで、「逆に、(風の市で出ている店と) 同じようなこと(商売) をしているから、その日の客は少なくなるね」と話す。こうしてみると、現状では、風の市は商店街の経済効果をあげているとは言えないようである。とりわけ、風の市では食品関係の店が多いので、当日は上新町の飲食店や食料品店の客が減ることもある。

上新町に住む 60 代の女性は経済効果について「おわら(風の盆) のときでさえ、お金を落とさないんだから(風の市は) 儲からない」と語る。また、福島の 50 代の女性は客としての風の市にやってくるが、「各町単位では特産物がないから、(風の市を) するのはいいことだと思いますよ。テントがかわいくて、おもしろいなと思いました」

と一定の評価はしているものの、「最近はマンネリ化していると思います。期待がないのでまた行きたいとは思わない」とも語る。一部の出店者と同様に、客の目から見ても風の市に変化が乏しいことが客を引きつける魅力を失わせていることが分かる。

また、JR越中八尾駅付近に住むある女性は、「(同時開催)のおわら(風の盆ステージ)を見に来る人はいるが、なりひら風の市を目当てに来る人はいないと思う」と話す。さらに、西町の70代の女性は「八尾はいろいろ(な行事を)やってるけど、私はおわらに力を入れているから、(他の行事は)行く気がしない」と話し、風の市自体に関心を持っていないと語った住民もいた。

以上の出店者や住民の語りから、風の市の現況について魅力が失われていて客数が伸びていないこと、また、出店者や商店街にとって経済効果がけっして高いものではないことがうかがえる。

4-3. 町民の生活の利便や交流

次に実行委員会が風の市の効果として考えている八尾町民の生活の利便や交流について、上記と同様に、出店者、住民などに聞き込みをおこなった。

ある出店者は「商売にはならないけど、楽しいからいい」と話し、また、別の出店者も「利益は少ないけど、自分の作ったものを食べてもらえるのはうれしい」と話す。さらに、食料品を売っている出店者は、「のんびりしてていい。(客や他の出店者の)人柄もいい」と言うが、これと似たような話は出店者の多くから聞くことができた。

出店者たちは、経済的利益は多くなくても、客との交流が楽しめる場として、風の市を認識していると言える。ただし、出店して間もない人は、「お客さんは馴染みの店にしか行かないから、うちみたいな新しい店には人が来ない。声かけても無視されることがある」と語る。客と出店者の交流の場であることで、反面では、新規出店者がなかなか風の市の雰囲気に入れ込めず、客も呼び込めないという場合も一部では生じていると思われる。

風の市にはほぼ毎回参加して、大道芸を披露している女性は、風の市の雰囲気を「すごくアットホームな感じがする」と表現する。彼女は「外部に宣伝して客を大勢呼んで、このアットホームな雰囲気が崩れるよりはこのままの方がいい」と語る。彼女は風の市について、「町の人々の社交場、いこいの場になっていると思う」と言う。

福島の60代の女性は「散歩の途中に寄ることもある」と話す。後者の女性のように、何かのついでに立ち寄って商品を眺めたり、気に入ったものがあれば買い物したりするという住民は何人かいた。さらに、風の市に来ている人たちが親しげに交流している姿を多く観察した。小学生たちが集まって遊んでいる姿が目立つが、大人たちも世間話をする場として利用しているようだ。

西町に住む80代の男性は「食べ物だけでなく、包丁とぎ(のような日用品)などもあって良かった。どんどん焼きを食べたけど安くておいしかった」と話し、上新町に

住む60代女性は「ご飯代わりに行っている（食事をつくる代わりに食事をしに行っている）」と語る。

以上から、風の市は住民どうし、あるいは住民と出店者の交流の場としての役割を果たしていて、出店者のなかには経済的利益がそれほどあがらなくても、そういった交流の雰囲気を楽しんでいる人もいる。また、事例は少ないが、住民の生活の利便という面でも、ある程度は風の市は機能していると考えられる。

5.まとめと考察

「なりひら風の市」の主催側は、八尾町外から客を誘致して、風の市の規模を大きくして経済的利潤をあげて、ひいては上新町を中心とする八尾旧町の商店街の活性化につなげたいと考えている。また、一方で、別の主催者は「なりひら風の市」を住民中心に考えて、住民の生活の利便や交流の機能を認識している。

このように「なりひら風の市」について、主催者側は、外部の客の誘致と経済的効果という狙いと地元住民の利便と交流という二つの機能を期待している。

出店者や商店街から聞き取った限りでは、経済的利益や商店街の活性化の面では、現在の風の市はそれほどの効果はあげていない。もし、「風の市」の経済的機能をあげようとするなら、地域外に宣伝をおこなうだけでなく、本論で紹介した語りにあるような風の市の「マンネリ化」を解消しなければならないだろう。しかし、全国のどこのイベントでも必ずマンネリ化が生じる傾向がある（二瓶、1986）。

また、「おわら風の盆」や「曳山祭」などの住民が主体となっておこなっている行事と比べると、風の市には客を惹きつける「八尾らしさ」はあまりない。「地産地消」が風の市のスローガンとして掲げられているが、実際は出店者の大半が地域外から来ている。八尾らしさを求めてやってくる観光客が風の市に足を運ぶ理由はそれほどないと思われる。したがって、風の市の経済的機能を高めるためには、八尾らしさを全面に出し、マンネリ化を解消するような様々な試みが必要になると考えられる。

一方、八尾町民の生活の利便や交流といった社会的役割については、現在のところ、風の市は十分に機能している。実際に参加してみると、語りにもあったようにアットホームな雰囲気でもとても気楽に過ごせるイベントとなっている。風の市は、住民たちが気楽に立ち寄れるコミュニティの交流センター的な役割を果たしていると言える。

問題は、もし、風の市を通年観光化のために観光客を誘致して経済的効果や商店街の活性化をはかる試みが精力的におこなわれてると外部からやってくる観光客のための風の市となって、住民どうし、あるいは住民と出店者の間の交流センター的な機能が低下してしまうという点である。風の市の経済的機能と社会的機能は両立しないのである。今後、風の市のどちらの機能を高めていくかについては、主催者だけでなく、出店者や住民の問題だと思われる。

文献

上新町商店街ホームページ <http://www.cty8.com/narihira/> 2008年1月閲覧
二瓶長記、1986、『まつりイノベーション 地域はイベントでよみがえるか』、株式会社ぎょうせい

第5章 獅子舞の再興

—野積地区乗嶺における人々の暮らしと獅子舞—

西川 純礼

1.はじめに

野積地区は八尾町の南部に位置する農村地帯で、この報告でとりあげる乗嶺は、野積地区の 11 ある集落のうちの一つである。乗嶺では、伝統的な行事である乗嶺紫野七社の春季祭礼の際に五穀豊穰や家内安全を祈願して、獅子舞が奉納されている。

日本では全国各地で獅子舞が行われているが、近年では、過疎化で祭りの担い手が足りなくなったために獅子舞が廃れてしまった地域も増えている。そんな中、私は、乗嶺の獅子舞も過疎化の影響により担い手が不足し一度は休止されたが、2008（平成 20）年の春に 6 年振りに復活したというニュースを耳にした。そして、乗嶺の獅子舞とは一体どのようなものなのかと興味を持ち、乗嶺の人々の聞き取りを中心に調査を行った。ここでは、乗嶺の獅子舞がなくなることなくなぜ復活したのかについて、獅子舞と乗嶺の人々との結びつきを、乗嶺の人々の語りから考察していきたい。

2.乗嶺集落の概要

乗嶺集落がある野積地区は、富山県八尾市の南部の山間地にある（図 1 の円で囲った地域）。

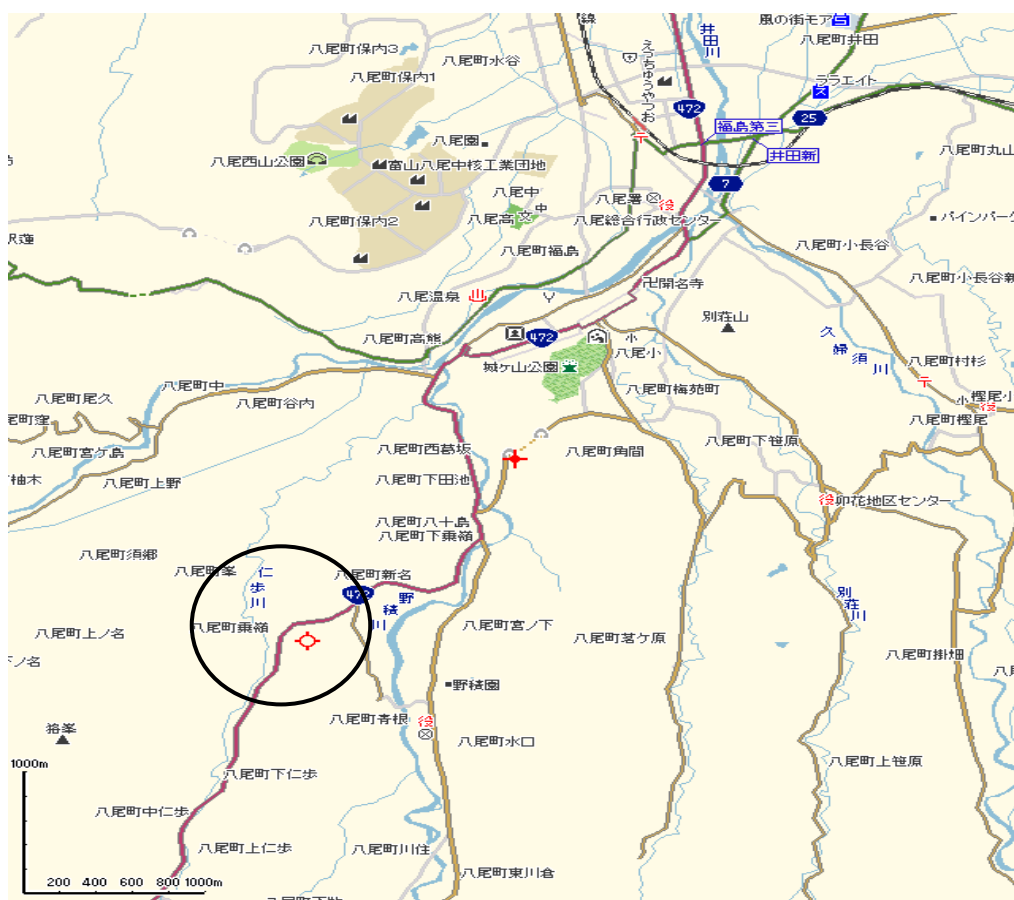


図 1.八尾町乗嶺の位置

(<http://www.mapfan.com/m.cgi?MAP=E137.8.29.3N36.35.18.1&ZM=8> をもとに作成)

八尾町の南部に位置する野積地区には神明、北玉、三和、乗嶺、青根、西川倉、東川倉、東布谷、布谷、赤石、松瀬の 11 の集落がある。乗嶺集落は越中八尾駅から南へ 5 キロメートルほどの所に位置し、野積川の西側、国道 472 号線沿いに広がる集落である (図 2 参照)。



図 2. 乗嶺集落

標高およそ 180 メートルから 230 メートルの高台にある集落の周りには棚田の風景がひろがっており、現在でも集落内の農家は棚田での農業を営んでいる。



写真 1.野積地区の棚田

この調査をおこなった乗嶺集落は世帯数 19 戸、人口 84 人の小集落である。表に 2008（平成 12）年 12 月末現在の野積地区の集落の世帯数と人口を示したが、この地区には規模の小さい集落が多いことがわかる。報告書の冒頭の「八尾の概要」で示されているとおり、野積集落では 1980 年まで急激な減少が続き、以降はゆるやかではあるが人口減が続いている。また、65 歳以上の人口が全体の 37.3 パーセントを占め、超高齢化が進んでいる。

表 野積地区世帯数と男女別人口（2008 年 12 月末現在）

（富山市のホームページ、<http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/> 2008 年 1 月 28 日閲覧 をもとに作成）

	世帯数(軒)	男(人)	女(人)	合計(人)
神 明	53	104	106	210
北 玉	43	57	58	115
三 和	20	35	40	75
乗 嶺	19	41	43	84
青 根	16	31	32	63
西 川 倉	28	41	25	66
東 川 倉	28	49	49	98
東 布 谷	12	12	17	29
布 谷	28	23	38	61
赤 石	6	6	9	15
松 瀬	5	6	6	12

小計	257	405	423	828
野積園	83	47	36	83
のりみね苑 (老人福祉施設)	62	6	56	62
野積地区合計	402	458	520	973

3.乗嶺の獅子舞の概要

ここでは、獅子舞行事について説明し、次に乗嶺の獅子舞の概要と現在の状況を述べる。

3-1.獅子舞の概要

獅子舞とは、獅子と獅子取りなどで演じられる民族芸能で、獅子頭ししがしらを操る頭持ちと獅子の胴体部分である獅子幕ししかたを支える「獅子方」、獅子の相手役として演奏に合わせて踊りを舞う「獅子取り（子役）」、様々な演目を伴奏する「囃子方はやしかた」、祝いの口上を述べる「口上語り」を構成の基本とする。一部の地域では、これにひょっとこ、おかめなどの「道化役」が加わる。

富山の獅子舞は大きく分けて「二人立ち獅子」と「百足獅子むかで」の2つに分類することができる。二人立ち獅子とは、頭を持つ「前足」と獅子幕を支える「後ろ足」の2人が獅子頭を横8の字に振りながら踊るものであり、百足獅子とは、獅子の胴体の部分に複数の人が入るものである。このように富山の獅子舞は2つに分類され、乗嶺では写真2のような「二人立ち獅子」の型でおこなわれる。



写真 2.乗嶺の獅子舞の様子

3-2.乗嶺の獅子舞の歴史と現在の状況

「八尾の概要」で紹介されているように、毎年、4月には、八尾地域内の多くの地域

や集落の神社で獅子舞行事が催される。乗嶺集落では、乗嶺紫野七社^{のりみねのしちしや}で春季祭礼として獅子舞がおこなわれる。

乗嶺紫野七社の春季祭礼は、毎年4月3日に姉倉比売神社^{あおくらひめのみじんじや}の神主により執りおこなわれる。乗嶺紫野七社には、天照皇大神、菅田別命、大山久比命、別雷命、豊受大神、天兒屋根命の7体の祭神が祭られている。なお、乗嶺紫野七社は乗嶺集落の下を流れる野積川のそばにあり、フナが神の使いであるとされている。昔、神が来やすいようにと一度神社を山にあげたことがあったが、「川のそばに戻して欲しい」とフナからのお告げがあったので再び今の場所に戻したという話が語り継がれている。

乗嶺集落には家が19軒あり、それが4つの「班」に分かれていて、おおよそ5軒で1班を構成している。祭礼の際には、獅子舞は公民館、乗嶺紫野七社、大黒様、お地蔵様、特別養護老人ホームのりみね苑の順に回りいったん公民館へ戻り、それから各班のうちの代表の1軒を訪れ、計4軒回った後に再び公民館に戻る。

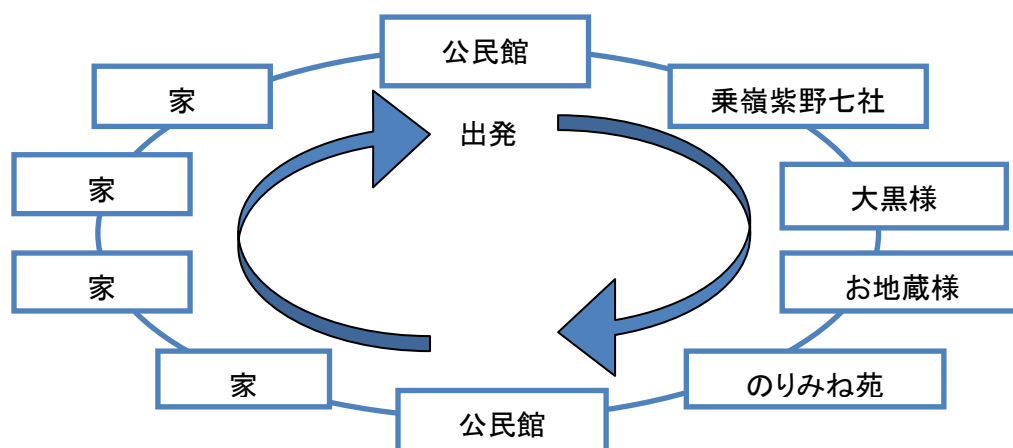


図 3.獅子舞の巡行の流れ

乗嶺の獅子舞行事の歴史は、明治初期に、現在の富山県富山市葛原^{つづはら}（旧大沢野町葛原）から獅子舞が伝わり、乗嶺紫野七社の春季祭礼で五穀豊穰、家内安全を祈願して、獅子舞が奉納されたのが始まりである。一説によると、京都から岐阜県高山へと獅子舞が伝わり、大沢野から高山へ出稼ぎに出ている人々によって大沢野へと伝えられ、さらに大沢野の葛原へはメス獅子が、別の地域には夫婦獅子^{めおと}が伝えられたといわれている。

乗嶺の獅子舞は過疎化による担い手不足や、祭礼を行う氏子の家での不幸が重なり、2002（平成14）年以降獅子舞は休止されていたが、2008（平成20）年4月3日の春季祭礼で6年振りに復活した。野積地区の11集落のうち、現在、獅子舞行事をおこなっているのは、乗嶺だけである。

乗嶺の獅子舞は、乗嶺青年会の人たちによって運営されている。青年会に入れるのは15才から40代までの男性で、現在のメンバーは20代が6人、30代が5人、40代が

3人であるが、50代以上の4人から5人のOBも青年会の集まりに顔をだしている。

青年会の役職には会長と副会長があり、会長は会計の仕事も兼ねている。青年会の主な活動は獅子舞の準備であり、毎年、年始に新年会も兼ねて集まり、その年の春季祭礼で獅子をまわすかどうかを話し合っ決めて。獅子舞の際に集落の人が出す祝儀は「花」と呼ばれている。青年会は、「花」のお返しの意味を込めて、6月の第3日曜日にバーベキューを開いて、集落全体の交流をはかっている。

3-3.乗嶺の獅子舞の特徴

乗嶺の獅子舞は、獅子方2人、獅子取り3人、囃子方5人、口上語り1人の11人で構成される。現在は獅子方と笛合わせて9人、太鼓1人、獅子取り3人の13人のメンバーで獅子舞をまわしている。本稿の3-1で説明したように獅子取りとは子役のことで、乗嶺の子役には三番艘さんばんそうが1人と獅子取りが2人いる。2人の獅子取りのうち1人は「金蔵きんぞう」と呼ばれ、もう1人は「アネマ」と呼ばれている。乗嶺では子役を出来るのは男の子だけである。三番艘は、金色の線が入った緑色の烏帽子をかぶり緑色の衣装を着ていて、写真3のように移動の時には扇子を持って舞いながら先頭を歩く。「金蔵」は、獅子を退治する役であり、「アネマ」はいくつかの演目の時に女の子の役を演じる。

また、子役を出来るのは小学生までで、中学生からは囃子方、高校生以上になると獅子方というように、年齢によって習う内容が決まっている。



写真3.乗嶺紫野七社への移動

獅子舞の演目は神楽獅子かぐら、金蔵獅子きんぞう、牡丹獅子ぼたん、蛇獅子へび、曲獅子まがの5種類がある。演目について、獅子舞が巡行していく流れに沿って説明していく。

まず公民館を出発し、乗嶺紫野七社へ向かう。そこでお祓いをうけてから大黒様へと移動し、そこで神楽獅子を舞う。これはその家の神や大黒様に敬意を表すもので、子役の「金蔵」が御幣ごへいを持って舞う。御幣とは獅子舞で使う小道具で、写真3で「金蔵」が

持っている約1メートルの長さの木の棒の上部に和紙を階段状にしてつけてあるものである。次に国道沿いの乗嶺のバス停のすぐそばにあるお地蔵様へと移動し、そこでも神楽獅子を舞う。次に、お地蔵様の近くにある老人介護施設「のりみね苑」へと入り、神楽獅子、金蔵獅子、牡丹獅子の順に舞う。金蔵獅子は、特に子どものお客さんに獅子に対して親しみを持ってもらおうという意味も込められていて、獅子のまわし方は簡単で分かりやすいものとなっている。ここでは子役の「金蔵」と「アネマ」が「ダンスリ」を2本ずつ持って舞う(写真4参照)。「ダンスリ」は金蔵獅子、蛇獅子、曲獅子で使う子役の小道具で、約40センチメートルの棒の両端に赤と青と白の紙が総ふさにして付けられてあるものである。



写真 4.曲獅子の様子

次の牡丹獅子は別名「アネマ獅子」と呼ばれ、「アネマ」が牡丹の花と扇子を持って舞う。内容は「アネマ」が獅子に牡丹の花を見せて獅子を引き寄せておき、「アネマにシシやついた、牡丹にシシやついた。」と言い、持っていた牡丹の花を槍に持ち替え獅子を驚かせて退治する、という流れである。「のりみね苑」での演舞が終えると、いったん公民館へ戻り準備をし直し、それから各班のうちの代表の1軒を順に回っていく。各家では、まず獅子が家に入って来たことを知らせるための挨拶代りに、玄関から部屋までの間を大門だいもと呼ばれる余興のようなものをして歩き、部屋に入ってから神楽獅子、金蔵獅子、牡丹獅子、蛇獅子、曲獅子の順に5つすべての演目を舞う。蛇には、縁起の良いもの、かつ、人に嫌われるものという2つの意味があり、蛇獅子は人間の代わりに獅子に蛇を退治してもらおうという内容のものである。これは5つの演目の中で最も動きが激しい演目である(写真5及び写真6)。蛇獅子の終盤で、口上語りは集落の人などから受け取った祝儀である「花」を読みあげる。そして、最後に曲獅子を舞う。曲獅子は他の4つの演目のなかにある芸をすべて盛り込んであるので、獅子方や子役にとっては一番体力を使うものである。このような流れで、計4軒を回り、最後に公民館へ戻っ

てきて獅子舞は終わりである。



写真 5.蛇獅子の様子 1



写真 6.蛇獅子の様子 2

乗嶺の獅子舞には2つの特徴がある。まず1つ目に、乗嶺の獅子はメス獅子であるが、他地域のメスの獅子頭と比べ、頭がつぶれた平面獅子であるということが挙げられる（写真7）。2つ目に、メス獅子であるが獅子の動きが大きく激しくて、喜怒哀楽も激しいいわゆるおてんば娘であることが挙げられる。一般的には、オス獅子は1つ1つの動きが大きく悠長であり、メス獅子は動きが細かいものであるので、乗嶺のように動きが大きく、かつ、激しいメス獅子は珍しい。これにはいくつか説があり、もともとの京の慎ましくやわらかい舞い方に反発したものではないかとも言う人もいる。

乗嶺の獅子舞は基本的な型は変わらずに伝承されているが、獅子舞の形は時代によって変化している。例えば、神楽獅子などの演目の名前などの型は変わらないが、踊り方や内容といったような形は少しずつ変化してきている。それは、乗嶺では獅子舞はすべて口伝で伝承されているからである。



写真 7.乗嶺の獅子頭

4.獅子舞と住民

ここでは、乗嶺の人々にとっての獅子舞がどのような意味をもっているのかについて、子ども、青年団の人々、女性の語りを順にみていきたい。

4-1.子役の子どもの語り

獅子舞の子役をやっている小学生たちに、獅子舞を始めたきっかけや獅子舞のことをどのように思っているのか聞いてみた。

A君は「始めは青年会の人に誘われたのがきっかけ。今では獅子舞が好きで楽しい。来年もやりたい。」と語り、B君は「(獅子舞をやっている)父親の影響から、元々獅子舞に興味があった。練習も好きで、青年会の人たちもかわいがってくれるから楽しい。」と語る。また、C君は「最初は獅子が怖いから嫌だったけど、練習してるうちに獅子が好きになった。笛や太鼓などかっこいいからやってみたい。」と言う。

これらの3人の語りから、獅子舞を始めたきっかけは、青年会の人からの誘いや親の影響を受けていることがわかる。獅子舞については、3人とも「好き」だと答え、B君とC君は、青年会の人たちの指導で練習しているうちに獅子舞が好きになったと言う。

青年会が集落の子どもたちを獅子舞や獅子舞の魅力に引きつける役割を果たしていること、そして、次の世代に獅子舞を伝えていく役割も担っていることが分かる。

4-2.青年会の人語り

太鼓と獅子方を担っているDさん(20代男性)に「いつから獅子舞をしているのか」と聞くと、「小学校低学年の頃から子役として獅子舞をやっていて、それが当たり前だと思っていた」という回答があった。Dさんは、大学4年間は県外へ出ていたが就職を機に八尾に戻ってきたそうで、戻ってきた理由は乗嶺に愛着があるからだと言う。「仕事と獅子舞の両立はどうか」と尋ねると、「仕事で疲れて帰って来てからすぐに練習に行くというのは本当に大変だし、みんなの時間がなかなか合わなくて大変」と言いながら、それでも「獅子舞が好きだから楽しい」と語る。また、「獅子舞のことをどのように思うか」という質問に対しては、「集落の繋がりは大事だと思うし、その繋がりの中で獅子舞は大きな役割を占めていると思う」と話す。

このように、20代や30代になると獅子舞に対する熱意や愛着が生まれてきている。また、自分たちが中心となって集落の連帯感を持続させるために獅子舞を存続させようという意識が生まれる。そして、仕事をしながらの獅子舞の練習は大変ではあるが、若い世代の人たちは青年会を中心に声をかけあって自発的に集まっている。

さらに、青年会のOBであり平成20年の獅子舞の総まとめをしたEさん(50代男性)と、同じく青年会OBであるFさん(80代男性)に話を聞いてみた。Eさんは今回の獅子舞復活のために精力的に動き、中心となって他の人に声をかけていた。「いつから

獅子舞をしているのか」という問いには、Fさんは「10代の頃から獅子舞をやっていて、昔から身近なものだった」と答え、「集落をあげて春先を楽しみにしていて、昔は子どもも多かったため子役にあたった家はそれを誇りに思い喜んで」と話す。

「獅子舞のことをどのように思うか」と尋ねると、Fさんは「(獅子舞には) 五穀豊穡・家内安全と共に、集落円満の願いも込められていて、獅子舞を通しての交流や繋がりもまた大切である。集落の中でも獅子舞は守っていかなければならないものという考えは当たり前であり、伝承していきたいという人々の願いは今も昔も変わらない」と語る。Eさんは「担い手不足の問題も心配されているが、例えば元々子役をやっていた人たちが大学など進学のため町をいったん出て、卒業後にはまた地元に戻って就職するといったように、町の人も就職の世話をするなどして獅子舞を盛り上げている」と語り、「子ども達にはよく山や川での遊びを教えてあげている」とも言う。

また、Eさんによれば、小学生までは子役を習い、中学生までは笛太鼓、高校生になれば獅子方を習うことができるといったように段階をふんで習える楽しみがあり、また、次の段階へ行きたいという憧れの気持ちから練習にも身が入り頑張れるとのことだった。そして、このように子役から獅子方まですべてを経験しているから、不足しているところがあれば誰でもカバー出来るのだとEさんは語り、「獅子舞の復活により、村も活気づいて良かった」と話す。さらに、Fさんは「衣装や化粧などに精通しているのは女性である。また、隣近所の人に獅子が来た時には接待をするなど、そういう形で女性は獅子舞に関わってきた」と話す。

上の語りから、この2人は、獅子舞には、集落の交流や連帯を促す役割があることを強く意識していることがうかがえる。また、段階を踏んで獅子舞について学習していくことには楽しさがあると同時に、そのような学習によって下の世代の学習を助けることができ世代間の交流に繋がるとも考えている。2人は、獅子舞が、若い世代に受け継がれることが、集落の維持や存続に関わってくると認識しているのである。

4-3.女性の語り

乗嶺に住んでいる女性の数人にも「獅子舞のことをどう思うか」という質問をおこなって、次のような回答を得た。

以前に弟が獅子舞をしていたという20代の女性Gさんは、「(獅子舞を) 今年見に行った。獅子舞は「男の祭り」で、直接関わることができないから見に行くだけだが、ないと寂しい。1年を通して集落のみんなで集まることはないから、祭りは楽しみ」と語り、子役のC君の母親である30代の女性Hさんは、「獅子舞を楽しみにしている。1軒1軒全部の演目をしてくれるし良い」と話す。また、息子と孫が青年会の70代の女性Iさんは、「息子や孫を見るのが楽しみで、毎年家族みんなで見に行く。獅子舞があることは、めでたいことであり、誇りに思っている。(自分が) 若い頃は、夫が囃子方をしていたので獅子舞の練習を見に行っていた。みんなのためによく夜食を作って持つ

ていった」と言う。

これらの語りからわかるように、女性は獅子舞の担い手として参加することは出来ないが、サポートという形で昔から獅子舞に関わっている。また、3人とも、家族が獅子舞に出ていると獅子舞見物が楽しいと言う。

孫が青年会に入っている70代の女性Kさんは、「(獅子舞は)昔からの伝統行事なので絶やしてはいけない。でも続けていくのは大変。(昔と比べて)今の獅子は型が崩れてしまった。しかし、厳しいことを言っても今の子ども(子役)がいなくなったら大変だから。獅子舞という形だけでも残して行きたい」と話すように、形式が昔と比べて変わってしまっても、獅子舞は残すべきだと考えている。

また、乗嶺のバス停のすぐそばにある老人介護施設の「のりみね苑」のスタッフの女性に春季祭礼当日の苑の様子を尋ねると、「祭りの日には、お赤飯を炊くなど、祭りの雰囲気にする。ホールへ移動して獅子舞を見て、子役の姿などを見て、涙ぐむお年寄りもいる。デイサービスとして利用している方も、手をたたきながら獅子舞を見て楽しんでいる」と語る。このように、高齢者たちは、獅子舞を楽しみながら、同時に、自分の幼少時と重ね合わせて伝統行事の復活を喜んでいる。

4-4. 語りのまとめ

さまざまな年代や立場の人と話をするうちに、獅子舞に対する思いは年齢を追うごとに変化していることがわかった。また、どの年代にも共通して言えることもあり、乗嶺では集落全体で協力しながら、獅子舞を盛り上げている。積雪量の多い乗嶺では、長い冬が明けて春が訪れたことで人々は開放的になり、春季祭礼を楽しみにして、そして、年に1度の人々の大切な交流の場として、集落全体で獅子舞を守っていこうとしている。

また、獅子舞に対する人々の意識や考えは、社会の変化にも伴って変わってきている。「昔は子どもも多かったため子役にあたった家はそれを誇りに思い喜んでいた」というFさんの語りにあるように、昔は子どもも多かったため子役の競争率も高く、そのぶん練習も大変厳しいものだった。やる気のない子にはいくらでも代わりがいたのだ。しかし、今は過疎化が急激に進み子役を出来る人が限られているので、青年会の方から積極的に呼び掛けて子どもを呼び込んでいかなければならないといった状況にある。そこで、Kさんの「(昔と比べて)今の獅子は型が崩れてしまった」という語りにあるように、指導が甘くなっているのではと感じる人もいるが、先に述べたように過疎化の影響による担い手不足のため、昔と同じように厳しい指導をすると子どもが耐えられなくなって、獅子舞をやめてしまうのではと心配し、昔から乗嶺の獅子舞を見ている人たちも強く言えなくなってきた。

さらに、社会の変化に伴って、就職を機に乗嶺を離れ外へ出ていく人が増加した。そ

のため、乗嶺の過疎化はさらに進んだ。乗嶺を離れずに就職をした人でも、八尾の工業団地や富山市の方で働く人が多く、Dさんの「仕事で疲れて帰って来てからすぐに練習に行くというのは本当に大変だし、みんなの時間がなかなか合わなくて大変」という語りにあるように、社会や人々の暮らしの変化によって、仕事と獅子舞の両立が厳しくなってきたのも事実である。

5.まとめと考察

乗嶺集落のさまざまな人々の語りに共通していたのは、時代背景や子どもの数、獅子舞への関わり方はそれぞれ違うけれど、乗嶺という土地に対する愛着と獅子舞に対する愛着が結びついているということである。乗嶺の人々にとって、獅子舞は集落の人々の繋がりや結び付きや交流を深める重要な行事であるとともに、横の繋がりだけでなく、世代間の縦の繋がりも強めることができる行事である。「獅子舞を伝承していくことが大切だという共通認識をもっており、その上で、話し合う場を設けて皆で気持ちや考えを確かめていくことが大事なんだ」と前出の80代の男性のFさんは話す。獅子舞によって集落の縦横の連帯を強めることが、愛着を持つ集落の存続につながっていると乗嶺の人たちは認識しているのである。

現在、野積地区の他の集落では、過疎化が進んで担い手不足のために獅子舞が休止されている。獅子舞を休止している野積地区の他の集落の人々も、上に述べたのと同様に、おそらく集落の人々を繋ぐ獅子舞の役割について認識していると推測される。

それでは、なぜ乗嶺では獅子舞を復活することができたのだろうか。

他の集落の人たちからの聞き取り調査もおこなったが、以下の4つの理由で、乗嶺では獅子舞が復活したと考えられる。まず、理由として第1に獅子舞をやろうと中心となって声をかけ、みんなをまとめる人がいたことが挙げられる。獅子舞復活のために尽力した前出のEさん（60代男性）のように、獅子舞のために精力的に動いて、人々をまとめていくのは大変なことであり、そのように動ける人は稀なのである。第2に、指導者の存在が復活の理由として挙げられる。休止されている間に獅子舞を指導していた人が高齢化してしまい指導できなくなってしまうことがあるが、乗嶺の場合は、休止した期間はそこまで長くなかったため、指導できる人がいたのである。第3に、当然のことではあるが、乗嶺のように、子役ができる年齢の子どもが集落にいたことが挙げられる。第4に、集落に愛着を持ち獅子舞を伝承していきたいという熱意を持つ若い世代がいたことが理由として挙げられる。すでに触れたように、乗嶺には20代や30代の若い世代にも集落や獅子舞に対して熱意を持っている人が多く、就職の際にUターンしてきた人もいる。

乗嶺の場合、以上の4つの条件が揃ったので、獅子舞の復活が可能になったと考えられる。今後、世代から世代への技能と熱意の伝承がうまくいけば、獅子舞は存続していただくだろうし、また、それは集落の維持存続にも大きく貢献すると思われる。

6.謝辞

今回の調査をするにあたって乗嶺青年会の方々をはじめとして、乗嶺集落の皆様や野積地区の皆様には、本当にお世話になりました。突然の訪問にもかかわらず、「外は寒いやろう」と家の中に招き入れていただいて、調査にご協力いただいた乗嶺集落の方々には申し訳ないという思いと感謝の気持ちで一杯です。

とりわけ、失礼にも突然に獅子舞について教えてほしいと電話をかけた私に対して、それ以後、忙しい合間を縫って獅子舞に関わるさまざまなことを教えてくださった角地芳郎様と、毎回訪ねるたびに温かく迎えていただいたご家族の方々には、たいへん感謝しております。

また、無理なお願いを聞き届けていただいて、獅子頭を見せてくださった島滝様と八尾コミュニティセンターの職員の方々、快く貴重な資料をくださった野積地区センターの方々にも、深く感謝いたします。乗嶺の獅子舞の歴史について話してくださった松越様や、親切にしてくださった八尾市営バスの運転手の方、たくさんの方々の好意で調査をおこなうことができました。調査を越えて、私は大学の中では教わるできないさまざまなことを教わりました。

お世話になった皆様に、心からお礼を申し上げます。

おわりに

私たちは平成 20 年（2008 年）に、富山県富山市八尾町の旧町、福島地区、野積地区の乗嶺集落の 3 箇所で調査を行いました。

調査は各自が現地で関心をおぼえたテーマについて進め、それぞれの調査結果を持ち寄ってまとめる形でこの調査報告書を作成しました。したがって、この小冊子は八尾の社会文化についての網羅的な報告ではありません。注意を払うべきであったテーマや事実がこの報告書では抜け落ちていることと思います。また、それほど長い期間の調査ではなかったので、浅い理解にとどまっている箇所があるかもしれません。

しかし、今回の調査に参加した学生 12 名は、それぞれの視点から調査地である八尾の現在の生活の姿に迫ろうと努力しました。私たちなりの努力がこの報告書に結晶していると自負しております。この報告書を読まれて、八尾の人々の生活の生き生きとした姿を多少なりとも感じとっていただけたならば、私たちにとってそれ以上の喜びにまさるものではありません。

今回の調査にあたっては、八尾の多くの方々のご協力をいただきました。この報告書が、お世話になった方々に対する私たちのささやかなお礼となることを心から願っております。

また、この報告書には、誤りや記入もれなど、不備な点も多いことと思います。お気づきの点があればご忌憚なくご指摘いただきますようお願いいたします。

平成 21 年 1 月

平成 20 年度調査参加学生一同



地域社会の文化人類学的調査 18
富山県八尾町の祭と観光—伝統と現在を生きる人々

発行日 : 2009 年 2 月 10 日

編集 : 竹内 潔

発行 : 富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190 富山大学人文学部

Tel. & Fax 076-445-6186

E-mail anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷 : なかたに印刷 (株)

富山市婦中町中名 1554-23

